
ただあなたを守りたい

白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただあなたを守りたい

【Nコード】

N6491X

【作者名】

白銀

【あらすじ】

神力と呼ばれる力で満たされた大陸。その大陸にある首都クロイセンは光の壁に守られた都市。

首都で暮らすシスター見習いの少女ノイアとシエルは力を失いつつある光の壁に再度力を注ぐために旅に出る。

旅の中、シエルは各地で命を狙われる。その理由とは……。少女シエルを守りぬく、シスターが主人公のファンタジーバトルものです。「のべぷろ!」「作家でごはん 鍛錬場」に投稿済みの作品となります。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 1

ただあなたを守りたい シスター見習い編

プロローグ

「……ノイア・フィルランド。貴殿の神力の高さは他の誰よりも高い。だが……力の持続力は最低レベル。最終的に私が下した判断は……今日この時を持ってシスター見習いの資格を剥奪する。以降は指導者としての道を歩むか……または別の道を選ぶかを決めるのだ」
50代後半の司祭はそう告げた。

ノイアと呼ばれた少女はその言葉を聞いて力を失うように膝をついた。目の前は真っ白だった。

「……………」

言葉は出なかった。ただただ絶望する。今までの日々が頭の中を駆け巡る。

「ノイアよ。貴殿が他の誰よりも努力していた事は認める」

司祭は言葉を選んでいようだった。だがノイアには聞こえていなかった。

（……嫌だ……！）

心の中で叫ぶ。シスターになるためにずっと鍛錬を続けてきた。持続力がないのは分かっている。それでも鍛錬を続けてきた。いつか夢を叶えるために。

「……貴殿ほどの努力家だ……指導者になるのは適していると思う」
司祭はノイアの肩に触れた。ノイアの肩は震えている。

「……嫌です」

ノイアは顔を落としたままつぶやく。

司祭は驚きで目を見開く。彼女なら分かってくれると思っていた。だが帰ってきた言葉は拒絶の言葉。ノイアはふらつきながら立ち上

がる。

「どこに行く！」

司祭はノイアに言葉をかける。

「……私は諦めません。シスターになれなくても……戦う道はありますから」

ノイアは司祭に背を向けてつぶやく。その声には力が戻っていた。
「……そうか」

司祭は密かに拳を握る。彼女は歩み続ける道を選んだ。止める必要はない。立ち止まるのであれば助けは必要だろうが。

ノイアはふらつく足取りでドアまで進み、大聖堂のドアを開ける。眩しい光がノイアを照らす。

「あ……ノイアだ」

ドアを開けた先には修道着姿の愛らしい少女が立っていた。

「シエル……頑張ってたね」

ノイアはシエルと呼んだ少女の髪を優しく撫でる。

「ノイア……？」

シエルは首を傾げる。

「……戻ってきて守ってあげるから……」

ノイアはそれだけを言っただけでその場を去った。向かうのはいつもの場所。あの場所にいたから頑張れた。

「……私はまだ……歩める……諦めない……今度こそ……」
ノイアはただ前を見てつぶやいた。

――

「これでいいかな」

15、16歳くらいの金髪を腰まで伸ばした少女が微笑んでつぶやく。

左手に持っているのはフライパン。焼かれているのは目玉焼き。見た所黄身は固めに焼けている。それを見てコンロから右手を離す。

コンロについでいる石が輝きを失う。それと同時にコンロの火が消える。目玉焼きをお皿に移してから振り向く。

「まだ寝てる」

ベッドの中で丸くなっている少女に温かい視線を向ける。12歳ではあるが実年齢よりも幼く見えてしまう不思議な少女。クスリと笑い、部屋の左端にあるベッドに近づいて艶やかな黒髪を撫でる。

「うーん」

眠っている少女が呻いてから、青色の瞳をゆっくりと開く。まだ目蓋は重そうだ。最年少のシスター見習いで、名をシェライト・ルーベントという。皆はシエルと呼んでおり、この部屋で一緒に暮らすルームメイトである。

「早く起きてよ、私は朝から鍛錬したいから」

なかなか起き上がらないシエルに向けて声をかける。

「う……ん。分かった……よ、ノイア」

だがシエルの反応は鈍い。朝が苦手なシエルは緩慢な動作で起き上がる。短い黒髪は寝癖で所々が跳ねている。ノイアはその姿を見て苦笑してしまう。

「ご飯あるから食べてね」

ノイアと呼ばれた少女がドアノブを掴みながら声をかける。

部屋中央の丸テーブルにはトースト、サラダ、ハム、目玉焼きなどが置いてある。一度シエルは朝食に視線を移してから、ノイアに振り向いた。

「分かったー」

ルームメイトが手をヒラヒラと振る。ノイアはその姿を見てからドアを開けた。

ひんやりとした早朝の空気がノイアの全身を冷やす。時刻は午前5時。まだ誰も起きていない。シスター見習いでこんな時間から鍛錬するのはノイアくらいだ。

木で出来た廊下を歩いてシスター見習いに与えられた宿舎を出る。

宿舎を出ると目の前は石で整備された坂がある。その坂を上りきった所にあるのがクロセイト大聖堂。ノイアとシエルが学び、将来はあの場で働く事を願う場所。

大聖堂はノイア達が暮らす首都クロイセンの中心にあり、そこを中心に住居が並ぶ。首都の南側はノイア達や旅人の宿舎が集まり、北側は商店街となっている。

「……頑張らないと」

ノイアは拳を握って、進路を北西に向ける。大聖堂には午前8時までに行けばいい。まだ向かうには早すぎる。

ノイアが向かっているのは一つの公園。首都クロイセンの北西は憩いの場が多い。その中にある公園に用があるのだ。当然、自然を見て癒されたい訳ではない。開けた場所で鍛錬をするためだ。

「……あの人は今日もいるのかな？」

ノイアは独語する。

実はこんな早朝から鍛錬をしているのはノイアだけではない。そして、シスターでもない。甲冑に身を包んだ騎士の少年だ。二人は同じ場所でお互いに特に干渉することなく鍛錬に励んでいるのだ。

ノイアは相手の名前さえ知らない。

「まあいるよね」

ノイアは微笑む。

おそらくあの少年がいたから頑張れている。一人ではなかなか続かないものだ。名も知らない少年が毎日早朝から鍛錬をしている。その少年に負けないように自分も鍛錬を続ける。もしかしたら相手も同じ事を考えているのかもしれない。邪魔であるのなら場所を移すだろうから。

ノイアは碁盤目状に出来た道を早足で進み公園に足を踏み入れる。木々が左右に立ち並び、頭上を見上げれば生命を感じさせる緑。こんな時間でもこの道で散歩をする人がまばらにいた。

「おはようございます」

ノイアが顔見知り挨拶。

「おう、おはよう。騎士の子はもうやってるよ」

50代のおじさんが微笑む。

「だんだん早くなってる……負けられない」

ノイアは早足でいつもの場所へと向かう。

「熱心だね……でも、この世界はなんでこんなに不平等かねえ」

おじさんは顔を落とした。

ノイアは木々で出来た道をほどなく歩いて進路を右に向ける。草が茂っている獣道を進みきった所を開けた場所がある。一部屋分のスペースしかなく鍛錬するには狭い。だが誰にも邪魔はされない。その場に銀髪を短く整えた青い瞳を持つ少年がいた。甲冑に身を包み淡々と剣を振る。額には汗が浮かび、少し息が荒い。おそらく一時間は素振りをしているのだろう。整った顔が時折、苦痛に歪む。また手がボロボロになるまで剣を振ったのだろう。

「……神聖なる神よ。我に癒しの力を与えたまえ……」

ノイアは言葉を紡ぐ。刹那、少年の手を温かい光が包む。少年は痛みが和らいだのか、剣を握り直す。

「……すまない」

少年はそれだけをつぶやいて黙々と剣を振るう。

ノイアは一度微笑んでから少年の背後に立ち、背を向ける。これが二人の関係。これ以上は関わらない。だから名前も知らない。

ノイアは一つ深呼吸をする。背後から聞こえるのは素振りの音。あまりにも聞き慣れているため集中力を切らす事はない。

ノイアは天に祈りを捧げる。ノイアの体から眩しい光が溢れる。

「……神聖なる神よ。我らに守りの力を」

言葉と祈りに反応してノイアの前に障壁が展開。祈りを続けて光の壁を維持。

ノイア達が暮らす大陸マクシリアには「神力」という力で満ちている。神力はこの大陸で生活するには欠かせない力である。

夜に読書をしようと思えば、輝石と呼ばれる石に神力を注ぎそれ

を光源にする。夜に首都を照らす街灯も輝石に神力を注いで光らせている。朝、ノイアが料理に使っていたコンロも神力を使い火を起こしていた。この力は6歳を超えた時に宿るものである。だが人によつて力の強さも、身に宿る神力の多さも異なる。中には全く神力を持たない人間もいる。神力を持たない者はガスやら油などを使い火や光源を得ているらしい。

ノイアは強い神力を持つている事からシスター見習いとして大聖堂で鍛錬が続けている。ノイアが張る障壁や、癒しの力の強さはどのシスター見習いでも越える事はできない。だが課題もある。身に宿る神力の絶対量が少なすぎるのだ。強い力は使える。だが維持できない。また使用できる回数も極端に少ない。

その証拠に目の前で展開している障壁が力を失う。ノイアの限界だ。

（まだまだ……）

ノイアは心の中でつぶやく。さらに祈りを込める。突如、全身に痛みが走る。だが止めない。神力の絶対量を増やす方法は限界まで神力を使う事である。限界を越えた時にしか神力は増えない。

「……っ……」

ノイアは顔を歪ませる。

方法は分かっているが限界まで神力を使うのは自殺行為である。

全身を破壊するような痛みに耐え切らないといけない。だがノイアは毎日これを繰り返している。その結果、正式にシスターになるために必要な神力の絶対量の半分はある。だがノイアの力の強さに追いついてはいない。

「神力があつても苦しいだけか……」

素振りを続ける少年が独語した。

いつもこの苦しみの声を聞いている。少年にはこの少女がどれだけ努力家なのか知っている。それと同時にこの世界があまりにも不平等である気がしてならない。努力をした者が成功しない。生まれ持った才能が全てを決めてしまう。

少年は神力が使えない。そのため信じる事ができるのはこの剣と、神力が使えない代わりに神が与えてくれた身体能力の高さだけ。

この少年のように神力を持たず、生まれつき身体能力が高い者は「騎士」と呼ばれる職に就く事を勧められる。断れば一般市民として生活はできる。だが、半分ほどの者は「騎士」になる事を望む。それしかこの世界に溶け込む道を知らないからだ。神力がない。それだけで運命を決められた者が「騎士」である。

「……ぐ……ああー……！」

いつものように絶叫が聞こえた。少年が振り向くと少女が荒い息を整えながら膝をついていた。どうやら限界まで使用したらしい。

「……………」

少年が少女を立ち上がらせる。

「ごめん……」

少女は礼を述べる。自らの足で立ち、瞳に力が戻ったのを確認した少年は再び背を向けた。少女は深呼吸をして気持ちを落ち着かせていく。神力が少しでも戻れば再開するつもりなのだろう。二人の無言の鍛錬が早朝の朝に続いた。

*

鍛錬を終えたノイアが宿舎に戻ったのは午前7時半。部屋に戻るとシエルはベッドに座り本を読んでいた。

「おかえりー」

シエルが微笑む。

「うん。行こう」

戻ってくるなり昨日用意しておいた荷物が入ったバッグを肩に背負う。シエルはこの部屋を照らす輝石に手をかざして神力の供給を絶つ。部屋の明かりが消えて、薄暗くなった部屋はどこか寂しげだ。それを見てノイアはドアを開ける。

「行こうー」

シエルが微笑んでついて来る。初めはこの幼いルームメイトには困ったものだった。ノイアの後には張り付くように体をくっつけて歩き、何かあればノイアの胸に飛び込み甘えたりもした。今ではそれにも慣れて世話を焼いている。

だが正確には世話を焼いているなどと言う言葉は使えない。神力の強さだけならノイアの方が上だが、それに匹敵するほどの強さの神力を持ち、絶対量では常にトップだった。100年に一度生まれるかどうかの「神に愛された者」。いずれはシスターの頂点に立つかもしれないと言われている存在なのだ。実際は他にも有力候補がおりシエルが頂点に立てるかどうかは分からないのだが。そして、シエルはあまりにも幼い。そして、上に立つには優しすぎる。ノイアはシエルが上に立つのは無理ではないかと思っている。

ふと温かくて柔らかい手がノイアの手に触れる。

「手を握らないで……恥ずかしい」

ノイアは隣を歩くシエルを見てつぶやく。周りの視線が気になつて仕方ない。見る見ると頬は朱色に染まる。

「ノイアの手は温かいから好きなの」

シエルは愛らしい笑顔を浮かべてノイアに微笑む。この笑顔を見ると反論できない。自由にさせてしまふ。ノイアは溜息をついた。

二人は宿舎を出て坂を上る。見えてきたのは大聖堂。三角屋根の先には金色に輝く十字架。左右にはステンドグラスが散りばめられていた。

ノイアは空いている右手で2メートル以上はあるドアを開けて中に入る。シエルも続く。赤い絨毯が敷かれた道の先には教壇。左右には祈りを捧げるための長机と椅子がある。すでに二人と同じ修道着姿のシスター見習いが椅子に腰をかけていた。

「あら、おはよう。……シエルに、その世話係さん」

ウェーブがかかった茶色の髪に、やや吊りあがった髪色と同じ瞳が特徴的な20代前半の少女が二人に挨拶。ノイアは右側に視線を向ける。隠れて拳を握る。優秀なシエルの世話係。これがノイアの

評価。いくら神力が強くて絶対量が少なければただの宝の持ち腐れ。ノイアの評価は「まだいたのか」と言われるくらいに低い。いくら努力しても評価が変化する事はなかった。

「ノイアは……毎日……むぐっ……」

シエルが何かを言いかけたがノイアは口を塞いだ。結果を出さねばどうしようもない。ここで何を言っても無駄だ。

「止めなさい、ミシエル。ノイアは立派な……私どもの仲間です」
優しく耳に心地いい声音。ミシエルと呼ばれた少女の隣に座っている少女が口を開いた。20代中頃の輝くような銀髪を腰まで伸ばした女性で、天使のような慈愛に満ちた笑顔を向けている。

「おはよう、ハーミル」

シエルが元気よく挨拶。ハーミルと呼ばれた銀髪の少女が手を振る。

ハーミルは近日中にシスター見習いを終える。シエルに匹敵するほどの力を持ち、シエルの出世街道を阻む最後の砦。だがこの二人はいがみ合う事はない。どちらが上になっても構わないとすら思える。

(……追いつかないと……)

ノイアは心の中でつぶやく。

ハーミルは心から心配した視線を向ける。この視線に甘えたら終わりだ。諦めてしまふ。だから視線を合わせずに左側の椅子に腰掛ける。シエルは当然ノイアの隣だ。

「そろそろ手を離して……」

ノイアがシエルにつぶやく。

「むー、仕方ない」

シエルは残念そうに手を離す。本当に困ったお姫様である。

シエルの綺麗な黒髪を撫でようと手を伸ばした時に後ろのドアが開いた。皆が一斉に視線を向ける。そこに立っていたのは司祭服に身を包んだ50代ほどの男。年齢を感じさせる白髪の上に司祭帽を被り、丸眼鏡の奥の温和そうな瞳が印象的な男。司祭アーバンだ。

皆が一斉に立ち上がる。シエルだけは反応に遅れている。

「ほら……立って」

ノイアがシエルを催促。ようやく理解して立ち上がる。ミシエルから嘲笑うような視線を感じる。だがそれを無視した。自分にならどれだけ向けられても構わない。ただシエルには何があっても向けさせない。

「皆さん、おはようございます」

司祭が皆に挨拶。皆が頭を下げる。ノイアはシエルの頭に手を置いて下げさせる。

「むぐっ……」

シエルが呻くが今は無視。

その様子に司祭アーバンは苦笑した。アーバンはシエルのルームメイトを決める際にすぐにノイアを指名した。優しいハーミルも候補に浮かんだが、おせっかいなノイアの方が向いていると思ったのだ。

「さて、本日は皆に集まってもらったのには理由があります」

司祭が言葉をつぶやく。皆が頭を上げて、緊張の面持ちで言葉を待つ。シエルだけはよく分かっているように。

「……首都クロイセンを守る光の壁が力を失っている事ですか？」

皆を代表してハーミルがつぶやく。司祭が一度頷いた。

首都クロイセンは光の壁に覆われている。これはシスターの長と各地に散らばる塔に神力を注ぐ事で成り立っている。塔が一つでも破壊されれば首都の守りは手薄になる。そのため騎士の多くは首都よりも塔の防衛に力を注いでいる。強力な光の壁に守られた首都クロイセン。だが、光の壁を失えば陥落するには数日あれば十分であるという脆さもある。

では、なぜ塔を首都の近辺に置かないのか。それには理由がある。この地には神力の影響を強く受ける土地がある。その場で神力を使用すれば10倍以上の効果が得られる。強化された神力を首都に集めて光の壁を形成しているのだ。

ノイア達が暮らすハールメイツ神国は大陸南部に位置している。北西、北東は天然の山々で守られ、背面は海に面して敵がいない。急所である首都は光の壁で守られており、唯一の脅威は北にある強国であるグリア連合国。賢王と呼ばれる王を中心にし、対立する国は圧倒的な武力でねじ伏せ、対話が可能であれば時間をかけてでも説得して取り込んでいる、この大陸最強の国である。グリア連合国が攻撃してこないのは光の壁を突破できないからである。

この国の生命線である光の壁と、力を送る塔。この二つに異常が出た場合は優先事項として全ての機関が協力体制を構築するのが常である。

「うむ。そこで……シスターを塔に派遣する事になった」

司祭がハーミルに向けて一言。

「なぜ……私達見習いに声をかける必要があるのですか？」

声を上げたのはノイア。

「もつともな意見だな」

司祭がノイアに視線を向けて頷く。こんな大切な任務であれば、現職のシスターが行うべき事だ。

「人手が足りないのですね？」

ハーミルが落ち着いた声で返す。光の壁が力を失っているのであれば現職のシスターもここにとどまり長の補助をしなければならぬ。そのため出向ける者は少ない。

「そうだ。だが……誰でも言い訳ではない」

司祭が皆を見つめる。ここにいるのは見習いが20名。

ノイアは思考した。この中で現職ほどの力があるのはハーミルとシエルだけだ。それは皆も分かっている。簡単な任務なら手を上げるが、今回は国の一大事。司祭の決定に従うのが自然である。

「ハーミル、シエル、ノイアに向かってもらいたい」

司祭は口を開いた。

ノイアは目を見開いた。なぜ自分なのだろうか。だが次の瞬間に理解して顔を落とす。所詮、自分はシエルの世話係なのだ。

「……見習いの担当は二箇所ですか？」

ハーミルが確認。三箇所と言わない所がやはりハーミルが優秀である事が分かる。司祭の考えを読んでいる。

「そうだ。場所は後で知らせる」

司祭が述べる。ノイアは拳を握った。だがそれ以上は何も言わなかった。

「ごめん……」

か細い声が聞こえた。ノイアは慌てて視線を向ける。そこには顔を落としたミシエルがいた。世話係と言った事に謝罪をしているのだろう。ここまであからさまな扱いをされれば哀れみの気持ちも抱くのだろう。失言だったと反省しているようだ。

「……事実だから構わないよ」

ノイアは儚く笑った。その笑顔が痛々しくミシエルはノイアの顔を見られなかった。ミシエルだけではない他のシスター見習いも顔を合わせない。

「何が……事実なのですか？」

疑問の声をあげたのはハーミル。ノイアは視線を向ける。何が言いたいのか分からない。

「今回の任務……あなたは必要です」

ハーミルがつぶやいた。皆が目を見開く。全員が言葉を待つ。

「あなたの神力の強さは現職をも軽く凌駕しています。光の壁を維持する力をここに送るにはかなりの力が必要です。あなたの力で一気に塔に力を注ぎ、足りない分はシエルの力で補うという考えでしょう」

スラスラと語るハーミル。ノイアは首を傾げる。

「シエルだけで十分だよな？ 結局、私は世話係で……」

ノイアがハーミルに言葉を返す。刹那、ハーミルがノイアを鋭く睨む。

「あなたは影で誰にも真似できないような努力をしています。なぜ自信を持たないのですか！」

ハーミルは瞳に涙を溜めて叫ぶ。

「私は力をまだ上手く使えない。一人では無理だよ」
シエルがノイアの手を握る。

「私が……必要？」

ノイアの肩が震える。シエルが頷く。

「見習いの代表です。胸を張って行きなさい」

ハーミルが二人に言葉をかける。二人は頷いた。

「ハーミルも……成功を祈ってる」

ノイアはハーミルに笑顔に向けた。ハーミルは微笑んで頷いた。

「私の出番はないな」

司祭が三人を見て微笑んだ。

＊

旅立ちとは二日後に決まった。その間に護衛に連れていく騎士を見つけるようにと司祭に告げられたノイアは大聖堂での鍛錬を行いながら候補を考えていた。

（……シエルもいるから……女性騎士の方がいいのかな）

心の中でつぶやく。考え事をしているが祈りは継続させている。今は障壁を張る鍛錬だ。大聖堂の外にある鍛錬用の敷地で皆は瞳を瞑り祈り続ける。

（……シエルが気に入った騎士でもいいけど……候補いるのかな）

やはり司祭のお勧めを教えてもらうのが早いかな）

ノイアは心の中で思考を進めていく。

「ノイア！ そんな障壁で防げるか！」

怒り心頭の声が耳に届く。咄嗟に神力を込める。何かが障壁に衝突する感覚がした。

「本当にすごい障壁だねえ」

チラリと視線を開けると、修道着姿に大剣を持つというあまりにも不釣り合いな人物が立っていた。鍛錬の指導者であるフィンネ教官

である。引きしまった体に180センチオーバーの長身が特徴的な30代の女性。

修道着姿なのはここの所属を示すためで元は騎士である。障壁の鍛錬の際に姿を現し、集中力が切れて弱まった障壁に一撃を浴びせるといふ鬼教官である。気を抜いたら大剣の一撃が待っている。体に直撃しないように止めてはくれるが、その恐怖は体験したくない。「ど……どうも」

ノイアは障壁の強度を調整する。あまり長く張れないので調整は必要だ。

「気を抜くんじゃないよ」

大剣で障壁を二度叩く。何とか弾き返したが、そんな武器で叩くのは止めてほしい。

（……フィンネ教官なら知っているかな？）

ノイアは護衛候補探しに思考を戻す。元騎士ならいい人を紹介してくれるかもしれない。ただそんな事を考えてはいるが、ノイアの頭の中にはあの銀髪の少年が頭に浮かんで仕方ない。実際の実力は知らないが、毎朝と毎晩、鍛錬するほどの人だ。信頼は出来るだろう。だが、あまり話した事がないので深くは知らないのが問題である。

（……自分だけでなくシェルも行くんだからね）

ノイアは溜息をついた。

「ほう……私の前で無防備か」

ノイアは寒気を感じた。視線を開ける。障壁が消えていた。自分の持続時間の短さをここまで恨めしく思った事はない。

「……ひい……！」

変な叫び声を開けて障壁を残った力で再展開。大剣と障壁が激突する。咄嗟に発動したが何とか止めれた。だが、亀裂が入りすでにボロボロ。再度、集中して修復を開始。もう一度叩かれたら割れる。ノイアの頬に冷汗が流れる。

「ずいぶん余裕だな……ノイア」

フィンネ教官がギロリと睨む。完全に今日のターゲットは私だ。涙目で集中を続けるノイアだった。

「今日はここまで」

フィンネ教官が大剣を背に背負い帰っていく。皆は安堵の息を吐いた。四時間の鍛錬中ずっと緊張していたのだ。無理もない。

「フィンネ教官！」

ノイアは教官の後を追って声をかける。

「ほう。まだしごかれたいか」

フィンネ教官が楽しそうに微笑む。そんな事は一切ないので、その幸せそうな笑顔を消してください、とノイアは思う。

「違います……えっと聞きたい事がありました」

ノイアが言葉を選ぶ。

フィンネが表情を引き締める。何を聞きたいのか分かったようだ。見習いが二人塔に向かうのは知っているのだから。

「誰か紹介してほしいんだね？ その前に候補はいないのかい？ それに合わせて助言はするけど」

フィンネは顎に手を置いて思考。

「候補ですか……シエルもいるから女性騎士がいいような気がするんです。ただ気になる騎士もいます。私と同じくらいの歳で銀髪の騎士なんですけど」

ノイアが伝えていく。

「女性で外まで護衛を任せられるのはいるけれど……位が上過ぎるねえ。一大事だから頼めば引き受けるだろうけど。それと銀髪で16、17くらいか。ヒューバーか、ロレンス……それかブレイズかねえ。ブレイズなら腕は確かだけど……ちょいと性格がね。悪い奴ではないけれど」

フィンネ教官が瞳を閉じて考え出す。

「ブレイズ……さんはもしかして朝に鍛錬をしていますか？」

ノイアが確認。

「よく知ってるねえ。すごい努力家なんだ。毎朝5時には剣を振ってるよ。寡黙なのがなければ完璧なんだけどね」

フィンネ教官が笑う。

「……ブレイズ……」

ノイアが一度考える。

「なんだい……護衛の騎士はもう決まっているじゃないか。紹介しようか？」

フィンネ教官が問う。ノイアは首を振った。

「いえ……今晚に会うので問題ないです」

ノイアは言葉を返す。

「ふーん。あの堅物に女が……しかもシスター。禁断だねえ」

フィンネが楽しそうに微笑む。

「違います！」

ノイアが大声で叫び返す。

「分かってるって」

フィンネ教官が手を振って去っていく。

「もう」

ノイアは腰に手を当てて教官を見送った。

*

午前中の鍛錬が終わり、現在は昼休憩。ノイアとシエルは大聖堂の隣にある店に足を運んでいる所だ。木で出来たドアを開けて店内に足を踏み入れる。

店内は照明が落とされ薄暗い。カウンター席もあり雰囲気は酒場である。

「好きな所をどうぞ」

店員がにこやかに微笑んだ。二人はカウンター席ではなくて二人用のテーブルに腰をかける。

「面白いね」

シエルが天井を指差す。視線を上に向けると輝石が神力を注がれて光っている。その輝石を囲んでいるのはガラスではなくて、焦げ茶色をしたバケツ。

「雰囲気はあるわね」

ノイアがつぶやく。なんだか酒場っぽいけれど、と心の中で付け加えはしたが。メニューを覗くとパスタやらピザが並んでいた。飲み物を見るとやはりお酒もあった。

「私はこれがいい」

シエルが指差したのはシーフードドリアだった。

「うん。分かった」

ノイアが手を上げる。店員が来たのを見て口を開く。

「このドリアを二つ」

ノイアが笑顔で注文。店員はメモを書いて戻っていく。

「お揃いだね」

シエルが笑顔を向ける。ノイアはシエルに微笑む。

「今日はどうしたの？」

シエルが首を傾げる。いつもは宿舎に戻るか、適当にパンとサラダを食べて終わりである。今日はいつもと比べればリッチだ。

「うん……護衛の騎士の事でね。相談があつて……」

ノイアは珍しく歯切れが悪い。

「護衛？ ノイアと一緒に鍛錬してる人は駄目なの？」

シエルが再度、首を傾げる。どうやらその人物が護衛に就くと思っ
ていたらしい。

「いいの？ 女性騎士の方がいいかと思うんだけど」

ノイアがシエルに確認。

「ノイアが信じた人なら……いいよ」

シエルが微笑む。ここまで信頼してくれる。ノイアは心が温まる
気がする。

「なら……声をかけてみる。無理なら司祭かフィンネ教官が選んだ
人にするよ」

「うん。それでいいよ。いつもありがとう……ノイア」
ノイアの提案に頷くシエル。二人は迷いが晴れて美味しくランチをいただいた。

*

正午を過ぎた頃。騎士団長の部屋の前に立っているのはブレイズ・マチエスだ。戸惑う事無くドアをノックする。
「入れ」

声を聞いてブレイズはドアを開ける。

部屋に入ってまず目を引くのは巨大な机。そして、その机に置いてある書類にサインをしている大柄で筋肉質な男。ブレイズと同じ銀髪をオールバックにし、無造作に伸ばした髭が印象的な人物。騎士団団長のアルフレッドである。

「お呼びでしょうか？」

ブレイズが声をかける。

「ああ。大聖堂で指導者をしているフィンネから報告があつてな」
アルフレッドはまず言葉をかける。ブレイズは意味が分からないので首を傾げる。

「光の壁の強化ためにシスター見習い三名が首都を出るらしい。その護衛にブレイズが選ばれる可能性がある」

アルフレッドはそう告げた。

（……どこ物好きだ）

ブレイズは心の中でつぶやく。腕だけで選んだのだろうか。

「おそらく指名する者は君が知っている人物だ」

アルフレッドが続ける。

「知っている？」

ブレイズは首を傾げた。シスター見習いで知っている人間などい
ただろうか。そこまで考えた時に一人思い出した。

「分かったようだな」

アルフレッドが表情を変えずにつぶやいた。

「了解しました」

それだけを言ってブレイズは背を向けた。務めであるならば、ただこなすのみ。それがこの国を守る事に繋がるのであれば。

「任せる」

アルフレッドはブレイズの背につぶやいてから書類に目を落とした。

*

午後の鍛錬は癒しの術式を使用するものだ。シスターが主に使う術式は障壁を張るか、傷を癒す事だ。そして、この国においては首都を囲う光の壁を維持する事に一生を捧げる者。

ノイアは瞳を閉じて祈りを捧げる。ノイアの地面に光で作られた円が形成。その円には読む事ができない言語が書き込まれており、魔方阵にも見える。

「上手く維持して下さい」

指導役である修道着姿の20代後半の女性がつぶやく。

ノイアは集中する。障壁よりもこちらの方が苦手なのだ。冷汗が

ノイアの頬に伝う。

「い……痛い！」

ノイアが叫ぶ。刹那、癒しの術式が暴走。閃光が溢れる。

「ちよつと……ノイアさん……またですか！」

指導役が声を荒げる。

そうまたなのだ。ノイアはよく癒しの術式を暴走させる。癒す所か、強すぎる力が暴発して痛みすら伴う本末転倒の術式になってしまう。

「ごめんなさい……」

ノイアは肩を落とした。もう少し簡単な術式なら難なく使用できるのだが。

「簡単な術式だけにしなさい！」

指導役にすら見放されたノイアは、朝に使用した神力があれば誰でも使用できる術式を使う。他の者が使用すれば掠り傷を直す程度だが、ノイアが使えば瀕死の重傷でも塞げる。規格外の神力の強さをしているノイアはこれだけでいいのではないかと思っている。暴発させて味方が傷つくくらいならば。

チラリと隣を見ると光の円に照らされているシエルがいた。シエルは癒しの術式が得意なのだ。この歳で何時間でも維持できる。だが障壁はたまに力加減を間違えて失敗する事もあるのだが。

「シエルちゃんはずごいわね」

指導役は大満足である。

「えへへ……これは得意だよー」

シエルは微笑む。もし護衛が怪我をしたらシエルに任せようと思うノイアだった。

かれこれ四時間が経過。そんな時に声が聞こえた。

「これで終了です」

指導役の鍛錬の終わりを告げる声だ。皆は一日の鍛錬を終えて疲れ果てていた。力が抜けて膝についている者もちらほらという。

「晩御飯作っておくね」

シエルがノイアに笑顔を向ける。

「うん……お願い」

ノイアがつぶやく。これから夜の鍛錬をするのだ。

「まだ……やるのですか？」

ハーミルが声をかける。ノイアの鍛錬時間は異常だ。

「うん……私は人よりも頑張らないと」

ノイアはつぶやいてハーミルの隣を横切る。だがハーミルがノイアの腕を掴んだ。

「……ハーミル？」

ノイアは首を傾げる。

「あなたは頑張りすぎです」

ハーミルは前を見たままつぶやく。周りが注目する。皆も同じ意見らしい。一日鍛錬をするだけでも辛い。だが、ノイアは朝も夕方も鍛錬を続けている。神力の絶対量を上げるために。

「……それでもやらないと……」

ノイアは笑う。

「何のために？」

ハーミルはノイアを見つめた。

「え？」

ノイアはハーミルの瞳を見て目を見開いた。ハーミルの瞳は迷い揺らいでいたのだ。

「教えて……」

ハーミルは再度、言葉をかける。ノイアは真摯な瞳を受け止めてから口を開く。

「……この国を守りたい……それに……シエルも」

ノイアはシエルに向けて微笑む。それが本音だった。

「あなたと言う人は……」

ハーミルは微笑んで手を離れた。ノイアは一度微笑んで背を向けた。

「なぜ……あのような真っ直ぐな方に力を与えないのですか」

ハーミルは顔を落としてつぶやいた。

*

ノイアはいつもの場所に足を向ける。鍛錬のためとブレイズをお願いするためだ。

獣道を進むと素振りの音が聞こえた。もう鍛錬をしているらしい。ハーミルは先ほどノイアを止めたが、このブレイズという少年の方が鍛錬中毒だと思う。

「あの……」

獣道を抜けた瞬間に声をかける。

「……………」

ブレイズは一度視線を向けたが、再び素振りを開始。

「えっと……話があるんです」

ノイアが言葉を選ぶ。今さらになって、もう少しコミュニケーションをとっておくべきだったと思う。

「……………」

ブレイズは手を止める事はない。

「えっと……」

ノイアは戸惑う。どう話せばいいか分からない。ブレイズは一度溜息をついた。

「……聞いている」

ぼそりとつぶやいて素振りを続ける。

「……神聖なる神よ。我に守りの力を！」

言葉と共に障壁を展開。ブレイズは驚きで目を見開く。障壁とぶつかった剣が弾き飛ばされる。かろうじて剣が腕から抜けるのを防いだ。

「……何をする」

ブレイズがノイアを軽く睨む。

「話くらいはこちらを見て聞いてよ！」

腰に手を当てるブレイズを指差す。ブレイズは再度、目を見開いてノイアを見た。

「……悪かった」

ブレイズは勢いに負けて、なぜか謝罪の言葉を述べていた。謝罪の言葉を聞いた瞬間にノイアの思考は急激に冷める。そして、次の瞬間には焦りだした。護衛を頼みに来たのに、何をやっているのだらう。

「ごめんなさい……えっと、お願いがあるんです」

平静を取り戻したノイアが何とかつぶやく。微笑む事に成功した。ブレイズは気にした様子もないのだが。

「……護衛の件か？　なぜ俺なんだ？」

ブレイズがノイアを見つめる。こちらの瞳を真っ直ぐに見つめてくる。決して逸らさない。

「ずっとここで鍛錬をしているのを知っているから……あなたなら信じられる」

ノイアは思いついた言葉を伝える。

「……まあそうだろうな。俺もお前でなければ断っていた」

ブレイズは瞳を閉じた。

「それなら……！」

ノイアが一步步む。

「お前は……何のためにシスターになる？」

ブレイズは問いと共に剣をノイアの首に当てる。少し前にハーミルにも問われた。もう迷いはない。

「私は……ただ守りたい。この国を……シエルを！」

ノイアは力を込めてつぶやいた。

「ふっ……そうか」

ブレイズは剣を降ろした。

「笑うことではないでしょう！」

ノイアは拳を握って抗議。

「すまない……俺も一緒なんだ。守りたいんだよ……この国をな」

ブレイズが微笑む。

「同じ……？」

ノイアはつぶやく。同じ理由で、同じ場所で鍛錬を続けていた二人。

「ああ。同じだ……。いいだろう、俺は力を貸す」

ブレイズが左腕を掲げる。

「よろしく……ノイアよ」

ノイアも倣って腕を上げる。二人は腕が一瞬だけ触れる。

「ブレイズだ」

二人は頷き合った。

*

夜の鍛錬を終えてノイアは宿舎に戻った。

テーブルに並べられているのは小皿に載ったハンバーグ、サラダ、そしてパンだった。それを作った人物はベッドの中で丸くなっていた。待ちきれなくて寝てしまったらしい。

「シエル……帰ったよ。お風呂入ったの？」

ノイアがシエルに問う。

「うー」

シエルが起き上がる。普段は愛らしい少女なのに、今は寝癖がついて残念な少女になっている。やはり笑ってしまう。

「ノイアが食べたら一緒に入るー」

シエルがトロンとした瞳を向けて微笑む。

「本当に世話が焼けるんだから」

ノイアが微笑む。世話が焼けるがやはり可愛い。だから許してしまおう。

「たくさん食べてね」

シエルが微笑んで視線を向ける。ノイアは言われるままハンバーグを一口サイズにして口に運ぶ。すでに冷めていた。でも、温かかった。

「美味しいよ」

ノイアが微笑む。

「うん！」

シエルも微笑む。ノイアが食べ終わるまでシエルはずっと見つめていた。

*

とある酒場のカウンターに、長身に似合った黒いロングコートを

着た青年が腰掛けている。

「マスター、お酒」

気楽そうな微笑を浮かべて手をヒラヒラと振り、髪と同じ茶色の瞳を向ける。

「今日はよく飲むな。金でも入ったか？」

50代後半のマスターがワインのボトルを青年の前に置いた。

「まあ、これから……ね」

ワインをグラスに注ぎながら一言。

「ほどほどにしろよ……傭兵稼業なんてそう長く続かないぞ」

マスターが溜息をつく。

「あいよ」

青年が再度手をヒラヒラと振った。そんな時に後ろのドアが開いた。青年がゆっくりと視線を向ける。

茶色のローブを纏った男が青年の隣に座る。丸テーブルで酒を飲みながら下品に笑う男達は視界に入れてすらいなかった。青年は視線を向けるが、フードをしているために顔はよく見えない。傭兵に仕事を頼む人間にはこういう素性が分からない人間が多い。

「あんたが……お客？」

青年は空になったグラスを置いてから問う。フードを被った男が頷いた。

「こいつを消してほしい」

一枚の人相書きを青年に渡す。人相書きに描かれているのは、まだ幼さが残る愛らしい黒髪の少女だった。

「おいおいガキかよ」

青年は頭を掻いた。

「……まだ12歳だが強い神力の持ち主だ」

フードの男がつぶやく。

「ふーん。あんたは連合の方が」

青年は人相書きを見つめる。それから視線を向ける。

「いくらだ？」

青年は問うた。フードの男が袋を取り出す。中身は見えないが全部金貨なら10年は遊んで暮らせるだろう。

「おいおい。そんなに払うのかよ」

聞いておいてなんだが子供一人を消すのにその額は有り得ないと思っただ。

「受けるのか？」

フードの男が問う。

「ほい」

青年が手を差し出す。

「成功報酬だ」

フードの男は首を振る。よくあるパターンだ。失敗したら終わり。成功して受け取りに来たら消す。最悪の依頼である。青年は溜息をついて席を立つ。

「悪いマスター……今日は払えない」

青年がにこやかにマスターに述べる。

「おい……」

マスターが低い事を出した。

「こいつに言ってくれ」

青年がフードの男を指差す。マスターがフードの男を睨む。

「おい……10年は遊んで暮らせる金だぞ！」

フードの男が立ち上がる。青年は無視して背を向けて去っていく。
「待て！」

再度、青年の背に向けて叫ぶ。

「なら聞くけど……10年遊べる金か命……どちらを選ぶ？」

青年が振り向いて問う。フードの男が顔を落とした。ほとんどの者は命を選択するだろう。

「次からは前金くらい払うんだな」

青年が手を振った。

「半分出す！」

フードの男が袋を青年の背に向ける。

「まだまだ青いねえ……。ま、こちらとしてはありがたいけどな」
青年が袋を受け取る。金貨を一枚マスターに向けて投げる。
「助かるよ」

マスターはそれだけを言っただけ後は無視をした。関わりたくもないという顔をしている。青年は袋から金貨を半分出して、袋を返す。
「では……頼む」

フードの男は長居をするつもりはないのかすぐに去って行った。
完全に消えてから青年は口を開く。

「さーで、どうしようかねえ」
軽い口調でつぶやいて酒場を後にした。

*

明日の準備のために鍛錬を午前中で切り上げた二人は、準備をしていた。

「シエル……必要最低限だよ」

ノイアがシエルに言葉をかける。

「うー、でも」

シエルは迷っていた。シエルの荷物袋はどんどん膨らんでいる。
もはや入らない。

「分かった……私がやる……」

ノイアが溜息をつく。自らの荷物はだいたい出来ている。後はシエルと自分の荷物を見比べて被っている物と、不要な物を出していけばいい。

「あーそれは」

シエルが荷物袋から取り出された枕を悲しそうな目で見つめる。
「いない」

ノイアは心を鬼にしてベッドに向けて放り投げる。枕が違つと眠れないのは知っている。だが旅には不要だ。

「うー、今日のノイアは冷たい」

次々取り出されていく荷物をシエルは悲しげに見つめるのだった。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 1（後書き）

読まれた方で感想、批評がありましたらお願い致します。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 2

ただあなたを守りたい シスター見習い編

―2―

「これで……いいか」

ロングコートを羽織った青年は金貨の入った袋を差し出す。

「……よくもこれだけ集めてくるものだ。これだけあれば五年は楽に暮らせるだろうに」

白衣を着た薬師が袋をまじまじと見つめる。

「……汚れ仕事の報酬だ。当然だろう」

青年は努めて明るくつぶやいた。平静を装っているが、長年関わってきた薬師には彼が心身共に疲れているように見える。

「……そうだな。だが、これでけあっても診れるのは五年ほどだ……」

薬師は顔を落とした。薬師が調合する薬は今だに量産が難しく破格の値段がついている。一般の者では買う事すら敵わないが、この薬しか効かないのであれば買うしかない。

「……それは仕方ないさ。これが……俺が出来る最後の親孝行だ」

青年は短く言って背を向ける。

「会っていかないのか？」

薬師が問う。

「……会える訳……ないだろう。こんな汚れた手でさ」

青年は振り向いて優しく微笑んだ。大きな背中はどこか寂しげである。

「これから……どうするんだ。まだ……続けるのか！」

薬師が背に向けて叫ぶ。薬師には彼がどうするのか分かっている。まだ薬を買う資金は必要だ。止めるとは思えない。ただ彼はもう十

分に尽くしたと思えてならない。

「さてな……ただ、その金はどうも危険だ……」

青年は前を向いてつぶやく。薬師は言葉を待つ。

「だから……確認してみようと思う。自らの目で」

青年は空を見てつぶやく。

「今度こそ……死ぬかもしれないんだぞ」

薬師が最後の静止の声を掛ける。

「それも……いいのかもな。俺は少し疲れたよ」

それを最後に青年は片手を上げて去って行く。薬師はただただ顔を落としただけだった。

*

肌寒さを感じさせる風が金髪を揺らす。時刻は午前5時。視線を上に向けると、うつすらと日が上り始めている。

ノイアは現在、首都クロイセンの城門前にいる。他にはシエル、ハミル、そして司祭アーバンがいる。向かい合うように、城門を背に立っているのは護衛の騎士達だ。

「……定刻だな」

深みを感じさせる声が響く。視線を向けると騎士団団長であるアルフレッドが数歩前進。アルフレッドの左には禿頭の大男がいる。騎士団の副団長であるセクメトである。

「護衛をよろしく頼みます」

司祭アーバンが恭しく礼をする。

「この命を掛けて」

セクメトが胸に拳を当ててつぶやく。それを合図にしたようにセクメトの背後には甲冑を纏った騎士四名が待機。

「皆さんがいれば安心です」

ハミルが笑顔で礼をする。

「将来を担われるハミル様の護衛を勤める事ができ……光栄です」

セクメトが頭を下げる。他の騎士も倣う。

「や……止めてください。それは周りが勝手に騒いでいるだけです……。私はまだただの見習いなのですから」

顔を真っ赤にして慌ててつぶやくハーミル。

騎士達の待遇はあまりにも過度である。本来ならば見習いの護衛は一人か二人である。だが、ハーミルの護衛は五人。しかも、副団長まで同行するという異例の事態となっている。それだけ期待されているのだろう。

「ここまで差が出るとはな」

ノイアとシエルの前にブレイズが立つ。

「見習いなんだから、これが自然」

ノイアは一つ溜息をつく。

「私は二人がいれば安心だよ」

シエルが愛らしい笑顔を二人に向ける。二人は一つ頷いた。

「貴殿達の出発はもう少し待ってくれ」

アルフレッドがノイアに向けてつぶやく。

「はい！」

ノイアはアルフレッドに向けて背筋を伸ばして力強くつぶやく。

「……貴殿の噂はいろいろと聞いている。君のような存在が騎士団にいれば嬉しいのだがな」

アルフレッドはノイアのような真っ直ぐな人間が好きである。努力する者は決して見捨てない。この人柄に惚れて騎士を目指す者がいるのも事実である。神力を持たず絶望した者が最後に頼る存在なのがこの男だ。

「私には神力がありますから」

ノイアは背筋を伸ばしたままつぶやく。

「だが絶対量が低いと聞いている。その代わりに騎士の素養があるのだろう？」

アルフレッドが真摯な瞳を向けて問う。

「はい。実はナイフを少し使えます。身体能力もフィンネ教官が言

うには……失礼ですけど下手な騎士と比べれば優れているらしいです。でも……私は人を刃で傷つけた事ありませんし……シスターなんです」

ノイアは微笑んでつぶやく。

「その真つ直ぐな姿勢……気に入った。その心を忘れるな」

アルフレッドは微笑んでから背を向ける。

それと同時に馬の鳴き声が響く。ハーミル達が出発するのだろう。ハーミルは副団長の背に体を寄せて、肩を震わせている。どうやら馬に乗るのは初めてらしい。怯えた彼女を守るように四人の騎士が周りを囲む。完全な体勢だ。

「俺達も準備するぞ」

ブレイズが二人につぶやく。その手には馬の手綱が握られている。「そうだね」

ノイアは頷いて手綱を受け取る。シエルはぴつたりとノイアの背に体をくつつける。

「馬を操れるシスターがまさかいるとはな。本当に騎士になったらどうだ？」

ブレイズは少しだけ呆れている。

「……どうせシスターらしくないですよ」

ノイアは頬を膨らませて馬に乗る。シエルは慣れた様子でノイアの後ろに乗った。

「護衛する方は楽でいい」

ブレイズは馬に乗ってから微笑む。

「では……行きますか」

ノイアが馬を走らせる。並走するようにブレイズが馬を走らせた。

*

ノイア達が向かう塔は、首都クロイセンから馬を北西に走らせて五日はかかる位置にある。北にある強国グリア連合の国境にも近く、

最重要拠点の一つでもある。そんな大切な拠点に見習いが派遣されたのは、先日新しく塔が建てられたからだ。仮に失敗した場合は新造の塔に神力を送り、国境に近い塔は破棄する予定だ。光の壁が力を失っている状況で、シスターが派遣されないのは不自然極まりない。そこで選んだ手段が見習いの派遣である。

「……」

ノイアは口を閉じて思考する。自分達の役目はおそらく罔。本命はハーミル達だ。水面下で将来に向けての段取りが進んでいるような気がする。将来を担うだろうシスター見習いの二人であるハーミルとシエル。現在ではハーミル派が多いのだろう。この任務で上手くハーミルに恩を売り、あわよくば邪魔なシエルを消そうとしているのかもしれない。ノイアは馬鹿らしいと思う。この国に内輪揉めをしている余裕はない。光の壁を失えば圧倒的な力に押され、数日でこの国は滅びる。ハーミルとシエルはこの国の未来には必要なのだ。それを理解せずに己の利益に走ろうとしている者がいる。

「……アルフレッド団長はシェライト派だ」

突然、ブレイズがつぶやく。驚いてノイアが視線を向ける。どうやら考えていた事は同じらしい。

「……うん？ 私？」

シエルは首を傾げる。

「どういう事？ 団長は副団長をハーミルの護衛に……」

ノイアが言葉を返す。

「副団長はハーミル派だ……。この機会にハーミルに顔を覚えさせ……恩を売り、団長になるつもりなのかもな。団長は……この馬鹿らしい内輪揉めを終わらせたいと考えている」

ブレイズは前を向いてつぶやく。この国を想いハーミルを支持するならばいいのが、己の権力のためにハーミルを指示する者を止めたいのだろう。

「……そう。私は団長を支持するわ」

ノイアはブレイズに微笑む。

「ふっ……お前は後ろで首を傾げてる者を守りたいだけだろう」

ブレイズがシエルに微笑む。

「うー、何の話」

シエルは頬を膨らませている。

「簡単だよ。シエル……ただあなたを守りたい……何があっても」

ノイアは微笑んで馬を走らせる。

「ありがと」

シエルはノイアの背に柔らかな頬を押し付けた。

*

首都クロイセンを出るとすぐに道が三本に別れる。北、北東、北西に向かう道だ。ノイア達が進んでいるのは北西へと向かう道である。

クレイア街道と呼ばれるこの道は、北に向かう道とは違い整備が進んでいない。無造作に生えた雑草が道のあちこちに生え、道を走る馬はかゆいのか痛いのか知らないが時折鼻を鳴らしている。この道を二日馬で走るとクレイア砦がある。塔の防衛部隊が突破された際の予備兵力が置かれ、また塔に向かう者が体を休める場所でもある。ノイア達が目指す第一の目的地である。

「ここまで整備されていないとはな」

ブレイズが溜息をつく。

「でも、綺麗だよー」

シエルが街道の左右に咲いている花々を指差す。黄色、赤など色とりどりの小さな花が可憐に咲いている。ノイアも視線を向けて表情をほころばせる。

「……花が咲く。それだけ平和という事か」

ブレイズは少しだけ表情を緩める。ここはまだ首都に近い。戦いの傷跡がないのは素直に嬉しく思えた。

「ねえ……あっち」

シエルはすでに花から視線を移してとある場所を指差す。指差したのは左側にある小高い丘を登った所にある休憩所だ。岩で出来たベンチが二つに、四角いテーブルが一つ。その上には雨を防ぐドーム型の天井がある。

「休みたいの？」

ノイアが後ろに問う。皆に向かうには真っ直ぐに進む必要があり、あまり寄り道はしたくない。だが、どうしてもシエルが気になる。

「うん……座っていると痛い」

シエルがノイアの背を抱く力を強める。ノイアは困った顔をする。本当に甘えん坊なんだから」

ノイアは溜息をついてからブレイズに視線を向ける。

「待て……」

ブレイズが休憩所に視線を走らせる。

「どうしたの……？」

ノイアが首を傾げる。

「……一つ教えてやる。休憩所……またはその付近では油断するな」
ブレイズは全く警戒を緩めない。ノイアも視線を走らせる。刹那、一本の矢が視界に入る。

「くっ……！」

ノイアは矢をナイフで弾く。ブレイズが警告してくれなかったら反応できなかった。

「ナイフが使えるというのは本当らしいな」

ブレイズが剣を抜いてノイアの前に立つ。その瞬間に薄い茶色のローブを纏った数人組みが去って行った。ブレイズはそれを見届けてから剣を収める。

「……びっくりした」

シエルがノイアを強く抱きしめる。

「どういう事……？」

ノイアは前に立つブレイズに問う。

「休憩所では皆油断するものだ。ああいう輩にはいいターゲットだ

ろう」

ブレイズは溜息をついて説明。

「……でも、シスターを狙うなんて」

ノイアは驚きを隠せない。

「……シスターを殺せば隣国から多額の金が入る。他に理由があるのならば逆恨みだな」

ブレイズが振り向く。どこか悲しそうな顔をしていた。

「………そんな………」

ノイアはショックを隠せなかった。

「俺達は神力を持たない。持ち前の身体能力で騎士になる者もいるが……盗賊や傭兵になる者もいる。生きていくには手段を選ばないんだよ……彼らはな」

ブレイズは顔を落とす。一步間違えばブレイズもあの者達の仲間になっていた可能性もあるのだ。決して他人事ではない。騎士になった以上はああいう者に剣を向ける機会は今からたくさんあるのだろうが。

「お金のために刃を向ける者が……いるなんて……」

ノイアは自分の甘さに嫌気が差す。それだけシスターという地位に甘えていたのだろう。

「あの人達も困らない世界にしたいね」

シエルは何気なくつぶやく。二人は目を見開く。

「……なるほど。団長が選ぶだけはあるようだな」

ブレイズは短くつぶやいてから馬を走らせる。ノイアは沈んだ心のまま馬を走らせた。ただノイアの馬の動きは悪い。馬は人の心情に敏感だと言うが、それは本当らしい。

「お願い……今は走って」

ノイアは短く馬に話しかける。馬は一度だけ鼻を鳴らしてから今まで通りに走り出した。

*

「将来を担うかもしれないシスターか……」

40代後半の男が窓の外を見ながらつぶやく。礼服に身を包んだ長身の男で、名をヴァンスと言う。首都クロイセンの政治を任されている男だ。

「はい。ただ同じ時代に二人も優れた才を持った者が生まれたのが問題なのです」

ヴァンスの後ろに立った男がつぶやく。

「争いの原因になるか……だからと言って100年に一度生まれるかどうかの神力を持った者を消すとは」

ヴァンスは振り向いてつぶやく。理解できないという顔をしている。

「現在はハーミルを支持する者が多いのです。後手に回れば……最悪、内乱が起こるのですぞ！」

男が叫ぶ。

「くっ……だが、私はもう少し見てみたいのだ」

ヴァンスは拳を握りつぶやく。あのシェライトという少女が歩む道が見てみたい。あの無垢な少女ならこの歪みきつた国を正せる気がするのだ。

「分かりました」

男は一度頭を下げて退出する。

ドアを閉め数歩通路を歩いた瞬間に拳を握る。

「やはり手を尽くしておいて正解だったか。ヴァンス殿は甘すぎる」

男は不気味な笑みを浮かべて去って行った。

*

ロングコートが風に揺れる。

「ずいぶん久しぶりだな……この国」

地図を見ながら歩いているのは傭兵ジュレイドである。消すよう

に依頼された少女シエライト・ルーベントをこの目で確かめるために、ジュレイドは黙々と歩く。

情報屋の話ではあと二日後にターゲットはクレイア砦に入るらしい。このまま進めば彼らがたどり着くよりも前に目的地に着けるだろう。

「……あれは……」

ジュレイドが独語して空を見上げる。白い鳩がジュレイドに向けて飛んてくる。

「仕事か……？」

ジュレイドは右腕を上げる。鳩がその腕に着地。足についた手紙を外した瞬間に、役目を終えた鳩は一度空へと戻る。

「騎士団団長のアルフレッドか……こんな有名な奴からの依頼とはね」

ジュレイドは手紙を見て微笑んだ。

「一方では消せと依頼され……一方からは守れか……モテモテだね」

ジュレイドは手紙のポケットにしまい歩き出す。自らの道を決めるために。

*

「日が沈むか」

前を進むブレイズがつぶやく。

「そうね」

ノイアが一つ頷く。辺りはすでに薄暗い。少しでも明かりがある内にテントを張りたい。

「ここまで来る事ができれば問題ない」

ブレイズが馬から降りて街道を右にそれていく。目の前に見えるのは森だった。

「今から森に入るの？」

ノイアが確認。視界が悪い状態で足場の悪い森に入るなんて正気とは思えない。

「すぐにテントを張れる場所がある。ここは首都クロイセンとクレイア砦のちょうど中間地点。休憩場所として森を切り開いている」
ブレイズが振り向いて説明。

ノイアはすぐに納得した。馬でも二日かかるのだ。ならば休む事ができる場所を予め用意しておくのが理想的だ。

「すごい、すごい！」

シエルは森に入った瞬間に騒いだ。切り開かれた道の左右の木々には輝石がつけられていたのだ。シエルが手を向けると神力に反応して輝石が輝く。森が三人を祝福するように輝いて出迎える。輝石から漏れた光の粒子が宙を踊るように舞う。

「綺麗……」

ノイアは溜息が出た。

「これが……俺にはない力か……」

ブレイズがつぶやく。

ここには何度も来た。だが、ランプだけで進む森の道は不気味でしかなかった。今の心を洗うような温かな光など見ることすらなかった。ハールメイツ神国がなぜシスターをここまで重要に扱うのかブレイズはようやく理解した。神力が使えない人間にはこの光景は奇跡と言う他ないのだから。

「行こう」

いつの間にか隣に並んだノイアが笑う。空間を満たす光の粒子に照らされたノイアの笑顔は言葉にするのも難しいくらいに綺麗だった。

「そうだな」

ブレイズは微笑んでから歩を進めた。

奥に進み頭上を見上げると森の木々の枝があちこちで伸び、開けた空間をドーム状で囲っている。ぐるりと周りを見ると木々に囲ま

れ、木々の間から漏れる月明かりが地面を照らしている。不思議な事に今までは木の幹でいっぴいだった地面は綺麗な平ら。ここならば一つくらいならテントが張れそうだ。

三人は馬の手綱を木々に縛り付けてから、手分けをしてテントを張り、地面に輝石が入ったランプを置く。来た道を照らしていた輝石への力の供給を止めて、次はランプに力を注ぐ。

「何か作るね」

ノイアが馬に括りつけてあった荷物袋から、パンと、お湯に溶かせばすぐに飲む事ができるスープを取り出す。この五日間は簡単な食事しか出来ないと思うと少し寂しさを感じる。

「木を集める必要はあるか？」

ブレイズが問う。二人は首を傾げる。その反応にブレイズは戸惑った。

「これがあればいいよ」

ノイアが取り出した物は携帯用のコンロだ。中におそらく輝石が入っているのだろう。

「……まるで魔法使いだな」

ブレイズが顔を落としてつぶやく。手をかざすだけで火を得る彼女達。自分とは違った人種に見えて仕方ない。

「……使えないんだよね」

ノイアがぎこちなく笑う。少しでも神力が使える者なら誰でも使えるような代物なのだ。それが使用できない。二人の間には深い溝があるような気がしてならない。

「使えない物にこだわっても意味はないな。料理は任せる」

ブレイズは地面に座り瞳を閉じる。瞳は閉じているが警戒は緩めない。何者かが接近すればすぐに気づく。現在、三人の周りにいるのは一人だけだ。首都クロイセンを出てからずっと感じる気配。

「……」

ブレイズは一度溜息をついてから料理にいそしむ二人を見つめるのだった。

*

時刻は午後１１時。寝ずの番をしていたブレイズはゆっくりと瞳を開ける。チラリと視線を向けると一つの毛布の中で眠るノイアとシエルがいた。一方的にシエルがノイアに抱きついていていただけのだが。

「平和な二人だな」

ブレイズは独語して立ち上がる。テントから出て三人が来た道を真っ直ぐ見つめる。三人を監視していた気配がゆっくりと近づいてくる。

まず目についたには輝石で輝くランプだった。だがシスターではない。身に纏っているのは真紅の甲冑。ブレイズはその甲冑を見て誰だかすぐに分かった。

「聖騎士……ルメリアか」

ブレイズはつぶやく。

「初めまして……ブレイズ」

騎士がうつすらと微笑んで挨拶をする。甲冑と同じ真紅の髪に、すらりとした体躯。女性騎士の中でも一位、二位を争う腕を持つ人物だ。剣の腕も優れているが、驚くべきは騎士でありながら神力が使える事である。両方の力を得た規格外の騎士に与えられた称号が聖騎士だった。

聖騎士の称号は今の所はルメリアしか持っていない。理由は二つある。

一つは二つの力を持つ者が稀であるという事である。国に二人か三人いればいくらいである。そして、もう一つ。これが一番の課題である。神力は本来は神聖な力。穢れた手ではその効力が失われてしまう。簡単に言えば人を傷つけてしまえば徐々に力を失ってしまうのだ。では、なぜ騎士など勤めていられるかと言えば、このルメリアという人物。人を殺さずに武器だけを破壊できるだけの腕が

あるからだ。

「……………」

ブレイズはどう言葉をかけていいか分からない。それだけ騎士としての格が違う。

「そう緊張しないで……二人の様子はどうか？」

ルメリアが問う。

「今は……ぐっすり眠っている」

ブレイズがテントに視線を移す。

「そう……なら安心ね。私は少し離れて様子を見ているわ。何かあれば介入するから。ただあまり期待しないでね。公ではあなたたちの護衛ではない。出来れば一度も介入せずに終わりたい」

ルメリアはそれだけを言っって背を向ける。

「分かった」

ブレイズは短く言っってテントに戻った。

*

早朝。ノイアは暑さを感じて瞳を開ける。

「ノイアー」

甘ったるい幸せそうな声が耳元で聞こえる。原因はどうかやらシエルらしい。シエルの両手と両足がノイアを捕まえて離さない。先ほどからシエルが動く度に柔らかな頬がノイアに触れる。

「もう……………」

ノイアは溜息をつく。だがシエルの幸せな寝顔を見ていると注意できない。

「……なあ」

声に反応して視線を向ける。声を掛けてきたのは当然ブレイズ。

「なに？」

ノイアは問う。

「シスターは……その……同姓愛はいいのか？」

ブレイズが真顔で質問。ノイアは言葉の意味を理解した瞬間に顔が真っ赤になる。

「駄目に決まってるでしょ！」

なぜか叫んでしまった。

「そ……そうか」

ブレイズはその勢いに押されて、頬に嫌な汗が流れる。

「もう朝？」

目を覚ましたシエルが問う。

「少し早いけど……今日には砦に着きたいから起きるよ」

ノイアがシエルの柔らかい髪を撫でる。

「それなら準備しないとね！」

シエルが元気よく立ち上がった。

*

視界に入るのは漆黒の壁。岩を高く積み上げた城壁は20メートルを越えているだろう。その城壁の上には甲冑を纏った騎士が24時間体制で見張っている。

「なかなかの警備だねえ」

木陰から砦の様子を眺めているのはジュレイド。ゆっくりと左腰に吊っている拳銃を抜く。リボルバータイプの大口径の銃で連射は出来ないが騎士の甲冑を破壊するだけの威力がある。一度、弾丸を確認。六発入っているのを確認して腰にあるホルダーに戻す。

「さて……では到着を待ちますか」

ジュレイドがぼつりとつぶやく。だが、次の瞬間には右腰に吊っている連射性能に優れた銃を引き抜く。草が揺れると同時にジュレイドは銃を向ける。

「待て！」

声と共に現れたのはジュレイドに仕事を依頼したフード姿の男だ。どうやらわざわざ仕事を確認しに来たらしい。その後ろには体格の

いい男達が10名はいた。共通点は赤いバンダナと丸太のような太い腕に施された蛇の刺青。

「……へえ……同業者か」

ジュレイドは銃を向けたままつぶやく。

「まずはその銃を降ろしてくれ」

男が両手を上げてつぶやく。ジュレイドは仕方なく銃を降ろした。「二つも雇うとは……用意はいいが……ルールに反するな」

ジュレイドは溜息をついた。それは傭兵を信賴していないと言っているのと同じ事だ。そんな依頼主を信賴するほど傭兵は甘くない。「ここで降りるなら……分かつているな」

フードの男が傭兵の背に隠れる。

「ここでドンパチしたら見つかるだろうが」

ジュレイドは溜息をつく。この男と話しているとだんだん頭が痛くなってくる。

「それはこちらと同じ考えだ」

同業者のリーダー格の男がつぶやく。

「ふーん。なら俺は様子を見させてもらっさ」

ジュレイドはつまらなそうに咎を見つめる。

「おい！」

フードの男がジュレイドを睨む。

「……安心しなよ。ちゃんと仕事はするから」

ジュレイドはニコリと微笑む。だが、瞳は全く笑っていない。寒気がするほどである。

「分かった」

フードの男はそれだけを言うのがやっとだった。ジュレイドを無視して咎を迂回していく。どうやら咎に入る前に消すつもりらしい。「昼間から堂々と襲うなんてスマートではないねえ」

ジュレイドは溜息をついて彼らの後を追う。

「ま……ちゃんと仕事するのは本当だ。雇い主が違っけどね」
ジュレイドはぼつりとつぶやいた。

*

馬を走らせてから三時間。砦に近くなったからか道は雑草が減り、だいぶ走りやすくなった気がする。

「急に寂しくなったね」

シエルが地面を見てつぶやく。ノイアも感じていた。今まで見かけた花々がないのだ。

「この辺りは幾度か戦いがあったからな。その痕だろう」

ブレイズがつぶやく。

戦いの傷から立ち直らない大地。どことなく寂しさを感じて三人はそれ以上言葉を発する事ができなかった。

「一雨……来そうだな」

ブレイズが頭上を見上げる。本日は朝から曇り空だった。そして、今は黒い雲が頭上を覆い、今にも降りそうである。

「雨の中を走るのは辛いけれど……今日は砦に着きたいね」

ノイアが頭上を見上げる。雨を凌げる砦に何とか着きたい。そう思った瞬間にノイアの鼻先が濡れた。次には頬に足に雫が降ってくる。どうやら本当に降り出したらしい。

「……悪い事は重なるものだな」

ブレイズの低い声を聞いたノイアは咄嗟に視線を下げる。

赤いバンダナを巻いた屈強そうな男達が視界に入る。その中央には薄い茶色のフードを被った男。彼らから離れるようにもう一人長身の男がいる。彼が仲間かどうかは分からないが警戒する必要があるそうだ。

「下がってろ」

ブレイズは馬から降りて、すかさず剣を抜く。

「シエルは私から離れないで」

ノイアとシエルも馬から降りる。

「この子達は任せて」

シエルは馬の手綱をしつかりと掴む。ノイアは一度頷いてからナイフを抜く。

「行く」

ブレイズは短くつぶやいて地面を蹴る。バンダナを巻いた傭兵が一斉に手にしたボウガンを構える。狙いは当然ブレイズ。

ボウガンの矢が空を切り裂く。視界に入ったのは金属の矢と剣がぶつかった際の火花。そして、鮮血。

「なんだ……こいつ」

傭兵は驚愕の表情を浮かべる。一番前でボウガンを持っていた傭兵が胴を斬られて倒れたのだ。傭兵は慌ててボウガンを投げ捨てる。この距離で使える武器ではない。剣を引き抜こうとした瞬間にさらに鮮血が舞う。身体能力が高いとされる騎士ではあるがこの速さは異常の一言。同じように神力を持たない代わりに高い身体能力を得た傭兵達でさえ追いつけない。

「数人であちらに向かえ！」

フードの男が指示。それと同時に五人の傭兵がブレイズを包囲。すかさず三人の傭兵がノイア達に向かって走る。

「ちっ……」

ブレイズは舌打ちをした。助けに行きたいがブレイズを五人の傭兵が包囲している。包囲した傭兵が一斉にブレイズに斬りかかる。

刹那、耳をつんざくような音が響く。ブレイズは後方にいた傭兵に対する警戒が緩んでいた事に遅れて気づく。だが、ブレイズには何の痛みもなかった。

「がっ……」

突如、ブレイズの目の前にいた傭兵が倒れる。傭兵達が驚いて視線をジュレイドへ。

「外した……悪い、悪い」

ジュレイドが肩をすくめる。一度、ブレイズと視線が重なる。今のうちにどうかしろと言っているように思える。半信半疑だがこの機会を逃す手はない。

「……………」
ブレイズは戸惑っている傭兵を横薙ぎの一閃で切り裂き地面を蹴る。刹那、銃声が轟く。ブレイズの後を追おうとした傭兵が次々に倒れていく。

「貴様………どういふ………！」

フードの男はそれだけしか口にできる事できなかった。ジュレイドが放った弾丸が男の頭部を吹き飛ばしたからだ。

「傭兵なんてこんなもんだよ」

ジュレイドはリボルバー式の拳銃に弾丸を込める。それから視線を前に向ける。

「さて………ここまでやったんだ。どうにかしろよ」

ジュレイドはゆっくりと歩きながらつぶやいた。

ノイアが展開した障壁に剣が激突。眩しい閃光が視界を埋めると同時に、傭兵が障壁の力に押されて吹き飛ぶ。だが、残った二人の傭兵が剣を振り上げて迫る。

「一撃だけなら………」

ノイアは障壁で一撃を受け止めて吹き飛ばし、もう一人の一撃はナイフで止める。がら空きの胸に蹴りを叩き込みたいが、それが出来ないのが悲しい所だ。こんな所で神力を落とすなど考えられない。「武器を破壊すれば！」

ノイアは左手にナイフを握り、力任せに傭兵の剣に叩きつける。

「なっ………んだと」

傭兵は亀裂が入った剣を見て慌てて後ろに飛ぶ。シスターの一撃にはとても見えない。これは騎士が放つ一撃の重さと鋭さだ。

「早く………来て、ブレイズ」

ノイアは走ってくるブレイズを見つめる。その間にも傭兵が左右から剣を振り下ろす。ノイアを倒せば戦えないシエルを倒して終わり。

「ぐっ………」

ノイアは左右からの一撃を両手のナイフで受け止める。

「ノイア！」

シエルの悲鳴に近い声がノイアの耳に届く。

「こんな奴らに負けるか！」

ノイアが叫ぶ。気合を入れるがナイフはすでに限界。亀裂が入りいつ折れてもおかしくはない。諦めかけた瞬間に銀髪が視界に入った。ノイアは安堵の息を吐く。

「待たせた」

声と共に鮮血が舞う。ノイアの右にいる傭兵が力を失って倒れる。最後の一人になった傭兵は数歩後ずさる。

ノイアが一度瞳を閉じる間に銀閃が煌く。耳に入るのは剣響。

「すごい……」

ノイアはそれだけをつぶやくのがやっとだった。高速の剣が幾重も繰り出される。傭兵はついていくのがやっとだった。頬には冷汗が流れている。

「……」

無言でブレイズが剣を振り上げる。激しい火花が散ると同時に傭兵の握る剣が折れる。

「くっ……」

傭兵が剣を捨てて半歩下がる。それよりも速くブレイズが踏み込む。横薙ぎの一閃。

「……あと……一人」

倒れていく傭兵を見ずに黒いロングコートを纏った男を睨む。ノイアとシエルはブレイズの背に隠れる。

「俺はジュレイド……出来れば戦いたくないんだけど」

ジュレイドは微笑んでから銃をしまう。丸腰で歩いてくるが警戒は緩めていない。ブレイズが地面を駆けると同時に銃を抜くだろう。それだけの事ができる自信があるのかジュレイドは気楽そうな笑みを浮かべて近づいてくる。

「……どう見る？」

ブレイズが背に問う。

「……分からない」

ノイアはすぐに首を左右に振る。敵なのか味方なのか全く分からない。

「なら……お話しよー」

ノイアの背に隠れていたシエルが歩き出す。すぐにブレイズの隣を通り過ぎて無垢な笑顔を向ける。

「待て！」

ブレイズが慌てて地面を蹴る。だがすぐに止める。下手に動けない。

「シエルだよ。助けてくれてありがとう」

シエルが笑顔で片手を上げて挨拶。

「ふーん」

ジュレイドがさかさ銃を抜く。すぐに引き金を引かなかったのが唯一の救いである。

「シエル、戻って！」

ノイアの悲鳴に近い声が響く。

「お話にそんな物はいらないよ」

シエルが頬を膨らませる。シエルを狙っているのは大口径の銃。一撃で絶命させる事ができる代物を隠せずに見つめる少女。

「面白いねえ……こっちの依頼にして良かった」

ジュレイドは銃を収める。

次の瞬間にはブレイズが剣を振り上げる。高速の一閃をジュレイドは半歩下がって回避。

「おいおい。こっちは丸腰だぞ」

笑いながらブレイズの剣を避け続ける。

「ちっ……」

ブレイズは舌打ちをする。何が丸腰だと言うのか。避けた瞬間に銃を抜けるタイミングは幾度かあったはずだ。頭の固いブレイズには彼が何をしたいのか理解できない。あまりにも自由過ぎる。

「二人とも駄目だよ」

シエルが二人に向かって叫ぶ。

「あんたは黙ってなさい」

ノイアがシエルの前に立ち障壁を展開。これでとりあえずシエルは守れる。

「お姫様は会話したいみたいですぜ」

なおも避けながらつぶやくジュレイド。ブレイズは舌打ちをしてから剣を止める。

「何がしたい」

ブレイズは仕方なく会話に応じる。目的が分からない。

「本来はそのお姫様を殺すように言われたんだけど……あんたの所の騎士団団長に守ってくれと依頼されてね。ほれ」

ジュレイドがコートに入った手紙を投げる。ブレイズはそれを受け取り中身を確認。

「傭兵は依頼が第一ではないのか？」

ブレイズが問う。

仕事を正確にこなし、依頼主を裏切らない事が傭兵を続けるコツだという事を、小耳に挟んだ事がある。この男は依頼を一つ無視して、別の依頼をこなしたらしい。全く逆の依頼であるならばどちらかを無視するしかないのだが。

「まあ……そうだろうな。でも、俺には当てはまらない」

ジュレイドは残念そうにする。

「力があるのなら全うな事に使うべきよ！」

ノイアが叫ぶ。澄んだ緑色の瞳が真っ直ぐにジュレイドを睨む。

ジュレイドはあまりに澄んでいると思った。真っ直ぐ過ぎる瞳。汚れた自らの瞳とはまるで違う。

「優等生の言葉だねえ。全うに生きれたら……そうしてるさ」

ジュレイドは一度顔を落としたが、すぐに先ほどから浮かべている気楽な笑みを浮かべる。

「今からでも……大丈夫だよ」

シエルが微笑む。その愛らしい笑顔はまさに天使のようだった。
「……………」

ジュレイドはその笑顔を見て戸惑う。今までの過去を洗い流すような笑みだった。おそらくこの少女に少しでも心が触れてしまえば撃てなくなる。そんな気がした。

「で……………どうすんの？ 雇う？ 依頼主はあんたらの団長だけど」
ジュレイドはシエルから視線を外し、ブレイズに問う。このシエルと名乗る少女はこの中で一番危険な気がする。

「団長が雇ったと言うのなら信じよう。この手紙も本物だ」

ブレイズはそれだけを言うのが精一杯だった。そもそもブレイズはこの男に勝てない。殺そうと思えば、この三人くらいは平気で殺せる。だがそれをしないのは何か理由があるのだろう。

「……………これだけ強い人がいれば安心か」

ノイアは顎に手を置いて思考。

「増えた方が楽しいよー」

シエルは笑顔でつぶやく。何事にも臆せず信じるシエル。穢れという言葉とはもっとも遠い位置にいる少女。

「敵わないな」

ノイアはぽつりとつぶやいてシエルの頭を撫でた。シエルはくすぐったそうに小さな頭を揺らした。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 2（後書き）

感想、批評ありましたらお願い致します。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 3

ただあなたを守りたい シスター見習い編

― 3 ―

「本格的に降ってきたな」

ジュレイドは空を見上げる。戦闘の終わりと同時に強さを増した雨。数分立っているだけでコートはずぶ濡れ、張り付いた髪は不快でしかない。ジュレイドは一つ溜息をついた。

「急ごう」

ブレイズは表情を変えずに素早く馬に乗る。ノイアは不安そうにシエルを見つめながらブレイズの後ろに乗る。

「一人で乗れるか？ お姫様」

馬に乗ったジュレイドが問う。

シエルは一つ頷いてから後ろに乗った。大柄な男二人で馬に乗るのはさすがに無理があるので組み合わせを変えたのだ。シエルをどちらが乗せるかで揉めたが、シエル本人の要望でジュレイドに任せる事にした。単純な強さだけなら何も問題はないのだが、いつ裏切るのか分からない男に重要人物を任せるのは不安で仕方ない。

「行こう！」

シエルが嬉しそうに拳を上げる。シエルは気さくなジュレイドが気に入ったらしく、終始ご機嫌である。

ノイアは何か面白くないと思う。こっそり頬を膨らませて、後方に吹き飛ばされないようにブレイズの肩をしっかりと掴む。

ジュレイドはノイアの反応が面白いのか一度ニヤリと笑い手綱を引く。

「では、行こう！」

ジュレイドが陽気な声を出して馬を走らせる。この飄々とした態

度のせいで何を考えているのか分からない。

「ちっ……」

ブレイズは一つ舌打ちをする。なぜ騎士団団長はこの男に護衛を依頼をしたのか、真意を測りきれない。この男は陽気な雰囲気を漂わせているが、必要であれば平気で仲間を裏切り、どこまでも冷酷に戦えるとブレイズは思っている。警戒する気持ちを抑える事ができない。

「落ち着いて」

ノイアが小声でつぶやく。ノイアの言葉を聞いて急激に頭が冷える。こんな事で平静になれなければ重大な所でミスをする。そして、今までの思考はブレイズの勝手な解釈。真実とは限らない。

「すまない」

ブレイズは短くつぶやいて馬を走らせた。

*

甲冑を身に纏った大柄な男が顎に手を置いて険しい表情を浮かべる。場所はクレイア砦の執務室。先ほどから険しい表情を浮かべているのは砦を任された騎士である。

「本気……なのですか？」

正面に立っている老齢な男が問う。視線が向けられているのは机に置かれた一つの手紙。

「……首都クロイセンからの依頼だ。だがヴァンス殿からの指示でないのが悩む所だ」

男は険しい顔をさらに険しくさせる。この手紙は首都クロイセンの政治の代表者であるヴァンスの手紙ではない。ハーマル派として有名なヴァーンハルトからの手紙なのである。

「何を悩むのですか……。あれだけ優秀なシスター見習いなど……そうはいないですよ。ハーマル派の勢力が強いのは心得ています。が……このご時勢、何が起こるか分かりません。迂闊な行動は控え

るべきかと」

老齡な男が早口に述べる。

大柄な男は一つ溜息をついた。目の前にいる老齡な男性が言いたい事はよく分かる。だが、こちらにも立場がある。

「ふう……それは元副団長としてのご意見かな？　ギルベルト殿」

男は視線を向ける。ギルベルトと呼ばれた老齡な男性はゆつくりと首を振った。

「それは……昔の事です。今はしがない一介の騎士でしかありません」

ギルベルトは顔を落とす。一介の騎士が意見を言ってもいいような案件ではない。だが、味方に刃を向けるなどあつてはならない事だ。どうにかして止めたい、そう思わずにはいられなかった。

「……俺はこの手紙に従おうと思う」

男はそれだけを言つて立ち上がる。対話を拒絶するために背を向け、執務室の最奥にある窓から降り続く雨を見つめる。ギルベルトは諦めたのか一度溜息をつく。

「……分かりました」

ギルベルトは一つ頭を下げ、背を向ける。気づかれるように拳を握り締めて。

*

飛び跳ねる泥が甲冑を汚していく。そんな事を気にした様子もなくブレイズは前だけを見る。

「そろそろ……だよね？」

後ろに座っているノイアが問う。目の前にいるブレイズはただ一度頷くだけだった。ブレイズからは常に張り詰めた空気を感じる。一度、襲われたのだから当然と言えば当然なのだが。もう少し肩の力を抜いた方がいいような気もする。ブレイズに倣い常に左右に視線を走らせている自分が言うのはおかしい事なのだが。

溜息をついて視線を右に向ける。そこには気楽な笑みを浮かべるジユレイドがいる。

「なあ……お姫様？」

ジユレイドが後ろに座っているシエルに問う。あまりにも自然なので自分達が命を狙われている存在を守っている事を忘れそうになる。

「なに？」

ジユレイドに張り付くように身を寄せているシエルが小首を傾げる。長年旅をしているような錯覚する起こすほどに馴染んでいる二人。この順応性の高さには驚かされる。

「あの二人……どういう関係？」

ジユレイドが左に視線を向けて問う。ブレイズとノイアの事だ。

見た所はお互いを嫌っている様子はない。必要なら体を寄せる事もある。現在も馬に乗るために身を寄せている。だが、恥じらいや、照れなどはない。二人とも年頃である。頬を赤らめるなど、何か反応があってもいいような気がしてならない。必要な事をしているだけという、冷めた恋人同士、または熟年夫婦のような二人。ジユレイドは問わずにはいらなかった。

「うーん。私達はシスターだから恋愛感情とかはないよ。うっん、持つてはいけないの」

シエルが二人を見ながらつぶやく。今も辺りを警戒しながら進む二人。必要ない会話をしているシエル達が不真面目に思えてしまうほど生真面目な二人。

「ふーん。若いのにねえ」

ジユレイドは何だかつまらなそうだ。

若い男女が出会えば恋愛。そんな単純な思考をとりあえず追い出して改めて二人を見つめる。恋愛感情ではなく、どこかでつながり信頼している二人。

「友か……同志かねえ」

ジユレイドはつぶやく。自分にはほど遠い言葉。これが裏切り続

けてきた者に与えられた罰。後悔がないと言えは嘘になるし、それしか方法がなかったのも事実。寂しい人生の終わりがこの少女の護衛。幸せかどうかは分からない。ジュレイドは自嘲の笑みを浮かべて前を見つめた。

「いいなあ……ねえ、ジュレイド」

シエルがジュレイドを抱きしめる腕に力を込める。シエルの温もりが背に伝わってくる。先ほどの暗い気持ちが一瞬だけ霧散して消える。

「なんだ？」

ジュレイドは前を見ながらつぶやく。遠目には漆黒の壁が見える。会話をする時間も限られてきた。言いたい事があるなら全て聞いておきたい。

「私達も……同志に……ううん……友達になれるかな？」

頬を朱色に染めて無邪気に問うシエル。あえて友達という言葉に言い替えたのが、シエルの幼さを伝える。そして、嘘偽りのない本心だと分かった。

「……」

ジュレイドは言葉を返せなかった。今まで聞いたどの言葉よりも重かった。腕の震えが止まらない。どんな相手が現れようと震える事がなかった体。だが、こんなにも小さな少女の言葉に震えている自分がいる。

もう二度と聞く事ができないと思っていた言葉。もう誰も信じてくれないと諦め、乾き切った心を潤す言葉。この体の震えは純粹に嬉しいのだと確信した。

「どうしたの……？ やっぱり嫌かな」

落ち込んでうな垂れるシエル。刹那、ジュレイドの心は万力で絞められたように痛む。今まで受けたどんな傷よりも深く心を抉る。直感的にこの少女は危険だと思ったのは正解だった。だが、もう遅いと頭では理解した。一度、シエルの心に触れてしまったから。もうこの少女に引き金を引く事はできない。こんな小さな少女を殺せ

ない傭兵。ただの笑い種だとジュレイドは思った。

「……そんな事を言ってる……俺が裏切った時に泣くぞ」

ジュレイドはつまらない軽口を言うのがやっとだった。平静でいられない。

「……いなくなったら悲しい。だから泣くよ。私は誤魔化したり、嘘を言ったりできる器用な人間ではないんだ」

シエルがジュレイドのコートに顔を埋める。真っ直ぐな気持ちを伝えてくるシエル。この少女は自分が関わった者が、一人でもいなくなれば泣くのだろう。

「……こんな子を……殺そうとしたのかよ」

ジュレイドは小声でつぶやく。表情には明らかな自嘲の笑みが浮かんでいる。

「お願い……裏切らないで……」

シエルは顔を埋めたままつぶやいた。

「考えとくよ」

ジュレイドは短く返した。ジュレイドにはこの少女は重かった。

チラリと視線を左に向ける。ただ前だけを見て歩み続ける二人。おそらくこれくらいの想いがないと一緒にはいられない。

(……一番の年長者が……一番……ガキじゃねえか……)

ジュレイドは心の中でつぶやいた。去り際を間違えれば一生後悔すると思うジュレイドだった。

*

クレイア街道を走破した四人の視界に入ったのは、漆黒の城壁で守られたクレイア砦。そして、城門にたどり着くための200メートルはある石を積み上げて作られた巨大な橋。橋の下は雨で勢いを増した川が流れている。

「先行する」

ブレイズが言葉の通りに先行。ブレイズの甲冑を見ればすぐに城

門が開くだろう。

橋を半分渡り切り、視線を上げると城門の上にいる兵士が旗を振る。開門の合図だ。

「ようやく屋根がある所に入れるね」

ノイアが安堵の息を吐いた。先ほどから服が張り付いて気持ちが悪い。雨に濡れて体温も徐々に落ち、疲労を感じた体はいつもよりも動きが悪い。

「そうだな」

ブレイズもどこか安心していうようだ。護衛という任務は緊張の連続なのだろう。落ち着きたい気持ちも理解できる。

「……」

だがジュレイドは辺りを警戒している。どうも腑に落ちない。

「どうしたの？」

シエルが問う。この少女はどうも人の心の変化に敏感らしい。ジュレイドの天敵かもしれない。

「お姫様は何にも心配いらないさ」

ジュレイドは笑う。それと同時に素早く視線を走らせる。

ブレイズを見るなり即座に開門をした所を見るとよく訓練されている。以前に砦を迂回した際も突き刺さるような視線を感じていた。あの時にジュレイドの存在に気づいていない訳がない。仲間として受け入れたか、それとも中に引きずりこんで始末するのか。口を開けた城門が不気味に見えて仕方がない。

「怖いねえ……」

ジュレイドは短くつぶやいた。

*

四人が城門をくぐり抜けるとすぐに門が重量を感じさせる音を立てて閉まる。

開けた空間の中央にいたのは老齢な男性。白髪を肩くらいまで伸

ばし、整えられた口髭と顎鬚が特徴的な細身の男。年齢は60歳に届くくらいだろうか。その男性を見るなりブレイズが瞳を大きく見開いた。

「ギルベルト元副団長！」

ブレイズが馬から降りて嬉しそうに駆け寄る。ノイアはこんなに嬉しそうに笑うブレイズを始めてみた。そもそもあまり笑った所を見た事がない。

「これは……ブレイズ。久しぶりですね」

ギルベルトが微笑む。二人はお互いに手を差し出して握手を交わす。

「へえ……ハールメイツの軍神……ギルベルト・スタンリーか」

ジュレイドが目を見開く。

ハールメイツの軍神。グリア連合国の二倍に渡る軍勢を卓越した指揮と、剣技で三度退けた際に畏怖と敬意を持つてつけられた称号である。神力を持たない騎士ではあったが当時は英雄扱いされていた。現在の騎士団の基盤を作ったのは彼であると言っても過言ではない。

まさかハールメイツの軍神とまで言われた高名な人物が今は重要拠点ではなく一つの砦で一介の騎士をしているとは。彼の噂を耳にする機会が多いジュレイドは驚かずにはいられない。

（……衰えたという訳ではないみたいだな）

ジュレイドが心の中でつぶやく。先ほどから背筋に氷をつけられたような強烈な寒気がする。とてもではないが衰えているとは思えない。おそらく傭兵であるジュレイドにだけ向けているのだろう。信用されないのは当然だ。

他の者の反応を知ろうと視線を向けると、ノイアとシエルは嬉しそうに笑うブレイズに温かい視線を向けている。ギルベルトの事は特に気にはしていないらしい。

「さあ……中にどうぞ」

握手を終えたギルベルトは右手を砦に向ける。一同が一步步んだ

のを見てギルベルトは背を向けて歩き出す。一向は案内されるままクレイア砦に足を踏み入れた。

クレイア砦の内部は入ってすぐに左右に階段がある。二階と城壁に上がるためのものだろう。視線を前方に向けると巨大な木製のドアが見える。おそらくこの砦を治める騎士が使用している執務室だろう。

「ブレイズにノイアさんは執務室へ。シェライトさんとジュレイドさんは私に付いてきて下さい」

ギルベルトがまずは執務室に右手を差し向ける。

「まずは報告だな」

ブレイズは一つ頷いて執務室に向かって歩いていく。ノイアはしばし迷ってから、執務室に向けて最初の一步を踏み出す。どうもシエルと離れるのは不安で仕方ない。一步を踏み出した瞬間にノイアの手にはギルベルトの手が触れる。刹那のタイミングで手紙を握らせる。

ノイアは驚いて振り向く。だがギルベルトは人差し指で自らの口を塞ぐ。何も言うなという事だろうか。ノイアは一つ頷いた。

「どうした？」

ブレイズが不審に思って振り向く。眉根を寄せてノイアを見つめる。だがノイアからは反応がない。何かを手に隠している。ブレイズは一度首を傾げた。

ノイアは掌に収まる手紙をこっそりと開ける。数こそ少ないが通路の左右には騎士が立っている。随時こちらに監視の目を向けており、迂闊に行動はできない。

（……ハーミル派の指示ですぐにでもシェライトさんの命は狙われます。護衛の方もおそらく分散する手筈になっています。どうか合流を）

ノイアは手紙の内容を心の中でつぶやく。内容を理解した瞬間に手紙を落としそうになった。慌てて振り向く。ギルベルトは一つ頷く。次にジュレイドに視線を向ける。

「また後でな」

ジュレイドは気楽につぶやくだけだった。だがその目は笑っていない。随時辺りを警戒し、いつでも銃を抜けるよう左手は大口径の銃に触れている。唯一、シエルだけは無邪気に砦の内部を見回している。

ノイアは拳を握ってからブレイズに体を寄せる。

「なんだ？」

怪訝な表情を浮かべてブレイズがつぶやく。周りの騎士からの視線が痛い。同国の騎士に女連れの騎士などと思われたくない。ノイアの肩に触れて離れようとした瞬間にノイアの口が動く。

「今から会う人は……おそらくハーミル派。気をつけて」

ノイアは小声でそれだけを述べた。ブレイズは努めて冷静を装う。「分かった」

ブレイズは短く述べて執務室に足を向ける。二人は何事もなかったように執務室のドアだけを見つめる。最悪はここからすぐに飛び出さねばならない。緊張の面持ちでブレイズは執務室に続くドアに手をかけた。

*

案内されたのは二階にある来客用の部屋だった。

ジュレイドは大口径の銃を引き抜いてゆつくりと進む。右を見ると白い布団が掛けられたベッドが二つ。左を見ると年代を感じさせる木で作られた机と椅子。正面には窓があり、外の通路を通じて移動できそうだ。

それ以外は何もないシンプルな部屋。目を引くのは机と、枕元に置かれているオイル式のランプくらいだろう。騎士が多いため輝石を使うランプは置いてないようだ。

「敵は……いないか」

ジュレイドは警戒しながら部屋を見渡す。次の瞬間には柔らかな

感覚が背に伝わる。シエルが体を寄せたからだ。ジュレイドが一度振り向く。そこには震えて縮こまったシエルがいた。

「……大丈夫？」

シエルが上目遣いで問う。瞳は若干潤んでいる。彼女にとって実戦は恐くて仕方なかったのだろう。そして、今回は頼りのノイアもない。

「ま……安心しなよ」

ジュレイドが努めて陽気に笑う。シエルが小首を傾げる。

「大抵の奴には負けないくらい強いから」

ジュレイドはつぶやくと同時に前方を向く。すつと目を細める。聞こえたのは甲冑が床を蹴る音。数は二人。刹那、銃を正面に向けて。鼓膜を破壊するような音と共に銃弾が空を切る。窓ガラスが割れると共に舞ったのは鮮血。窓に手をかけた騎士が一人倒れる姿が見えた。

「きゃあ！」

シエルは耳を塞ぎ、両目を閉じる。ジュレイドからは体を離さない。

「そのまま閉じてろ！」

ジュレイドは叫ぶと同時にシエルを抱き上げる。シエルは震えながらジュレイドに抱きつくようにしがみつく。小さな両手はしっかりとジュレイドを掴み離さない。

「窓からは無理です」

ギルベルトの声を聞くと同時に、窓に向かって牽制の射撃を放つ。着弾を確認せずに振り向いて走る。背中から聞こえてきたのは甲高い金属の音。

「大楯か……」

ジュレイドは苦々しくつぶやく。

「お早く」

ギルベルトがドアを開ける。駆け出すように外に飛び出したジュレイドは来た道を睨む。幸いまだ通路には騎士は展開していない。

「参りますよ」

ギルベルトは腰から双剣を抜いて駆け抜ける。ジュレイドはシエルを抱く右腕に力を込める。

「離さない」

シエルは震えながらつぶやく。ジュレイドは一つ頷いて地面を蹴った。

*

「これはどういう事だ？」

ブレイズは目の前で椅子に座る大柄な男に問う。ブレイズとノイアを囲むように立っているのは剣を抜いた四人の騎士。

「抵抗をしなければ……同じ騎士だ。手は出さない」

大柄な男が低い声で脅しを掛ける。周りの騎士も剣を構え直す。

騎士剣が一度眩しく輝く。だがこの程度で臆する二人ではない。

「……シエルを狙うなら……ここを出させてもらいます」

ノイアは腰につけているナイフホルダーからナイフを抜く。騎士が一斉にノイアに視線を向ける。いつ斬りかかってきてもおかしくない。緊迫した空気の中でブレイズも口を開いた。

「……仲間に手をかけると言うのであれば……不本意ではあるが剣を抜かせてもらう。俺は騎士団団長の命を受けて……この場にいる」
ブレイズも腰から剣を抜く。

「残念だ」

大柄な男が立ち上がる。それを合図にして騎士が二人に斬りかかる。まず動いたのはブレイズ。右に見える騎士が剣を振り上げると同時に横薙ぎの一閃を放つ。高速の刃が騎士の胴に吸い込まれるように進む。

刹那、ブレイズは舌打ちをした。いつもなら一撃で胴を切断できる間合い。一太刀で勝負を決められる自信もある。だが仲間に剣を向ける事に抵抗があるのか、甲冑にヒビが入る程度の力に自然と抑

えてしまっている。致命傷を逃れた騎士は数歩後ずさり再度、剣を構える。

迷ったブレイズは一瞬だけ反応が遅れる。頬に冷汗が流れた時に、凜とした力強い声が耳に届く。

「神聖なる神よ。我に守りの力を！」

障壁を発動させる言葉。刹那、ブレイズの目の前に障壁が展開。障壁を発動させたノイアは左から迫った騎士の剣をナイフで受け流している。ノイアのナイフには迷いが無い。いち早くシエルの元にたどり着きたいのだろう。

「……」

ブレイズは一度瞳を閉じる。障壁と剣がぶつかる音が響く。まだ割れる事はない。そう信じられる。ブレイズが現在するべき事は心を落ち着かせる事。仲間に剣を振るう覚悟を持つこと。

ブレイズはゆっくりと瞳を開ける。刹那、障壁が割れる。幾重にも散らばる光を視界に入れる。迫るのは二つの高速の剣。

「……迷わない」

ブレイズがつぶやくと同時に銀閃が煌く。砕けたのは二本の剣。武器を失った騎士は呆気にとられて前を見つめる。視界に入ったのは輝くような銀髪。

「吹き飛ばす！」

ブレイズは左手で鞘を引き抜いた勢いそのまま騎士二人の胴を横薙ぎに叩きつける。鋭い一撃が甲冑を破壊し、騎士二人は壁に激突して意識を失う。気絶する騎士を見つめたブレイズは心が締め付けられる思いがした。どれだけ覚悟を決めても仲間に、同じ国の騎士に剣を向けるのは耐え難い。

「時間を使い過ぎたな」

大柄な男が大剣を振り上げる。ノイアは二人の騎士の剣を受け止めて動けない。声に反応したブレイズは蒼白な顔を浮かべて力の限り叫ぶ。

「ノイア！」

ブレイズが地面を蹴る。男の左隣に駆け、素早く剣を構える。だが今からでは振り下ろされる大剣を止められない。ノイアのナイフでは受け止められない。

「神聖なる神よ。我に守りの力を！」

ノイアは真つ直ぐに大剣を睨みながら言葉を紡ぐ。この程度では恐れない。ずっとフィンネ教官の大剣を受け止め続けてきた。そして、自分の神力は規格外のもの。この強すぎる神力のためにシスターになれないのかもしれない。でも、今は必要な力。今すぐにでも泣いているかもしれない少女を守りたい。

「吹き飛ばし！」

ノイアが叫び障壁に力を込める。刹那、閃光が執務室を照らす。

男は何が起こったか理解できなかった。鉄球に体を吹き飛ばされたような感覚がした。握っていたはずの大剣は手にはない。耳に入ったのは大剣が床に落ちる音と、甲冑を砕く不快な音。

「なんだと……？」

男がつぶやいた時には体を斬られていた。両足の力が抜けて男は倒れていく。倒れていく最中、臆せず前だけを見つめ続ける緑色の瞳と一瞬だけ視線が合う。それを最後に全身の力が抜けて男は意識を失った。

「早く治療しろ！」

ブレイズは呆然と倒れた砦の男を見つめる騎士に怒鳴る。騎士二人が剣を捨てて男に駆け寄り、それを見届けて自らは執務室の外に向けて走る。殺さない程度には手は抜いた。甘いと言われるかもしれないが、これがブレイズに出来る精一杯だった。後ろを走るノイアは何も言わなかった。

*

甲高い金属音が立て続けに響く。ジュレイドは進路を塞ぐ漆黒の大楯を睨む。現在は一階に下りるための階段で足止めを食らっている。

るのだ。騎士は大楯を三枚並べて進路を塞ぎ、銃弾を弾きながら前進を続けている。追いつめてから大楯を解除するつもりなのだろう。銃弾を弾けると分かった騎士は落ち着いている。

「こいつを弾くなんて」

ジュレイドは大口径の銃を見つめて苦々しくつぶやく。甲冑を楽に破壊する弾丸を射出するリボルバータイプの銃。だが、さすがに大楯は貫通できないらしい。

「援護を頼みます」

ギルベルトは階段を駆け下りる。真っ直ぐに前を見て双剣を構える。

「簡単に言うねえ」

ジュレイドは残弾を確認してから続く。残弾は三発。右腕が塞がっているために、弾を込める事ができない。現状ではこのまま切り抜けるしかないだろう。シエル一人でこの場を駆け下りるのはさすがに無理がある。シスターは神力が使えるが身体能力はノイアのような例外を除けば、決して高くはない。背についてこさせるなら抱えて突破した方が遥かに楽である。

階段を駆け下りるギルベルトと大楯の距離が2メートルに迫った時に、大楯の隙間から鋭利な輝きが煌く。

「ぎりぎりまで引き寄せなさいと……教えた筈です！」

ギルベルトが階段を蹴って跳躍。大楯の左右から突き出された槍が空を切り裂く。響いたのは二発の銃声。銃弾が大楯の隙間を正確に撃ち抜く。大楯の隙間から鮮血が舞ったのを見たギルベルトは重力に身を任せて着地。最前列の騎士が慌てて大楯を解除。右手に持った槍でギルベルトを狙う。

二つの銀閃が舞うように煌く。突き出された槍をすれすれで回避して槍を切断。その勢いのまま駆け下りて騎士の胴を切り裂く。バランスを崩した騎士が後方にいる騎士に激突するのを確認したギルベルトは身を屈める。

「こいつで最後！」

ジュレイドが引き金を引いた。バランスを崩した騎士の甲冑を銃弾が貫く。後方にいる騎士は体勢を整えるだけで精一杯の様子。

「畳み掛けますよ」

ギルベルトがジュレイドに剣を放り投げる。ジュレイドは銃をホルスターに戻し剣を受け取る。

「ふっ……」

ジュレイドは笑う。目の前にいるのは混乱した10人ほどの騎士。その間をすり抜けるように、進路を塞ぐ騎士は強引に突き落としながら、二人は階段を駆け下りた。

*

ブレイズとノイアは執務室を飛び出して真っ直ぐに砦の外を目指す。ふと左に視線を向けると、騎士が階段から転げ落ちてきた。

「なに！」

ノイアはすぐに警戒する。対するブレイズは落ち着いていた。こんな事ができる人間はそうそういない。ジュレイドとギルベルトが強行突破をしているとすぐに判断した。

「馬を確保して逃げるぞ」

ブレイズは前方を睨む。ノイアはブレイズの背を見つめながら戸惑っていた。まずはシエルの安全を確認したい。だがすぐに気持ち切り替える。ここから逃げ切るには馬は必須だ。あの二人を信じて今は進むしかない。

「道を開ける！ 貴殿が剣を向けるのは……同国の騎士か！」

二人の道を阻もうとする騎士に向けてブレイズが叫ぶ。騎士は一瞬だけ躊躇する。だが、すぐに左右に散らばる10名の騎士が剣を構える。

「今なら！」

ノイアは騎士が躊躇した一瞬で地面を駆け抜ける。騎士が地面を蹴るよりも速く、ノイアが駆け抜ける。狙いを失った騎士の視界に

入ったのは銀髪の騎士。

「……」

ブレイズは剣を構えて深呼吸をする。ここからは状況による。さすがに10名の騎士を相手にするのは骨が折れる。そして、ノイア一人で馬を取り戻せるのかも疑問である。

ただ最善を尽くすのみ。それが今、ブレイズが出来る唯一の選択だった。思考をまとめたブレイズは弾かれるように動き出す。

まず視界に入った右からの騎士剣を横薙ぎの一閃で破壊。すかさず武器を失った騎士の背に回り込む。他の9名の騎士が一瞬だけ動きを止める。完全な敵なら生きた楯にするが、同じ国の騎士にそんな真似はできない。背後に回ったのは最後の説得をするためだ。

「……聞いてくれ。俺達は同じ国の騎士なんだ」

ブレイズは言葉をぶつける。通じる筈だ。同じ想いを持っているのなら。数秒の沈黙が数分の時間を感じる。ブレイズの頬に冷汗が流れた時によりやく騎士が口を開いた。

「……そうだな。悪かった」

ブレイズに掴まれている騎士が苦しそうにつぶやく。他の騎士も一斉に剣を降ろす。ブレイズは安堵して手を離す。これでこの不毛な戦いが終わる。そう思えた。

「よかった。これで戦う……」

だが、ブレイズはそこまで言葉を吐いて止まった。解放した騎士が腰のナイフを引き抜き、ブレイズを刺したのだ。口の中に鉄の味が広がる。

「悪いな……これもここで生きていくには必要なんだ」

ナイフで刺した騎士が冷酷な瞳を向ける。ブレイズは信じた自分が愚かしく思えた。彼らと自分は戦う理由も立場も違う。同じ国にいるが、違うのだ。

「くっそ……！」

ブレイズは左手で騎士の腕を力任せに掴む。騎士は表情を歪ませてナイフを握る手を離す。ブレイズはすかさず剣を振ろうと思った

がバランスを崩す。激しい眩暈を感じ、立ってられない。

「さっさと寝てろ！」

叫び声と共に視界に映ったのは騎士剣。酷く遅く見える。諦めて瞳を閉じた瞬間に投擲された剣が騎士の腕を貫いた。

「お前がな」

ジュレイドの気楽な声が背後から聞こえる。刹那、突風のような風がブレイズの隣を駆け抜ける。ブレイズを守るように立ち塞がったのはギルベルト。

「待ってて」

シエルがジュレイドに抱きついて腕を離し、ブレイズに駆け寄る。立て続けに響いたのは銃声。シエルが離れてようやく両手が使えるようになったジュレイドは銃を乱射しながら、ブレイズとシエルに近寄る騎士を足止めする。

「……神聖なる神よ。我に癒しの奇跡を……」

シエルがナイフを引き抜いて癒しの術式を発動。円形の魔方陣がブレイズを囲む。ブレイズは急に体の力が抜けた。もう意識を保てない。

「任せて……さっさと寝てろ」

ジュレイドの気楽な声を最後にブレイズは意識を失った。

*

一度、二度と立て続けに火花が散る。ナイフとボウガンの矢がぶつかり火花を散らしているのだ。ノイアは城壁の上から放たれるボウガンの矢を弾きながら地面を駆け抜ける。

「つつ……！」

ノイアの表情が歪む。

弾き損ねた矢が右腕を掠ったのだ。真っ赤に染まっていく修道着を見ずにただ前に進む。一度止まれば回避する事は不可能。素早く視線を走らせる。城壁の上には左右それぞれにボウガンを構えた騎

士が五人ずつ。現在はボウガンを放っているが、こちらに降りるための梯子もあり油断はできない。

(……目的地は……ここから右の最奥……)

ノイアはすかさず視線を左に。右手に見える城壁に沿うように走れば右側の騎士は恐くない。問題は左の五人。

城壁から一筋の光が瞬いた瞬間にノイアは口を開く。

「神聖なる神よ。我に守りの力を！」

障壁を左右に展開して矢を弾き飛ばす。刹那、ノイアは右手に見える城壁まで一気に駆け抜ける。城壁に沿うように駆け抜けた先に見えたのは、首を金属の輪で固定されている二頭の馬。ノイア達がここまで乗ってきた馬である。

(……ここからは……どうすればいい……)

ノイアは悔しそうに心の中でつぶやく。馬の首を固定している金属はナイフで破壊できる。だが、そんな猶予を与えてくれるだろうか。

ノイアの予感には当たった。騎士はすかさず馬に狙いを定めたのだ。ノイアを簡単に止められないのであれば脱走手段を絶つ。ノイアが取れる方法は一つしかない。二頭の馬の前に立ち両手のナイフを構える。高速の銀閃が飛来する矢を全て叩き落とす。すかさず瞳を閉じて深呼吸。

「神聖なる神を。我に守りの力を！」

言葉と共に第二派を障壁で弾き返す。目の前にいる敵はどうにかなる。だが時間をかけ過ぎた。右側の城壁の上いた騎士達が梯子を伝い降りて来る姿を視界の端で捉える。頬に冷汗が流れる。

「……防ぎきれない」

ノイアは一步後ずさる。この場を離れる訳にはいかない。だがどうしようも出来ない。城壁から放たれる矢と、城壁から降りて剣を抜く騎士を視界に収める。ノイアは覚悟を決めた。両手のナイフを強く握り、深呼吸。出来る限り時間を稼ぐ。後は皆がどうにかしてくれる。シエルを守ってくれる。

「それが唯一できる事……！」

ノイアが飛来する矢を睨む。刹那、宙に障壁が展開。障壁に衝突した矢の全てが弾き返される。

「え……？」

ノイアは呆気にとられた。目の前に立っていたのは真紅の甲冑を纏った女性騎士。聖騎士ルメリアだ。

「障壁で身を守っていなさい」

ルメリアの言葉を聞いてノイアは障壁を展開。

ルメリアはノイアが自身を守る事を確認し、腰の剣を引き抜いた。左手は鞘を握る。左に視線を走らせると城壁から降りた騎士五人が迫る。

「……参る」

一言つぶやき地面を蹴る。ノイアが一度瞳を閉じる間にルメリアが一瞬で距離を詰める。

「なっ……！」

騎士が目を見開く。舞ったのは砕けた刃。だが剣を破壊した相手の姿はない。騎士は慌てて振り向く。

「はぁ！」

ルメリアが叫ぶと同時に左手に握る鞘を振り上げる。ルメリアの右側にいる騎士二人の剣をへし折り、左に向き直る。

すかさず残った二人の騎士が剣を振り下ろす。

「神聖なる神よ。我に守りの力を」

ルメリアが言葉を紡いだ瞬間に障壁が展開。騎士の剣を弾き返し、呆気にとられている間に一気に距離を詰める。白銀の一閃と、鞘での一撃が交差。砕けた刃が雪のように舞い煌く。その最中で立ち尽くすルメリアが騎士に視線を向ける。

「……まだやるか」

五人の騎士に問う。騎士は右腰についているナイフに手を添える。だが、頭では理解している。自分達が束になっても敵わないという事を。

ノイアは息をする事も忘れていた。あまりにも速く。そして鋭い。おそらく自分と同じ資質を持った人。だが次元がまるで違う。遥かな高みにいる。同じ事をしろ、と言われれば数年はかかるだろう。

「剣を収めて……こちらの勝ちよ」

ルメリアがつぶやいて視線を砦に向ける。ブレイズを背負って走るジュレイドに、右横で並走するシエルが見える。最後尾はギルベルト。

「今のうちに！」

シエルを見た瞬間に平静に戻ったノイアは馬を高速する首輪をナイフで破壊。手綱を強引に引いて門へと向かう。

「こいつ……任せた」

追いついたジュレイドが背負ったブレイズを降ろす。気絶するブレイズを見たノイアはすぐにでも治療をしようとする。だがその手を止める。今するべき事は違う。

「……今はここから逃げる事だけを……」

ノイアは痛いくらいに下唇を噛んで堪える。ブレイズのためにもいち早くここから離れなければいけない。

「お早く」

ギルベルトが双剣を構えて周囲を警戒する。騎士達の動きは目に見えて鈍い。指揮官を失い、今から追っても間に合わないのだから当然だろう。時折放たれる矢をギルベルトとルメリアが叩き落していく。

「……先に行く」

背にブレイズの重みを感じながら、ノイアは手綱を引く。

「遅れるなよ……じいさん」

ジュレイドが馬を走らせながら涼しげにつぶやく。

「では……私も」

ギルベルトは周囲を警戒しながら全力で門へと駆け抜ける。

「外に馬があるわ。不本意だけど……乗せてあげる」

並走するルメリアが小声でつぶやく。ギルベルトは一つ頷いた。

*

夜道を三頭の馬が駆け抜ける。あれからいつたい何時間走っただろうか。雨でぬかるんだ道が確実に馬の体力を削っていく。そして、砦で休む事無く進み続けているノイアは限界が近い。荒い息を整えながら懸命に前を見つめる。意識が朦朧としているのか、先ほどから同じような景色ばかりを見ている気がする。

現在進んでいるはマーベスタの森。クレイア砦を越えた先にある森で、都市マーベスタに向かうにはここを通り過ぎるしか他に方法はない。左右には木目が比較的真っ直ぐに伸びた背の高い木が整然と立ち並んでいる。空を見上げれば針や鱗のように細い葉が日を遮っている。

「どこかで休めないか。もうクタクタ」

ジュレイドが陽気に笑う。まるで疲れている様子がない。

「うー」

ジュレイドの背にもたれるようにしがみついているシエルが呻く。おそらくシエルを休ませるために言ったのだらう。

「もう少し進めば開けた場所があります」

最後尾を進むギルベルトが言葉をかける。

「ブレイズも……気絶したままだから……どこかで休むのは賛成。シエルも疲れてるから」

ノイアは振り向いてつぶやく。表情を変えないのはルメリアだけだ。

「……旅に慣れていない者もいるなら同然ね」

しばし考えてからルメリアは賛成した。

「おっし。姫様、もう少しで休憩だぞ」

ジュレイドが後ろでぐったりしているシエルにつぶやく。

「うん」

シエルは力なく頷いた。

*

テントの中を眩しい光が照らす。地面には読む事ができない文字で満たされた円形の文様が浮かぶ。シエルの癒しの術式である。膝を地面につけて祈り続ける。温かい光が毛布をかけられて眠るブレイズを包み込む。

「ぐっ……」

ブレイズが表情を歪ませる。

「……もう大丈夫だね。起きると思うよ」

シエルは微笑んで立ち上がる。もうここには用はないといったげな背中である。

「もう行くの？」

ノイアはテントを出ようとするシエルの手を引く。

「傷は治せても……ブレイズの心は私には癒せない」

シエルは弱々しく微笑む。

「……それは……私にも」

ノイアが顔を落とす。

「……ノイアなら出来るよ。ずっと一緒に鍛錬を続けてきたんだから」

シエルが微笑んだまつぶやく。今日のシエルはやけに大人びて見えた。どこまで出来るか分からないけれど、力になりたいのは確かである。

「……分かった」

ノイアは微笑んで頷いた。

*

ブレイズはほのかな明かりを感じて瞳を開ける。薄茶色の布が視界に飛び込んできた瞬間にここがテントの中だと気づいた。

「逃げられたのか……？」

ブレイズが独語する。

「ここはマーベスタの森よ」

ブレイズの言葉には返答が返ってきた。視線を向けるとノイアがこちらを見ていた。疲れた表情に少しだけ安心したような明るさが戻る。

「そうか……すまない。迷惑を掛けた」

ブレイズは半身を起こす。表情は沈んでいるように見える。同じ国の騎士と戦ったのだ。沈む気持ちも分かる。そして、ギルベルトの話では説得しようとした騎士にナイフで刺されたらしい。戦闘の最中のため刺した騎士を責める事はできない。だが、ブレイズが受けた衝撃はかなりのものだろう。

「いいよ。ブレイズには世話になっているから」

ノイアは努めて明るく笑う。実際に世話になってばかりだ。こうしてシスター見習いでいられるのもブレイズのおかげのようなものだ。一人では諦めていたから。

「……俺は……仲間を斬った」

ブレイズが拳を握る。拳は小刻みに震えている。ノイアはその拳を優しく包む。

「……それはシエルを……同胞を消そうとした人達だよ」

ノイアはゆっくりと言葉をかける。

「……それでも同じ国の騎士だ！　なのに……言葉すら通じなかった！」

ブレイズは声を荒げて叫ぶ。両肩は震えていた。

「……それは悲しいよね」

ノイアがしっかりとブレイズの拳を握る。ブレイズがノイアの緑色の瞳を見つめる。

「なら……変えよう。シエルを守り抜こう」

ノイアの強い言葉がブレイズの心を揺さぶる。

「それがこの国のためか……。ハーミルを支持するように見せかけ、

己の事しか頭にない者からシエルを守りぬく。そして……生きて伝える。この国のあるべき姿を」

ブレイズの瞳に光が宿る。

「……うん」

ノイアは微笑んで頷いた。これが正しい答えなのかは分からない。分からないのであれば進みながらも見つけたいと思う。そのためには生きて歩み続ける。今いる皆で。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 3（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。感想をいただければ幸いです。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 4

ただあなたを守りたい シスター見習い編

— 4 —

「なかなかの太刀筋だな。素人とは思えない」

ルメリアの凜とした声が早朝の寒空に響く。時刻は午前5時。鳥の小さなさえずりしか聞こえてこない静まり返った場に響くのは剣響。

地に生えた短い草は突風のように地を駆ける二人によって激しく揺れる。

「ナイフを……使ってしまったから！」

ノイアは叫びながら剣を受け止める。目の前で火花を散らしているのは騎士剣。ナイフの限界を感じたノイアは騎士剣に変更する事を選んだのだ。

「……力で負けている相手に鏢競り合いをするな」

涼しげな声が耳に届く。衝突した剣はどれだけ押しても動く事はない。それを可能にするのは、鍛え抜かれた膂力と、天性の体バランス。

「動かないのであれば」

剣を受け止めていたルメリアが力を込める。刹那、ノイアはバランスを崩す。強引にルメリアが剣を横薙ぎに振るったのだ。

「素早く体勢を整えろ」

凜とした声が響く。声と共に繰り出されたのは銀閃。騎士でなければ反応できない高速の輝きが迫る。

「……っ……！」

言葉通りに素早く剣と鞘を構える。瞳を閉じる間もなく銀閃が煌く。両手の剣と鞘で丁寧を受け流す。剣響が寒空に響く。数は5回。

一瞬の間を置いてルメリアが剣を構える。

「この一撃……受け止めて見せる！」

叫びと共に剛剣が振り上げられる。ノイアは咄嗟に剣と鞘を交差。火花が散ったのは一瞬。気づいた時には宙に浮いていた。

すかさずノイアは空中で一回転して地に足をつける。着地を待っていたかのように追撃の銀閃が煌く。だがこの一撃は予想していた。ノイアは左手にありったけの力を込めて鞘で受け止める。

「今なら！」

銀閃が寒空を切り裂く。狙いはルメリアの剣。シスターは人を傷つける事ができない。ならば相手の武器を破壊するしかない。それと共に圧倒的な剣技で戦意を喪失させなければならぬ。そんな無理難題をこなせるのが聖騎士と呼ばれる存在。

「上出来だ」

凜とした声音から柔らかな声音に変わる。聖騎士は満足したように微笑んでいた。

ルメリアの剣から火花が散る事はなかった。ノイアの剣が空を切り裂いた時には半歩下がっていた。結果は空振り。呆気に取られて前を見つめた時には勝敗は決していた。

白銀の刃はノイアの首筋に触れる直前で止まり、左手に握られた鞘は剣を押さえつけている。実戦では剣を砕かれ、いつでも殺せる状態だ。やはり敵わない。これが本職の騎士の腕前。同じ力を持つていても届かない領域。

「参りました」

首筋に触れそうな刃を見てつぶやく。ルメリアはただ緑色の瞳を見つめている。

「どうかしましたか？」

緑色の瞳が真紅の瞳と重なる。答えを求める瞳に耐えかねてゆっくりと口を開く。

「いや……諦めないのだな。私が言うのも何だが……この戦い方は賢いとは言えない。騎士として割り切ったほうが幾分か楽だ」

ルメリアが剣を首元から離して鞘に収める。

「……それでも神力と騎士の力を天から与えられた。それは意味がある事だと思います」

ノイアは剣を鞘に収めながらつぶやく。この二つの力がシエルを守る事に繋がるのなら極めたい。どれだけ困難な道でも。

「……ノイア……君は本当に惜しい人材だな。アルフレッドが気に入る訳だ」

ルメリアは一度微笑んでからテントに向けて歩いていく。この少女は騎士になれば、自分と同格かさらに上にいけると思う。まだ荒削りだがこの向上心は賞賛に値する。だから剣を教えた。ずっと影で見守ろうと思っていたが、どうしても手を貸したくなった。

「……騎士……」

ノイアは自らが握る剣を見つめる。自分自身と国を守るために剣を扱う者。

「……私は……まだシスターだから」

迷える少女が顔を落としてつぶやく。果たして自ら武器をとった者がシスターと呼べるのかは分らない。だが、使える力を無駄にしていられるほど今の状況は優しくない。自国にいながら命を狙われているシエル。同じ騎士が言葉を掛けても刃を向けてくる者達。やれることは何でもしなければ守りきれない。ジュレイド、ギルベルト、ブレイズに頼ってばかりではいけない。ジュレイド、ギルベ

「守りたい人は……自分で守らないと」

ただ強く拳を握った。

*

朝食を済ませた彼らはそれぞれの馬に乗る。

本日の目標は森を抜けて、都市マーベスタにたどり着く事である。
「さて……そろそろ話してくれよ」

無言の空気に耐えられずにジュレイドが前を見たままつぶやく。

後ろでもたれ二度寝していたシエルが大きな瞳を開ける。この二人に緊張感などという言葉はないらしい。常にマイペース。本当に気の合う二人である。

「良いでしょう。ですが……警戒は緩めないで下さい」

ギルベルトが口を開く。

堅物二人がすかさず辺りを警戒。賊の一人すら見逃さない緊張感溢れる視線が、背の高い木の間を貫く。ブレイズとノイア。この二人がいれば油断した、などという事はなさそうである。安心したギルベルトがようやく口を開く。

「……結論から言いますと都市マーベスタは安全だと思います。領主のザックス殿は温厚な方で対話を重んじます。そして……騎士団団長とは旧知の仲で、シェライト派として有名ですね」

顎鬚に触れながら私見を述べるギルベルト。

ノイアはとりあえず安堵の息を吐いた。ここで挟まれたらもう逃げ場はなかった。何とか都市についても拘束されて終わりだっただろう。

「へえー、お姫様は人気あるんだな。騎士団団長に、聖騎士、ハーメルメイツの軍神……そして領主様……この国を納める事ができるかもな」

ジュレイドがさりと危険な事を口走る。

「……」

ギルベルトが顎鬚に手を触れてしばし黙考。ルメリアは涼しい顔をしている。

「ねえ」

ノイアが出来る限り体を寄せて小声で問う。どうしても気になる事があるのだ。

「……なんだ。そんな小声で……らしくない」

ブレイズは眉根を寄せて返す。ノイアに合わせて小声にしてくれるのが彼らしい。

「出来るの？」

「……結論から言えば可能だ。グリア連合国と通じて現政権を撃破すればな。国名はグリア連合国になるが……この国の誰かがここを納める事はできるだろう。その中心人物はシエルになるだろうな。まあ仮定の話だ」

ブレイズは前を見ながらつぶやく。ノイアは疑問を感じた。

「どうして……グリア連合国の誰かが納めたほうが良いのではないの？ そんな事を許してくれるの？」

ノイアは小首を傾げる。分からないという顔をしている。

「……だから賢王だと言われている。仮にグリア連合国の誰かが納めてみる。各地で反乱が続く。どれだけ鎮めても途絶える事なく続くだろう。それを納めるのに何十年、何百年もかかる。それならば今の形をそのままに、国の名前だけを変えてしまった方が早い。安穩とした市民は生活が変わらなければすぐに受け入れてしまう。もう反乱を起こす事はできない」

ブレイズは溜息をつきながら話す。納める者が変わり、国の名前が変わるだけで生活は何も変化しない。ならば立ち上がる者はいないだろう。

「……本当の敵はグリア連合国。とてつもなく大きいね。内輪揉めをしている私達があまりにも原始的な集団に見える」

つぶやいて顔を落とす。

敵国は常に考えている。機会を与えればすぐにでも手を打ってくる。この事実をどれだけの人間が気づいているのか。どれだけの人間が危惧しているというのだろうか。ノイアは不安で仕方なかった。震える拳を強く握って止めた。

*

「王よ。どうして動かないのですか！」

20代中頃の青年が声を荒げる。長い銀髪を腰まで伸ばし、肌は病人のように白い。身に纏っているのは甲冑ではなく胸、腰、膝、

肘に防具がつけられた軽装姿。グリア連合国近衛騎士の一人であるフィッツである。

「今は動く必要がない」

王座に座る王はただ前だけを見つめている。

黒髪を肩まで伸ばした褐色肌が印象的な男。凛々しく威厳に満ちた低い声は、とても20代後半には見えない。王でありながら常に漆黒の甲冑を身に纏い、体は無駄なく引き締まっている。周りからは賢王と呼ばれているが、戦争になれば自ら前線に立ち剣を振るう。そのため国民からは強い支持を得ている。彼こそがグリア連合国の王、アガレスである。

「なぜですか！」

目の前にいるフィッツはさらに叫び続ける。将来を担うシスター見習いが二人も外に出ている。この好機を逃す手はない。

「……かの国が内輪揉めをしているのは知っているか？」

アガレスが瞳を閉じてつぶやく。

「は……はい」

呆気にとられてフィッツがつぶやく。その瞬間にアガレスの瞳が開く。

「なぜだ？」

「そ……それは自らの出世のためにどちらかに肩入れし……あわよくば昇進しようという目論見ではないかと……」

アガレスの問いに何とか言葉を返すが、後半は声音が小さくなる。自信はない。

「……それは一つの理由にすぎん」

「では……？」

フィッツは絶大な信頼を寄せる賢王の言葉を待つ。この王は絶対に正しい。王の言葉を聞き信じれば間違いはない。

「我らが動かないからだ。人は敵を失えば自然と内輪揉めを始める。常に敵がいなければまとまれないのが人間なのだ。下手に動けば二つの派閥はすぐに協力体勢を作るだろう。敵国グリア連合国に抗う

「ためにな」

王はゆっくりと立ち上がる。ゆっくりと歩を進める。

「……私が浅はかでした」

近衛騎士が頭を垂れる。やはり賢王に従えば間違いはない。そう信じられる。

「構わん。もう少し学べばよい。それに動かない訳ではない」

「――！」

言葉に出来ない喜びが胸を満たす。ようやく動ける。我らの勝利のために貢献できる。

「本来であれば内輪揉めでどちらか片方が消えると思っていたが……敵にも優秀な者がいるようだ。これ以上待っても結果は変わらない。なれば……」

賢王が拳を握る。

「出撃……ですね」

「ぎりぎりまで引きつける。シスター見習いシェライト・ルーベントが塔に到着した際に叩く。塔の兵力と共にだ」

「了解しました！」

フィッツは胸に手を当てて微笑む。すぐさま振り返って元来た道を駆ける。

「……ハールメイツ神国よ。シェライト・ルーベントの守りをおろそかにした事……後悔するがいい」

アガレスは鋭い眼光をさらに鋭くさせてつぶやいた。

*

都市マーベスタ。首都クロイセンの次に大きな都市であり、北にある塔に武器と食料を供給する重要拠点でもある。門を潜ると中心にある領主の館を中心に十字路が展開。都市の南西、南東は商店街が集まり、北東は住宅外、北西は旅人のための施設になっている。現在、一向は十字路を真っ直ぐに進み領主の館を目指している。

左右は商店が並び道行く人も多い。ジュレイドは辺りを警戒しながらシエルから離れない。

「何……あの赤いの」

シエルが右側にある果物屋を指差す。並べられているのは丸々とした赤い果物で、店主が皮をナイフで剥いていた。剥かれた果物は水々しくて美味しそうだ。

「ああ。この辺りでしか取れないリステの実だよ。甘くて美味しいんだ」

ジュレイドがリステの実を見つめる。シエルも瞳を輝かせて見つめる。それと同時にジュレイドのコートの袖を引っ張る。

「おいおい。おねだりする人間違うって」

ジュレイドが前を歩くノイアを指差す。

「ノイア」

ジュレイドの袖を離してノイアの背に飛びつく。会話を小耳に挟んでいたノイアは溜息について銅貨を二枚渡す。

「毒味だけはしてね」

ノイアは振り向いて微笑む。シエルの安全を確かめられるなら銅貨一枚なんて安いものだ。

「恐いなー、おい」

ジュレイドは仕方なくリステの実を齧り何ともない事を確認。それからシエルに渡す。シエルは頬を朱色に染めて小さな口でリステの実に齧りついた。ジュレイドはそれを横目に自らのリステの実に齧り付く。

「えへへ……お揃いだ」

シエルが無垢な笑顔を向ける。ただ同じ物を食べているだけなのだが、何か善行を終えた気分になるのが不思議である。自分には全く似合わないのだが。

「……あまり時間を掛けないで」

ルメリアが腰に手を当ててノイアを睨む。

「ほほ……そう焦る事ありません」

ギルベルトがシエルを見て微笑む。歩みを止めている原因の少女は柔らかな頬をリストの実で汚しながら笑顔で微笑んでいる。

「そんなに汚して……」

ノイアがシエルの頬を白いハンカチで拭いていく。堅物お姉さんから世話焼きお姉さんに変わったノイアは止まらない。シエルの行動を見つめて何かできないか様子を伺う。

「ありがと、ノイア」

シエルが微笑む。その微笑を見てノイアはこの子はこのままでいてほしいと思った。先ほどブレイズと話していた事なんて、まだ知らなくてもいい。そのままずっと育てばいい。痛い事、辛い事は自分が受ければいいのだから。

「行こう」

ノイアが食べ終えたシエルに手を差し出す。

シエルがしつかりとノイアの手を握る。何だかこの小さな手に触れるのが久しぶりな気がする。数日離れていたただけなのだが、一度触れてしまえば離したくないような気がしてしまうから不思議である。

「さて……では改めて領主の館に向かいましょうか」

ギルベルトが皆を見渡す。

一斉に皆が頷いたのを確認してギルベルトを先頭にして彼らは歩き出した。

*

机に置かれた書類にサインをしているのはマーベスタの領主であるザックス。茶色の髪を短く伸ばした細身で穏やかそうな表情が印象的な人物である。歳は40代中頃だろうか。

場所は領主の館の執務室。書類を整理するための机の他には、左右にぎつしりと専門書が詰まった本棚のみ。他には特に物が無い。ここまで豪華な飾り、照明がない執務室はないだろう。贅沢を嫌う

ザックスの性格をよく表わした部屋である。

「すみません」

大人しそうな声を聞いてザックスは顔を上げる。それと共にドアが開き姿を現したのは礼服に身を包んだ華奢な少女。ザックスの一人娘であるミレーネだ。

ザックスによく似た穏やかな表情を浮かべ領主であり、父である男を見つめる。

「どうした？」

ザックスは笑顔を浮かべて問う。ミレーネはしばし戸惑ってから口を開く。

「……クレイア砦に所属しているギルベルト殿がお会いしたいそうなのですが」

「ギルベルト？ ハールメイツの軍神……ギルベルト・スタンリーか！」

ザックスは慌てて立ち上がる。クレイア砦に所属しているのは聞いている。その彼がなぜここに姿を現したのか。クレイア砦に賊が入ったと今朝聞いたが、それと何か関係があるのだろうか。

「と……通しますね」

ミレーネは慌てる領主の反応に驚いて背を向けて走り出した。ザックスは一つ深呼吸をして平静を装う。何かが起きようとしている。どんな言葉を聞いても平静でいなければいけない。自分はこの都市を任された領主なのだから。

*

数分の時を得て現れた人物を見てザックスは空いた口が塞がらなかった。ギルベルトだけでも驚きだが、聖騎士として有名なルメリアまでいる。いったい何が起きれば、この二人が護衛につくような事が起きるのだろうか。

「お久しぶりです……以前にお会いしてから五年は経ちますかね」

部屋に入るなり一行の中心にいるギルベルトが丁寧に挨拶。

「そうですね。またお会いできて光栄です」

「もう老いた身です。そう畏まる必要はありません」

椅子から立ち上がろうとするザックスを手で制す。そんな様子に耐えかねて左隣にいるルメリアが一步前に入る。

「悠長に挨拶をしている場合ではない。早急に行動しなければ」
溜息をついてギルベルトを横目で見ろ。

「私達はここから北にある塔に向かう予定です。しかし……時には傭兵に狙われ……ついに先日は……」

ノイアが代わりに状況を説明する。だが、この先は言ってもいいのか悩む所である。隣にいるブレイズに視線を向ける。ブレイズは無言で一つ頷いた。

「どうしたというのだ？ 私の方にはクレイア砦に賊が侵入したとしか聞いていないぞ」

ザックスが眉根を寄せる。

ノイアは目を見開いた。何か手は打っているとは思っていたが、まさかこんな嘘を平気で流しているとは。

「同じ国の騎士に攻撃を受けました。狙いは……シエル……いえ、シエライト・ルーベントを消すためです」

ノイアは低い声でつぶやいていた。怒りを抑える事ができない。叫ばなかった事が唯一の救いだっただ。

「な……なんだと？ ハーミル派が勢力を増しているのは知っているが……まさかそこまで」

ザックスは明らかにうろたえている。確かに真実を知れば誰でも驚くだろう。

「……この都市での安全を確保して欲しいのです。それと同時に騎士団団長に連絡を。あの方は優秀な方です。何か手は打っているとは思いますが……念のために」

ギルベルトが具体的にこちらの要望を伝える。
「分かった。この館の部屋を使うといい」

ザックスは何とか平静を取り戻してつぶやく。宿を取るよりも目の届く場所で保護した方が懸命だと判断した。皆も納得して一度頷く。

「それと……塔に向かう時なのですが。兵を半分貸していただけませんか？」

「どういう事だ？」

ギルベルトの言葉に、ザックスは立ち上がる。この都市から兵を動かすのは有事の際だけだ。グリア連合が動いたとは聞いていないならば、ハールメイツの軍神とまで言われた男には、凡人には見えない何かが見えているのだろうか。

「……私の予想ですが……仕掛けて来ます」

ギルベルトは表情を陰しくさせ断言した。グリア連合国の王は機会があれば逃さない。シエライトを消し、そしてこの都市までは一気に侵攻するだろう。そうなれば後は相手のペース。後手に回ったハールメイツ神国はいずれ負けてしまう。初戦を挫いてどうにか時間を稼ぎたい。この国がまとまるだけの時間を。

「……分かった」

ザックスは頷いた。

北にある塔を守る守備隊が突破されれば、この都市は最前線になる。それならば塔の守備隊と連携して、食い止めるしかないのだろう。塔の兵力を引かせるというのも一つの手だが、この都市を戦場にするのは得策ではない。

「ありがとうございます。ブレイズ、兵を率いた経験は？」

ギルベルトがブレイズに問う。急に振られたブレイズは驚いて目を見開く。

「私は一介の騎士です。そんな経験は……」

ブレイズが首を振る。てっきりギルベルトが率いると思っていた。「そうですか。ならばいい機会です。あなたが率いなさい」

ギルベルトが微笑む。ブレイズは一步後ずさる。自分の指示で多くの騎士が命を落とす。

「ハールメイツの軍神の隣には常に……フレイル・マチエスがいました。彼が部隊を率い……私が作戦を立てる。彼がいなければ私は軍神などと呼ばれませんでした」

ギルベルトが微笑む。

「父と……俺は違う。それに父は……結局……」

ブレイズが顔を落とす。父のような才があるのか不明あるし、父は結局戦死した。戦死した者の指示を聞いてくれるのだろうか。しかも、こんな若い騎士の言う事を。

「作戦はじいさんが考えるんだ。いい機会だと思うけど」
ジュレイドは肩をすくめる。

「軍師だけでは戦争は勝てない。胸を張れ……ブレイズ。お前が適任だ」

ルメリアがブレイズの背を押す。ブレイズは戸惑いながらも姿勢を正す。

「……皆の命……私が責任を持ってお預かりします」

ブレイズは胸に手を当ててつぶやく。

「いいだろう。信じよう……君を」

ザックスは一度頷く。本来ならばこの都市を守る隊長クラスに指揮を任せたい。だが、この都市の守りをこれ以上手薄にはできない。このメンバーの中で指揮ができそうなのが一人しかいない以上任せられないのだろう。それに塔までつけば戦争になれた者達が多い。最悪は彼らに任せるといふ手段もある。何とか心を静めたザックスは背を向けるブレイズを見つめた。

*

案内されたのは館の2階にある客室。部屋を見渡すと人が二人は眠れそうな大きめのベッドが四つあり、書き物が出来る机があった。先ほどの執務室よりも豪華に見えてしまうのは気のせいではないだろう。

「本棚まである……えつと……歴史に軍略……あとは政治か。固いねえ」

部屋の奥に鎮座している本棚を見てジュレイドがつぶやく。だが返答はない。

ブレイズはベッドに腰を降ろし、顔を落としたまま動かない。ふとブレイズの肩に手が触れる。

「出発は明日です。ブレイズ……気負わないで下さい」

ギルベルトが微笑む。気休めである事は分かっている。だが気負いすぎて判断を間違えば重大なミスを犯すのも事実である。適度な緊張感を持つて挑まなければならない。

「分かっています」

ブレイズは拳を握る。もはや明日の事しか頭がないブレイズ。すっかりシエルの護衛だという事を忘れている。

そんなブレイズを横目に見てジュレイドは最奥の窓から外の景色を覗く。

「……………」

館の外には石で出来た平坦な道を通行人がまばらに歩いている。目を細めて通行人を凝視。その中で一定のペースで歩いている二人組みを見つけた。周りの市民に合わせた私服姿だが、あまりにも乱れがない。

「ふーん」

ジュレイドはつぶやいて腰に吊っているリボルバーの弾を確認。

ザックスが騎士団団長に知らせるまでは気を抜けない。この館にいても安全だという事はどうやらないらしい。ジュレイドは何事もなかったようにドアへと向かう。

「どこに行くんだ？」

ブレイズがジュレイドの背に問う。

「お散歩」

ジュレイドは右手を軽く上げ、振り向く事なくドアを開けた。

*

ノイアは優しく短い黒髪を撫でる。

「うーん」

シエルが気持ち良さそうに表情を緩める。シエルは客室につくとすぐにベッドに潜り込んで眠り出したのだ。長旅の疲れが出たのだろう。ノイアの左手をしっかりと握り寝息を立てている。

「大変だな」

ルメリアが呆れたような表情を浮かべる。ノイアは微笑んだまま黒髪を撫で続ける。

「そんなに大変ではないんですよ。それに……私も癒されているから」

シエルの無垢な寝顔を見つめる。今までナイフや剣を握り戦っていた殺伐とした世界から引き戻してくれる存在。ノイア自身もどこかでシエルに頼っている。シエルがいれば道を踏み外さないと思える。

「そうか……それもいいか」

ルメリアは窓の外を見つめる。そこには黒いコートを羽織ったジュレイドがいた。一定のペースで前を歩く男達を監視している。おそらく相手も気づいている。ペースを守りつつ館から離れていく。仲間と合流してジュレイドを消すためだろう。皆が他の事で頭がいっぱいである時に影で動く傭兵。彼なりにシエルを守ろうとしてくれている。

「……幸せな奴だな」

ルメリアはシエルの寝顔を見てつぶやいた。

*

一定の間隔でブーツの音が響く。時折、前を歩く二人が視線を向けてくるがジュレイドは何事も無かったかのように気楽な笑みを浮

かべて歩く。隙あらば鼻歌でも歌いそうなほどに力が抜けている。だが、この気楽そうな男の右手はリボルバータイプの拳銃に触れている。一秒でもあれば引き抜き、すぐにでも撃てる体勢は崩さない。それが分かっているため前を歩く二人はまだ行動を起こさない。

「……」

無言で歩いていると男達は館から離れ、北西へと進む。誘っているのが分かる。だがあえて追う事を選んだ。彼らが誰の指示を得て行動しているのか。それを確かめるために。

*

書斎の一室でヴァーンハルトは手にした手紙を握り潰す。

「なぜだ…… 砦から逃れるだと……？ たかが護衛一人と、老人一人加わっただけで」

両肩を震わせてつぶやく。心の乱れが部屋を照らす輝石に伝わる神力を乱す。天井で輝く輝石は光を失い、ベッドの近くにある輝石だけが弱く光る。

「誰か雇ったとしても言うのか？」

ヴァーンハルトは手紙を床に投げつける。証拠を消さねば自らの立場が危うい。政治の代表であるヴァンスが、騎士団団長に気づかれたら終わりである。せつかくハーミルに取り入ってヴァンスと入れ替わる策が途絶えてします。そのために副団長まで護衛につけたというのに。

「早く動かねば……」

ふらつく足取りで自室を飛び出した。

*

「一人で…… 向かった！」

ノイアは声を荒げる。眠っているシエルが驚いて目を開く。

先ほどルメリアが窓の外を指差して、ジュレイドが怪しい二人組を追うために外に出たと述べたのだ。それを聞くなりノイアが叫んだのだ。

「どうしたの？」

シエルは眠そうな顔で半身を起こす。

「ジュレイドが……一人で。早く行かないと」

ノイアが立ち上がり、すかさず駆け出す。

「おい……無策で追わないで。ああ、もう！」

ルメリアは話した事を激しく後悔した。話さなくてもあの傭兵ならば無事に解決できただろう。むしろノイアが行く事で危うい状況になる恐れもある。

ルメリアは一つ舌打ちをして部屋を飛び出す。そして、この行動もよくなかった。もう一人おまけがついてしまったのだ。

「待ってー」

シエルが追いかけて来たのだ。ルメリアは素早く振り向いてシエルを抱き上げる。どうするべきか悩んだ瞬間に男性陣が休んでいる部屋が目についた。勢いよくドアノブを回して開け放つ。

「こいつ……任せた。絶対に出すな！ いいな！」

叫んでシエルを放り投げる。それと同時にドアを勢いよく閉める。

「あわわ……」

シエルが空中で手足をばたつかせる。

「おっと……」

ギルベルトが咄嗟に受け止める。シエルは大きな瞳をさらに大きく見開いて訳が分からず小首を傾げるのだった。

*

「酒場か。昼から酒は飲めないし……ミルクとかあるの？」

ジュレイドは古びた酒場に入り冗談を飛ばす。歩く度に木で出来た床が軋む音がする。中にいた屈強そうな男達が手にした武器を構

える。剣に斧と傭兵というよりは山賊のような輩。数は左右に五人ずつ。正面には後を追ってきた二人組みがいる。丸テーブルを倒し、男達がジュレイドに向かって距離を詰める。

「悪いが消えてもらう」

後をつけて来た者の一人がつぶやく。ジュレイドはまだ銃を抜かない。

「誰に頼まれたんだ？」

ジュレイドは肩の力を抜いて話しかける。それを合図にして周りにいた男達が一斉に走り出す。ジュレイドは溜息をついて両手に銃を構える。

耳をつんざくような音が響くと同時に鮮血が舞う。左右にいた男がそれぞれ一人ずつ倒れる。その隙に距離を詰めた男達が武器を振り上げる。避ける場所はないように見えた。

「おっと」

ジュレイドは気が抜けるような声を出して、武器の間をすり抜けるように移動。標的を失った男達は目を見開く。振り向く間もなく銃声が立て続けに轟く。

「はい。あと四人」

壁に背をつけて悠々と弾を込めるジュレイド。男達は憤慨した様子で武器を振り上げて走る。だがジュレイドは追って来た二人から目を離さない。おそらく危険なのはこの二人。残りの山賊まがいの方は対した事はない。

「ちっ……やっぱりか」

舌打ちをした瞬間に壁を背に横飛び。

轟く銃声。コートの裾を破いたのは一発の銃弾。ジュレイドが地面を一回転して起き上がった時にさらに銃声が轟く。鋭い眼光が銃弾を睨む。軌道を読みきり一歩下がる。銃弾が今までジュレイドの左足があった場所を貫く。追って来た二人が握っているのはリボルバータイプの小振りな銃だった。

「……」

ジュレイドは咄嗟に銃を構える。

刹那、二発の銃声が轟く。ジュレイドは即座に反応。一秒も経たぬ内に引き金を引く。宙で火花が散る。銃弾と銃弾が宙でぶつかりお互いの弾を弾き飛ばす。

銃の援護を得た山賊まがいの男達は自分達が有利だと判断したらしく猛然と突撃してくる。さすがに不利かと思つた瞬間に障壁が男達の進路を塞ぐ。

「ジュレイド！」

ノイアの声が酒場の入り口から聞こえる。一斉に銃がノイアを狙う。

「馬鹿……！」

咄嗟にジュレイドが酒場の入り口に向けて駆ける。その機会を二人の男は見逃さない。男達の予想通りにジュレイドはノイアの前に立ち塞がる。銃声が轟く。

ジュレイドは遅れて引き金を引く。刹那、ジュレイドの右腕と、左足を銃弾が貫く。力を失い膝をついたジュレイドは放った弾丸を見つめる。狙いは完璧なはずだ。

二発の弾丸が空間を切り裂く。銃を持った男二人に狙い通りに直撃する。一発は頭部を貫き、もう一発は手にした銃を破壊する。だがここまでがジュレイドの限界。

「もらった！」

障壁を突破した二人が無防備なジュレイドに武器を振り下ろす。回避しようにも体が動かない。まさか人を庇って死ぬとは夢にも思っていなかった。だが悪行を続けた身にはお似合いの死かもしれない。

「させない！」

力ある言葉がジュレイドの耳に届く。二人の男達が振り下ろした剣をノイアが剣と鞘で受け止める。目の前にいる男達を睨みながら腕に力を込める。だが片手では防ぎきれない。

「それなら……！」

ノイアは半歩下がる。男達が空振りをしたのを見て、剣を構える。
「はぁぁー……！」

叫ぶと同時に地面を蹴る。高速の横薙ぎの一閃。慌てて一人が受け止める。刹那、左手に握る鞘が振り上げられる。舞ったのは白銀の刃。武器を失った男は数歩後ずさる。

「この女！」

男が剣を捨てて落ちていた斧を拾い上げる。一気に距離を詰めて力任せに振り下ろす。

「……っ……」

剣と鞘を交差させて受け止める。激しい衝撃が全身を駆け抜けた瞬間にノイアは判断した。受け止めきれない。押し負けると思った時に真紅の鎧が見えた。

「世話が焼ける！」

鋭い一声が響くと同時に砕けた刃が舞う。

目の前に立ったのはルメリア。剣を素早く男の首元に向ける。

「さっさと行け」

武器を失った二人の男を睨む。即座に男二人が逃走。残ったのはジュレイドが後を追っていた一人。

「……すまないけど……そいつから話を聞きだしてくれる」

ジュレイドがコートの裾で額の汗を拭う。

「ごめんなさい。私のせいで……今から癒しの術式をかけるから」

瞳に涙を溜めたノイアがジュレイドに駆け寄る。癒しの術式を背後に感じながらルメリアは男の前に立つ。

「……」

男は観念したのか抵抗をする様子は見せない。

「誰の指示？」

ルメリアが低い声で問う。男は舌打ちをしてから口を開く。

「ヴァーンハルト……だ」

男は溜息をつきながらある男の名前をつぶやく。その名前には覚えがある。確かヴァンスと同じ政治を務める男で、ハーミル派で有

名な男だ。かなり野心家で隙あればヴァンスに成り代わろうとしていた男である。

「なるほど……ある意味では納得ね。ご同行願える？」

ルメリアが問う。確かな証拠があればヴァーンハルトとて言い逃れはできないだろう。男は力なく頷いた。

「では帰りますか」

ジュレイドが立ち上がる。一応は怪我を塞ぐ事はできたらしい。だが自前のコートには穴が開いていた。コートの持ち主は気にした様子はない。いつもの陽気な笑顔を浮かべているだけだ。

ノイアは力なく頷く。今回は迷惑を掛けただけだった。力になる所か足を引く張る結果となってしまうた。

「今後は迂闊な行動はしないように」

ルメリアは男を連行しながらつぶやく。それ以上は何も言わなかった。

「心配してくれたのは……ありがとう」

ジュレイドがノイアの頭に手を置く。上目遣いでノイアが見つめる。

「惚れるなよ」

ジュレイドがノイアの頭から手を離す。すぐに右手の一指し指を伸ばし、親指を立て拳銃を作り撃つ真似をした。ニヤリと笑う仕草は子供のようだった。

「惚れません！」

ノイアが顔を真っ赤にして叫び返す。

「まあ、ノイアにはあの堅物が似合ってるな」

ジュレイドは背を向けて歩き出す。

「……堅物」

ノイアはぽつりとつぶやく。おそらくブレイズの事だろう。胸に手を当てる。彼に対しては特別な感情はない。友であり、同じ道を進む同志。

「そうだよね」

ノイアは心に確認してから一步を歩んだ。

＊

「彼はこの国の騎士に預けたわ」

ルメリアが領主に報告。何の感情も与えない無表情で淡々と述べる彼女の心は見えない。

「分かった。合わせてアルフレッドに報告しよう」
溜息をついてザックスが述べる。

「この国のあり方……もう一度考える必要があると思うけど」
ルメリアはつぶやいて背を向ける。耳に痛い言葉ではあるが事実であると思う。まさかこの都市でも皆と同じようにシェライトの命を狙う者が現れるとは思わなかった。そこまでして昇進を考える者がいるとも思いたくはない。だが今回は具体的な名前まで出てしまった。

「……いい機会なのかもしれないな」
ザックスは顔を落としてつぶやいた。後は首都クロイセンにいる旧友が上手くやる事をただ祈るだけだった。

＊

「二人ともどうして無理したの！」

帰った途端になぜか怒られているジュレイドとノイア。さすがに破けたコートで帰ってこれば分かってしまう。

「悪かったよ」

ノイアがどうかシエルをなだめようとする。

「大丈夫。簡単には死なないから」

ジュレイドがシエルの頭に手をのせる。その瞬間にシエルの大きな瞳に涙が溜まる。

「……私のせいで二人が傷つくのは嫌だよう……」

シエルがジュレイドに抱きつく。顔をジュレイドの腹部に埋めて涙を流す。

「悪い……」

ジュレイドはそれだけしか言えなかった。いつもの気楽な冗談は言えない。胸を締め付けて言葉がでない。頼むから泣かないで欲しい。シエルが傷つかないために、怯えないように奴らの後を追ったのだから。これでは何がしたいのか分からない。

「次からは……私にも教えて。ちゃんと耐えられるように強くなるから」

シエルがジュレイドのコートを強く掴む。震えてはいるが確かな強さを感じる。

「……そうか」

ジュレイドは短くつぶやく。それを聞いてシエルが顔を上げる。

「もう……幼いままでも……弱くてもいけない」

強い瞳がジュレイドの瞳と重なる。その瞳からは迷いはなかった。強くなるうと決めた者が向ける強い瞳だった。

「いいんじゃないのか」

ジュレイドが笑う。いつもの陽気な笑顔で。

「しばらく見ないうちに大きくなるんだね」

ノイアは寂しそうな嬉しそうな表情を浮かべる。もう私がいなくてもシエルは歩める。近いうちに世話係ではなくて対等な立場で歩める日が来る様な気がする。そんな日が訪れるようにノイアは天へと祈った。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 4（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。感想があればお願い致します。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 5

ただあなたを守りたい シスター見習い編

― 5 ―

「ここに来たということは……戦か？」

渴いた声が耳に届く。無機質な地下牢に座っているのは長身の男。不適な笑みを顔に張り付かせただ一点を見つめている。

「そうだ」

アガレスは男を見下ろす。男は視線を向ける事もない。

「そうか……お前は負ける」

男が淡々とつぶやく。まるで未来が見えているかのような言葉。そんな力をこの男は持っていない。それはよく知っている。

「なぜだ？」

短く問う。だが、男は渴いた笑みを浮かべるだけだった。聞いた答えは返ってこない。何を考えているのかも分からない。

「ならば証明しよう……我の道を」

アガレスが背を向ける。これ以上ここいいても仕方ない。そもそもここに来た事自体に意味はないのかもしれない。

「次の戦い」

「……」

男の言葉に無言で振り向く。男の瞳とアガレスの瞳が重なる。

「お前が負けたのなら……私をここから出せ」

男がゆっくりと立ち上がる。

「負ける事はない」

「そう思うのであればそれもいいだろう」

アガレスの言葉を聞いて男はゆっくりと座る。アガレスは男の瞳を見つめる。ただ一点を見つめ続ける瞳。この男はいったい何を見

ているのだろうか。弟である自分にもそれは分からなかった。

＊

新造された塔の最上階で修道服姿の少女が祈りを捧げる。少女の体から白い光が溢れる。神力の輝きが塔の外壁を照らし、力を送り続ける。

「ハーミル様……もう朝です」

外壁の背に体を預けているセクメトが溜息をつく。徹夜で祈りを捧げるなど正気ではない。

「……」

ハーミルは無言で祈りを捧げる。これが自らに与えられた使命だと背で語っているようである。

「これ以上はお体に触ります。あなた一人だけの身でない事を理解して下さい」

セクメトはゆっくりと近づき祈りを続ける少女の細い肩に触れる。

「……あなたも出世したいのですか」

ハーミルは祈りを止めてぼつりとつぶやく。背に立つ男が震えたのが分かる。嫌でも分かってくる。皆は出世のために自分を担ぎ上げただけだ。真に想ってくれる人はいない。その分ではシエルは幸せだと思う。彼女には絶対に裏切らないノイアが側にいるのだから。

「そのためなら……あたなを守り抜きます」

セクメトが頭を垂れる。あつさりと認めた所は分かりやすいと思う。裏がある人間を信じられるほどハーミルは出来た人間ではない。「そうですか。ならば……今は守ってください」

将来を期待された少女はセクメトを見ずに歩を進める。いつか心から信頼できる者が側にいて欲しいと心の中で強く願った。

＊

「皆を頼む」

腕を組んだ筋肉質の男がブレイズを見つめる。都市マーベスタの騎士をまとめている隊長である。

「はい！」

胸に手を当てて応じる。

目の前の男からすれば20歳も年齢が離れた者に兵を預けるのは不安で仕方がないだろう。だが、彼は不満な顔をせずに若き隊長をただ見つめるだけだった。都市マーベスタを背に佇む男はブレイズにはとてつもなく大きく見える。これだけの器はまだない。だがいつかはここまでたどり着きたいと思う。自らの力で。

「無事に……戻るように」

ザックスが微笑む。

ブレイズは一度頷いて背を向ける。騎士が一斉に道を開ける。その先に立っていたのは手綱を握るノイア。その先に広がるのはハイマイト平原。短い草が生えた平坦な平原で塔までの進路を塞ぐものはない。馬で走るには適した道だと言えるだろう。

「ブレイズ隊長、ちゃんと決めてね」

微笑んで手綱を手渡すノイア。

ブレイズは無言で手綱を受け取り馬に乗る。皆が言葉を待つ。

「グリア連合国との初戦……我らの手で勝利を掴む。自らの剣に誇りを……！」

剣を掲げる若き隊長。

空に響いたのは雄叫び。皆が剣を掲げ叫び続ける。その叫びは地を震わせるほどに力強く、逞しい。

「すごい」

馬に乗ったノイアは短くつぶやく。これが戦争に行く者の覚悟。恐怖を拭うためだと頭では理解している。だが、全身が震えた。それだけ騎士達の声には熱が入っていた。

「行こう、ノイア」

隣で震えた声がする。右を見ると震える手で手綱を握っているシエルがいた。昨日の出来事があってからシエルは目に見えて変わった。今まで馬に乗る時はノイアかジュレイドの背にしがみついていた。だが、今では自らの力で乗っている。振り落とされないか不安ではあったが何とか乗りこなしている。

「何があっても守るから」

ノイアはただそれだけを述べた。こんな所で死なせない。強く思い馬を走らせた。

*

真紅の髪を無造作に伸ばした大男が塔を見上げる。昼を過ぎ日差しを増した光に目を細めて最上階を見つめる。その視線はどこか寂しげだ。

「この防衛もこれで最後か」

大男が丸太のような太い腕を組む。この塔の防衛を任されてもう40年になる。新米としてここに派遣され、幾度か敵国と戦ってきた場所。男が立つこの渴いた地面には幾重もの仲間と敵の血が染み込んでいる。

「グリア連合国の騎士が動いた」

一定のペースを崩さない足音と共に低い声が男の耳に届く。男はゆっくりと振り向く。そこには男と同一年の細身の男が立っていた。白髪のアールバックと、左目につけた眼帯が印象的な男だ。

「大将はアガレスか？ 最後の防衛としては満足だな、グレン」

男が視線をグリア連合国に向ける。鋭い眼光をさらに鋭く細め睨みつける。

「ここに骨を埋める事ができないのは残念ではあるな」

グレンと呼ばれた男は顔を落として笑う。この地で散った仲間を思えば死ぬまでここを守り抜きたい。

「ふっ……そんな事では先に逝った者に笑われる。皆を集めよ！

これが我らの最後の防衛だ」

男が指示を飛ばす。グレンは胸に手を当ててから背を向ける。

「もう一度だけ……力を貸してくれ」

男は瞳を閉じて祈った。

＊

目の前に広がるのは湿原地帯。泥を弾きながら一定のペースで馬を走らせているのは漆黒の甲冑で身を包んだ一団。中軍が前に出て、両翼を下げた「」の形をとる偃月えんげつの陣を崩さずに、頭上高くに見える塔を見つめる。陣の先頭を進むのはグリア連合国の王アガレス。彼を中心に主力部隊が集まり、左翼、右翼は主力部隊には劣るが年配のベテラン騎士が固めている。

「各位、気をつける。落ちたら助からないぞ！」

アガレスの右隣に位置するフィッツが叫ぶ。

地面には短い草が生い茂り、所々に水が溜まっているよくある湿原地帯。だが、この湿原地帯は沼地のようにぬかるんだ場所があり、落ちれば底なし沼に落ちたように沈んでいく。ものの数秒で全身が自然に飲み込まれ、一度落ちた者を救う手段はない。

「その程度の事で臆する兵はおらん」

アガレスが瞳を閉じてつぶやく。騎士達は王の背を見つめる。

「我らにあるのは勝利のみ」

王の言葉に騎士は背を伸ばし胸の甲冑を叩く。金属の音が一斉に鳴る。この国の忠誠を示す合図である。守るべき王が自ら前線に立ち、最前線を進む。後に続く騎士はただ信じて後に続くのみ。その心に迷いも、恐怖もない。

「我は負けん。絶対にな」

王は塔を睨みつけて短くつぶやいた。頭をよぎるのはあの男の言葉。それを振り切るようにアガレスは塔を睨み続けた。

*

月明かりに照らされた平原をひたすら走り続け、見えてきたのは白亜の塔。

「あと数刻で到着だ。だが気を抜くな！ ついた瞬間に戦闘になる可能性もある」

先頭を進むブレイズが指示を飛ばす。騎士に緊張が走る。都市で予備兵力として扱われていた彼ら。戦慣れしていない者の中にはいるのだろう。

「緊張する必要ないぜ。こっちはハールメイツの軍神様がいるんだから」

場を破壊する陽気な声が響く。皆がジュレイドを見つめる。緊張した彼らにニヤリと笑みを向ける。

「気休めになるかは分かりませんが…… 負けた事はございません」
軍神が皆の不安を拭い去る。騎士達の表情には安堵の笑みが浮かぶ。ギルベルトは素早く彼らの表情を確認する。これならば戦える。緊張して動けなくなった兵よりかは幾分かましである。

「誰か来たよ」

シエルが小さな手を前方に向ける。馬に乗って平原を駆けるのは一人の真紅の髪をした大男。

「ほう。ジェイス殿ですか」

ギルベルトが顎鬚に触れる。

「塔の防衛をしている隊長か」

ブレイズは大男を見つめながらつぶやく。男はギルベルトの目の前で馬を止めた。近くに立つとさらに大きい。縦だけではなく、鍛え抜かれた肉体のおかげで横にも膨らんで見える。

「俺はジェイス。そちらの隊長はギルベルト殿か？」

ブレイズを見ることもなくギルベルトに視線を向ける。当然と言えは当然だろう。

「俺がこの一団を率いているブレイズだ」

ジェイスに向けて右手を差し出す。その手を意外そうな瞳で見つめるジェイス。微笑んではから手を差し出す。

「すまない。若い隊長だな」

「それは心得ています」

手を握り合い二人は言葉を交わす。

「現在の状況を教えて下さい」

ギルベルトが二人の会話に割って入る。今はとにかく時間が惜しい。作戦を伝達するには少なからず時間が必要である。その間に敵が来てしまえば無策で戦うようなものだ。それだけは避けたかった。「分かった。塔に向かいながら説明する」

ジェイスは馬を塔に向ける。

ブレイズが手を掲げて合図すると同時に騎士達が続く。

「今夜か……早朝か」

ノイアは塔を見つめながらつぶやく。並走するシエルを見つめると顔は真っ青だった。でも、前を見つめて懸命に馬を走らせる。手を貸したくなる。だが、ここで手を差し出したら以前のシエルに戻ってしまう。ノイアは拳を握って甘い自分を追い出す。胸が締め付けられる。その痛みを堪えてノイアは痛いほどに拳を握った。

*

ほのかなランプの光が一枚の地図を照らす。地図の上には騎士の形をした石の置物が各地に置かれている。

「別働隊か……」

ジェイスは地図を見てつぶやく。塔の前にはジェイスを中心に円を描いて守る方円の陣が敷かれ、北西には一つの部隊を置くらいしい。真北には敵を示す騎士が置かれている。

「はい。この辺りの地形は進行可能な場所が限られています。彼らは南に真っ直ぐに進行する他に道はありません。迂回路もあります。時間が掛かりすぎます」

ギルベルトが敵の騎士を南に移動させる。

「それではこの北西の部隊はどう進むのですか？ 沼地を避けるのは不可能ですよ」

ブレイズが顔をしかめる。相手の進路が限られるのと同時に、こちらの進路も限られている。

「ああ。この塔を守るのはいつも一本道でぶつかるだけだ。下手に迂回しから沼地に落ちて終わりだ」

ジェイスが腕を組む。沼地を駆け抜け抜けろというのはあまりにも無理がある。

「——私が道を作ればいいんですよね？」

一人の少女が急に言葉を発する。緑色の瞳が皆を順番に見つめる。「その通りです」

ギルベルトがノイアを見つめて一つ頷く。

「ほう。障壁で道を作るのか」

ジェイスは感心したように地図を見つめる。

「側面からの攻撃は都市マーベスタからの援軍で務めます。数が多すぎれば奇襲には向かないでしょうから」

ブレイズが提案。奇襲を失敗すれば全滅。危険なのは承知しているが、それは後から来た者が務めるべきだと思う。

「若いと言ったことは訂正しよう」

ジェイスの手が肩に触れる。ブレイズは男の瞳をしっかりと見た。「生きて戻れよ」

短くつぶやいてテントの外に出る。もう決める事はない。後は敵が来るのを待つだけだ。

「そつえばシェルはどうしてるんだ？」

ブレイズが地図から視線をノイアに向ける。

「もう塔に登ってる。ルメリアも一緒だから心配はいらない」

ノイアが微笑みを向ける。

「あなたでなくてよかったのですか？」

ギルベルトの表情が曇る。昨日からノイアはシェルを避けている

ように見える。

「あの子は私から離れて大きくなろうとしてる。だから側にいてはいけないんです」

ノイアは儚く笑う。表情を見れば分かる。心配で溜まらないのだろう。今すぐにでも駆けつけて抱きしめたいと顔に書いてあるようにも見える。

「その想いは伝わっていますよ」

ギルベルトが微笑んで返した。

*

塔の最上階を小さな足で懸命に登っているのはシエル。額には汗が浮かび、荒い呼吸を繰り返している。

「ジュレイドに運んでもらった方がよかったのではないか？」

後ろを歩くルメリアはさすがに心配になってきた。「上まで運ぼうか、お姫様？」いつもの軽口を叩いたジュレイドをシエルは首を振って断固辞退。今は自らの足で塔を登っている。

「強くないといけないから。もう足手纏いは嫌」

シエルは胸の前で拳を握りつぶやく。小さな背中はどこか力強く見える。でも、まだまだ支えは必要である気がする。手間のかかるお姫様だとルメリアは思う。

「ノイアだつて戦場に立つ。怖いけど……私にできる事をするよ」

シエルの細い肩は震えている。それでも歩む足は止めない。本当はノイアに抱きついて甘えたいのだろう。そして恐怖を拭きたい。だが少女は振り向かない。ルメリアにも頼ろうとしない。その想いを受け取って後ろを歩く世話係代行が口を開く。

「ならば……シエル。お前の力を見せてやろう」

優しい声が背に届く。肩の震えが一瞬だけ止まる。

「——うん！」

シエルは力強く頷く。いつも世話を焼いてくれたノイアに一人前

の姿を見せたい。そんな想いが伝わってくる。

「まるで親子みたいだな」

ルメリアは呆れながらつぶやいた。

*

時刻は午前三時。月明かりを浴びて騎士剣が白銀に輝く。

「夜戦か……」

ブレイズは湿原に立つ軍勢を見つめる。

ここまで乗ってきた馬は食料として潰したらしく、グリア連合国の騎士達は湿原を自らの足で進んでいる。一定のペースで進む甲冑姿の部隊はどこか不気味な印象を受ける。まるで感情のない人形が歩を進めているようだ。

「今なら敵からの発見が遅れる。好都合だ」

ジュレイドが小声でつぶやく。こちらを発見されるのも時間の問題だが、上手くいけば奇襲をかけられる。

「ねえ……先頭を進んでいる人……嘘……」

ノイアは敵の部隊の先頭を進む人物を見て肩が震えた。敵国の王であるアガレスである。シスターであつても見間違える訳はない。前線に出て来ただけでも驚きだが、敵国の王の行動を見てさらに目を見開いた。

アガレスは一度左手を上げる。部隊が一斉に停止。敵部隊との距離は約100メートル。前方の騎士が握っている弓がぎりぎりで届く範囲。

「——ふっ——！」

アガレスは即座に地面を蹴る。刹那、一斉に矢が放たれる。煌いたのは銀閃。飛来した矢は宙で折れ地面に突き刺さる。

一瞬の空白。ハールメイツの騎士達はたった一人で矢を全て弾き返した敵国の王を呆然と見つめた。その一瞬の時をグリア連合国は

見逃さない。

「続けー！ー！」

フィッツの怒号の叫び。漆黒の甲冑を纏った騎士が一斉に地面を駆ける。一瞬の遅れと共に矢が雨のように降り注ぐ。

「大楯部隊……構え！」

指示を受けて先頭を進む部隊が一斉に大楯を構える。二列目を進む騎士は頭上に大楯を掲げ、そのまま疾走。

矢の第二波を大楯で防いだグリア連合の騎士は勢いを衰える事無く前進。

「ぎりぎりまで引き付けろ！ 武器をボウガンに」

副隊長のグレンが即座に指示を飛ばす。騎士達は手にした弓を放り投げて腰につけているボウガンを構え屈む。

「狙いは足。射撃と同時に大楯部隊は前へ！」

グレンの指示を聞いた瞬間に矢が湿原に生える草を貫きながら疾走。脛の甲冑を砕き、最前列の騎士が倒れる。だがこの程度で敵は止まらない。即座に二列目の騎士が掲げていた大楯を降ろし前進。中央突破を目指す。

「——陣を鶴翼へ……急いでください」

ギルベルトの声を聞いて大楯を構えた部隊が突撃。敵の進路を塞ぐ。

刹那、方円の陣を崩す。指示通りに両翼が前方に張り出し「V」字型の鶴翼の陣に変更するために騎士達が疾走。両翼の間に敵が入った瞬間に包囲、殲滅をする陣形だ。

「勝った」

アガレスは敵の陣を見て勝利を確信した。中央突破を狙う我らを両翼が挟んで殲滅するつもりだろう。戦いながらこつと早く陣を変えてきたのは賞賛に値する。だが、すでに遅いとアガレスは断定した。

「——はっ」

短く息を吐き目の前にいる大楯部隊を一閃の元に崩したアガレスは疾走。狙いは手薄になった陣の中央にいる敵の指揮官のみ。突破してしまえば、この陣は意味をなさない。また指揮官を失った部隊など烏合の衆に過ぎないのである。このままに勢いならば難なく突破できる。

勝利のためにアガレスは地面を蹴る。自らが進む事で自国の騎士が続くようにと。

*

祈りを続けるシエルの耳に届くのは戦の音。騎士達の叫び声に金属がぶつかる音。塔の最上階にいても外での戦いの緊張感は伝わってくる。

「……………」

シエルが一度呻く。不安で溜まらない。あの中にノイアがいる。誰が死んでもおかしくない戦場に。そう思うと震えが止まらない。

「信じる」

ルメリアがシエルの肩を掴む。だが震えは止まらない。

「強くなるんだろう。簡単な事でないのは分かってる。でも……負けるな」

優しい声がシエルを支える。

「——うん！」

シエルは一度頷いてから祈りを捧げる。光が塔を照らす。力が首都クロイセンに伝わっていく。力が足りない時の補佐として付いてきたルメリアだったが、どうやらその必要もないらしい。一人では無理だからと付いてきたノイア。だが、数日間の旅で彼女は一人で使命を達成できるまでに大きくなった。まだ震えてはいるが一步を歩もうとしているシエル。

「将来が楽しみではあるな」

ルメリアは微笑んでつぶやき、塔の最上階から戦場を見下ろす。視界に入っただのは光輝く道だった。

＊

光の道突き進むのは真っ白な甲冑に身を包んだ部隊。

「――続け！」

ブレイズの声が戦場に響く。騎士達が電光石火の勢いで駆け抜ける。

「まずはご挨拶！」

銃声が轟く。

グリア連合の部隊は部隊右側から受けた攻撃に足が一瞬止まる。今が絶好の機会。これを逃せば相手の突破を許してしまう。

「行け！ ノイア！」

ジュレイドの声を聞いて、剣と鞘を逆手に握り、湿原地帯を体勢を低くして駆け抜けるノイア。刹那の時点で一気に接近。銀閃が敵国の剣を破壊する。

「――騎士の意地を見せる！」

ブレイズの叫びを聞いて騎士が迷わず地面を蹴る。シスターの少女が一番に突撃したのだ。騎士である自分達が迷っている場合ではない。覚悟を決めた騎士が怒涛の勢いで突撃をした。

「馬鹿な……どうやって」

アガレスが振り向いた瞬間には側面からの攻撃を受けた部隊は混乱状態。突破のための勢いも衰えている。偃月えんげつの陣は主力を前方に置いて一気に突破する陣形。側面には主力はおらず奇襲を受ければひとたまりもない。

「余裕だな。アガレス！」

太い声が響くと共に剣が振り下ろされる。

アガレスは剣を受け止めたと同時に視線を走らせる。刹那、ハ―

ルメイツの騎士が左右から剣を振り上げる。

「ジェイスか……面白い策を使う」

強引に横薙ぎに剣を振るいジェイスを吹き飛ばす。刹那、一息と共に高速に一回転。高速の銀閃が左右から迫る騎士を斬り捨てる。単体での強さでは止まる所を知らないアガレスであったが、戦局は刻一刻と姿を変えていく。

「両翼……閉じて下さい。包囲します」

ギルベルトの指示を受けて、V字の陣形がグリア連合の騎士を挟むように移動。

「皆、引け！」

フィッツが部隊に指示を出す。向かうのは手薄な敵の右翼。奇襲を行った部隊に背を向ける事になるがこのままでは全滅してしまう。「主力を殿にして撤退！」

アガレスは後方に跳躍すると同時に奇襲を行った部隊に向けて突撃。グリア連合の騎士は王に背を向けて撤退の道を切り開くために地を蹴った。

「おいおい。正気かよ……この王様」

ジュレイドは舌打ちをした。

王アガレスは撤退する事もなくこちらに向けて突撃してくる。一人でも多くの騎士を救うために。何よりも恐いのが主力部隊の瞳。突撃する王を見て死ぬ気で剣を振るう様はもはや人間を越えた存在に見える。

「ぐっ……」

左隣にいるブレイズの呻き声を聞いて素早く銃を向ける。ブレイズの目の前にいたのは漆黒の甲冑に剣を三本刺した騎士。倒れてもおかしくない状態でおも剣を振っている。

「くっそが！」

ジュレイドは叫んで引き金を引く。できる限り苦しまぬように頭部を正確に撃ち抜く。ただ敵を撃っただけだが、こんなにも気分が

悪いのは初めてだった。これが戦争だと割り切るには重すぎる。

「はぁー！ー！」

ノイアの叫び声が戦場に響く。ジュレイドとブレイズが慌てて視線を向ける。

響いたのは剣響。二つの剣が火花を散らして交差する。

「貴様が原因か」

アガレスが目の前にいるシスターを睨む。まさか湿原に障壁を展開して突破するとは。ここまでの奇策を使ってくるとは思わなかった。だが、次はない。

「そうよ。そして……あなたの道はここで終わりよ！」

左手に握る鞘がアガレスの剣を狙う。

「くだらん」

アガレスは半歩下がって回避。刹那、銀閃が煌く。ノイアに向けられた一閃は突如現れた障壁に弾き飛ばされる。目を見開いた時にはノイアが振り上げられた銀閃が視界に入った。

舞ったのは白銀の刃。佇んでいるのは剣を握る異色の少女。

「ノイア！」

「王！」

ブレイズとフィッツの叫び声が響く。叫び声を聞いてお互いに後方に跳躍。代わりに剣をぶつけたのはブレイズとフィッツ。

「やらせない」

血走った瞳がブレイズを睨む。もはや前だけしか見えていない。あまりにも真っ直ぐで愚直。ブレイズは目の前にいる人物が一瞬自分と重なった。だが、手を抜くつもりは一切ない。

「ジュレイド！」

ブレイズは叫ぶと共に左に横飛び。フィッツの視界が開けた瞬間に見えたのは黒いコートを纏った男。

「悪いな」

銃声が轟く。

「——っ」

フィッツは急激に頭が冷えた。冷静になった頭でも今の状況をどうにかする方法はない。瞳を閉じた瞬間。甲冑を砕く音が耳に入る。だが、痛みが体を駆け抜ける事はなかった。

「フィッツ……お前は引け」

瞳を開けると目の前には王が立っていた。左手の籠手で銃弾を防ぎ悠然と立っているアガレス。

「アガレス！」

ブレイズは叫ぶと共に地面を蹴る。高速の銀閃。舞ったのは火花。

「……」

「……」

二つの視線がぶつかる。ブレイズの剣を止めたのはアガレスが右手に握る鞘。ルメリアやノイアがよく使う手段だ。

「潮時か……」

アガレスは短くつぶやいてブレイズを力任せに吹き飛ばす。立て続けに宙を切り裂く弾丸を鞘で弾き飛ばしながら退路を進むアガレス。

周りにいた騎士達がアガレスを追うために一斉に地面を蹴る。

「深追いはするな。慎重に進め！」

ブレイズは焦る騎士の背に叫ぶ。騎士は一度止まり隊列を整える。その間にはグリア連合国の部隊は撤退を終えていた。

「……これは……勝利なのか……？」

ブレイズは力が抜けた。地に膝をつけてぼつりとつぶやく。数だけの計算なら勝利。塔も防衛できた。だが、それと同時に敵の強大さを身を持って経験してしまった。こんな相手がまた攻めてくる。

「何度でも……追い返そう。出来るよ、ブレイズなら」

隣に立ったのはノイア。緑色の瞳はただ前だけを見ている。

「やらなければいけないんだな」

ブレイズはふらつきながら立ち上がる。視線を向けるのは首都クロイセン。光の壁は力を取り戻して強く輝いている。遠目でもはっきりと分かるように。新造の塔に加えて、守り切った塔からも神力

が流れているだろう。これで首都の防衛は安心できる。

「とりあえずの安心は確保。問題は山積みだけだな」

ジュレイドは塔を見上げる。その塔では今もシエルが祈りを続けているだろう。彼女の元に平穏は訪れるのだろうか。敵国を追い返したから安心。そんな簡単ではない問題が、山積みのような気がしてならないジュレイドであった。

*

翌朝。ヴァーンハルトは礼服に着替えを終えた瞬間にドアがノックされた。

「誰だ？」

ヴァーンハルトは不機嫌さを隠す事もなくつぶやく。声を聞いてドアを強引に開けて入ってきたのは騎士団団長アルフレッドと、ヴァンス。その後ろには騎士が数人待機している。

「……」

ヴァーンハルトは言葉を失った。ついにこの時が来てしまった。

「シスター見習いシエライト・ルーベントを自らの利権のために消そうとした。間違いはないか？」

騎士団団長がヴァーンハルトを睨む。手に握られているのは一つの手紙。

「何を馬鹿な事を……」

ヴァーンハルトが一步後ずさる。誰かが口を割ったとでも言うのだろうか。

「捕らえた者が貴殿の名前を口にした。まずは話を聞かせてもらう」指示をすると同時に騎士が部屋に入る。ヴァーンハルトの両腕をしっかりと固定して連行していく。

「待て。話を……ヴァンス！」

ヴァーンハルトは叫びながら抵抗を続ける。だが、騎士の力には敵うわけはなく、次第に声は遠くなる。

「……これからだな」

ヴァンスが騎士団団長を見上げる。

「ああ」

アルフレッドは一つ頷いてから背を向けて歩き出した。

*

賑やかな声が朝日が出そうな時刻に響く。グリア連合国を追い返した彼らは即座に酒盛りを始めたのだ。

お酒が飲めないノイアは壁に背をつけて溜息をついた。シエルは祈っており、ブレイズは同じ騎士に囲まれて談笑している。特に話す相手がおらず退屈なのだ。

「ノイアさん。溜息をついてはいけませんよ」

ギルベルトが隣に立ち一言つぶやく。今は話し相手がいる事が素直に嬉しい。

「暇なのよ」

ノイアは楽しそうにしている銀髪青年を見ながらつぶやく。

「ほほ……そうですか。ジジイでは役不足ですな」

ギルベルトはテーブルに置かれたお酒を持ち飲み始める。周りにいる男達のようにお酒によって騒ぐ事ができたら楽なのかもしれないとノイアは思う。

何度目かの溜息が出そうな時に修道服が控え目に引っ張られる。

驚いて右を向くと同じ修道服を着た少女がいた。

「ルメリアと交代した」

シエルが嬉しそうに微笑む。一仕事を終えたような清々しい笑顔をしている。

「そう……上手く出来たみたいだね。私は……駄目だね。もうシスターというよりは騎士だから」

ノイアは儚く笑う。ふと小さな手がノイアの手を優しく包む。

「それが……ノイアだよ。シスターでもあるし、騎士でもある」

シエルの瞳は真剣だった。この少女だけはノイアがどんな道を進んでも受け入れてくれるような気がする。

「ありがとう。シエル……」

ノイアは屈んでシエルを抱きしめる。

「ノイア……」

「うん？」

耳元で囁くシエル。ノイアは久しぶりの感触に心が安らぐのを感じる。何か言いたそうなシエルに言葉をかける。

「大好き」

頬を赤らめてシエルがつぶやく。

ノイアの心に今までの悩みを全て吹き飛ばすような清々しい風が流れる。心がぽかぽかと温まる。不覚にも涙が出てしまった。

「う……っ……」

ノイアは涙を堪える事ができなかった。どうしても涙が出るのか分からない。戦いの恐怖を今になって感じているのだろうか。そうだとするならいったいどれだけ鈍い心をしているのだろうか。

「大丈夫だよ」

シエルが抱きしめる力を強くする。ノイアはさすがのようにシエルを抱きしめた。いつもとは立場が逆だが、今日だけはシエルの優しさに触れていたかった。

*

「あいつは負けただろう？」

牢にいた男が看守に聞いた声を掛ける。いつものように冷たい地面に腰を降ろし、一点を見つめている。

看守の頬には嫌な汗が流れる。牢の中にいるにも関わらず恐怖が心を占める。震えて動けない。何か出来る訳でもないのだろうか。「まあいい。いずれ分かる」

男は一度微笑みを浮かべる。看守はその笑みが悪魔の笑みにしか

見えなかった。どうして兄弟でここまで違うのだろうか。

剣の腕、軍略においては現王アガレスをはるかに上回る男。だが、その性格に問題がある。

半年前にとある騎士がクーデターを起こした。それを鎮圧するために出陣したこの男は僅かな手勢で勝利を収める。その結果だけを見れば賞賛に値する。だが、裏では抵抗を止めた騎士を全て惨殺し、彼らを匿った市民も虐殺したのだ。

前王からは王の器ではないと追放を言い渡された男はその場で父である前王を殺害。最終的には兄と弟に分かれての争いに発展した。その争いの結果は現王の勝利。この男は今もこの冷たい牢の中に閉じ込められている。

「さて……ハールメイツ神国。どれだけ耐えられる」

男は不適に笑いゆつくりと立ち上がる。

看守は怯えて一步下がる。耳に入っただのは男をつなぐ拘束具が音を立てて破壊される音だった。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 5（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。今回は戦争パートですので、分かりにくい点などがありましたら感想、メッセージをいただければ幸いです。

キャラ紹介、世界観紹介（前書き）

今回はキャラ紹介です。参考にして下さい。

キャラ紹介、世界観紹介

ただあなたを守りたい

人物紹介・世界観紹介

世界観紹介

一、大陸マクシリア

神力と呼ばれる力に満ちた大陸。神力はこの大陸で生活するには欠かせない力。

例えば、首都の夜道を照らしている街灯は「輝石」と呼ばれる石に神力を注ぎ、輝かせる事で光源になっている。調理に使うコンロなども内部に輝石が入っており、神力を注ぐ事で火を起こしている。

神力は6歳を超えた時に宿るものであるが、人によって力の強さも、身に宿る神力の絶対量も異なる。中には全く神力を持たない人間もいる。神力を持たない者はガスや油などを使い火や光源を得ている。

二、国紹介

ハールメイツ神国

大陸南部に位置している国家。

北西、北東は天然の山々で守られ、背面は海に面して敵がない。急所である首都クロイセンは光の壁で守られており、唯一の脅威は北にある強国、グリア連合国のみ。

光の壁はシスターの長と各地に散らばる塔に神力を注ぐ事で成り立っている。塔が一つでも破壊されれば光の壁は力を失う。そのため騎士の多くは首都よりも塔の防衛に力を注いでいる。

塔を首都の近辺に置かない理由は、神力の影響を強く受ける土地があるからである。その場で神力を使用すれば10倍以上の効果が得られるため首都と離れた場所の建設を余儀なくされている。

光の壁を失えば数日で強国に飲み込まれると言われており、塔の維持とシスターの存在は必要不可欠となっている。

シスターとは神力が特に強い者を教会で養成して資格を与えた者と呼ぶ。特に女性の方が神力が高い者が多いため、ハールメイツ神国ではシスターが重要視されている。

グリア連合国

賢王と呼ばれるアガレスが治める国。

対立する国は圧倒的な武力でねじ伏せ、対話が可能であれば時間をかけてでも説得して取り込んでいる、この大陸最強の国。

王自身が騎士である事から武力を中心に国が纏まっている。「ハミル派」と「シェライト派」の内輪揉めを好機とみて軍を派遣。以後は戦争状態に突入する。

ハールメイツ神国のキャラクター紹介

一、メインキャラクター

ノイア・フィルランド 年齢15、16歳

髪色は金髪で腰までの長さ。瞳の色は緑。

本編の主人公で規格外の神力の持ち主。だが、絶対量が少なく正式なシスターになるのは絶望的な状況。代わりに常人よりも身体能力が高く騎士の素質を持っている特異な少女。

早朝から鍛錬をするなど生真面目で堅物。ただルームメイトのシエルに対しては甘く世話好きな一面がある。

補足

「神の代行者」の二代目シラヌイの激しさと、エレナのおっとり

した所を足したキャラ。早朝鍛錬をするのは私の作品の主人公のお決まりパターン。

シエライト・ルーベント 年齢12歳

黒髪を短く伸ばした少女。瞳の色は青色。

外見も精神年齢も幼く甘えん坊な最年少のシスター見習い。規格外の神力を持つノイアと同等の神力を持ち、絶対量もトップクラスの「神に愛された者」。

本名が呼びにくいので皆は「シエル」と呼んでいる。世話係であるノイアに甘える場面も多々あるが、旅を通して成長。自ら立ちとうとする。

ブレイズ・マチエス 年齢16歳

銀髪に青い瞳。

寡黙な騎士。ノイアと同じ場所で早朝訓練を行っていた少年。ノイアに頼まれたのを気に護衛を引き受ける。剣の腕は一級品だが、性格に難ありという評価を受けている。かなりの堅物で冗談などはまず口にしない。

本編では同じ国の騎士と戦った時、大勢の騎士の指揮を任された時は迷いを見せるなど年齢相応の姿を見せる時もある。

父の名前はフレイル・マチエス。ハールメイツの軍神、ギルベルトと共に数多の合戦を勝利に導いた男を父に持つ。その資質を受け継いでいるとギルベルトは信じて、ブレイズに騎士の隊長を任せる事を決めた。結果は初戦を勝利に導く電光石火の突撃を見事に成功させる。

ジュレイド 年齢20代中頃 正確な年齢は24歳。

髪と瞳は茶色。常に黒いロングコートを羽織っている。かなりの長身。

気さくな人物で常に陽気。時折、冗談も飛ばすムードメーカー。

本職は傭兵でシエルを消す依頼を受けるが、同時に護衛の依頼を受け、後者を選んだ。傭兵を続けているのは母親の薬を買うため。人生に疲れていたがシエルの心に触れて徐々に前向きになっていく。

ルメリア 20代後半

髪、瞳、甲冑と全てが真紅。すらりとした体型。

騎士でありながら神力が使える規格外の騎士。剣の腕は女性騎士で一位、二位を争う腕を持っている。彼女に与えられている称号は聖騎士。

ノイアと同じ素質を持つ人物で、本編では剣の使い方を教える場面もある。ノイアのいい見本となる人物。右手に騎士剣、左手に鞘を持つという独特の戦い方をする。

性格はメンバーの中で一番理知的。無駄を嫌い注意する場面も見られる。

ギルベルト・スタンリー 年齢は58歳。

白髪を肩くらいまで伸ばし、整えられた口髭と顎鬚が特徴的な細身の男。

グリア連合国の二倍に渡る軍勢を卓越した指揮と、剣技で三度退けた経歴を持つ人物。畏怖と敬意をもって「ハールメイツの軍神」と呼ばれている。現在の騎士団の基盤を作ったのも彼である。

丁寧な口調で話す落ち着いた人物で、常にメンバーを気に掛けている心優しい人物。

ハーミル 年齢 24歳

輝くような銀髪を腰まで伸ばした女性。

シスター見習いを近日中に終える予定。「神に愛された者」であるシエルに匹敵する力を持ち、将来はシスターの長になると噂されている人物。彼女に取り入り、出世を目論む人物は後を断たない。彼らを総じて「ハーミル派」と呼んでいる。

おっとりとした人物ではあるが、博識で世界の流れを正確に把握している才女。同じく将来を担うと噂されているシエルとも対立する姿勢は見せておらず、逆に共に歩もうと思っている。

サブキャラクター紹介

騎士団所属の人物

アルフレッド 年齢40代後半。

大柄で筋肉質な男。銀髪をオールバックにし、無造作に伸ばした髭が印象的な人物。騎士団団長。

「ハーミル派」と「シェライト派」で内輪揉めをしている現状を何とか止めたいと考えている人物。努力家であるノイアを騎士にしたいと声を掛けているが失敗続きである。

努力するものは見捨てないという心情を持ち、神力を持たない人間が最後に頼るのは彼だと言われている。人望が厚いだけではなく、ジュレイドなど有能な傭兵にシエルの護衛を依頼するなど用意周到な一面もある。

セクメト 年齢35歳。

副団長。禿頭。

ハーミルの旅に同行する男。今回の任務でハーミルに取り入り、騎士団団長になる事を狙っている。「ハーミル派」として有名なヴァーンハルトと通じている。

教会所属の人物紹介

ミシエル 年齢22歳

ウェーブがかかった茶色の髪に、やや吊りあがった髪色と同じ瞳が特徴的な少女。第一話でノイアを世話係と蔑んだ少女。のちに反

省して謝罪の言葉を述べるなど素直な一面もある。

アーバン 年齢50歳程度

白髪に丸眼鏡が印象的な人物。優しいだけではなく、時には厳しい現実を突きつける大聖堂の司祭。どちらの派閥にも属さない中立の立場を貫いている。

フィンネ 教官 30代

180センチオーバーの長身。引きしまった体格。
シスター見習いを鍛える教官の一人。元騎士。大剣でシスター見習いが張る障壁を叩くという恐怖の訓練を行う鬼教官。さっぱりとした性格。

サリヤ・メール

180センチを越える長身とスラリとした体型が特徴的なシスター。ウェーブが掛かった茶色の髪を腰まで伸ばしている。

シスターの第一位であり、シスターの長。光の壁を維持している首都クロイセンの要。知的で心優しい人物であり、ハーミルとシエルを導く存在となる。

政治担当の人物紹介

ザックス 40代後半

マーベスタの領主。茶色の髪を短く伸ばした細身で穏やかそうな表情が印象的な人物。騎士団団長アルフレッドとは旧知の仲で、彼と考えを同じにする人物である。ミレーネという一人娘を持つ。

ヴァンス 40代後半

礼服に身を包んだ長身の男。首都クロイセンの政治を任されている。

る人物。騎士団団長アルフレッドと共に内輪揉めの終息を求めている人物。また、まっすぐに穢れを知らないシエルが歩む道を見たいと思っている。どちらかといえば「シェライト派」の人物。

ヴァーンハルト

ハーミル派として有名な政治を担当する人物。皆での襲撃、都市マーベスタにて刺客を送るなど全てはこの男の指示である。ついでに二話では名前が出ていないが、ヴァンスと会話していた怪しい人物はヴァーンハルトである。

塔の守備隊

ジェイス 年齢は58歳。

真紅の髪を無造作に伸ばした大男。丸太のような太い腕をした筋肉質な人物。

北西にある塔を守っている隊長。グリア連合国の国境線に近い塔に配属されたために数多くの合戦を経験している。新造の塔が建設されて役目を失うが、最後の防衛戦では勝利を収めている。

性格は豪胆。前線では指揮をするよりも自ら剣を振るう事が多い。

グレン 年齢58歳

北西を守る部隊の副隊長。白髪をオールバックにし、左目につけた眼帯が印象的な細身の男。

隊長が前線で剣を振ってしまうので、代わりに部下に指示を出すのはこの男。冷静で常に落ち着いている。

グリア連合国

フィッツ 20代中頃

長い銀髪を腰まで伸ばし、肌は病人のように白い。身に纏ってい

るのは甲冑ではなく胸、腰、膝、肘に防具がつけられた軽装姿。グリア連合国近衛騎士の一人。

王であるアガレスを慕い、忠誠を誓う騎士。直線的で愚かなほどに真っ直ぐな人物。

アガレス 年齢20代後半

黒髪を肩まで伸ばした褐色肌が印象的な男。凛々しく威厳に満ちた低い声は、とても20代後半には見えない。王でありながら常に漆黒の甲冑を身に纏い、体は無駄なく引き締まっている。周りからは賢王と呼ばれているが、戦争になれば自ら前線に立ち剣を振るう。そのため国民からは強い支持を得ている。

ガイラル 年齢30代前半

外見はアガレスと同じ褐色の肌に、黒髪。髪は腰まで伸ばし、前髪の間から見える瞳は狂喜の色を含んでいる。

力で国を統一する。その想いが強くアガレスのやり方は甘すぎると思っている。過去に反乱を起こした騎士と匿った住民を虐殺した経緯がある。王としての器がないと言った前王を殺害、その後は弟であるアガレスと激突、その後は牢へと閉じ込められていた。

クレサ 14歳

黒髪を結い上げた幼さが残る少女。年齢のせいかな身に纏う軽装があまりにも不釣り合いに見える。ガイラルとは夜を共にする仲。今作のお色気担当のキャラクター！

バルデス 30代中頃

精悍な顔つきに整った黒髪が印象的な男。険しい表情は30代中頃という実年齢よりも年配に見える。

ガイラルの腹心の部下。力でこの国を統一しようとするガイラルを支持している。実力はクレサ共々アガレスと並ぶ強さを誇っている。

29.

キャラ紹介、世界観紹介（後書き）

第5話現在のキャラクター紹介です。定期的に修正、更新をすると思います。作者のメモ書きに少し手を加えた程度なので、不足している部分があると思います。名前とどんな立場の人物だったか確認するのに使用して下さい。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 6

ただあなたを守りたい シスター見習い編

―6―

「あれから一週間か……」

ノイアは今まで読んでいた分厚い本を閉じる。

グリア連合国との戦いを終えた彼女達はすぐに首都クロイセンを目指した。ジェイスを中心とした塔を守る騎士達は古い塔を破棄して兵力を二分。一部は都市マーベスタに、残りは新造の塔の守備のために派遣された。グリア連合国の第二派に備えての準備は静かに着々と進んでいる。

「早いよね。ハーミル……大丈夫かな？」

ベッドに腰掛けているシエルがつぶやく。

先ほどまで読んでいた本を腰掛けているベッドに置いてルームメイトに視線を向ける。シエルはそわそわと落ち着かず窓の外に視線を向けている。

視線の先にあるのは大聖堂。先ほどから落ち着かない理由は、正式なシスターになるための試験を行っている最中だからである。将来を担うと噂されているハーミルが試験に挑んでいる現在、首都クロイセンは張り詰めた空気で満たされている。新たな歴史を刻むかもしれない一瞬を皆が待ち望んでいるのだ。

「皆…… どんどん先に行ってしまうな」

ノイアはゆっくりと立ち上がり開いた窓枠に手を掛ける。ふんわりと優しい風が頬を撫でる。現実もこの風のように優しくればいいと思う。試験に受かるのは絶望的だと言われている自分。いつか試験を受ける時が訪れるのだろうか。

絶望的なノイアとは違い、ハーミルの試験は形だけのものらしい。

あれだけの素質を持っていて落ちる事はまずあり得ない。試験の後
は新造された塔への派遣が決まっているらしい。

「皆いなくなつて寂しいね」

シエルが溜息をつく。気が付けば6人になつていた今回の旅。急に二人だけになれば寂しさも込み上げてくる。だが、シエルが寂しがっているのはとある一人が姿を現さないからだろ。急に現れたと思えば、去り際も早い傭兵。別れの挨拶くらいはしてほしいものである。だが、いつまでも寂しがっている暇はない。特に余裕のないノイアには立ち止まる時間は皆無だ。

「寂しいけれど……私達もやるべき事をやろう」

ゆつくりとノイアが振り向いて歩き出す。シエルは頷いてから後に続いた。

*

渡された青いローブを緊張した面持ちで羽織るのはハーミル。緊張した面持ちではあるが、どこか嬉しそうな表情を浮かべている。しつかり者の印象が強いこの少女の素に近い年相応の姿を見たような気がする。

「おめでとう、ハーミル」

教壇に立つ司祭アーバンが声をかける。ステンドグラスから漏れた光に照らされた表情はわが子が自立した姿を見るように柔らかい。

「はい……」

ハーミルは頬を赤らめて微笑む。恥ずかしそうな、それでいて満ち足りた笑顔。

受かる事が確実と言われていた彼女。だがこれだけ嬉しそうな顔をされればこちらまで嬉しくなってしまう。いつまでもこの柔らかな温かい時間を過ごしたいと思う。だが、この国にはそんな時間はない。すぐにも彼女には次の指示を与えなければならぬ。アーバンは一度咳払いをしてから重い口を開く。ハーミルは場の空気が

変わった事を感じ取り、表情を引き締める。

「——シスターの第二位、ハーミル・クロイス。すぐに塔へと出立せよ」

「分かりました。全力で務めます」

司祭の言葉を受けてハーミルが恭しく礼をする。もう二度と会えないかもしれない。最大限の感謝を一度の礼に込める。新造された塔は首都クロイセンから北に三日ほどで辿り着く距離にある。ハーメルメイツ神国の中央。これから激化するグリア連合国との戦争の中心地になるであろう場所。

「我が国に勝利を……」

司祭が瞳を閉じる。ハーミルはその言葉を聞いて背を向ける。視線の先、大聖堂のドアに背を預けて立っているのは副団長のセクメト。その隣には新たに護衛を任された騎士。

「参りましょう。勝利を掴むために」

ハーミルは大聖堂のドアを開け放つ。可能であるなら、この場にもう一度立てる事を強く祈った。

*

「さて……部隊の再召集は終わったか？」

男の渴いた声が響く。男の目の前に立っているのはグリア連合国の王アガレス。

「残り三日はかかる」

鋭い眼光を男に向ける。本来であればすぐにでも牢に放り込みたい。だが自分がハーメルメイツ神国に負けたのも事実。国の中ではより強い者をと押す声もある。その声に後押しされて、今この男は目の前に立っている。

男は刃物のような鋭利な視線を受けても反応を示さない。外見はアガレスと同じ褐色の肌に、黒い髪。だが印象はまるで違う。黒い髪を腰まで伸ばし、前髪の間から見える瞳は狂喜の色を含んでいる。

「まあいいだろう。行くぞ、クレサ」

男は右隣に立っている若い少女につぶやく。黒髪を結い上げた幼さが残る少女。14歳という年齢のせいか身に纏う軽装があまりにも不釣り合いに見える。

「はい。ガイラル様」

クレサと呼ばれた少女は柔らかい笑顔を向ける。

ガイラルと呼ばれた男は一度不適な笑みを向けて王に背を向ける。その後をクレサが一定の距離を開けて追従する。

「あんな幼い少女を連れて正気ですか？」

王の側に控えていたフィッツがいぶかしむ。常にガイラルの右側を離れない少女。彼の右腕だとしても言うのだろうか。

「フィッツ……この国は力を示して成長した国だ。幼かるうが、女性だろぅが強ければ上を目指せる。あの男が今も平気な顔をして歩けるのもこの国だからだろぅ」

「彼女は……強いのですか？」

「あの少女が本気を出せば、バルデスとほぼ同等の力を持っている」
アガレスは少女の背を見つめながらつぶやく。

「バルデス殿ですか……」

フィッツの顔が青ざめる。この国でアガレスとともに戦える男の一人である。そんな力をあの小さな少女が持っているというのだろうか。フィッツは震えが止まらなかった。ガイラルがハールメイツ神国を倒せば、次の標的はまた自分達に向くだろう。味方である内は心強いが敵になれば脅威でしかない。

「フィッツ……味方を恐れるな。敵だけを見よ」

アガレスは瞳を閉じる。フィッツは震える体を拳を強く握って堪えた。

*

ブーツが歩を進める度に地に落ちた枝が音を立てる。薄っすらと

天井の葉から漏れる光を浴びながら黒いコート姿の男が獣道を進む。ほとんどなく進むと開けた場所に出た。その場で黙々と素振りをしているのはブレイズ。ただ静かに、やるべき事だからやっているとその表情は語っていた。以前とまるで変わらない。ただ真新しい白銀色の甲冑を纏っている所だけはどこか新鮮だった。

「おっ……… いたいた」

陽気な声で話しかけるジュレイド。

「………」

無言で視線だけを向ける。手は休めない。

「相変わらずだな。まあ、そのまま聞いてくれ」

苦笑してジュレイドは素振りを続ける少年につぶやく。

「……… なんだ」

「おっ……… 話してくれるんだねえ。用事は特にないが。これから報酬を持って里帰りでもしようと思つてな。挨拶に来た」

コートから袋を取り出す。軽く振ると金貨が音を立てる。

「挨拶をする人間を間違えている」

溜息をついてブレイズが素振りを続ける。シエルかノイアに挨拶をすべきだろう。特に関わりが深かったシエルには顔を見せるのが筋だと思う。

「いや……… 合ってるさ。ノイアはうるさいし、ギルベルトの旦那はマーベスタ、ルメリアにいたつては無視だろう。あんたに伝えておけば……… ちゃんと伝えてくれるだろう？」

ジュレイドは儚く笑う。疲れたような、諦めたようなそんな表情を浮かべている。

「……… 本人にちゃんと伝えなくていいのか？」

素振りを止めて青い瞳がこちらを向いた。迷いを感じさせない強い瞳。

「泣かれたら面倒だ。それに……… あいつは俺には重い。住む世界も違う。今が……… 離れるにはいい機会なんだよ」

ジュレイドは青い瞳から視線を外す。落ちた力のない葉がなぜか

自分と重なる。自然と溜息が出た。こんな姿を他人に見せる時がくるとは夢にも思っていなかった。

「そう思うなら勝手にしろ。だが俺は信じている」

ブレイズはゆっくりと剣を構える。

「何を？」

「ジュレイド……お前がまた戻ってきてくれる事を」

少年は前だけを見て素振りを再開した。

「ふっ……本当に優等生だな。ま、悪い気はしないがな」

ジュレイドは背を向ける。素振りの音が激しさを増していく。この場を去ろうと思った瞬間にもう一つ話がある事を思い出した。

「そうだ。ノイアがいろいろ悩んでいるみたいだったぞ。力にならないのか？」

おせっかいだとは思ったが、最後までいいだろう。

「——その必要を感じない」

「なぜ？」

断言する少年に眉根を寄せるジュレイド。

「彼女は必ず前を向く。もし進むのを諦めるのであれば……その時は動こう」

ブレイズは表情を変えずにつぶやく。そんな事はないと、この少年は確信しているらしい。

「いったい何なんだろうね……この二人は」

ジュレイドは頭を掻きながら立ち去る。おそらく一生掛かっても理解できないと思う。だが、機会があるのならもう一度くらいはおせっかいを焼いてもいいかと思う。もしかすればそれだけ彼らの事を気に入っているのかもしれない。自分の中の変化に戸惑いながら、ジュレイドは獣道を戻っていった。

*

大聖堂についた二人は意外な人物が訪れている事に驚いた。

「おお。ちょうど君の話をしていた所だ。何でもブレイズが指揮した部隊の最前列を駆け抜けたらしいな」

騎士団団長はノイアに向けて賞賛の笑みを向ける。周りにいたシスター見習いが一斉に渦中の人物に視線を向ける。そんな信じられない物を見る目を向けないでほしいと思う。

「あの時は必死でしたから……」

ノイアは苦笑いを浮かべるだけで精一杯だった。

「その事なのだが。ノイアよ……そなたは騎士になるのか？」

司祭アーバンの視線が緑色の瞳と重なる。今、一番聞かれたくない質問だ。だが、この質問からは逃げてはいけないと思う。拳を握りゆつくりと口を開く。

「私は……シエルを守るためなら……どちらの力も使います。ただチャンスがあるなら試験を受けたい！」

これがノイアの出した答え。中途半端であるのは分かっている。

だがこれが旅に出て見つけた答え。

「ふっ……では試験を受けるがいい。失敗して……まだ進む意志があるのなら騎士団はいつでも受け入れるぞ」

アルフレッドはノイアの肩を強く掴む。ノイアは強く頷いた。

「ふう。困ったものだな」

アーバンは溜息をつく。試験で不適格となったのならば指導役として残ってほしいと思っているのだが、その選択肢が頭から抜けているような気がしてならない。だがいかにもノイアらしいと思った。

「それでは私はこれで失礼する」

アルフレッドはノイアの肩を離してドアへと向かう。ノイアはその横顔を見つめる。どこか張り詰めた横顔。自然と体が震える。また戦争になるのだろうか。

「……もう分かっていると思うが……また戦争になる。次はおそらく本命となるだろう。開戦する前に試験を行いたい。今は一人でも多くの正式なシスターが必要なのだな」

アーバンはまだ幼さが残る少女を見つめる。

「え……もう？」

シエルは目を見開く。試験はまだ一年先だと聞いていたのだ。それが今、目の前に迫りつつある。

「12歳で試験を受けた者はいらるのですか？」

ノイアも驚きを隠せない。震えながら司祭に問う。

「そんな例はない。だが……シスターの第一位サリヤ・メイル一人では光の壁を維持するのは困難だ。彼女に匹敵する神力を持つ者がいなければ今後の戦いを切り抜ける事は不可能」

アーバンの顔には緊張が感じられる。それだけ緊迫している状態なのだろう。あの王がもう一度攻めてくる。しかも今度は首都を潰すつもりで。

「それなら受ける。いつまでもノイアのお荷物でいたくない！」
シエルが胸の前で拳を握って叫ぶ。

周りのシスター見習いがシエルを驚きの瞳で見つめる。以前の彼女なら怯えてノイアの背に隠れていただろう。そして、「一緒に受けよう」などと言ったかもしれない。だが、今の彼女は司祭を見つめ自らの意志で進もうとしている。

「分かった。では、試験は明日に実施する」

司祭がシエルの瞳を受け止めて指示を出す。大聖堂は一瞬で張り詰めた空気に満たされる。ハーミルの次は「神に愛された者」とまて呼ばれたシエルが受ける。当然と言えば当然なのだが、この国が大きく動こうとしているように思えてならない。

「頑張れ……シエル」

ノイアはシエルの細い肩を優しく掴む。優しく温かい手の平から力を受け取ったシエルはもう迷わない。

「うん！」

シエルは強く頷いた。

*

昼からの鍛錬を終えたノイアはいつもの場所へと足を運ぶ。何度通ったか分からない獣道。立ち止まる事などなかったこの道だが、今日は足が重い。ついには足が止まってしまった。

「——どうしたんだろう」

ノイアは顔を落とす。足が石になったかのように動かない。止まっている場合ではないというのに。ブレイズは今も鍛錬をしている。グリア連合国との戦いで功績を認められて隊長の候補にと押す声が増えたブレイズ。それでも彼は今日も淡々と己の腕を磨いているだろう。

「中途半端な私が止まってどうする！」

ノイアは叫んで強引に足を動かす。体は重く感じるが何とか進んでくれた。二人の鍛錬の場。いつものように素振りをしているのは銀髪の少年。一度視線をノイアに向ける。そのまま視線を戻して素振りを続けると思った。だが、彼は素振りを止めてノイアを見つめた。

「なんて顔をしているんだ」

ブレイズが眉を寄せていぶかしむ。そんな事を言われても自分では分からない。こちらが聞きたいくらいである。

「何かおかしいかな？」

ノイアは務めて明るく笑う。笑えているのかは分からない。今はどこかおかしい。

「……」

溜息をついてからゆっくりと歩を進める。冷たい甲冑に包まれた手がノイアの頬に触れる。月夜に照らされて輝いたのは一滴の涙。

「——そんな！」

ノイアは驚いて瞳を拭う。なぜ涙が出たのか自分でも意味が分からなかった。最近は何故か涙脆い気がする。以前は守るべき存在であるシエルの前でも泣いてしまった。自分はこんなにも弱かっただろうか。

「ごめん。泣いてる暇なんてないのに。皆に……追いつかないと」

ノイアはブレイズの横を通り過ぎて深呼吸。祈りを捧げて障壁を展開させる。今まで泣いていたかと思えば急に鍛錬を始めるノイアだが、この姿が一番彼女らしい。

「そうでないとな」

ブレイズは微笑んで素振りを再開する。やはり張り合う相手がないと鍛錬もはかどらない。特に何かをした訳ではないが、やる気になったのであれば問題は無い。

そんな想いを知ってか知らずかノイアは鍛錬に没頭し始める。先ほどの弱い自分を追い出そうと必死になっているようにも見える。

「なあ……」

ほどなく素振りをしてからブレイズは背に声を掛ける。鍛錬中は話したくはないのだが、ジュレイドの事を話さなければならぬ。

「珍しいね」

ノイアは祈りながらつぶやいた。二人が鍛錬中に話すなんて事は今までなかった。以前は名前すら知らなかったのだから当然ではあるが。

「すぐに終わる。ジュレイドの事だ」

「そういえば姿を見てないね。どうしたの？」

黙々と鍛錬を続けながら会話するのが彼らしいが、話題に上がった人物の事はノイアも気になる。試験を明日に控えたシエルの耳に入れるかどうかを考えなければならぬ。

「ああ。今回の報酬を持って里帰りするらしい」

ブレイズは淡々とつぶやく。

「そっか。また会えるよね」

ノイアは戻ってくる事を疑っていないようだった。それはブレイズも同じである。やはりこの少女とは気が合う。何があっても道を違える事はないと思える。この背中を任せたいと思う唯一の人物。ブレイズの中でもややもやしていた気持ちたちが固まる。

「やはりお前は俺の友であり……同志だな」

ブレイズは表情を引き締めて首肯。

「それは喜んでいいの？」

ノイアはおかしくて笑ってしまった。おそらく異性として見られていない。でも、嬉しかった。今はこの関係が心地良い。こうして背を向き合い、信じあえるこの関係がノイアに力を与える。迷いを払ってくれる。

「ああ。これからもよろしく頼む」

「うん」

二人はそれ以上話さなかった。淡々と鍛錬を続ける二人。ただ真摯に前に進もうとする二人を月夜の光が祝福するように照らした。

*

大柄な男が城の廊下を進む。精悍な顔つきに整った黒髪が印象的な男。険しい表情は30代中頃という実年齢よりも年配に見える。ガイラルの腹心の部下であるバルデスである。

窓の外を見つけるとうつすらと日が登りかけている。時刻は午前5時くらいだろうか。冷たい石で出来た通路を薄っすらと照らす光は、現在のバルデスの心を表しているかのようである。

ようやくガイラルの部下だった騎士が城に集まったのだ。その報告のために早朝から報告のために早足で歩を進めているのである。待つなどという選択は頭にはない。ただ進むのみである。そんな単純な思考しかこの男の頭にはない。

階段を上がり左に曲がった先には赤い絨毯が敷かれた通路が見える。急く気持ちを抑えながら大股で歩き、見えて来たのは3メートルはある巨大な木製のドア。

「……」

無言で目の前にある木製のドアをノックする。

「開いてますよ」

内側から少女の声が聞こえる。バルデスは無言でドアを開く。まず目につくのは王族が使う巨大なベッド。三人が寝ても余裕が

ありそうなベッドに眠っているのはガイラル。その隣では白いシートで体を隠したクレサ。シート以外は何も身に纏っていないため視界に入る白く滑らかな肌が何とも艶かしい。ガイラルと彼女の関係はすでに知っているので何も言うつもりはない。ただ必要な事を述べるのみ。

「ガイラル殿は？」

部屋に一步踏み込んで我らが主を見つめる。

「集まったか？」

ガイラルがゆっくりと半身を起こす。鋭い瞳がバルデスの瞳と重なる。やはりこうでなければいけない。牢に入ってもまだ衰えないこの狂喜を帯びた瞳。この国にはこの男のような強さが必要だとバルデスは考えている。アガレス王のやり方は甘すぎる。彼が健在であるうちはまだいい。だが、次も賢王と呼ばれるだけの逸材が現れる保障はない。いずれは新たな力に屈する時がくると思っている。ならば力でこの大陸全てを統一してしまった方がいい。力で抑えなければ、反発も大きいだろう。ならば反発する気が起きない様に、心が折れるまで叩きのめせばいい。それができるのはこの男だけだと確信している。だから従うのだ。

「はい……全て揃いました。出撃は明日」

バルデスが唯一の主の瞳を見つめてつぶやく。

「見せてあげましょう。グリア連合国の本当の力を」

クレサの言葉に二人の男が頷いた。

*

朝日を感じて重い目蓋を開ける。シエルはゆっくりとベッドから半身を起こす。

「ノイア……作ってくれたんだ」

視線を左に見える丸テーブルに移すと朝食が並んでいた。シュガートーストに、スクランブルエッグにウインナー、そしてサラダ。

いつもの定番メニューだ。こういう時に冒険はしたくないので素直にありがたい。のそりと起き上がり丸テーブルに近づく。

「やっぱりノイアは温かいな」

シュガートーストが置かれたお皿に敷かれている一枚の手紙。そこには「試験、頑張れ」とノイアらしい固い文字で短く書かれていた。短い言葉だけど気持ちは伝わる。今までなら試験の前くらいは一緒にいてほしいと思っただろう。でも、今は違う。ノイアには私の原因で止まってほしくないと思う。無理はしてほしくないけれど、ノイアが満足するだけ進んでほしい。

「だから……シスターになる。もう守られてばかりでは駄目なんだ」
シエルは椅子に腰掛けて朝食のシュガートーストに齧り付く。その小さな体に少しでも力を取り込むために。

*

「やはり主戦場はここか？」

執務室に低い声が響く。グレンは都市マーベスタ領主の机に広げられた地図を指差す。場所は新造の塔。グリア連合国から首都クロイセンへと向かう南下するだけで済む最短ルート。塔を攻略して光の壁を破壊。その勢いのまま首都を攻略する。もっとも理想的な勝ち方だ。

「そうなるでしょう。戦は相手の領地で行い……そして、短期決戦にするのが理想です」

ギルベルトが顎鬚に触れながらつぶやく。決して地図からは視線を外さない。

「俺達はどこにいてもいいのか？」

ジェイスは頼みの綱である軍神を見つめる。

「機を見て……ジェイス殿には首都に向かってもらいます」

地図を見ながらギルベルトはつぶやく。新造の塔ではなく、首都。その意味する所は光の壁が失われるという事だろうか。二人の騎士

に緊張が走る。

「この守りはどうする。ここが攻撃されないという事はまずないぞ?」

今まで黙っていた領主が口を挟む。首都への援軍を出させないために各地が同時に攻撃を受けることは容易に想像できる。このこと安全ではないし、突破されないための最低限の兵力は必要だ。

「ここは私が引き受けます。合図を受け次第……陣を魚鱗に変えて敵陣の強引に突破して下さい」

ギルベルトが二人に真摯な瞳を向ける。二人の騎士は軍神を信じて一つ頷いた。

*

平原を幾多の馬が駆け抜ける。その先頭を走るハーミルの表情は固い。見ないようにしているがどうしても目に入ってしまう物がある。

場所は首都クロイセンを出て北に向かった場所にあるノリアス平原。平原自体は平らで何の障害もない。だが各地には折れた剣、朽ちた甲冑、そして白骨が散らばっているのだ。行きと帰りで二度目通ったが慣れる事はない。この道を平然と走る事が出来る者は戦争というものに慣れすぎた者だろう。

「私の背に乗りますか?」

左を並走する青年が問う。輝くような金髪に青い瞳の細身の好青年。細く小柄な体型ではあるが左手には大楯が握られ、背には大剣を背負っている。ハーミルの新しい護衛であるマイセルである。

「いえ……シスターの第二位である私が馬にも乗れないなどいい笑い種です」

ハーミルは毅然と前を見つめる。

「それは分かりますが……無理をなさらないように」
隣を並走する青年はうつすらと微笑んだ。

「……」

ハーミルは横目でマイセルを見つめる。これは本心なのか、それとも無言で右隣を並走するセクメトと同じように己の昇進を考えているのだろうか。もやもやした思いが膨らむ。近くに來た者を信じる事ができない汚れた心。この心はいつか自分を破壊してしまうと思う。ハーミルはこのもやもやした気持ちを消し去るために意を決して隣の青年に声をかける。

「あなたも……私を利用するのですか？」

ハーミルは青年に鋭い瞳を向ける。言葉に出した瞬間にはつきりと心の汚れを感じた。周りのせいにはできない。これが今の自分だ。「私は昇進には興味はありません」

マイセルはうつすらと微笑む。穢れのない笑みだと思った。これはシエルが浮かべる笑みに似ている。ハーミルにはもう二度と浮かべる事ができない微笑。

「では……なぜ戦う？」

問うたのはセクメト。彼ははつきりと騎士団団長になるためだという事を認めている。ハーミルもそれは了承している。それ以外のために戦う理由。それはハーミルにも気になった。彼の言葉に耳を傾ける。どこかで期待している自分がいた。

「ただ国のために。それ以上でもそれ以下でもありません」

微笑んで答えるマイセル。彼の表情は満ち足りていた。本当に昇進など考えていないのだろうか。

「そうか。つまらん男だな」

セクメトは興味が失せたらしく視線を外す。マイセルの言葉を聞いたもう一人は驚きで目を見開いていた。

「……」

言葉を返す事ができない。自分の周りにいる者は自分を担ぎ上げていただけだと思っていたが違う者もいる。彼はもしかしたらハーミルが心から願う人なのかもしれない。ただ純粹に自分の事を守ってくれる存在。

「確かにつまらない男かもしれません。でも……こういう不器用な生き方しか出来ない者もいるのです」

マイセルは微笑んだまま視線を前方に向ける。もう話す事はないとその横顔が語っていた。

「……悩む必要なんてない」

ハーミルが二人には聞こえないくらいの小声でつぶやく。今は一つの考えが頭を占めている。皆が担ぎ上げるのならそれでいい。だが、昇進させる人間は自分が選ばばいい。彼女が上に上がってほしいと思える人間。それはただ国を想い真摯に歩む者。マイセルのような人間が騎士団団長に相応しいと思えた。この考えを聞けば彼は嫌がるだろうか。だが、いつか理解してくれると思う。そんな日が来ればいいとハーミルは信じたかった。

*

スタンドグラスから漏れた光が幼さを残した少女を照らす。教壇までの真っ直ぐに伸びた道を常に前だけを見て進む。緊張しているのか喉は渴き、手には嫌な汗が浮いている。

「緊張するな、シエル。そなたなら間違いなく合格する」

教壇に立つ司祭アーバンは優しく語り掛ける。強くなったとは言えまだ12歳の少女。念願のシスターになるための試験を受けるとあれば緊張するのだろう。

「はい」

シエルは司祭を見上げて頷く。

「初めまして……あなたがシェライトちゃん？」

司祭の隣に立っている女性が声をかける。180センチを越える長身とスラリとした体型が特徴的なシスター。ウェーブが掛かった茶色の髪を腰まで伸ばし、優しそうな笑みを浮かべている。シスターの第一位、サリヤ・メイルである。シスターの長であり光の壁を展開している首都の要と言っても過言ではない。

試験の際は、大聖堂に現れ、新たにシスターになる者を自らの目で見定める。彼女は合格だと思えば、後は司祭に任せるのが常だ。

「はい。初めまして、サリヤ様」

シエルはぎこちなく礼をする。これで合っているかどうかは分からない。ただノイアは位が高い者に出会った時は強引に頭を下げさせていた。今回もこれで間違いはないだろう。

「ふふ……聞いている話とはだいぶ違うわね」

シスターの第一位は頬に手を当てて微笑む。噂では12歳という実年齢よりもさらに幼いと聞いている。今回の旅で成長したのだろうか。それは緊迫するハールメイツ神国に置いては喜ばしい事だと思う。

「試験は……何をするんですか？」

緊張した面持ちで問う。試験の内容は見習いにも公開されていない。ただこの国を根底から揺るがす可能性があるらしく、試験を受ける者は相応の覚悟を持つようにとだけ言われている。

「簡単よ。私の代わりに光の壁の維持をするだけよ」

サリヤは微笑んで天井を指差す。目の前の少女は目を見開いた。維持に失敗すればこの国は滅ぶ。それをただの見習いに行えというのである。おそらく他のシスターが影でサポートしてくれているのだろうが、国の命運を決める壁を維持しろというのはあまりにも重い。

「——ここで臆する者にシスターを名乗る資格はないわ」

震えるシエルに容赦ない言葉が降り注ぐ。鋭い瞳が少女の青い瞳を貫く。

「……」

シエルは無言で顔を落とす。もしサリヤが倒れる事があれば光の壁の維持をするのは自分かもしれない。国の存亡を背負い続ける。それは生半可な覚悟では成し得ない。国の歴史の中ではただの一瞬に過ぎない時間に臆する者にシスターを名乗る資格はないのだろう。これは神力と共に覚悟を試す試験だ。

「私は……挑む」

短くつぶやいて顔を上げる。ここで逃げたら何のために見習いをしていたのか分からない。そして、弱い自分とお別れするにはいい機会だと思う。

「そう……よかった」

鋭い眼光ではなく、シエルを迎えたのは優しい微笑み。

「お願いします」

一度頭を下げて教壇へと進む。

差し出されたのは温かな手。シエルはその手を取って瞳を閉じる。イメージするのは首都を覆う光の壁。温かな白い光が少女から溢れる。

「……頑張つて。どうか……私を超えて下さい」

サリヤは新たなシスターとなるべき少女を優しく見守った。

*

場所は首都クロイセンを出て北西に向かった先にあるクレイア街道。草が無造作に生えた整備が行き届いていない道を馬が一定のペースで駆け抜ける。疾走する馬とは別に手綱を握る男はどこか覇気がない。

「確か……一日走ると休む所があるんだっただけ」

ジュレイドは他人事のようにつぶやく。首都クロイセンを出てからどうもやる気が起きない。どうしてもあの幼い少女の顔が頭から離れない。最後まで側で守ってあげられないのが心残りなのだろうか。

「傭兵の俺が？ 金さえ貰えれば何でもよかったのにな」

うつすらと微笑む。汚れ仕事で得た資金で薬を買う人生。それに疲れ、いつ死んでもいいと思っていたこの頃。だが、あの少女と出会ってから、生きる目的が出来たような気がする。あの小動物のよくな弱き存在を守り抜く。支え続ける。そのために引き金を引いた

数日間。

「満たされてたなあ……あいつらも嫌いではなかった」

次に頭に浮かんだのは堅物二人。自分とは間逆の生き方をしていた二人。理解はできなかったが、その生き方は輝いて見えた。自分が幾ら手を伸ばしても届かない所にいたから。

(……俺が離れただけか……)

声を出す気力も失われる。手綱を引いて馬を止める。自分はいったい何をやっているのか。次の仕事を探す訳でもなく、依頼されたから守った者が頭から離れない。

気付いた時には馬を走らせていた。向かうのは首都クロイセン。

「本当に何をやってんだろうな」

ジュレイドは自らの行動が馬鹿らしく思えた。だが、湧き上がる感情を止められなかった。自然と微笑んでしまう。

(……俺はまだ生きている。死んでなんかいない……)

心の中から強い気持ち溢れる。だから行く。今度も守るために。

*

頬に汗が伝う。自分の失敗で国が滅びるかもしれない。極度の緊張状態が続き呼吸は荒い。だが、そんな事すら気にしていられない。目の前のシスターはこんな状態をずっと続けてきたというのだろうか。シエルの心の中には敬意と憧れの感情が浮かぶ。力があるのなら目の前の女性のようにになりたい。そう強く願う。

「そんなに固くならないでいいわ。いざとなったら私がフォローするから」

あまりにも緊張で固まっているシエルに優しく声を掛ける。旅を通して成長したといってもやはり12歳。国を背負えというのは無理があるのだろう。だが、シスターになるのであればこなしてもらわなければならない。

シエルは幸い順応性があるのか言葉に反応して落ち着きを取り戻

していく。安心したサリヤは二人のシスターを比べるために思考を走らせる。

昨日、試験を行ったハーミルも同じように緊張していた。だが、どこか安定していた。完璧と言っても差支えがないほどに。それと同時に不安もある。どこか冷たい感じがしたのだ。この国の者に対する不審、疑いを心に隠し、それでも守ろうとする固い心。まるで亀裂が入った鋼のような心だった。冷たく、そして固い。それでいて脆い心。

対して目の前にいる少女から感じるのは国を、人を想う温かさ。首都を守るだけでなく、内にいる者の心すら癒そうとする慈愛に満ちた心。緊張して力を上手く出せないようだが、目の前の少女には明るい未来を想像したくなるだけの希望がある。

「どちらも必要か……」

サリヤはぼつりとつぶやく。まだ幼く安定感がないが、やはりこの子の力は今のハールメイツ神国には必要だと思う。司祭に視線を向けると納得したらしく一度頷く。

「——いいわ。あと一時間耐えられるならあなたをシスターの第三位にします」

重い声がシエルの全身に染み渡る。だが、もう震えない。そして迷わない。今度は自分が皆を守る番。今までのただ甘えていた自分とはお別れをしないとイケない。恐怖はある。だがノイア達は戦場という、もつと荒んだ世界で恐怖と戦っている。塔で見たノイアの涙は恐怖に震えた涙だった。自分があの場合にノイアを立ててしまっている。弱い自分のために辛い事も痛い事も平気な顔をして受け止めようとする。もうそんな事は止めさせたい。自分が首都をノイアを守り抜く。

「どうか……大切な人を……ただ守れますように」

シエルが言葉を紡ぐ。小さな体から溢れたのは強い光。溢れた光は天へと登り光の壁を眩しく照らす。

「……底が知れないわね」

サリヤは目の前の少女から溢れる光に震えた。いったい何がこの小さな少女にここまでの力を与えるのだろうか。シエルの力の根源を時間が来るまで考え続けるサリヤであった。

*

溢れる閃光。

「——これがシエルの力」

ハーミルは背を向いてつぶやく。力強く、それでいて優しい光。

「……戦場に立つ騎士には必要な光ですね」

マイセルは首都の光の壁を優しく見つめる。離れていても心が安らぐ光。この光が輝き続けるのであれば戦い続ける事もできる。

「……」

セクメトだけは無言で前を見つめ続ける。どれだけ力を持っていたとしても、上に立つのはハーミルでなければならない。それをこの戦いで証明する。何があっても。

「戦い抜きましよう。そして……生きて首都へ」

ハーミルは視界に入った塔を見上げる。ここが自らの墓になるかもしれない。そんな弱気な心を追い出してハーミルは馬を走らせた。

*

鍛錬を終えたノイアは緊張した面持ちで大聖堂へと向かう。焦る気持ちを抑えて大聖堂へと向かう坂を上る。結果なんて最初から分かっている。それでも気持ちを抑えられなかった。

「……」

無言で立っているのは青いローブを纏ったシエル。

「……おめでとう」

ノイアはただ微笑む。駆け寄って抱きしめたい気持ちを必死で抑える。

「今度は……私が皆を、ノイアを守る」

はつきりと宣言するシエル。努めて無表情を貫き、平静を装っていても分かってしまう。

(……肩震えてるよ……)

ノイアは心の中でつぶやいて、ゆつくりと坂を上る。涙を堪えるので必死だった。

「どれだけ……恐くても……私も戦う。私に出来る方法で！」

懸命に叫ぶシエル。強くなっても全く変わらなかった。この気持ちは何があっても変わらない。

(やっぱり、私は……シエル。あなたを守りたい)

決して言葉には出さない。シエルはノイアが戦うのを嫌がるだろうから。目の前に立ちゆつくりと柔らかな黒髪を撫でる。

シエルが上目遣いで見つめる。たぶん何を考えているのか分かってしまっただろう。でも、この気持ちだけは曲げられない。何があっても。明日にでも始まる戦争。その中でこの命が失われる事があったとしてもこの少女だけは守れますように。ただそれだけを祈った。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 6（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。感想をいただければ幸いです。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 7

ただあなたを守りたい シスター見習い編

―7―

「明日には敵と接触します」

張り詰めたクレサの声が耳に届く。彼女が見上げているのは20メートルはあるだろう白亜の塔。神力に満たされ白く輝き続ける塔は自分達を拒んでいるように見える。逆にハールメイツ神国の騎士達は救いの光に見えるだろう。あれだけの神聖な光に守られていれば、シスターという存在を担ぎ上げなくなるのも理解はできる。

「いよいよか……」

兵を率いているガイラルは無表情のままつぶやく。国を出てから表情一つ変えないガイラル。

だがずっと見続けてきたクレサには分かる。彼は今、楽しくて仕方がないのだろう。この戦いを経て地位を取り戻す。そして、いつかは王アガレスとの再戦を望んでいる。ハールメイツ神国との戦争など余興の一つでしかないのだろう。

「このフィレイア平原は平坦。伏兵はないと考える」

左隣に位置するバルデスは事務的な口調で報告。仮にハールメイツの軍神とまで呼ばれた男が守っているのであれば、どんな奇策を使ってくるかは分からない。だが、彼は都市マーベスタの守りにについている。まさかここまで策を伝えているとは考えにくい。

「結構だ。ただ正面にいる敵をねじ伏せる。単純で分かりやすい」

ガイラルが手を上げる。今までの横一列の横陣から、この国で使用頻度が高い、中軍が前に出て両翼を下げた「えんげつ」の形をとる偃月の陣へと変更。先頭を進むのは当然ガイラル。力で大陸を統一すると述べる男が騎士の影に隠れているなどいい笑い種となる。そのた

め彼は常に最前線を好む。

「あなたを守り抜きます。何があっても……」

「あなたの霸道と共に……」

二人の忠臣が左右につく。これで準備は整った。後は敵を殲滅するのみ。

「……抑えられんよ……この気持ちは」

渴ききった声が漏れる。刹那、ガイラルは一人で先行する。その後を赤黒い甲冑を身に纏った騎士達が続いた。

*

「いいのかな……?」

手に取っているのは騎士が装備する軽装。戦いとなるのであればこちらの方が動きやすく、そして防御力もある。だが、シスターが軽装をつけて戦争に出るなど過去に例がないらしい。

「やはりこつちか」

軽装を置いて、いつもの修道服を手取る。

「こんな事で悩むのはノイアくらいだね。早くしないと風邪引くよ?」

ベッドに腰掛けているシエルが楽しそうにこちらを見つめる。

現在は就寝着を脱いで、薄い生地の下着だけ。さすがに体が冷えてきた。悩んだ拳句に風邪を引いたなど笑い話にもならない。

「私の目的はシエルを守ること……なら一番適した物を選ぶべき。悩む必要なんてないんだ」

ノイアは修道服をゆっくりとベッドに置く。薄手の服をまず身に纏い、それから軽装に手を伸ばす。

「騎士のノイアかあ……」

シエルが頬に両手を当てて赤らめる。見つめ続ける事数分。軽装を纏ったノイアは惚れ惚れするほど凜々しかった。男性であれば一目惚れをしてしまったかも、とシエルは思う。

「まだシスターなんだけど……」

ノイアは呆れながら少女を見つめる。やはり自分は騎士よりの人間なのだろうか。ならば何故私の中には神力があるのだろうか。その答えをまだノイアは出せていない。

「——今まで聞いた事なかったんだけど、どうしてシスターになりたいの？ 騎士団団長から直々に声が掛かるなんてすごい事だよ」
シエルが拳を握って見つめる。なかなか痛い所を突かれた気分だった。ノイアは一度手を握る。そして、開く。その間に考えは纏まった。

「私には神力がある……その理由を知りたい。そのためにはシスターになるのがいいと思ったの。このまま騎士になっても……人を斬れない騎士なんて何の役にも立たない。何をやっても中途半端。それが私」

ノイアが自嘲の笑みを浮かべる。シスターとしても騎士としても中途半端な存在。神力を捨ててしまえば騎士として結果を残せたかもしれない。だが、それは己の半身を失うような気がしてならない。答えが欲しい。それがノイアの気持ち。それは正式なシスターとなる試験の中にあるような気がする。

シエルは難しそうな顔をして唸っている。

「それともう一つ……規格外の神力で光の壁を作れば、どんな攻撃でも弾き飛ばせるような気がしたの。そしたらシエルが安心して暮らせるでしょう？」

ノイアは柔らかい黒髪を優しく撫でる。シエルは難しい顔から花が咲いたように微笑む。この少女にはこれくらいの理由の方が分かりやすいらしい。

（……私はまだこの子に依存してるのかな……）

ノイアはシエルを撫でながら心の中で思う。それと同時にこの戦いで見つけようと思う。自分のあるべき姿を。

翌朝。

ようやく日が昇ったのを合図に赤黒い甲冑を纏った騎士の姿が見えた。途中で馬を捨てたらしく徒歩で確実に歩を進めてくる。その中に見える騎士五、六人が持つ丸太のような攻城兵器は塔を破壊するためのものだろう。国を支える塔を破壊する禍々しい兵器からは目を離す事はできなかった。

戦場となるのはフィレイア平原。今までこの平原で戦争をした事はない。生命力に満ちた草で覆われた広大な平原を進む赤黒い集団は、この地を汚しているようにしか見えない。

「いいのですか？」

左隣に立つマイセルが言葉を掛ける。

声を掛けられたハーミルはゆっくりと振り向いた。彼女が握っているのは金属棒。いざという時のために自衛するためのものだ。だが、とりあえず持っているだけでどこかきこちない。おそらく振り回した事などないのではないだろうか。

「ここを任されたのです。黙って見ている訳には参りません。障壁を張り援護します」

毅然と言い放つ。ノイアは戦場を騎士と共に駆け抜けたと聞いている。ならば自分も騎士と共に戦うべきだと思う。もうシスターは守られるだけではないけないのだ。共に戦場に立ち、国を守る。それでこそ対等だ。

「……守りは任せる」

セクメトは短くつぶやき自身の兵を率いて前方へと突き進む。

ハールメイツ神国が取った陣形は前方にセクメトが率いる「中隊歩兵陣形」。横三列に並び、列を入れ替える事で持久戦に持ち込む陣形である。また列が分かれているため散開がしやすく、敵が得意とする偃月えんげつの陣の側面を攻撃するにも適している。

では、肝心のハーミルの守りはどうしているか。塔の前方ではマイセルを中心とした重歩兵が「密集陣形」をとっている。大楯を並

べ、その間から槍を突き出し接近した敵を貫く守りの陣である。そして、彼らを守るのはハーミルだけではない。戦場に置かれた投石器の周囲にも大楯を構えた騎士が配置されている。投石器の数は左右に二台ずつの計4台。最大射程は150メートル、放つ事ができる岩の重さは70キロが限界。城や砦を攻撃する攻城兵器と比べれば、威力が抑えられた物ではあるが人に対しては有効である。

詰まる所、今回の戦いは「中隊歩兵陣形」と投石器の連携が勝敗を決めると言っても過言ではない。対するグリア連合国は攻撃に特化した陣形。目的は単純に一点突破である。

緊迫した空気に満たされた平原を赤黒い集団が疾走。一切の迷いなく、こちらに突撃する様は恐怖を感じずにはいられない。

だがセクメトはただ前を見つめる。この程度で負けるようでは騎士団団長になどなれはしない。

「――二列目、弓を用意。一列目は交戦開始！」

セクメトの叫びを聞いて騎士が反射的に動く。空に放たれたのは二列目が放つ矢と、投石器から放たれる岩。勝負の幾重を左右する初撃。セクメトは敵に鋭い視線を向け続ける。だが、彼はすぐに目を見開く事になる。

戦場の上空に閃光が輝く。輝きの正体は幾重にも張られた障壁。

驚くべきはその障壁が矢だけではなく、投石器から放たれた岩までも粉々に破壊したからである。

「ぐっ……これでは！」

セクメトは即座に騎士達に視線を走らせる。

「う……あ……」

隣にいた騎士が数歩後ずさる。要である投石器を防がれたのだ。無理もない。そして、迫るのは臆するという言葉からは無縁の者たち。ハールメイツ神国が陣を変更する間もなく、グリア連合国の騎士が迫る。

（破られる……！）

セクメトが苦渋の表情を浮かべた瞬間。目の前に障壁が展開。

「臆してはなりません！ 我らは負けられないのです！」

戦場に響いたのはハーミルの怒声。刹那、騎士達の表情に光が戻る。グリア連合国の騎士が障壁を突破する前にセクメトは叫ぶ。

「一列目散開！ 包囲せよ！」

刹那、一列目が左右に素早く分散。防御の薄い側面からの挟撃で敵の勢いを削ぐためだ。それと同時に二列目は弓を捨てて鞘から剣を抜き放つ。二列目に位置するセクメトも剣を構えて敵の指揮官を睨みつける。三列目は援護のために素早く腰のボウガンを引き抜いた。

「ほう。持ち直したか」

ガイラルは敵である禿頭の男を見つめ感嘆の声を出す。だが、こうでなければ張り合いがない。

「参ります」

つぶやいて駆け抜けるのはクレサ。自らの身長をはるかに超える2メートルの槍を持ち、敵の指揮官目掛けて突き進む。

刹那、先行したクレサ目掛けて無数のボウガンの矢が戦場を駆け抜ける。だが、先行する少女は身構える事もなく槍を握る。

「――神聖なる神よ。我らに守りの力を」

クレサが言葉を紡ぐ。障壁がボウガンの矢を弾き飛ばす。勢いをそのままにはただ戦場を駆けける。ガイラルがそう願う通りに。

「彼女が原因か。畳み掛ける！」

セクメトは指示を飛ばすと共に自らも地面を蹴る。地を蹴った彼よりも速く二人のハールメイツ神国の騎士が神力を持つ少女に向けて斬りかかる。相手は武器を破壊するだけ。気をつけていれば脅威ではない。彼らの基準は自国の聖騎士ルメリアだった。その油断が二人の命を奪う。

「邪魔です」

少女は短くつぶやくと同時に右側に見える騎士の喉を貫く。その

まま横薙ぎに振るい吹き飛ばす。次の瞬間には少女は障壁を展開。隙を突いたつもりの騎士の剣を障壁で止め、すかさず腰に装着している騎士剣で一閃。舞い散る鮮血が少女の頬を汚す。倒れていくのは銅を切断された騎士。

ハールメイツ神国の騎士達は一瞬足が止まる。神力を持つ者が人を殺める。それはシスターを、神力を国の支えにしている者達からしてみれば理解し難い事だった。国の根底を揺るがされるに等しい蛮行。彼らが足を止めるのは至極当然であり、そして、その一瞬の空隙をグリア連合国は見逃さない。

「後は任せろ」

黒髪の少女の隣を駆け抜けるのはバルデス。クレサは素早く騎士剣を鞘に戻して、槍を構え直す。頬について血を拭う事もなく再度、地面を駆け抜けた。

*

剣響が戦場に響き渡る。騎士達の叫び声はもう耳には入らない。耳にしているのは金属の音と、敵の息遣いのみ。

「……」

「……」

お互いに無言で剣をぶつけ合うのはバルデスとセクメト。周囲の騎士は援護したくても出来なかった。高速でぶつかり合う剣戟に舞い続ける火花。もはや二人だけの剣を止められるのは片方のみに見える。いつまでも続くと思われる終わりの見えない死闘。

だが響く剣響に不快な音が混じる。セクメトの剣に亀裂が走ったのだ。

「悪いが終わらせる」

バルデスが短くつぶやく。刹那、騎士剣が振り上げられる。宙に舞ったのは砕けた騎士剣。

「くっ……」

武器を失ったセクメトはすかさず後方に下がる。追撃を警戒したが、バルデスはその場を動かない。代わりに視界に入ったのは黒髪の少女。セクメトが距離を取るよりも速く手にした槍が駆け抜ける。セクメトの銅を正確に貫き、漆黒の瞳がセクメトを睨み続ける。

「この程度……！」

セクメトは体を貫いた槍を両手で掴む。全ての力を両手に込める。少女が驚き槍を引かせるよりも速く、金属槍をへし折る。セクメトは数歩ふらつくも体勢を整え、地に落ちた剣を手に握る。

「お前達……俺に構うな。敵を……一人でも減らせ！」

血を吐きながら指示を飛ばす。あと少しで挟撃は成功する。敵の兵力を半分に落とす事はできるだろう。唯一の懸念は目の前にいる男と少女。彼らを残しておけば中央を突破されてしまうだろう。霞む視界で剣を交えた男を見るセクメト。彼はすぐさま距離を縮める。視界に入ったのは光を帯びて輝く銀閃。

「いい指揮官だった」

声が耳に届くと同時にセクメトは斬られていた。もう助からないのは頭では分かった。だが、その前にやる事がある。まさか自分が国のために、あの小生意気な娘のために命を捨てる時が来るとは夢にも思っただけだった。

刹那、獣の咆哮が戦場に轟く。咆哮をあげた渦中の人物を皆が見つめる。止め処なく流れる血を気にする事もなく剣を真っ直ぐに構える。

「ちっ……」

バルデスはすかさず横薙ぎに剣を振るう。その一閃を受けてもセクメトは止まらない。獣のように真っ直ぐに突撃する。

「——くたばれ！」

セクメトは叫ぶと同時に高速の突きを繰り出す。甲冑を砕き、バルデスの体を深々と突き刺す。この男だけでも地獄に連れていく。全ての力を腕に込める。これが自分に出来る最後の勤め。

「油断したな、バルデス」

渴いた声が耳に届く。

刹那、セクメトの視界に入ったのは自らの首を狙う一閃。それがセクメトの見た最後のもの。鮮血が舞うと同時に全ての力を失う。バルデスは腹部に刺さった剣を強引に引き抜く。

「この不覚は次の戦場で」

腹部から流れる血を苦々しく見つめ、絶命した敵の指揮官を静かに見つめた。

*

都市マーベスタ北にあるハーマイト平原。その平原を挟むように睨み合っているのは漆黒の鎧を纏ったグリア連合国の騎士と、都市マーベスタを守るハールメイツ神国の騎士達。

都市マーベスタには守るべき塔はなく首都が狙われている今は防衛する価値は総じて低い。だが、ここを突破されるという事はさらなる援軍を首都に送ってしまうということ。ハールメイツ神国はこの場を守り抜き、可能であれば首都へと援軍を送る必要がある。

「まだなのか？」

隣にいる軍神に問うたのはジェイス。

軍神はただ前だけを見て全く動かない。時折、何かを考えるように顎鬚に触れるのみである。

睨み合いを続けてすでに三時間。敵はギルベルトの策に警戒して動かず、ギルベルトもまた陣を動かさない。ハールメイツ神国の陣は横陣。ただ一列に並んでいるだけだ。何か策があるようには見えない。だが、あまりにも単純で何をしてくるのか分からないという、不審な行動を取り続けるハールメイツの軍神にグリア連合の騎士は疲弊しているようにも見えた。それが目的ではないかと勘繰ってしまいそうになるほどである。

「そろそろ降りますかな」

ギルベルトは空を見上げる。見上げた空はこの陰鬱な争いに似合

つた真つ黒な雲。すぐにも雨が降ってもおかしくない空模様。

「いや……もう降っているな」

グレンも空を見つめる。まばらな雨は次第に強さを増していく。数秒と経たずにバケツを引っくり返したような雨が降り続く。もはや敵の姿はおぼろげにしか見えない。

「それでは手はず通りにランプを！」

ギルベルトは前方を睨み指示。敵にまだ動きはない。今のうちに策を展開する必要がある。指示通りに騎士達が一斉にランプを構える。剣を鞘に戻してランプを両手に持つ。この雨でもガラスに守られたランプは煌々と輝く。その輝きは敵にこちらの位置を正確に伝える。

「俺達は側面に移動だ……悟られるな」

ジェイスが半分の兵を率いて北東に向けて移動を開始。彼らはランプを持つことはない。現在の視界の悪さでは移動には気付かれないただろう。それよりも目の前でいきなりランプを燈している奇怪な行動に視線が集中し、こちらには視線すら向けないだろう。

今後は折を見てジェイスは首都へ、グレンは敵の側面へと奇襲する手筈になっている。昨日の作戦会議とは内容が異なるが、軍神を信じるしかないだろう。

グリア連合国の騎士は混乱していた。雨が降る事は誰にでも予想は出来た。ハールメイツ神国がそれを待っているのも薄々気付いてはいた。だが、ランプを燈す意味が分からない。これでは視界が悪くなったというのに、位置を知らせているようなものだ。

「何がしたい……」

グリア連合国の指揮官は独語する。ランプの数と先ほどまでの騎士の数は同じ。おそらく一人に一つランプを燈しているのだろう。動きはなく雨が降る前と何ら変わらない。警戒をするにしても何をしたいのか検討もつかない状況。

率いている騎士に視線を向けると戸惑い、不安、恐怖が感じられ

る。激しい雨も重なり着実に体力を奪われている。ガイラル、そして王アガレスが率いる騎士はどんな恐怖にも屈する事はないが、目の前にいる平凡な騎士にはこの不可解な状況は耐えられないだろう。こんな恐慌状態で敵と戦えるのだろうか。そんな疑問が幾度となく脳を駆け巡る。

そんな指揮官の不安が騎士に伝わったのか、最前列にいる騎士が恐怖を打ち消すために鞘から剣を引き抜く。ただ一人が剣を抜くという全体から見れば些細な行動。だが、この特殊な状況下では皆に瞬時に恐怖が伝わる。全ての騎士が鞘に手を掛ける。響いたのは鞘から剣が抜き放たれる金属音。

「くっ……敵の策かもしれないが……これが限界か」

指揮官自身も鞘から剣を引き抜く。それを合図にしたように騎士が剣を構えて突撃の体勢を整える。

「陣は鋒矢^{ほし}。突撃せよ！」

指揮官の叫び声が響いた瞬間に、騎士は恐怖を一瞬で闘志に変える。咆哮を上げて雨で濡れた平原を駆け抜ける。すぐさま「↑」の形に陣を整え、指揮官は最後尾につく。突破力と攻撃力に特化した鋒矢^{ほし}の陣。側面の攻撃には対応できないという視界が限られた戦場においては不適な陣。これほど極端な陣を選んだのは、恐怖の対象である軍神を絶対的な突破力で叩くためである。それ以外にこの身に纏う恐怖を拭う方法はない。皆の考えはその一つに固まっていた。

「来ましたか。もういいですよ」

ギルベルトが手をかざす。騎士達は両手に持ったランプを地に置く。敵はどうやらランプの数を見てこちらが全く動いていないと誤認したらしい。ここまでは予定通り。後は側面からの奇襲を受けた敵部隊を壊滅させるのみである。

「陣は魚鱗^{ぎょりん}。一気に殲滅します」

ギルベルトの落ち着いた声を受けて騎士達は地面を駆けながら陣を組む。

中心が前方に張り出し両翼が後退した陣形。」「の形に兵を配する突撃の陣。ギルベルトは攻撃の際はこの陣を好む。陣が横に広がらない分だけ包囲されやすいが、魚の鱗一枚一枚のように部隊が密集して進むため情報伝達が早く、少数兵力でも正面突破が容易な陣だからである。現在は部隊を二つに分けているため、このような攻撃に特化した陣でなければ相手と対等に戦う事は不可能である。

「側面からの攻撃を合図に突撃します！」

陣の底辺の中心に位置するギルベルトが叫ぶ。騎士達は軍神の策を信じて、平原を駆け抜けた。

*

指揮官セクメトの死。どんな戦いであれ指揮官の討ち死にはもつとも避けねばならない事の一つである。指揮官を失えば、統率の取れない兵は各個撃破されるのみ。どれだけ優勢でもひっくり返ってしまう。そういう意味ではグリア連合国が行う士気を高めるために指揮官が突撃するという策は愚策と取られる事もある。

だが、今回の戦いにおいてハールメイツ神国は止まらなかった。もはや自分達に逃げ道がない事が分かっているからだ。ならばもう敵を倒すしかない。背水の陣へと追い込まれた彼らはさらに勢いを増しているようにも見えた。

「挟撃を受けたか」

ガイラルは後方を見て苦々しくつぶやく。

敵の一目目は左右に散開し、もろい側面を正確に崩す。それだけならまだ何ともない。現在、危惧すべきは目の前にいる大楯部隊。寄れば楯の隙間から垣間見える槍が猛威を振るい、重ねられた大楯は生半可な攻撃を軽々と吹き飛ばす。その防御力を支えているのは守られているシスターの少女。時折、大楯から覗く彼女は毅然と立ち、騎士に指示を飛ばす。その様はまさに指揮官だった。

「怯まないで下さい。絶対に抜かせてはなりません！」

ハミルの言葉を聞いて重騎士が楯を持つ手に力を込める。攻撃の足が鈍った敵を投石器が狙い陣を崩していく。その間に前方にいる部隊はグリア連合国の騎士を包囲するために戦場を駆け抜ける。短期決戦から消耗戦へと移行したこの戦いにおいて、重騎士が多いハルメイツ神国は有利にも見える。それが唯一彼らを支える拠り所である。

それと共に彼らを支えているのがシスターの第二位。セクメトが討ち死にしてからは部隊を指揮をしているのは彼女だ。才女と言われるだけはある、指示はまさに的確。また、癒しと守りの術式のおかげで長期戦をも可能にしている。これが初戦とは信じられない手際のよさに、すでに彼女からの指示を疑問に思う騎士は一人もいない。

「このまま粘れば勝てないことはありません」

気丈な声が騎士を震わせる。もしかすれば勝てるかもしれない。その思いが彼らの心を支え続ける。

現在、グリア連合国の突撃を大楯部隊が止め、前方に出た部隊が包囲を完了させた。一斉にボウガンを構え各個撃破へと移行する。ハルメイツ神国の包囲殲滅が、圧倒的な攻撃力による正面突破が早い。お互いに撤退という言葉が頭から抜け落ちた戦場はまるで地獄だった。

その中で脅威となるのがグリア連合国の黒髪の少女。神力をその身に宿したクレサは的確に障壁を展開。大楯の隙間から飛び出す鋭い突きが展開された障壁と激突。すかさず勢いが死んだ槍を左手に握る騎士剣で切断する。

ハルメイツ神国が次の攻撃に移るよりも速く、クレサは全ての力を左手に込める。その小さな体では予想もできない剛剣が大楯を持つ騎士を数歩後退させる。

「よくやった……行け」

渴いた声と共に踏み込んだのはガイラル。数歩後退した重騎士に追い討ちの一閃を浴びせた瞬間に即座に指示を飛ばす。

指示を受けたグリア連合国の騎士がその間隙を正確に貫く。先ほどからこの流れるような連撃で徐々に重騎士の層が薄くなっている。さすがのハーミルも全てをカバーするのは限界であり、陣を組み直すとしてもいつまで持つのか分からない。

重騎士をまとめるマイセルは守るべきシスターの前に立ちその様子を見ていた。この場に来るのも時間の問題。大楯部隊は限界をすでに超えている。頼みの綱であるハーミルも障壁を張り続けた結果、見るからに疲弊している。気丈に振舞っているが限界である事は誰が見てもすぐに分かる。

「何とかお守りしなければ」

マイセルは前方を睨む。

新たな間隙をから飛び込んだきたのは黒髪の少女。神力を持ちながら迷いなく人を殺める少女。幼さを感じさせる可愛らしい表情とは、あまりにもかけ離れているように思えてならない。そして、この小さな体のどこにそんな力があるのか突破した瞬間に、大の男共を蹴散らして進んでくる。狙いはマイセルの後ろにいるハーミルだろう。

「来ましたね……」

マイセルは大楯と剣を構える。見ているのは黒髪の少女ではない。騎士達によって作られた道を歩む敵の指揮官。この戦いを楽しんでいるかのような狂喜の瞳を向けてくる男。ハールメイツ神国の騎士はこの男が不気味でしかない。

「——この命に替えても」

マイセルはつぶやくと同時に地面を蹴る。一度瞬きをする間に高速の突きがマイセルの銅を狙う。刹那、大剣が走る。槍を吹き飛ばして目の前にいる不気味な男へと大楯を構えて突撃する。

「邪魔だ」

短い声と共に振り下ろされるのは剛剣。常人ならば軽く吹き飛ばす一撃を、マイセルは難なく受け止める。火花が散るのはただの一瞬。圧倒的な膂力で剣を押し返す。

「——はぁ！」

短い気合の叫び。押し返された事に驚きを隠せない男の銅に向けて、圧倒的な膂力と共に全てを破壊する大剣が迫る。

「惜しいなあ」

当たれば即死の一撃。だが、目の前の男は不適な笑みを浮かべるだけだった。自らを守ろうともせず、剣を振り上げる。その瞬間にマイセルは自らの失敗を悟る。

大剣が輝く壁に触れて弾き飛ばされる。バランスを崩したマイセルに避ける猶予はない。だが、頭部を狙う一閃をすかさず左に動いて致命傷を避ける。

「ほう」

心底戦いを楽しむ声が耳に届いた瞬間に右肩に火傷をしたような熱さが伝わる。重騎士用の厚い甲冑でなければ右腕を切り落とされていただろう。衝撃に数歩下がった所で次は背中に燃えるような痛みが走る。おそらくあの少女に貫かれたのだろう。自らを貫いた鋭利な槍を、大楯を離れた左手で掴み固定するマイセル。それと同時に鋭い眼光が目の前の男を睨む。

刹那、振り下ろされたのは止めの一閃。マイセルはその一閃から視線を外さない。

「投石部隊……岩を飛ばせ！ 目標は私だ！」

マイセルは力の限り叫ぶ。一閃を体で受け止めた瞬間。マイセルの手が討つべき相手の腕をしっかりと捕らえる。

しばし睨み合う二人。そんな彼らを狙うのは投石器が放つ岩。直撃すれば即死。それは分かっているがマイセルは離さなかった。自らの命で国が救われるのなら本望だった。これで終わりと思い瞳を閉じかけた時に少女の声が響いた。

「させません！」

悲鳴にも似た声が背後から響く。声を上げた少女はすかさず突き刺している槍を離し、腰にある剣を引き抜く。甲高い金属の音を耳にした瞬間に、マイセルの右腕に痛みが走る。

「く……ここまできて」

マイセルは苦渋の表情を浮かべる。そんな彼を嘲笑うように見たのは後方へと飛ぶガイラル。彼を仕留める事すら自分には出来なかったらしい。この右腕があと数秒でも掴んでいれば。そんな後悔すら許されない。もう自らの一生は尽きてしまうのだから。

「マイセル……」

ハーミルは力の限りに叫ぶ。彼女の神力が障壁を展開。

マイセルが頭上を見上げた瞬間に岩が障壁によって砕かれる。降り注ぐのは障壁が破壊できなかった岩の塊。

死を逃れたマイセルは即座に距離を取る。ハーミルの元まで戻り、落ちていた剣を拾う。痛む右手から左手に持ち替えて眼前を睨む。

眼前に迫るのは五、六人のグリア連合国の騎士が運ぶ丸太のような攻城兵器。包囲をしている部隊も懸命に数を減らしているがとても凌ぎきれない。もう負けは見えている。

「最後まで諦めてはなりません！」

ハーミルが声を張り上げる。彼女だけはまだ諦めていない。神力が切れたのなら自らの体を攻城兵器にぶつけてでも止める気だろう。そんな事で彼女の命を散らせる事は許されない。

ならばマイセルが取るべき行動は一つ。皆も同じ考えなのか視線がマイセルに集まる。彼は一つ頷いて剣を手放した。

「申し訳ありません……ハーミル様」

マイセルはつぶやいた瞬間にハーミルを左腕で抱き上げると同時に戦場を駆ける。向かうのは首都クロイセン。彼女だけはこの場で死なす訳にはいかないのだ。どんな罵りの言葉を受けようと、どれだけ蔑まれたとしても止まる訳にはいかない。

「何をしていますか！ 私が退いては戦って散った者は！」

ハーミルはマイセルの肩を掴む。だが彼は離さない。何としても

首都へと送り届ける。そんな彼の考えを理解したハールメイツ神国の重騎士は彼らを追うグリア連合の騎士に総攻撃を開始する。

「恐ろしいな」

ガイラルは短くつぶやく。

負けは見えているのにまだ戦おうとするハールメイツ神国。誰一人として逃げ出す者はおらず、ただ国を支えるシスターのために命を捨てる騎士達。

彼らの瞳にはまだ勝利を求める輝きがあった。それが理解できない。今でも攻城兵器が塔を破壊しようとしている。残るは討って出て来たハールメイツ神国の部隊を叩いて終わり。だが、彼らは仲間の勝利を信じて疑わない。

「――何だというのだ！」

ガイラルは叫んでいた。勝利はした。だが、この胸を駆け巡る不安を拭う事ができない。そんな彼の耳に馬が平原を駆けける音が響く。ゆっくりと振り向くと漆黒の甲冑に身を包んだ王アガレスの姿が見えた。彼に続くのはグリア連合国の主力部隊。

「時間を掛けすぎたか」

苦々しくガイラルがつぶやく。こんな塔などすぐに攻略して、そのまま首都へとなだれ込むつもりだった。だが、追いつかれたのであれば、共に首都を目指すしかないだろう。胸を駆け巡る不安を捨ててガイラルは光を失う塔を見つめた。

*

耳に入るのは雨音のみ。降り止む事がない雨を全身で浴びながらグレンは前方を睨む。目の前に見える兵は自部隊の兵のざっと四倍はあるだろう。

途中でジェイスの部隊と分かれたため数では心もとないが、生き残るためには側面からの奇襲を成功させるしかない。後はギルベルトが正面から陣を崩し、その間に指揮官を討つ事がグレンの役目で

ある。

敵はすでにこちらを発見しているのか警戒して速度を緩める。だが、彼らの陣を見て奇襲が成功する事を確信する。陣の変更を許さずにただ突撃するという攻め方は、まるでジェイスのような戦い方だと思ふ。常に冷静に指示を出すグレンには似合わない戦法だった。だが、この方法しかないのであれば引くつもりはない。表情を引き締め、手に持つランスをしっかりと握り締める。

グリア連合国の騎士は鋒矢ほしの陣を崩さずに平原を駆け抜ける。だが、突如その歩みが緩慢になる。まるで何かの障害物に阻まれたように足が遅い。突撃の陣において、それはもつとも避けねばならない事である。

陣の後方を走るグリア連合国の指揮官は怪訝な顔で眉根を寄せる。だが、すぐに彼にも原因が判明する。

視界に飛び込んで来たのは騎馬隊。数は対した事はないが、どこから現れたのか想像もできない神出鬼没の部隊を目にすれば、足が鈍るのは仕方がない事だろう。

「どこに潜んでいたというのだ……援軍か？」

指揮官は突如現れた敵に困惑を隠せない。

側面から陣を突かれる。最悪の思考が走った時には、先頭を進む隊はすでに前方にいるハールメイツ神国の歩兵隊と衝突する寸前。今、陣を変えればその間に殲滅されてしまう。そして、指揮官が後方に位置するこの陣で、最前線を走る兵に指示を飛ばすのはすでに不可能である。

その迷いを正確に感じ取り、グレンは口を開く。

「側面を突けば勝てる。続け！」

雨の轟音に負けずに叫ぶ。騎士は先頭を進むグレンに負けない咆哮を上げる。ただ目指すのは後方の指揮官のみ。

ハールメイツ神国の騎士はすかさず突撃用のランスを構える。刹

那、目にも止まらぬ勢いで駆け抜ける騎兵。突撃を受けたグリア連合国の騎士は突風に吹かれた紙のように次々と宙を舞う。何とか踏み留まる騎士は後続のランスが正確に貫く。

漆黒の甲冑を纏った一団が後方に注意が向いた瞬間。怒濤の勢いで押し寄せてくるのはギルベルトの歩兵隊。二倍の兵力をもろともせずに足が鈍った騎士を的確に潰していく。この突破力であればギルベルトの部隊とも容易に合流できるような気がする。

だが、グレンは自らの手で決める事を選んだ。目の前で混乱した騎士を馬の突撃で弾き飛ばし、騎士の中で一人豪華な鎧を纏う人物を見つける。

その人物が引きつった顔を浮かべた瞬間。グレンはランスを構えて右腕に力を込める。放たれたのは目にも止まらない鋭い突き。引きつった表情を変える間もなく頭部を正確に貫いた。

上がったのはグレンの咆哮。雨音に勝る咆哮が戦場を満たす。

グリア連合国の騎士の足並みがさらに落ちる。それどころか間を置かずに完全に停止する。これは勝利の咆哮だった。グリア連合国の騎士は後ろを見ることもなく確信した。指揮官が討たれたのだとならば前を走る自分達はどうすればいいのだろうか。前を進んだとしても勝ち目はない。後ろにも下がれない。そんな彼らに向けられたのは一つの声。

「すぐに武器を捨て、投降しなさい！」

聞こえたのはハールメイツの軍神の声だった。

騎士達はしばらく逡巡した。ここで朽ちるか、それとも投降するか。

答えはすぐに出た。地に落ちたのは白銀の剣。ここで全滅するよりも、都市マーベスタに留まる方が正しい。王アガレスが勝てばこの場から逃れられる。そして、グリア連合国の騎士を捕虜にするなら、彼らはこの場に兵を置くしかない。新たな援軍を首都クロイセンに送るのを防ぐ、そういう意味ではこの行動が正しいのだと思える。

おそらく軍神はそれが分かっている。無駄に命を奪おうとしない、その人柄には惹かれるものがある。グリア連合国に所属する多くの騎士は、なぜ敵としてこの場に立つ事になったのか残念に思う者も少なくはなかった。

*

首都を覆う光の壁が薄れたと同時に、ハールメイツ神国の騎士は首都の中央に集まる。大聖堂のドアの前に立つ騎士団団長は拳を上げてからゆつくりと口を開く。

「――塔が崩れた今……もはや我らの道はただ一つ」

アルフレッドの言葉を皆は口を閉じて待つ。

「光の壁より外に出て……首都を防衛する」
予想通りの声が耳に届く。

ここに籠もっていても、投石器などの攻城兵器に攻撃されれば終わり。この国を守るには討って出て脅威を排除するしかないのだ。そして、自分達が最後の戦力。援軍を期待するのは絶望的だ。自分達の力に全てが掛かっている。恐怖も感じるが、それと共に最後に戦える事を誇りに思う騎士は多い。彼らの表情はどこか穏やかだった。

騎士団団長の言葉を聞いていた銀髪の青年はふと隣に立っている人物が気になった。新緑の瞳はただ前で演説をする騎士団団長に注がれていた。そんな彼女の気持ちを確認しておきたい。

「いいのか？」

ブレイズは隣に立つノイアに問う。軽装まで身に纏い、騎士に混じる彼女はどこか無理をしているようにも見える。

「シエルを守るには……もうこの方法しかないから」

ノイアは薄く微笑む。ただ守りたい少女のために自ら剣を取る事を選んだ彼女。そんな彼女はやはりブレイズがよく知るノイアだった。

た。

「お前らしいな。ならば……守ろう。一緒に」

ブレイズは腕を掲げる。温かい微笑を向けて。

「当然」

ノイアは微笑んで彼の腕に自らの腕を重ねる。軽い金属の音が響く。これが二人を結ぶ絆の音。二人で歩めば絶対に止まらない。守るべき人を守れると強く信じる事ができる。ブレイズはどこまでも友と共に戦いたいと思う。この命が尽きるまで。

*

大聖堂に集まっているのは現職のシスター。

教壇に立つのはシスターの第一位であるサリヤ。その彼女を中心として、円を描くようにして集まったシスターは光の壁の維持に全ての神力を集めている。それだけの力を集めてようやく失った塔一つの神力を補う事が出来ている、というのが現状である。彼女達の神力が尽きれば首都を守る壁は失われる。それだけは外で戦う騎士達のために何としても避けなければならない。

「……っ……」

現職のシスターに紛れて祈るシエルは両肩の震えを何とか止める。こんな事で震えてはいけない。ノイアは戦場に出る。自分も自分に出来る事をしなければいけない。もう守られているだけではないのだ。それでも何か心の支えが欲しい。そう思わずにはいられなかった。

そんな時に髪を優しく撫でる大きな手を感じる。神力を断たずにゆっくりと視線を向ける。そこに立っていたのは黒いコートを羽織った男性。いつもの陽気な笑顔を浮かべてシエルの黒髪をただ優しく撫でている。今まであまりにも祈りに集中していたために気付かなかった。彼女の心を支えるもう一人の人物がそこにいた。

シエルはゆっくりと茶色の瞳に視線を合わせる。彼は一度微笑む。

「行ってくる。だから……お前も頑張れ」

短くつぶやいてジュレイドは背を向ける。

失われる手の温もりが寂しくて仕方がない。でも、心の中には確かな力を感じる。これなら戦いが終わるまで頑張れる。シエルは再度祈りに集中する。どうか皆が無事でいますように。そして、また笑い合えますように。彼女の祈りはシスターの第一位を通じて光の壁を輝かせた。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 7（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。短くてもいいので感じた事感想にて伝えていただければ幸いです。

ただあなたを守りたい シスター見習い編 8

ただあなたを守りたい シスター見習い編

―最終回―

雲から漏れる朝日が朽ちた甲冑を照らす。場所はノリアス平原。ここではハールメイツ神国が統一するための戦争、そして以前グリア連合国と戦った時の名残が消えていない。

(……また増えるんだね)

ノイアは地に刺さっている折れた剣を悲しげに見つめる。反射した剣に移るのは悲しげな表情を浮かべる自分。

一度、緑色の瞳を閉じる。

そんな時に優しく肩を掴まれた。誰の手なのかはすぐに分かる。

「そろそろだ」

ぶつきらばうに声を掛けたのはブレイズである。

「そうだね。どうか……守れますように」

腰についた剣を抜く。それと同時に左手には鞘を握る。頭に浮かんだのは、花が咲いたような笑顔が似合う黒髪の少女。その少女を守るなら剣を取る、戦いへの恐怖はもうだいぶ薄れてきたような気がする。

後は合図を待つだけ。数秒が、数十分に思えた。だが、その時は来た。

「前進！」

皆を震わせたのは騎士団団長の声。

刹那、弾かれたようにノイアは地面を蹴る。

前方を見ると赤黒い甲冑を纏った騎士と、漆黒の甲冑を纏った騎士の集団。

真っ直ぐに直進してくるのは赤黒い甲冑を纏った部隊。得意の偃えんげ

月の陣ではなく、中心が前方に張り出し両翼が後退した正三角形の形に兵を配する突撃の陣。魚の鱗一枚一枚のように部隊が密集して進む魚鱗の陣である。そして、後方には両翼が前方に張り出したV字型の形を取る鶴翼の陣。この陣を率いるのはグリア連合国の王、アガレス。そして、V字型の側面にはそれぞれ左右に一台ずつ計二台の投石器が騎士達によって組み立てられている。塔の防衛戦の際にハールメイツ神国が使用した投石器よりも一回り大きいだろうか。最大射程は300メートル、岩の最大重量は140キロが限界の要塞攻略に使う投石器である。

ハールメイツ神国は突破を防ぎつつ、アガレスが防衛する投石器を破壊しなければならない。最悪のケースは投石器を破壊できずに光の壁を破壊され、そして陣を突破される事だ。

人を斬る事も、傷つける事もできないノイア。そんな彼女に与えられた任務は投石器の破壊。人ではなく物であれば容赦なく破壊できる。そして、障壁が展開できるため突撃には欠かせない人物でもある。

ハールメイツ神国の先陣は突破力を重視した矢印型の鋒矢^{ほうし}の陣。後方にはアルフレッドが率いる方円の陣がある。

先頭を進むノイアは、グリア連合国の先頭を走る黒髪の少女に視線を向ける。

刹那、黒い瞳と緑色の瞳が重なる。次の瞬間には両者はそれぞれの武器を構えて戦場を駆け抜ける。

舞ったのは火花。目にも止まらない高速の突きを左腕に握る鞘で受け流したノイアは、すかさず右手に握る騎士剣を下から振り上げる。狙いはもちろん少女が握る金属槍だ。

だが、耳に入ったのは剣と槍がぶつかる金属音ではなかった。代わりに響いたのは渴いた音。視界に広がる閃光を見た瞬間に、障壁で防がれたと断定したノイアは素早く後方に飛ぶ。

追いかけるように放たれたのは高速の突き。避けることなど不可能な鋭い突き。ノイアは冷静に槍を見つめて障壁を展開させる。

眩しい閃光が戦場を照らした瞬間に、二人は理解した。同じ力を持つ者なのだという事を。その事実が二人の足を止めたのは一秒もなかっただろうか。再び地面を駆け抜けたノイアは少女の懐へと飛び込む。この距離なら槍は使用できない。

だが、黒髪の少女は冷静だった。懐に入られた瞬間に、すかさず左手で剣を引き抜く。両国の最前線に響いたのは剣響。そして、神力の輝きが満たす。

火花と閃光が舞い続けるだけで両者の体が赤く染まる事はない。全くの互角だった。このバランスを崩すのは両者にとって信頼に値する者達である。

「ノイア……どけ！」

ジュレイドの声を聞いた瞬間に右に跳躍。轟音と共に撃ち出された弾丸が黒髪の少女目掛けて飛ぶ。その弾丸の全てを切り裂いたのは二つの銀閃。黒髪の少女を守るように立ったのは狂喜の瞳を向ける男と、精悍な顔つきの男。

「骨がある奴がいる……なあ！」

二人のうちの一人が狂喜の瞳はそのままに獲物を求めて走る。

「そりゃ、どうも」

目の前に迫る男に向けて両手の銃を乱射するジュレイド。その全てを高速の銀閃が弾き飛ばしていく。一気に距離を詰めた男は剣を頭上まで掲げ、全ての力を込めて振り下ろす。

一度、火花が散る。ジュレイドは左手に持つ大口径の銃で剣を止め、右手の銃を男の頭部に向ける。

「……」

無表情のジュレイドが引き金を引き絞る。

弾丸は目の前の狂喜の笑みを潰す事はできなかった。弾丸を右に動いて避けた男は、不気味な笑みをそのままに左手で腰についた剣を引き抜き一閃。

それを予測していたかのようにジュレイドは半歩下がり避ける。強敵を見つけた喜びに満ちた瞳と、冷え切った瞳が重なる。

お互いは一息をつく暇もなく地面を蹴った。

＊

圧倒的な剛剣がノイアの剣を押ししていく。精悍な顔つきの男が剣と共にノイアを切り裂こうとしている。明らかに力で劣るノイアは数秒と持たずに吹き飛ばされる。バランスを崩したノイアに赤黒い鎧を纏った騎士が左右から迫る。

バランスを崩した今は剣を受ける事もできないだろう。だが、不安には思わなかった。すかさず援護に回ったブレイズが一閃の元に左右から迫る騎士を切り倒す。鋭い瞳を前方に向けるのも一瞬即座に地面を蹴る。

「ノイアは……ただ前に！」

ブレイズは叫ぶと同時に目の前の男に剣を振り下ろす。

ノイアは頷くと同時に地面を駆ける。常識では考えられない数の剣響を背にノイアは戦場を駆け続ける。その進路を塞ぐのはまたしても黒髪の少女。

「——どいて」

ノイアは剣を構えて短くつぶやく。少女が槍をゆつくりと構えるのを視界に納めると同時に、いつの間にか追いつき隣を並走するルメリアに視線で合図。

「お前が……率いる」

短くつぶやくと同時に少女との戦闘状態に突入するルメリア。

ノイアは一つ深呼吸をする。自らの後ろに続くのは鋒矢ほつしの陣を崩さずに続く騎士達。

「——続いて！」

力の限りに叫ぶ。敵の指揮官クラスはブレイズ達が止めてくれている。今なら陣を突破できる絶好の機会。ただの見習いの言う事を聞いてくれるかは分からない。それでもノイアは叫び地面を駆け抜ける。

背後から聞こえたのは騎士の雄叫び。油断すれば先行してしまい
そんな勢いで駆ける白銀色の甲冑を纏う騎士達。ノイアは溢れる想
いを胸に戦場を貫く一本の矢の如く、目の前の魚鱗の陣を引き裂い
た。

*

神力の輝きが大聖堂内部を照らし続ける。塔が崩壊してから交代
で祈り続けているシスターの顔色は蒼白。身を引き裂くような痛み
に耐えて、それでもシスターは祈り続ける。

だが、すでに限界に達した者も多く、先ほどから倒れるシスター
が続出している。だが、外で戦う騎士へと希望を伝えるために、こ
の国を絶対たる光の壁で守るためには祈りを止める訳にはいかない
たった一人になろうとも祈りを続ける。これがシスターの戦いであ
る。

皆が限界に到達している中で表情を変えずに祈っているのはサリ
ヤとシエル。シスターの第一位と第三位の名は伊達ではなく、交代
をほとんどせずに祈り続けている。

特に驚くのはシエルの力。彼女一人で現職のシスター3人分ほど
の力がある。現在、光の壁を維持できているのは彼女がいたからと
言っても過言ではない。

(……どうか……この光がノイアに届きますように)

シエルは祈る。自らの神力が大切な人を守るようにと。また笑顔
で笑い合えるようにと。祈り続ける少女の体から眩い光が溢れる。
その光は止まる事なく溢れ続けた。

*

平原を駆け抜けるのはジェイスが率いる騎馬隊。もはやハールメ
イツ神国とグリア連合国は交戦状態に入っているだろう。

「何としても間に合わせろ！ 後方か側面から攻撃できれば、この数でも役立つ！」

馬をひたすらに走らせながら騎士達に向けて叫ぶ。視界に入るのは着実と組み立てられている攻城兵器。何としてもあれを破壊しなければいけない。自らの役目を定めた騎士達は覚悟を決めて指揮する男の背中を見つめる。

ジェイスは無言で前だけを見る。今はこれ以上口に出す事はない。後は突撃するだけ。それがいつものジェイスのやり方だ。止める役、またはミスを支えてくれたグレンがいないのは心許ないが悩むのは自分らしくないと思う。

ジェイスは無言で続く騎士達と一緒に覚悟を決めた。

*

地面に生える草を切り裂いて進むのは無数のボウガンの矢。狙いはハールメイツ神国の騎士達の足を潰す事である。鶴翼の陣の左翼から放たれる矢を一つの閃光が弾き飛ばす。

何を受けても揺らがない輝きがハールメイツ神国の騎士達を守り続ける。ノイアを先頭にして敵の鶴翼の陣を迂回するように、北東方向の投石器を目掛けてひたすらに駆け抜ける。

（もう少し。もう少しだから）

苦渋の表情で投石器へと駆ける。自分だけではなくて後を続く騎士達を障壁で守りながらの突撃。身を引き裂くような痛みに耐えながらノイアは重い足を動かす。自分を信じて後を追う騎士達のために。そして、シスターである自分が先頭を走る事で、シスターを光の壁を信じてもらえるように。これが自らが戦場に立つ意味だと思う。そして、二つの力を持つ理由ではないかと思う。

投石器までは残り100メートル。希望が見え始めた所で一つの漆黒の影が左側に移る。グリア連合の鶴翼の陣の左翼が、こちらの側面を突くために移動を開始したのだろう。それだけこの戦いにお

いて投石器の存在は重要である事の証明に思えた。

側面を突かれる、そんな事はここに来る前に分かっている事だ。だが、それでもやらなければ勝利はない。

「追いつかれる前に」

ノイアは残った神力を全て解放。漆黒の鎧を纏った騎士達の進路を障壁が綺麗に塞ぐ。

「破壊する！」

叫ぶと同時に地面を駆け抜ける。騎士達は迷わず一斉に続く。障壁が持たない事もすでに分かっている。だが、陣の先頭を走る少女をただ信じたかったのだろう。それと同時に後方を走る騎士は覚悟を決める。このまま突破できないのであれば、突破の役に立つのみである。

刹那、矢印型の陣の後尾を走る騎士が左へと進路を変更する。障壁が消えるのなら自らの身が障壁の代わりになればいい。それが騎士とシスターの関係。それがハールメイツ神国のあるべき形。それを証明するために生きた楯がノイア達の進路を確保する。

（こんなの……ないよ）

内心でつぶやいて潤む視界を強引に拭って投石器を睨む。

「陣は魚鱗……体をぶつけてでも破壊する！」

ノイアの叫びを聞いて騎士は一斉に楯を構える。残りの距離は10メートル。組み立てを続けていた騎士はすでに作業を止めて迎撃の態勢を取っているようだ。

だが、もう遅い。そんな語りのない陣では突撃の陣は止められない。銀色の甲冑を纏った騎士が怒涛の如く投石器になだれ込んだ。

*

立て続けに銃声が響く。両手に持つ銃の一つは目の前にいる狂喜の瞳を向ける男へ、そして、もう一つは隙があればジュレイドに襲い掛かるうとする騎士へと向ける。

騎士の叫び声を聞いてジュレイドの冷静な瞳が戦場を走る。左側から斬りかかってきた騎士の首元に銃を押し付けて迷わず引き金を引く。次の一瞬、すかさず半歩下がったジュレイドの前には剣を振り上げる男がいた。先ほどから狂喜の瞳を向けるこの男をジュレイドはよく知っている。グリア連合国の王アガレスの兄である。グリア連合国出身の者で知らない者はまずいないだろう。

「こんな人間がいるとはなあ！」

ガイラルが振り下ろした剣をジュレイドは半歩下がって避ける。

刹那、両手に握った銃から弾丸が射出させる。だが、高速の銀閃が次々と弾丸を落としていく。その様を見たジュレイドは一度舌打ちをして戦法を変更する。

振り下ろされる剣を右手の銃で止め、すかさず身長に見合った長い足で腹部を狙う。足に鈍い痛みが走ると同時に吹き飛ぶガイラルを見つめる。

無言で追撃の銃弾を浴びせるが、ガイラルは両手の剣で防ぎきる。銃弾が止んだ瞬間には臆する事もなく懐に入るべく突き進む。

常人よりも身体能力が高い騎士に対しては銃という武器は万能ではない。ガイラルほどの騎士ならば銃弾くらいは平気で切り裂けるほどの身体能力があるからだ。それでいて一瞬が勝負を決める高速の戦闘において弾を込める時間というのは隙を与える絶好の機会ではない。有用性が疑問視される割りには高価で量産に向かない兵器。それがこの大陸における銃の評価である。

ジュレイドは迫る強敵に一つ舌打ちをして残りの銃弾を思い浮かべる。右が一発、左が二発だろう。たったの三発でこの男を倒すのは骨が折れるな、と内心で苦笑しながら銃を構える。

そんな時に視界に入ったのはブレイズ。精悍な顔つきの男と剣を交えているが、若干、ブレイズが押されているだろうか。ジュレイドは残りの銃弾を気にしながらもう一度舌打ちをする。仲間を気にするなんて自分の変化に戸惑いいつも頭の中はいかに援護をするかで一杯だった。

「仲間の心配か？」

低い声と共に視界に映ったのは銀閃。

「それくらいの余裕はあるさ」

ジュレイドはニヤリと笑い半歩下がる。銀閃が空を切ったのを確認して、援護の銃弾を放つ。ブレイズがバランスを崩した瞬間に届く完璧な援護射撃。精悍な顔つきの男の銅を正確に貫いて動きを止める。刹那、ブレイズが動いた。

「ぬおおー！ー！」

雄叫びがジュレイドの耳に届く。ブレイズの動きを注視して援護の射撃を二発。精悍な男の両腕を正確に撃ち抜く。後はブレイズに任せておけば問題はないだろう。目にも止まらない銀閃が男を切り裂いたのを確認したジュレイドはすぐに視線を目の前の男に。

ガイラルは弾かれたように一気に距離を詰めてくる。ジュレイドはこれが分かかっていて援護した。あの寡黙な少年が命を落とすよりは自分がピンチになった方がいい。ただそれだけだ。そして、自分ならこの状況を切り抜けられる。

「団長！ すまないが後ろに兵が行く！」

ジュレイドは声を張り上げる。今は目の前にいるガイラルだけで手一杯。とてもではないが周囲にいる騎士の面倒までは見る事が出来ない。

（突破されんなよ）

ジュレイドは後方にいる騎士団団長をただ信じた。

*

真紅の髪が戦場で揺れる。宙に舞ったのは白銀の刃。グリア連合国の騎士剣を尽く破壊しているのはハールメイツの聖騎士である。ルメリアは武器を失い引く者、何も出来ずに倒される者の双方を横目で見つめる。それから自らが戦うべき相手に視線を向ける。そこにいるのは黒髪の少女だった。

何とか槍をへし折る事には成功したが、まだ騎士剣が残っている。武器を失おうとも引くとは思えない少女。最悪は斬るしかないだろう。騎士となつてから人を斬った事はないが、国の危機となれば己の道を曲げる事も必要となるだろう。

ルメリアの殺気に満ちた視線を受けた少女は怯まなかった。左手に騎士剣を握り地面を駆け抜ける。ルメリアも一つ息を吐いて地面を駆ける。

初撃がぶつかり火花を散らす。お互いに睨み合うのも一瞬、即座にお互いが半歩引く。

「……」

少女が無言で地を蹴る。ルメリアは障壁を展開して少女の横薙ぎの一閃を止める。溢れる閃光を睨んで少女の動向を窺う。

「う……」

少女が呻いてバランスを崩した所でルメリアは動く。障壁で防がれるという事をすでに分かっていたが攻撃の手は休めない。

ルメリアの剣と少女の障壁がぶつかる。閃光が視界を埋める。それは呆気ないほどに一瞬だった。全てを弾く障壁はガラスが割れるように亀裂が入り形を失う。これはその小さな手を血で染めてきた代償だった。

少女が目を見開いた瞬間に銀閃が煌く。ルメリアの剣が正確に少女の剣をへし折る。次の行動は簡単に予測できた。少女は迷わず腰についているナイフを引き抜いて突き出す。

それと同時に障壁を展開。ナイフと障壁がぶつかり少女の動きが止まる。今から引いても間に合わない。いつでも殺せる間合いだった。

だが、ルメリアは追撃の刃を向けなかった。一度も人を斬った事がないルメリアにはこれ以上剣を振るう事はできなかった。それを知っている少女はさらにナイフを障壁に押し込める。

刹那、眩しい閃光が視界を埋める。少女は残った神力で障壁を展開。障壁同士が干渉を受けて削られていく。障壁が形を失い両者を

隔てるものは何もない。

常人なら反応できない速さで突き出されたのは少女のナイフ。だが、聖騎士相手には通用はしない。

「すまない……」

ルメリアの言葉が少女の耳に届く。少女のナイフを左に逸れて見事に回避したルメリアは少女の小さな背を見つめる。ルメリアと距離を取った瞬間に少女に向けて、騎士のボウガンが一斉に狙いをつける。反応する間もなく少女の手足をボウガンが貫く。

「生きていたら……また会いましょう」

ルメリアは背を向けてつぶやく。

倒れていく黒髪の少女は必死で癒しの術式を使用しているのは分かった。だが、もうこの戦いにおいては脅威とはならない。だから止めはささない。甘いと言われればその通りである。彼女を救えばまた仲間が殺されるかもしれない。だが、殺せなかった。やはりまだ自分の中にはシスターとしての考えが残っている。この道を歩むであろうノイアは答えを出せるのだろうか、そんな思考が頭の中を駆け巡る。無駄な思考を強引に追い出してルメリアは前ではなくて後方に。首都クロイセンへと進路を取る。突破を果たし、騎士団団長アルフレッドが率いる部隊と交戦しているグリア連合国の騎士達を止めるために。

（前はあの子に任せるしかない）

ルメリアは最前線で奮闘を続ける少女の無事をただ祈った。

*

轟音と共に首都が揺れる。

祈りを続けるシスターは小さな肩を一瞬震わせた。中には震えて動けない者もいる。この音の正体はおそらく投石器から放たれた岩だろう。140キロを超える岩が首都の光の壁を揺らしている現在、彼女達の負担はさらに増大している。

皆の顔が蒼白であるのは、恐怖と疲労であらう事は容易に想像できるだろう。

（ノイアに……この祈りは届いてるのかな？）

シエルは大切な人を思い祈る。この祈りがハールメイツ神国の未来に繋がると信じて。

（また会えるよね。笑顔で。そのために祈るから）

疲労が重なりふらつく体を小さな両足で踏み留まるシエル。

（頑張るから……だから守って。この国を）

首都を揺らす兵器に負けない力で祈り続けるシエル。自分を見つめてくれるのは温かい瞳。どれだけ辛くても、休む事なく祈り続けているサリヤの瞳だ。

「こんな小さな子が頑張っているのだから……あなた達が休む時間はないわ」

シスターの第一位の声が皆に届く。衣擦れの音と共に、ふらつき倒れた者が起き上がる気配。シエルは自らの行動で皆が立ち上がった事に誇らしい思いが膨らむ。

（まだ私達は大丈夫だよ）

シエルの体から温かな光が止め処なく溢れた。

＊

一閃が木で出来た投石器を斬りつける。

「っ」

苦渋の表情を浮かべて痛む右手を庇うのはノイア。やはり身体能力が一般よりも上だと言っても、投石器を素手で破壊するというのはさすがに無理があるらしい。投石器はノイア達が囲んでいるため動いてはいない。問題は首都の北西にあるもう一台の投石器。一定のタイミングで放たれる岩は着実に都市の光の壁を削いでいるように見える。

（早く破壊しないと！）

ノイアは焦りながら剣を振るう。何度、弾かれたとしても止める事はない。時間さえがあれば破壊も可能と思われるが早い事に越した事はない。そんなノイアの不安は最悪の形で現れる。突如、投石器を囲う部隊から悲鳴が上がったのだ。

視線を向けるとさらに数を増した漆黒の騎士の集団。その中心には眩しい銀髪を腰まで伸ばした少年がいた。その奥には首都へと真っ直ぐに突き進むアガレスの部隊が見える。そろそろ戦争も終盤に突入しているのだろう。

そんな中でノイア達は投石器を破壊できていない。そして、剣を握る手もすでに赤く腫れ上がり、上手く動いてくれない。このままではあの銀髪の少年が率いる部隊の攻撃を受けて全滅。最悪の思考が頭を過ぎた。その不安が皆に伝わったのが皆の動きが鈍る。やはり私ではまだ騎士を率いる事はまだ不可能らしい。

「ノイア！」

そんな時に耳に届いたのはブレイズの声。激しい戦いを抜けてきたのか、すでに甲冑はボロボロだった。だが、本来の隊長の到着に騎士の顔に生気が戻る。

皆は最後の抵抗をするために自らの手に持つ剣を強く握り締めた。

*

ジュレイドは素早く銃弾をリボルバーに詰め込む。

「ちっ……」

数秒という短い時間の中でガイラルは高速の剣戟を繰り出す。裂けたコートからは鮮血が舞う。後退させるために応射するがその尽くは虚しく地に落ちる。

「くっそが！」

ジュレイドは右手の銃を捨てて腰にあるナイフを引き抜く。ナイフと剣がぶつかり火花を散らす。しばし睨み合ったのは一瞬。ナイフが音を立てて砕けるのを視界に納めながら左手に握る銃の引き金

を引き続ける。銃に収まる弾丸を全て受けてもガイラルは倒れなかった。

「終わりだ！」

叫び声が耳に届いた時には鮮血が舞っていた。ジュレイドは片膝をついてガイラルを見上げる。日を浴びて白銀色の剣が怪しく光る。ジュレイドは動かない体を恨めしく思う。あと数秒でも動ければ決められる。悔しさが心を満たす。ジュレイドは痛いほどに歯を噛締めた。

*

ボロボロの甲冑を身に纏っているのは騎士団団長アルフレッド。右目に垂れた血を拭いながら大剣を持ち上げる。

「もう終わりではないだろうな」

隣に立っているルメリアもすでに疲弊している。彼女を庇うように前に出たアルフレッドは前方を睨む。防衛のために組んだ方円の陣はすでに瓦解して、乱戦へと突入している。

それぞれが出会い頭の敵と戦う姿はもう殺し合い以外の何者でもない。そんな汚れきった戦場を突破してくるのはグリア連合国の王アガレス。こちらはすでに立っているのがやっと。だが相手はどうか。甲冑には傷一つなく、ただ前へと進んで来る。

「この程度で……倒れるものか」

アルフレッドは大剣を構えて戦場を駆けた。

*

ジェイスが戦場に辿り着いた時にはすでに勝負はついていた。それでも叫ばなければならないのが隊長の役目である。

「まだだ……止まるな！」

落胆する騎士に怒鳴り声を上げて強引に前へと向かせる。だが、

この戦場を見れば落胆する気持ちも分かる。首都の門へと迫ろうとするアガレスの部隊。そして、光の壁を破壊する投石器は健在。誰が見ても負ける事は分かっていた。そもそも光の壁があつてのハーメルイツ神国。絶対的な防御力を失ったこの国に勝てる要因などないのである。何か特別な事が起きれば好機もあるうが、その傾向はないように思えた。

自らが守り続けた塔での防衛戦。その勝利など些細な事であつたように思う。弱気な思考が頭を駆け抜けた瞬間に口を開く。

「違う！」

ジェイスは叫んで自らの思考を追い出す。考え事の内容など全く知らない騎士が目を見開く。何事もなかったかのように、ジェイスは突撃用のランスを構える。隊長が乱れていては戦いにはならない。迷いを振り払うようにジェイスが叫ぶ。

「投石器を破壊する。続け！」

ジェイスを中心とした騎兵隊が投石器に向けて電光石火の勢いで駆ける。後ろからの防御など用意している筈はなく、グリア連合国の騎士達が展開するよりも速く騎馬隊が投石器へと接近した。

*

幾重にも投石器から放たれる岩を光の壁が弾き返す。その輝きはあまりにも強固ではあるが、徐々に薄れている。

首都から溢れる眩い光を全身で受けて白銀色の甲冑が輝く。目の前の漆黒の鎧を纏う騎士達に臆する事なくブレイズは走り抜ける。背から聞こえるのは何としても投石器を破壊しようと奮闘する音。自らの役目は目の前にいる騎士を止めること。ただそれだけに集中する。

（ノイアなら出来る。だから俺は……）

ブレイズは心の中でつぶやき敵の隊長クラスに斬りかかる。彼は以前塔の防衛戦で顔を合わせた事がある。自分と同じに真っ直ぐに

突き進もうとする者。

生きるか死ぬか分からない今の状況では、最後に戦う相手としては無難な所だと思う。

お互いに無言で剣をぶつける。鏢迫り合いを行うも数秒、ブレイズは即座に視線を走らせる。動きが止まったブレイズに騎士達が槍を突き出す。すぐさま後方に飛ぶが避け切れずに白銀の甲冑を貫く。ブレイズが未熟なのではない。明らかに数が多すぎるのだ。自分達を包囲するように集まったグリア連合国の騎士達は倍はいるだろうか。負傷して動きが鈍ったこちらの騎士が動けるならば反撃もできるが、それは無理な事だろう。

「後一息だ……立ち上がれ！」

ブレイズは体に刺さった槍をへし折り味方に叫ぶ。だが、その声は虚しく響くだけ。もう動けないのだ。それでもブレイズは叫ぶ。一つの希望をもって。

「敵として出会った事を……残念に思う」

目の前の真っ直ぐな少年が剣を振り上げる。ブレイズの青い瞳に白銀の刃が映った。

*

一人また一人と倒れていく中で祈りを続ける二人。限界が近づいてきたシエルはゆっくりと大きな青い瞳を開く。

「サリヤ様……癒しの術式を皆に届ける事は可能ですか？」

声音は自分でも驚くほどに落ち着いていた。サリヤはゆっくりと瞳を開く。

「ええ。可能です。ただし障壁は同時には展開できません。かなりの危険が生じる事は理解してください」

サリヤの視線を受け止めてシエルは頷く。もうこの方法しかないと思う。幸い癒しの術式は得意だ。他の誰にも負けた事はない。

「皆に届けます……力を」

シエルは瞳を閉じる。

「あなたを信じます」

サリヤの優しい声を聞いてシエルは全ての神力を解放する。

（どうか私達を信じてくれる者たちに癒しの力を）

祈りの言葉が光の壁を消失させる。光は風に舞い戦場を包んだ。

＊

甲冑が碎かれる不快な音が響く。慌ててノイアは振り向く。

振り向いた先には、甲冑を碎かれたブレイズがいた。だが、彼は何とか踏み止まり、敵の隊長クラスの手をしっかりと握り睨みつけている。溢れる血はまるで見えていないようである。自らが倒れたらこの場は終わり、そう思っているようだった。

ノイアは痺れる右腕を振り上げる。腕が悲鳴を上げた瞬間に彼女を温かな光が包み込む。これは癒しの術式。そして、この温かさは離れていても分かる。守ると決意した少女の温かさだった。

（結局、私が守ってもらってる）

ノイアは心の中でつぶやく。刹那、緑色の瞳に光が戻る。

腕が折れる事すら厭わない高速の剣戟が立て続けに投石器を揺らす。今なら破壊できると確信したノイアは一つ深呼吸をする。全ての力を右腕に込める。

戦場に響いたのは少女の叫び声。轟音と共に投石器がバランスを崩して倒れていく。それはずっと待ち続けた瞬間だった。

投石器が崩れ落ちるのを視界の端に捉えた瞬間に皆の瞳に光が戻る。心も体も全快した騎士は再度陣を組み始めていくように見える。その一部としてノイアも加わる。

先頭を走るブレイズの背を見つめてノイアは地面を駆け抜ける。グリア連合国の突撃を警戒して剣を握り直すが、彼らは呆気なく殿を残して後退していく。投石器が破壊された今はすでにここに留まる必要がないのだらう。彼らは即座に進路を変えて、首都を攻める

王の元に向かっているように見えた。

*

日を浴びて怪しく光る剣が振り下ろされる。ここまでか、とジュレイドが諦めた瞬間。温かさが彼を包む。これは塔へと向かう際に自らの背に張り付いていた温もりだった。ジュレイドは自然と笑ってしまった。まさか自分が助けられる側になるとは思ってもいなかった。

剣を振り下ろすガイラルは不審な瞳をこちらに向けてくる。死の間際で笑っているのだから不審に思うのは当然だろう。だが、彼は少女の温かさに微笑まずにはいられなかった。無性にあの柔らかい髪をもう一度撫でたくなつた。だから生き残る。こんな所では死ねない。

再び力を取り戻した体は反射的に動く。素早く左腰からナイフを引き抜いて振り下ろされる剣を止める。

ガイラルが驚愕で目を見開く。動けるとは思っていなかったらしい。そんな彼を冷静な瞳が貫く。振り上げられたのは一丁の拳銃。無言で引き金を引いてガイラルの頭部を吹き飛ばす。鮮血を体に浴びてからジュレイドは立ち上がった。

*

投石器の岩が首都へと降り注ぐ様子を一度振り向いて確認したのはアルフレッド。首都が心配ではあるが今の脅威は目の前にいるアガレス。

両者が地を蹴ると同時に激しい剣戟が平原の草を切り裂き、地面を抉りとる。それでも二人は止まらない。おそらくこの二人のどちらかが倒れても、この戦争は終わらない。何か決定的な出来事でも起きない限りは止まらないだろう。

だが、お互いにこの小さな戦いにこだわった。お互いに皆の命を背負う者同士の一騎打ち。賢王とまで呼ばれる人間も相手の指揮官の度量を試したいのかと予想したアルフレッドは、その想いに応えるべき大剣を振るう。

アルフレッドは剛剣を横薙ぎに振るう。高速の一閃を後方に下がり回避したアガレスはゆっくりと剣を頭上に掲げる。まるでこちらを挑発するような構え。だが、アガレスの瞳はただただ鋭い。次の一閃で全ての決着をつけるつもりなのだろう。

アルフレッド自身もむろんそのつもりである。大剣を両手で握り、構える。刹那、地面を蹴った。アガレスも同時に地面を蹴る。

間合いに入り真っ直ぐに突き出されたのは大剣。目にも止まらない速度でアガレスの腹部を狙う。だが、アガレスは咄嗟に体を左側に捻り直撃を避ける。

「くっ……！」

アルフレッドは悔しそうに顔を歪ませる。手に伝わったのは甲冑を砕く手応え。右脇腹を切り裂く事には成功したが、これだけでは絶命には至らない。

「終わりだ」

低い声が聞こえた時にはアルフレッドは斬られていた。自らの身から舞った鮮血を空に見つめるのも一瞬、彼は最後の力を右腕に込める。

雄叫びを上げて右回りに回転するように剣を薙ぐ。無防備なアガレスの背中を切り裂き、ふらつく体を何とか保つ。

霞む視界の先にはこちらに止めを刺そうと振り向くアガレスの姿。そして、首都を破壊する投石器の岩。もはやここまでと瞳を閉じかけた時に温かな光が自らを包んだ。

*

投石器を騎馬の突撃で揺らし続けるのはジェイスの部隊。光の壁

が失われた現在、放たれる岩は首都を着実に破壊している。

その代わりに癒しの術式が発動したらしく、ハーツメイツ神国の騎士達は息を吹き返しているように見える。残りはこの兵器を破壊すれば攻め手を失ったグリア連合国の騎士達は無策で突撃するか、撤退するか道はないだろう。

「もう一度だ！」

突撃用のランスを構えてジェイスは迷わず突っ込む。それを阻むのは投石器の前に展開している騎士達。手にしたボウガンを一斉に放ち、こちらの数を着実に減らしている。

もう少し騎士が多ければ駆逐できただろう。だが、元々は都市マ―ベスタに配置された一部の騎士達の集まりである。戦争に横槍を入れるには不十分な数である。特に戦局が混乱して、乱戦に突入している現在は数が多ければ有利という単純な殺し合いに成り下がっている。数が少ない騎兵部隊など逆に駆逐される側だろう。だが、彼らは一つの目的のために進む足を止めない。

ジェイスは放たれる矢をランスで弾き飛ばし、ただ駆け抜ける。後方からどれだけの騎士が追いついてきているのかは分からない。最悪は自分一人で破壊すればいい。本来の豪胆な性格が功を成して迷いは瞬時に晴れていく。

進路を塞ぐグリア連合国の騎士を馬で吹き飛ばした瞬間に、腹部に痛みを覚える。視線を向けると腹部に矢が二本刺さっていた。危うく落馬しそうな体を何とか手綱を握り支える。

「残りはあと5人……耐えろよ。この体」

全身で矢を受けてもジェイスは止まらない。目の前にいるのは騎士五人。一斉にボウガンを構えるのもお構い無しにジェイスは突撃する。進路を塞ぐ騎士を吹き飛ばした先に見えたのは突撃を受けて歪んだ投石器。

戦場に響いたのは雄叫びと、投石器が崩れる音。それと共にボウガンの矢がジェイスの甲冑を砕く音。

「まあ……こんなものかな」

ジェイスはつぶやいた瞬間に口から血が溢れる。さすがの癒しの術式も死に至る者はどうやら救う事ができないらしい。奇跡の力といっても都合はよくないなと思い、瞳を閉じる。それ以降彼が瞳を開く事はなかった。

*

延々と続いてきた投石器の攻撃が止んだのを確認したアルフレッドは陣を後退させていく。幸いこちらは癒しの術式のおかげで、まだ戦える。投石器を失った時点で光の壁は必要ない。この癒しの術式の方が有効である。数で劣っていても軽い傷なら癒してくれる。その安心感は騎士達の士気を高めるには十分であった。

対するグリア連合国は疲弊しているように見える。シスターによる癒しを受けずに戦い続けているのだ。無理はないだろう。このまま全ての騎士が倒れるまで戦いを続けるか、それとも引くのか。

睨み合いを続ける中でグリア連合国の王は即座に決断した。手に持つ剣を放り投げて無防備に一人前進してくる。それに応えるようにアルフレッドも前進する。両者の声が届く間合い。しばし睨み合う二人。

「これ以上の戦は……無意味だ」

アガレスは短くつぶやく。

「それはこちらと同じだ」

アルフレッドは一つ頷く。

このまま両軍が激突すれば、ノリアス平原は死体の山になるだろう。相手への恨みはある。だが、勝つための有効な手段もなく殺し合いをするのは、もう一国が行う戦いではない。

どうしても決着をつけたいのであれば、お互いに必勝の策がある時のみ。そう言外に語っているように思えた。

両者は同時に背を向ける。これが戦いの終わりだった。今までの戦いは何だったのかと呆気なく思えてしまう終わり。再度、攻めら

れた時には防ぎきれるのは疑問ではある。

だが、首都から放たれるあの温かい神力の輝きがあれば負ける事はない、とアルフレッドは信じている。アガレスとて神力というこの大陸に満ちた力を軽視する事はないように思えた。数週間の平和となるのか、もう二度と戦う事はないのか。それは神しか知らぬ事だった。

*

翌日。

ノイアはいつもの獣道を歩いている。修道服この身に纏うのが今日で最後になるのは寂しくて仕方がない。だが、もう迷ってはいけないと思う。

ノイアは試験に落ちた。絶対的な神力を持った彼女だが、維持出来たのは一時間にも満たなかった。結果は戦力外通告。今日この日を持って彼女はシスターではない。素質が全てと語るこの仕打ちはこの大陸の冷たさを伝えるようでもあった。

ノイアに迫られた選択は、一人の女性として生きるか、教会の指導役となるか、そしてこの体にあるもう一つの力を使うのか。答えはすぐに出た。ショックではあったけれど、まだ自分は歩める。

簡単に自分を抜き去ったシエル。戦場を満たした彼女の光が今もこの国を存続させている。こんな奇跡をさらりとやってのける彼女に追いつきたいと思う。そのためには歩みを止める訳にはいかない。彼女の隣に立てるように歩み続けなければならない。

獣道を抜けた先にある二人の鍛錬場。そこにいたのはブレイズ。

「心配していたが……大丈夫らしいな」

素振りをしていた手を止めて微笑む。

「私が止まる訳ないでしょう？ 私は騎士になる。そして、次こそはシエルを守る側になる！」

ノイアは唯一の友に宣言する。

「相変わらず不器用な生き方をする」

「そうね。でも、それが私なの」

苦笑して答えるノイア。

神力をその身に宿すために人を斬れないノイア。騎士になるとしても、また茨の道を進む事になるだろう。それでも彼女は神力を捨てない。それがシエルとの唯一のつながりだから。

そして、自らの神力は必ず次の戦争でも役に立つと思う。障壁を張り守るだけではなく、シスターと騎士を繋げる架け橋となる。それが天から与えられたノイアの役割。

答えは試験ではなくて戦場にあった。自らを信じて続いてくれた騎士達。そして、シスターが先頭を走る事で得られたシスター、神力への絶対的な信頼。この国が進むには欠かしてはいけない絆だと思う。その答えを戦場で見つける辺りは、やはり自分が騎士なのだと思えてならない。

「険しいだろうが。これかも頼む」

ブレイズが片手を掲げる。

「ええ」

ノイアは青い瞳を真っ直ぐに見つめて腕を重ねた。

アルフレッドへの報告のために振り返った瞬間にノイアは緑色の瞳を大きく見開く。そこにいたのは荒い呼吸を繰り返すシエル。

「ノイア！ 試験に落ちたって……指導役を断ったというのは本当なの？」

シエルは早口で述べる。

「落ち着けよ、お姫様」

ジュレイドがシエルの黒髪を撫でる。

「だって……あんなに頑張ったのに。それにもう同じ道は歩めないの？」

シエルが大きな青い瞳に涙を浮かべる。

「歩めるよ。すぐには無理だけど……シエルを守る立派な騎士になるから」

ノイアが微笑む。

「それなら……」

シエルがゆつくりとノイアに近づく。ノイアが小首を傾げた瞬間に小さな体をもたれてくる。久しぶりに感じるシエルの重さ。

「待ってる。ずっと」

優しい声と共にシエルがノイアを包む。ノイアの全身に言いようのない喜びが駆け巡る。思えばずっとシエルを抱きしめていない。ずっと堪えていた。

「今日くらいいいんじゃないの？」

ジュレイドがニヤリを笑う。その瞬間にノイアの心は素直になった。

「ありがとう」

ノイアは小さな体を優しく抱きしめる。

「うん」

シエルの幸せそうな声が耳をくすぐる。ノイアは溢れる想いを口にする。

「私はシエル……ただあなたを守りたい。それだけだよ」

ノイアの涙が黒い髪を湿らす。その想いに応えるようにシエルは抱きしめる腕に力を込めた。

「終わり」

ただあなたを守りたい シスター見習い編 8（後書き）

シスター見習い編の最終回です。以降は「騎士編」へと続きます。

ただあなたを守りたい 騎士編（前書き）

シスター見習い編の続編です。

続編ですが、キャラ表を読んでいただければ「騎士編」からでも読めます。

ただあなたを守りたい 騎士編

ただあなたを守りたい 騎士編

プロローグ

「止められなかった」

悲痛な声。

身を切り裂くような痛み。

なぜ人は争うのか。どうして誰のでもない土地を支配したがるのだろうか。

答えは分からない。

それでも止めたかった。

奪い合う事などなく、分かり合いたかった。

そして、皆が助かる道を選びたかった。

「どうして？」

少女は問う。

この冷たき世界に。

誰かに答えて欲しくて。答えが知りたくて。

そんな想いを無視して、世界にまた一つ戦争が起きた。

――

剣響が二人の特訓場で鳴り響く。

高速で流れる銀閃を目で追う少女は反射的に体を動かす。

振り下ろされた一閃を半歩下がり避け、すかさず鞘を振り上げる。

鳴り響く金属音と共に少女が口を開く。

「今日は私の勝ちだな」

金髪を肩まで伸ばした少女は薄っすらと微笑む。右手に握られた

白銀の剣は銀髪の少年の首筋にしっかりと当てられている。

「これで勝率は五分か。腕を上げたな、ノイア」

銀髪の少年はノイアと呼んだ少女に微笑む。

「調子がいい時はあっさりと負けるがな。まだ隊長の方が上だ」

「二人の時まで隊長か。ノイアらしいな」

銀髪の少年が肩を竦める。心底残念そうな顔をしているように見える。

「一年前のようにブレイズと呼んでほしいのか？」

悪戯な笑みを浮かべるノイア。

「そうだな。親愛なる友に距離を取られたら敵わない」

「そうか。では……考えておくとしよう」

二人がまた距離を取る。

ノイア達が暮らすハールメイツ神国と、北の強国グリア連合国との戦争が終わって一年。シスター見習いの試験に落ちたノイアは騎士になる事を選んだ。最初は落ち込んでいるようにも見えた。

だが、数日後。

彼女は明らかに変化した。まずは輝くような金髪を気持ちいいくらいにバツサリと切り肩までのショートヘアに。そして口調を男性口調に変更。今でこそ皆は慣れてきたが最初は戸惑ったものだった。

「何をしている」

怪訝な顔でノイアが手を止めた隊長を見つめる。その表情からは不満が読み取れる。

「すまない」

ブレイズが己の剣を構える。

お互いが数撃打ち合った所でブレイズが口を開く。

「今日は伝える事がある」

真剣な青い瞳がノイアを見つめる。

「なんだ？」

ノイアは表情から感情を読み取ろうとするが、それは叶わなかつ

たのか難しい顔をして訓練に集中する。

「隣にある大陸は知っているな」

「ああ。フィレイア大陸……だったか！」

鈍い一撃を渾身の力で弾き返すノイア。慌ててブレイズが剣を構え直す。

「そこに向かって欲しい」

「なに……？」

次に攻撃の手が緩まったのはノイア。明らかに話が見えない状況に戸惑いを隠す事ができないようだ。

「甘い！」

ブレイズの叱咤の声。放たれたのは銀閃。ノイアが握っていた剣は弾き飛ばされて地を突き刺す。ブレイズは追撃のために剣を振り降ろすが、またしても鞘で止められる。

「なぜ私なんだ？」

余裕に満ちた声が問う。鞘だけでも勝てるとも言いだけな口調である。

「シスターであり、騎士であるノイアが適任という事だ。護衛はジュレイドがしてくれる」

つぶやくと同時に後方へと飛ぶブレイズ。

「そう。当分は会えないね」

残念そうにうな垂れるノイア。口調も戻っており、その姿は一年前の彼女に相違ないように見える。シエルが関わるとすぐに素に戻るのがいかに彼女らしいといえるだろう。

「なら今のうちに会って来たらどうだ？」

ブレイズはそんな彼女に苦笑する。

「そうだな」

ノイアは微笑んで背を向ける。口調は変わってもやはり中身は変わらないらしい。

「そんなに簡単には変わらないか」

一つ溜息をついてブレイズは一人で黙々と素振りを開始した。

＊

ちょうど朝日が昇り始めた頃。

坂を上るノイアは瞳を細めて大聖堂を見つめる。見習いの時は毎日この坂を上っていた。岩で出来たこの坂の感触が懐かしいと思うほどに、自分は大聖堂に顔を出していないのだろう。

固まった表情を解してから大聖堂のドアを見つめる。

「緊張する事はない」

ノイアはそう言い聞かせてドアを開ける。

耳に届いたのは聖歌。壮大で心を洗い流す神聖なる歌だった。自然と微笑んでしまう。鍛錬ばかりしていてまともに歌っていなかった気がする。全てが懐かしい。

ゆつくりと赤い絨毯を歩く。ステンドグラスから漏れた朝日を浴びて教壇に。

皆の視線がノイアに集まる。軽装姿で大聖堂に入ってきたのだ。不審に思う者がいるのは当然だろう。ちらほらと知らない顔もあり、どうも居心地が悪いのが難点だ。

教壇には見知った顔が合った。目が合うなり声を掛けてくれた。

「これは……ノイアですか」

教壇に立っていた司祭アーバンが微笑む。その微笑みはノイアを、教会から去った者を温かく迎えてくれる笑みに見える。ほっと一安心してから口を開く。

「シェライト様はいますか？」

ノイアは自らの出した言葉に違和感を覚える。例えどれだけ親しくても、親代わりに関わってきたとしても、それだけノイアとシスターの第三位の差は大きい。

「もし本人が聞いたら怒りますよ」

司祭が溜息をつく。この固い性格が直らないものかと思案しているのだろう。こちらにも溜息をつきそうになった所で、後方のドアが

開く。

まさかと思いゆつくりと振り向く。緩む頬を止められなかった。ドアを開けて入ってきたのは黒髪のシスター。一年前と比べると少しだけ身長が伸びて、大人っぽくなった彼女。シスターの第三位シェライト・ルーベントである。

「おはようございます。シスターの第三位シェライト様」

恭しく礼をする。

「おはようございます。騎士様」

シエルも同じように恭しく礼をする。だが、その小さな肩が怒っているのは誰が見ても分かることだろう。

「ごめん」

つぶやいて小さな肩を抱きしめる。

「次にそんな挨拶したら絶交だよ」

頬を膨らませるシエル。こういう所はやはり変わらない。今でも愛おしくて仕方がない。

「悪かった。今日は大切な話があるんだ」

ノイアは抱きしめる力を強くする。

「騎士の方で動きがあるみたいだね。ジュレイドから聞いたよ」

シエルは一度体を離す。心配そうな顔をこちらに向けてくる。どうやら言うまでもなく分かっているようだ。

「ああ。私はフィレイア大陸に向かう」

シエルの青い瞳を見つめてつぶやく。

「噂ではグリア連合国と通じて……もう一度ここを攻撃する用意をしているらしいね」

「ああ。だがそれは一部の者らしい。私は現地に向かい可能であれば止める。最悪はこちらを援護してくれる勢力を探さねばならない」
相槌を打ち今後の方針を語るノイア。

「二人で向かうのは刺激しないためだね」

「ああ。着いた瞬間に動きがあるかもしれない。大勢で押し掛けたら戦争の理由にされてしまうだろうな」

シエルは納得したように頷く。この一年でだいぶ賢くなったとノイアは思う。わざわざ説明しなくても理解してくれる。あどけない顔で首を傾げていた時は可愛いと思ったが、今は誇らしい。

「もう行くの？」

「ああ。そうゆつくりは出来ない。だが……相棒がいない。どこに行ったか知っているか？」

心配そうな瞳を向けるシエルに、神出鬼没な傭兵の居場所を問う。彼女ならもしかしたら知っているかもしれない。

「うーん。さすがに分からない。明日、港に来てよ。探して向かわせるから」

シエルは明日にはどうやら探せるらしい。この一年でさらに親密になった二人。ノイアには分からない特別な絆があるのだろう。

「分かった。ジュレイドの事を話すお前を見ていると……どうも落ち着かないな」

ノイアは背を向ける。まだ心の中がモヤモヤする。大切な物を奪われそうな、何とも複雑な想い。ジュレイドの事を嫌ってはいなが、シエルが絡むなら話は別だ。

「もう。私の中ではノイアが一番だよ」
背に優しい声が届く。

「分かった」

ノイアは振り向く。今は最高の笑顔をしている自信がある。その証拠にシエルが最高の笑顔をノイアに向ける。モヤモヤした気持ちはすぐに吹き飛んで、晴天の空のような曇りのない心が満たした。

*

首都クロイセンの北側にある商店街。店と店の間にある路地裏で黒いコートを羽織った男が手の平サイズの袋をポケットから取り出す。

「確かに」

運び屋の男は、ずつしりと重い袋を見つめる。傭兵や賊などの資金を運ぶのを生業としている男で、常に黒いローブを羽織っているために顔は見た事はない。運んでくれさえすれば誰でも構わないので皆興味はない。気にするのは仕事の正確さのみだ。

「これで最後だ」

男に短くつぶやいて背を向ける。

「ああ。ジュレイド、あんたもよく稼いだもんだよな。あんな動けない親のために」

いつもはお金を受け取れば早々に去る運び屋だが、今日は珍しく話し掛けてきた。ジュレイドと呼ばれた男は髪と同じ茶色の瞳を向ける。

「それ以上は言うな。頭に穴が開けられなくなかったらな」

冷え切った瞳と共に向けられるのは大口径の銃。

「悪かったよ。金はちゃんと運ぶ。それで最後だ」

早口で運び屋が述べる。

「ああ。そうしてくれ」

ジュレイドは銃を腰にあるホルスターに戻して、商店街へと足を向けた。

*

シエルは大聖堂のドアを開ける。坂の上にある大聖堂は首都クロイセンの中心にあり、首都全体を見渡すには都合がいい場所である。「うーん」

難しい顔をして唸るシエル。目当ての人物が一体どこにいるのだろうか。北側の商店街か、南側の宿舎か港だろうか。

悩む事、数秒。

シエルが選んだのは商店街。そろそろ稼いだお金が溜まる頃だろう。また怪しい運び屋にお金を渡している頃ではないかと思ったのだ。

どうしても今日には彼に会わなくてはならない。すでに司祭には了解を得たので、胸を張って実行できるのが唯一の救いである。腰まで伸びた長い黒髪が風で乱れる事も気にせずに目当ての人物を探す。近くにいれば特に探す必要はない。相手から見つけてくれるからだ。

歩く事、数分。

商店街は活気に満ちており、人だらけ。もはや一人ずつ顔を確認するだけでも億劫な状態だ。キョロキョロと周りを見渡すシエル。

「どうした？」

声と共に髪を優しく撫でられる感触。やはり見つけてくれた。

「探していたの。少し協力して欲しい事があって」

上目遣いで見上げるシエル。

「なに？ シスターが悪巧み。面白いねえ」

ジュレイドは笑う。

シエルは一つ頷いた。ノイアは絶対反対するのは分かっている。ならばもう後には引けない状況にするだけだ。彼女は怒るだろうか。それでもどうしても側にいたかった。その想いは止められなかった。

*

翌朝。

港に止まったフィレイア大陸との貿易船を見つめているのはノイア。あの船に乗り密かに侵入を果たす。すでにフィレイア大陸に侵入した仲間がザーランドという人物に話をつけているらしい。当面の無事は保障はされるらしいが、どうにも胡散臭い。だいたい情報が少なすぎるのだ。それだけ急ぎだったのは簡単に予想できるが、その理由が分からない。

「また難しい顔をしてるねえ。そんな顔をしていると嫁の貰い手いないぜ」

後ろから髪を撫でる大きな手。肘を腹部にめり込ませたいが、そ

れが出来ないのが無性に腹立たしい。

「その手をどける」

代わりに殺意を込めた瞳を向ける。

「おっかないな。一年前の方が可愛かったよ」

ジュレイドが撫でるのを止めて、肩を竦める。

「余計なお世話だ。だいたいシスターは恋愛禁止だ」

騎士である自分が言うのはおかしい話ではあるが、ノイアはその身に神力という力を宿している。ノイア達が暮らすハールメイツ神国を支える奇跡の力である。女性の方が身に宿す神力は強く、その中で特別に神力が高い者をシスターと呼んでいる。

「そうだったねえ。恋愛はいいけれど……大人の関係に進むと力が」
ジュレイドはそこで言葉を止める。

「なんだと？ 貴様、シエルに」

ノイアが剣を引き抜く。人を傷つければ身に宿す神力は低下する。そんな事はお構いなしに目の前にいる脅威を排除しようとするノイア。剣から放たれる殺気は本気だと分かる。

「おいおい。俺はもう25歳だぞ。さすがに13歳に手は出さない
って」

冷汗がジュレイドの頬に流れる。数多の死線をくぐり抜けてきたジュレイドだが、この少女とは戦いたくはないのだろう。殺す気で剣を握ったノイアの実力は一年前とは比べ物にならないのだ。

「その言葉を取りあえずは信頼するでしょう」

剣を鞘に戻すノイア。だが、もし違える事があるなら迷いなく斬ると述べているかのようだった。

「行くぞ」

低い声と共にノイアが歩き出す。

「口調まで変えて……本当に無理してるんだから」

ジュレイドの言葉を見殺しして歩き続ける。無理をしている事などノイア自信も分かつてはいる。だが、こうでもしなければ騎士として生きてはいけない。弱い騎士など不要なのだから。

＊

「信頼できるのですか？」

幼さを感じるが、どこか威厳に満ちた不思議な声。

それでいて高圧的な感じはしない。すんなりと身に入り、従う事に心地良さすら感じさせる、生まれながらの王の声だった。

「まだ分かりません」

王座に座る少女の前で膝をついている男が述べる。女性のような艶やかな黒髪を腰まで伸ばした細身の男である。

「そうですか。自国のために他国を侵略するなどあつてはならぬ事。ぜひとも話をしたい」

少女は憂いを帯びた瞳で細身の男を見つめる。

「仰せのままに」

男はゆっくりと立ち上がる。背を向けた際にドアを開けて入室して来たのは筋肉質の大男。

「これはザーランド殿。また女王の機嫌取りか？」

ザーランドと呼んだ男を睨む筋肉質の大男。

「いえ……報告をしたまで」

ザーランドは男を極力視界に入れないようにしているようにしている。

「ふん。それも無駄になるだろうがなあ」

男はその態度が気に入らないのか一度鼻を鳴らした。

「それはどうかな」

ザーランドは不適な笑みを浮かべて王の間を飛び出す。

こちらが駆けつける前に死ぬようであればそれまでだろう。だが、彼はどうにかして女王の願いを叶えたいのだろう。通路を可能な限り早足で駆け抜けていった。

＊

船が大海原に飛び出してすでに一時間くらいは経っただろうか。正確な時刻はノイアには分からないが地図と照らし合わせるとそんな所だろう。

現在は船の左側面に体を預けてどこまでも続く海を眺めている。さすがにここで素振りを始める訳にはいかずにやる事がないのだ。「暇なの？」

後ろからの声に振り向く。予想通りジュレイドが立っていた。

「ああ。少し話さないか」

「いいぜ。ゆつくりと話した事はないからな」

ノイアの提案にジュレイドは乗った。背を船の側面に預けてこちらに視線を向けてくる。

「前から聞こうと思っていたのだが。お前は何者だ？」

「今さら聞くの？ ただの傭兵だけど」

こちらの問いに苦笑して答えるジュレイド。傭兵だという事くらいはすでに知っている。

「なぜ傭兵なんてしてるんだ。なぜ傭兵がシエルを守る？」

ノイアの聞きたかった事を問う。

だが、彼は口を閉じたままだった。答える素振りすらない。

「答えたくはないか。まあ、そうだろうな」

「人に聞いてばかりか？」

うつむいたノイアに冷たい声が降り注ぐ。驚いて顔を上げると冷たい目がこちらを見ていた。人の心に踏み込むなら、そちらも話せと言っているようであった。

「そうだな。すまない。幸い時間はある」

「ああ」

ノイアの言葉を聞いてジュレイドは視線を空へ。

「私はハールメイツ神国の北東にある都市で生まれた。勉学は得意ではなく、取り柄と言えば絶対的な神力の強さと、身体能力の高さだけだった」

ノイアの言葉を隣の男は無言で聞いている。どうやら口を挟む気はないらしい。

「二つの力を持っている事で両親は喜んだ。でも、次第に分かってしまったんだ。シスターとしても騎士としても中途半端な存在である事がな。シスターとしては神力の絶対量が少なく、騎士としては人を斬れない。そんな役立たずだと分かってしまったんだ。それからは両親の反応は冷たかった」

うつむいたノイアの瞳には薄っすらと涙が浮かんでいた。

「だからあんなに馬鹿みたいに努力してたのか」

「それしかもう道がなかった。力に恵まれていないならば、認められるには頑張るしかない。そう思ってたがむしろやらにな。そんな中で私はシエルに出会った。私とはまるで違う、生まれながらの天才。それでいて驕る事はない清らかな心を持つ存在。自分がいかにちっぽけな存在に見えた」

ノイアは儂く笑う。どこか疲れた笑みだった。

「疎んだりしなかったのか？」

「そうだな。世話係を命じられた時は頭が真っ白になった。この心に燃え上がるような怒りが満ちた。だが、あの子はその怒りすら受け止めて、癒してくれた。だから私は彼女の側にいる事を誓った。今もその想いは変わらない。何があってもだ」

先ほどの弱々しさはいったい何処にいったのか、ノイアの声は力強かった。

「そうか。少しはノイア……お前が分かったよ。もっと誰かに話した方がいい。心に溜めすぎだ」

つぶやくと共に髪を撫でるジュレイド。

「子供扱いをされるのはお断りだ」

「可愛くないな」

腕を退けるノイアに苦笑交じりの声が降り注ぐ。

「では、お前の番だ」

「構わないが……その前にお姫様、大丈夫かな」

ジュレイドの話を聞こうと思ったが、お姫様という言葉がやけに気になる。そして、なぜ運搬用の樽を見ているのだろうか。

「う……う……」

少女の泣き声が樽から響く。

「おい。まさか」

ノイアには泣き声だけで分かる。その樽の中の人物が誰なのか。そして、今の話を絶対に聞かれたくはなかった人物である。この汚れた心を晒すなど考えただけで身が引き裂かれる思いがする。

「シェライト・ルーベント」

ジュレイドが樽を指差す。それと共にノイアが駆ける。樽を見下ろすと体を丸めて収まっているシエルがいた。引き返すにしても今からでは無駄が多すぎる。

「やられた……」

ノイアはつぶやく。まさかこんな手段まで使って付いてくるとは。

「ノイア」

シエルが樽から飛び出て抱きつく。瞳からは大量の涙を零して。

「ああもう。泣くな」

ノイアは抱きしめてなだめる。

「俺の話は次回に持ち越しだ」

ニヤリと笑って去っていくジュレイド。諸悪の根源の背を鋭く睨んでから泣きじゃくるシエルをなだめるのだった。

*

「彼女達は大丈夫でしょうか？」

司祭アーバンの声からは不安が感じられる。執務室の椅子に腰掛けている騎士団団長アルフレッドは穏やかな瞳を返す。

「彼女達だから任せたのだ。シエルが動くかどうかは賭けでしたが……予想通り動いてくれて助かった」

安堵の息を吐くアルフレッドに、司祭は怪訝な顔を向ける。

「ノイアとあの傭兵だけで十分ではないのですか？　そこが解せないのです。光の壁の維持はサリヤとハーミルで十分ではありません。しかし、シエルほどのシスターをこの地から離すのは愚策にしか思えません」

「そうだな。だが、あの国の女王の心を解すのはノイアだけでは無理だと思うのだ」

疑問に答えるアルフレッド。

「確かにシエルは他人の心に触れる事を得意とします。女王の本音を聞きだすには必要ではあるでしょうな。そんな彼女を支えるにはノイアが必要ですか」

「そういう事だ。そして、シスターの第三位という地位も必要だ。まさか交渉に来たのが何の階級もない騎士と、傭兵では話を聞く気も起きないだろう。そして、ハーミルほど知的な存在は警戒されるだけだ。まずは懐に入る」

二人はお互いの考えに納得して頷き合う。こちらの勝手な事情で二人の肩に重石を載せてしまったことに後悔があるのか、二人の顔はどこか冴えなかった。

*

「綺麗だね」

弾んだ声が耳に届く。

見つめた先に見えるのは白銀の大地。

舞い落ちてくる輝きを緑色の瞳に映す。確かに綺麗な国だと思う。手に触れる冷たい物が雪というものののだろうか。ノイアは手の平の上で溶ける雪を不思議そうに見つめた。

「大陸フィレイア。魔法と雪の大陸か」

ジュレイドが見慣れぬ地を見てつぶやく。数百年前は緑豊かな大陸だったらしいが、今では毎日、雪が降る極寒の大陸である。

「神力ではなくて……ここでは魔力というんだったな。神力とはず

いぶん違うと聞く」

噂で聞いた程度なので事実かどうかは分からない。

「魔力……禍々しい響きだね」

シエルは何かを感じ取っているのかぼつりとつぶやく。

「禍々しいかどうかは分からないけれど……こんなに寂しい所なの？」

降り立った港町はどこか殺風景だった。その理由は緑がないのだ。地面は硬質な石で形作られ、疎らに立っている木も葉はなく寂しさが込み上げる。

「こんなに自然が消えるものなのか？」

ジュレイドは疑問に思っているようだった。異常気象が起きれば自然も失われるのかもしれないが、これだけ緑がないのは不自然に見える。緑豊かな大陸マクシリアに慣れ過ぎているのかもしれない。

「それもザーランドという者に確認しよう」

岩の道を進み港町の中央に向かう三人。左右を見渡すと貿易で売買する品物を納める倉庫が無数に並ぶのみ。人が住んでいるという雰囲気は特にはなさそうだ。

「そうだな。ここでは情報も少ないだろうしな」

ジュレイドはつぶやくと同時に地図を広げている。ここから真北に向かえばどうやら一つ街があるらしい。

「ジュレイド」

小声でノイアが語り掛ける。ジュレイドはすかさず地図をコートのポケットにしまう。

ノイアは戦いの緊迫感に震える少女の前に立つ。ジュレイドも鋭い視線を前方へと向けた。

*

一頭の馬が雪道を駆け抜ける。

馬を操るザーランドは強く手綱を握る。完全に出遅れてしまった。

すでに船は到着をして、交戦状態に入っているだろう。彼らが戦えるだけの力があればいいが、見た事もない力にすぐに対応するのは容易ではない事は簡単に予想できる。

閉鎖的なこの国の情報は他国には広まっていない。魔力という言葉と、数種類の攻撃手段しから知らないのが実情だろう。

そんな状況で生き残れというのがいかに過酷なのかは誰よりも理解している。

遠方に見える港町を複雑な瞳で見つめたザーランドは焦る気持ちを何とか静めるのだった。

*

「シエルは私の背から離れるな。ジュレイド、一人でも大丈夫か」
「もちろん」

ジュレイドは銃を引き抜いて、警戒しながら数歩前進。
目の前にいたのは漆黒のロープを纏った男二人。素早く視線を走らせる。左右の物陰にはそれぞれ一人ずついる。

両手の銃を素早く構える。銃という武器がこの大陸でどこまで通用するかは分からない。だが、遠距離で使用する武器を試すのは容易だ。

刹那、銃声が轟く。一度、瞳を閉じる間に放たれる高速の弾丸。力のある騎士でようやく弾き落とせる弾丸を、信じられない事に彼らは切り裂いた。彼らが握っているのは光輝く剣。

能力次第では四人纏めて相手をする予定だったが、そこまで甘くはないらしい。

「左右の二人は任せた！」

ジュレイドは叫ぶと同時に地面を駆ける。前方にいる黒いロープを纏った男達も同時に地面を蹴る。

まずは先行して来た一人が振り下ろす一閃を左に回避し、すかさず敵の頭部を撃ち抜く。

すかさず舞った鮮血を気にも留めずにもう一人が斬りかかってくる。常人よりも身体能力が高い騎士の一閃に近い斬撃だった。即座に回避する事は不可能と断定したジュレイドは右手の銃で受け止める。腕に伝わった力は想像したものとはかけ離れていた。あまりにも軽い。

吹き飛ばそうと思いを巡らせた瞬間。手に持った銃が内側から膨らむ。

反応するよりも速く、一つの破砕音が港町に響く。何と剣に触れた銃が爆発したのだ。吹き飛ぶ破片を避けるなどの芸当はいかに身体能力が優れていても不可能である。

破片が体を突き刺すのを何とか堪えて前方を睨む。バランスを崩したジュレイドに振り下ろされたのは光剣。左手に握る銃で受け止めれば先ほどと同じ結果が待っているだろう。

舌打ちをしてから左に跳躍。受け止められないならば避けるしかない。だが、頭では理解しているあの速度を避ける事は不可能である事を。一撃を受ける覚悟をしていたが、振り下ろされる一閃は見るからに遅い。先ほどと比べれば雲泥の差である。

「なんだ？」

ジュレイドはあまりにも遅いその斬撃をいぶかしむ。この程度の速さなら楽に倒せる。着地と共にすかさず左手に握る銃を構えて引き金を引く。だが、次は騎士並の速さで銃弾を切断された。

その瞬間に一つの予想を立てる。おそらくあの爆発は何かの力。触れた物を爆発させるのだろう。だが、利点だけではない。力を使うと何か別の力が使えなくなるのだろう。目の前の男が使っているのは素早く動く事ができる力と、光剣が触れた物を爆発させる力。予想を確かめるために一度距離を取る。身体能力では同格。ならば後はどちらが先に一撃を決められるかだけである。

ゆっくりと歩を進めるジュレイド。敵も警戒しているのかゆっくりと距離を詰めてくる。

「——ふっ——」

短く息を吐いてジュレイドが地面を駆ける。敵は反応が遅れて地面を蹴る。だが、それではもう遅い。ジュレイドはすかさずナイフを引き抜いて投擲。光剣が触れた物を爆砕させる。おそらく敵は何を投げられたか分からずに、とりあえず身の安全のために爆破させたのだらう。予想通りに見るからに動きが鈍る敵。

轟いたのは銃声だった。

*

放たれるのは光輝く氷の刃。

舞い落ちる雪を切り裂きながらノイアを狙う。

両手に握る剣と鞘が無数の氷刃を破壊する。防戦に徹しながら、徐々に左にいるローブ姿の男との距離を詰める。隙あらば捕らえるつもりである。

「合図をしたら障壁を展開。いいな」

背後にいるシエルに声を掛ける。本来であれば離れたくはないが、ジュレイドに全てを任せるのは負担が多すぎるだらう。

「大丈夫。実戦の訓練もちゃんとしてるから」

シエルはいつでも障壁を張れる準備をしている。

覚悟を背に感じたノイアは氷刃を破壊する事に集中する。先ほどから無数の氷刃が放たれているが、五秒に一回ほど数が減る時がある。便利な力に見えるがどうも欠陥があるらしい。

その隙を突けばこの状況を打開できる。そう確信したノイアは心の中で秒数をカウントする。

四秒の時間を正確に数えて背を屈める。

ノイアが地を蹴ったのと、シエルの障壁が展開したのは同時だった。氷刃を障壁が弾き返したのを視界の隅に収めてノイアが駆け抜ける。

敵は明らかに驚いているようだった。神力という力をおそらく初めて見たのだらう。氷刃が勢いを弱めたその瞬間にノイアが敵の懐

に接近する。

だが彼女の視界を埋めたのは氷の壁。全てを弾き返すと言外に述べている氷壁がノイアが手に持つ剣では破壊する事は不可能に見える。

すかさずノイアは剣ではなく、身に宿るもう一つの力を発動させる。

規格外の神力を解放して、氷壁に障壁をぶつける。理を違える二つの力が衝突した瞬間。二つの壁はガラスが割れたように砕け散る。その間隙に迷いなく飛び込んだのはノイア。氷壁をこつとも容易く突破された事に驚きを隠せない敵は動けない。そして、どうやら発動させたくても力を使えないらしい。

その隙についてノイアは敵の男の背に回り込むと同時に剣を鞘に収めて腰に固定する。

敵の男はなぜ斬らないのか戸惑いを隠しきれない。そんな彼を生きた楯として掴み駆け抜ける。味方を楯にされて、どう動くのか逡巡できた時間は数秒だった。敵は迷わず氷刃を放つ。

「見た目通りに冷たい国だな」

独語して生きた楯を解放する。氷刃を受けて絶命してから放すという選択肢もあるが、さすがにそんな姑息な手段は取りたくはない。敵が戦いにおいて、どこまで冷酷になれるのか試したかったのだ。もし戦争になるのであればこの辺りは重要になってくる。

生きた楯を失い視界に入ったのは無数の氷刃。今から剣を抜いてもとてもではないが防ぎきれない。ならば取る方法の一つのみ。すかさず姿勢を低くして氷刃を避ける。次弾を左に跳躍して回避、その次を放つ隙などは与えない。すかさず背後に回りこんで首筋に剣を当てる。

「話を聞こうか」

ノイアの低い声が港町に響く。答えるかどうかは疑わしいが、情報が少しでも欲しいというのが本音である。

「ゲベル様に栄光あれ！」

捕らえた男は短く叫ぶ。その後、彼が取った行動をノイアは忘れる事ができないだろう。彼は氷刃を手握り、腹部に突き刺したのだ。素早く一人残った男に視線を走らせる。

だが、視界に映ったのは鮮血だった。

「おいおい。これはさすがにないだろう」

数多の戦場を歩いた傭兵にもこの状況は衝撃らしい。

「口を割らないために自決するとは……」

ノイアはつぶやかずにはいらなかった。今まで出会った敵とは違う異質な恐怖が全身を駆け巡る。震える肩を止められなかった。

「ここがフィレイア大陸」

シエルは自分達がいた場所とは理を違える地を改めて見つめている。今までの思考を捨てて柔軟に考えていかなければならないと三人はこの時に同時に思った事だろう。

「ここはすぐに騒ぎになる。急ごう」

ノイアが二人を促す。二人は頷いてすぐに駆け出す。言いようのない恐怖から逃げるように。

*

茶色髪の長身の男、背の低い黒髪の少女、そして、女性騎士。先に知らされていた情報通りの三人組が雪原を進んでいる。

ザーランドは馬から降りて手綱を握っていない右手を振る。ほどなくして警戒しながらも茶色髪の男を先頭にしてこちらに歩を進めてくる。どうやら刺客は自力で退けたようだ。腕は立つというのは分かったが、後は人柄だ。この大陸を救うのか、それとも結局は自国のみしか考えないのか。

話せばすぐに分かる事だ、と結論付けたザーランドは三人を待つ。

「あんたがザーランド？」

先頭を歩いていた男が問う。どこか軽い印象を受ける男だった。「そうです。貴殿たちがハールメイツ神国から来た者ですか？」

事務的な口調でまずは確認する。

応じたのは輝くような金髪の少女。年齢は十六、十七くらいなのだろうが、緑色の瞳からはしっかりとした意志を感じさせ彼女の年齢を若干高くみせている。

「そうだ。私はハールメイツ神国の騎士ノイア・フィルランド。こちらがシェライト・ルーベントだ」

ノイアと名乗った少女が、シェライトと呼んだ少女を紹介する。「シェライト・ルーベント。確かシスターの第三位の名でしたね。なるほど。確かに我が女王の話をするには適していますね」

ザーランドは微笑んでシエルを見つめる。予想ではシスターの第二位が姿を現すと思っていた。才女と呼ばれる彼女をいかにこちらのペースに持っていくかを考えていたが、それは無駄に終わったようである。

「まずは話を」

悠長に話をしている場合ではない、と言いたげなノイアの視線を受け止めたザーランドは表情を引き締める。

「まずは落ち着ける場所に移りましょう」

ザーランドは馬に乗る。

「どれくらいで落ち着く？」

唯一、名乗っていない男が問う。

「せいぜい数時間といった所です」

「ふーん」

質問したのはこの男だがどうも反応は鈍い。三人の中でザーランドに警戒をしているのは、おそらくこの男だけだ。だが、彼の反応は正常だ。港でゲベルの刺客と交戦したであろう彼らがすぐにこの国の人間を信じるとは思えない。

「あえて言わせて頂くならば……信じて下さい。私は二つの大陸を巻き込む戦争を止めたいのです。そして、この国がまた繁栄する道を共に探したいと思っています」

ザーランドは名乗らぬ男を見つめて語りかける。

「そうかい。悪いが俺は態度保留だ。気に障るかもしれないが許してくれ」

男は茶色の瞳をこちらに向けてくる。心までを見透かす瞳だった。態度は軽いがどこか筋が通った人間だと判断するザーランド。

ここで何かを言っても始まらない。そう思い進む事を決める。「参りましょう」

ザーランドが馬を走らせる。異なる大陸から来た三人は彼の背を追いかけるように歩を進める。彼らの一歩がこの国の未来を救ってくれる事をただただ祈った。

ただあなたを守りたい 騎士編（後書き）

お読みいただきありがとうございました。感想をいただければ幸いです。

ただあなたを守りたい 騎士編 2

ただあなたを守りたい 騎士編

―2―

視界に広がるのは白銀の世界だった。

空を見上げると雲一つない快晴であるが寒さは全く変わらなかった。

冷酷とも言える容赦ない寒さに身を震わるノイアは、早くもこの地が嫌いになりそうである。新調した薄茶色の防寒用ローブだけでは、とてもではないが耐えられない。

「シエル、大丈夫か？」

左隣を歩く黒髪のシスターに問う。正式なシスターの証である青いローブを纏っている彼女。だが、それはそもそも防寒用ではないのだ。表情からは読み取れないが寒いのではなからうか。

「これくらいは大丈夫」

小さな拳を胸の前で握り、しっかりとした言葉を返すシエル。

（あの時とは違うんだな）

ノイアは今でもこの小さなシスターを子供扱いしてしまう。すでにノイアの元から離れ、自らの足で歩いて進んでいけるというのに、「無理なら言ってくれ。どこかで暖を取る」

シエルに優しくつぶやいて先頭を進む男を見上げる。

「あと一時間ほどです」

視線に気づいたのか先頭を進むザーランドが振り向いてつぶやく。「さすがに冷えてきた。それにこの雪……体力を奪われるな」

ジュレイドが苦々しくつぶやく。歩を進める度に纏わりついてくる雪。動きを鈍らせ、それでいて余計な労力を使わせる雪は厄介な事この上ない。

「ここイリース雪原は深く積もらない事が唯一の救いですね」

ザーランドは前を向いたままつぶやく。

イリース雪原。

周囲には花などの植物が姿を見せず、柔らかな雪がくるぶし辺りまで積もっている。ここまでは何の特色もないただの雪原である。

だが、この雪原地帯に足を踏み入れた瞬間に気になる物が一つあった。それは所々に散在している大きな岩だった。

（輝石みたいだな）

ノイアは岩を視界に収めた瞬間に輝石に近いと感じた。輝石とは神力に反応して明かりを燈す石の事である。光を得るだけではなく、コンロなどに組み込むことで神力を動力へと変換できる大陸マクシリアでは欠かせない石だ。

（色は少々薄いが……近いな。試してみる価値はある）

ノイアは一メートル先にある水晶色をした石に神力を注ぐ。

期待して力を送ったのは数瞬。結果はすぐに出た。

石は光る事はなく、何事もなかったようにその場に留まり続けたのだ。

「ノイアも試したんだ」

隣でシエルが肩をすくめる。考える事はどうやら同じらしい。

「駄目だったがな」

ノイアは苦笑した。

「その石は魔力にしか反応しません」

前を進むザーランドがつぶやく。答えを示すかのように右手を掲げる。水晶色の石は内側から力を得たように輝き出す。それはノイアが先ほど思い描いた光景だった。やはりこの地は理を異にする地らしい。

「魔力か。聞いたら答えてくれるのか？」

「町についたら答えようと思いましたが……いいでしょう」

ノイアの問いに長髪の男は静かに口を開く。

三人は自らの瞳で魔力というものを見た。

ジュレイドは光剣と尋常ではない加速力を。ノイアは氷の刃と、同じく氷で出来た壁を見たのだ。あれだけなのか、それともまだあるのか。生きていくためには知っておく必要があるだろう。

「この大陸は魔力という力に満たされています。目には見えませんが、空気と同じように確かに存在します」

「それは神力と同じだね」

ザーランドの言葉に応じたのは黒髪の少女だった。この地にある魔力という未知なる力に興味があるのだろう。シエルは先ほどから自然と前屈みとなり聞く体勢を整えていた。

「共通点は多いようですね」

魔術師もどうやら神力という力に興味を持ったのか、顎に手を置いて考え込んでいるように見える。言葉通りに共通点は多いのかもしれない。神力も魔力同様に目には見えない、それでいて力を扱えない者には奇跡としか思えない現象を起こす事ができるのだから。

「あなた方はその身に力を宿しているのですよね？」

「そうだ。そのため人によって力の強さも、絶対量も異なる」

問いに答えたのはノイア。

「私達もこの身に魔力を宿しています。ですが……それだけではありません。この地を満たす魔力を体に取り込んで力を発動させる事も出来るのです。力を使い過ぎれば当然、その場の魔力は薄れます。結果はあなた方も見ましたね？」

ザーランドはこちらに問いを放つ。

「かなり万能な力に見えたが……どこか欠陥があるように思えた。一瞬だけ力が弱まる時があったな」

長髪の男に冷静な瞳を向けたのはジュレイドだった。

「そうです。それが魔力を扱う者の突くべき所です。光剣を使用する者はこの地にある魔力を大量に使用します。自身の魔力が尽きれば外から取り込みますが限界もあります。最悪は魔力が全く使用できない状態に陥る事もあります。氷刃にて攻撃をする者は優秀な者でも五秒に一回は力が弱まるでしょう。極端な事を言えば無尽蔵の

魔力がその身にあれば何の問題もなく自由に扱えます。ですが、そんな人間はいません。最終的には、いかに魔力を多量に取り込むか、そして、その魔力をいかに効率よく使用できるかで魔術師の優劣は決まると言っても過言ではないでしょう」

ザーランドは一切の澱みなく言葉を続けていく。よくもここまでスラスラと口が動くものだと感じてノイアはある疑問が頭に浮かぶ。

「魔力を取り込む事ができれば使えるのか？」

ノイアは試しに聞いてみた。あの光剣は工夫次第では便利に思える。特に武器を破壊するという点においてはかなりの利点がありそうだ。それしか戦う術がないノイアには是非にも習得したい事だった。

「いいえ。この大陸で生活する者でも使用できない者がいるくらいです。使えるとは思えません。ただ私が光剣を形成し、それを渡せば使用できます」

「爆発のタイミングは？」

「あなたで決められます。私の力を一部渡すようなものですね」

答えを聞いた瞬間、どうやらこの話は無駄ではなかったとノイアは思う。上手く連携すれば新しい戦い方も可能だ。物体を爆発させる力など扱いを間違えれば自らの身すら危険に晒す力である。だが、シエルのためなら何でもすると決めているノイアには藁にもすがる思いである。

「ノイア。何だか危ない事を考えてない？」

シエルが覗き込んでくる。穢れを知らない青い瞳がノイアの瞳に重なる。全ての汚れを見透かすような瞳だった。深く心を覗き込み、全てを暴く瞳。

一度、心臓が跳ねた。刹那、船での会話が脳裏に浮かぶ。

「世話係を命じられた時は頭が真っ白になった。この心に燃え上がるような怒りが満ちた」

自らの言葉が頭を駆け巡る。シエルに対して向けてしまった汚い心。恥ずべき心だった。この少女にだけは知られたくない汚れた気持ちである。

「なんでもないさ」

それだけしか言えなかった。だが、青い瞳はノイアを決して逃がしてはくれない。隠そうとする後ろめたい心すら看破しそうな瞳には全身が震えた。

（止めてくれ）

心の中でつぶやく。ただシエルを守るだけの騎士でいさせて欲しい。胸を張って誇れる騎士でいたいだけなのだ。

拒絶の言葉を叫びそうになる自らを必死で止める。そんなノイアを救ったのは陽気な声だった。

「前を向いて歩けよ。危ないから」

声の主によってシエルの小さな手が引かれる。

「わわ……」

有無を言わさぬ力に引かれ、慌ててバランスを取る少女。先ほどシエルがいた場所には水晶色の岩が飛び出していた。余所見をしているままならば、今頃は岩に足を取られて転倒していただろう。

（しっかりしないと）

ノイアは頬を両手で叩く。意識が散漫で守れなかった、などという失態は許されないのだ。騎士はシスターを守る者。そして、自分はシエルを守る者なのだ。それ以上でも、それ以下でもない心と言い聞かせる。冷静な自分が戸惑う心を静める。これならば問題ない。

「まとまりましたか？」

長髪の男がつぶやく。どうやら黙して二人のやり取りが終わるのを待っていたのだろう。そう言えば確認の最中だったという事を思い出す。

「すまない。途中だったな」

「いえ。他に特に話す事はありませんからね。後は実際に見た方が早いと思います」

ザーランドは苦笑する。

本質をこちらに全て話したくないのか、それとも魔力で出来る事が限られているのか。その答えは分からなかった。だが、この大陸にいれば自ずと分かることなのだろう。

「ならば実際にこの目で見るでしょう」

ノイアはつぶやいて降り続く雪を見つめる。時折、隣を歩くシエルの視線を感じたが振り向かなかった。このままでいいとは思わないが、今は視線を合わせたくなかった。

*

「ふう」

溜息をついて自室のベッドに倒れ込んだのは銀髪の少女。確かな弾力が体を支え、そのまま眠りに落ちてしまいそうな心地良さが少女を包む。

しばしの静寂。まるで力尽きたかのように動かない。実際には動けなかったのだ。

気を抜けばすぐにでも眠ってしまうほどに少女は疲労していた。

元々真っ白な肌は体調不良によって病人のように青白くなっている。吐息もどこか荒い。

「重過ぎるのよ。私には」

少女はつぶやく。

王としての責務と重荷。それは齡十七歳の少女には重過ぎる。だが、甘えてはいられない。民は自分に期待しているのだから。この肩にどれだけでも重荷を載せてくる。体が、心が悲鳴を上げても載せ続けてくるのだ。

逃げたい。

そんな弱音が少女を襲う。だが、逃げられない。自分は王の血を

引いた者であるのだから。そして、自らが逃げればあの男は戦の準備を進めるだろう。

グリア連合国がすぐに戦を出来るとは到底思えない。だが、我が国フィッツベルが表立って宣戦布告をしてしまえばもう止まらない準備が整ってしまえば、二つの大陸の兵力がぶつかる最悪の戦争の出来上がりだ。

（だから逃げない。逃げてはいけないのよ、ノース・ロウ・フィッツベル！）

心の中で自らの名を叫ぶ。全身に力が沸く。湧き上がる力を溜めてベッドから起き上がる。

起き上がった瞬間に王族に与えられた豪華な部屋を一度見渡す。

天井に浮かぶ水晶色をしたシャンデリア、目の前にある煌びやかな飾りを施された鏡台、そして、背には人が三人以上は眠れそうな巨大なベッド。

だが、こんな物に興味はないのだ。

「ただ民の笑顔のために……」

言葉をつぶやく。その言葉が自らの耳に入り全身に溶けていく。

一人の少女から、一人の王へと戻った彼女は自らの部屋を後にした。

*

岩とブーツがぶつかり硬質な音を響かせる。

先ほどまで雪原を歩き通しであったためか、固い地面と硬質な音にどこか安心感を覚える。この雪という物にそれだけ慣れていないという事をノイアは改めて感じる。

ふと同じく異なる大陸から来た二人に視線を向けた。

「お嬢様はお疲れ？」

陽気に笑いぐつたりとした少女を撫でるジュレイド。撫でられている少女はもう動きたくないのかドボトボと力なく歩いている。ノイアも今日はさすがに休みたい。慣れない土地での活動がここまで

体力を奪うとは予想外だったからだ。

「宿は取れるか？」

ノイアは先頭を進む男に問う。

町に入っすぐに宿舎らしき建物が数軒建っているのが目に映る。どうやら港町から国の中心にあるという城へと向かう休憩地点として栄えた町なのだろう。そうでもなければ町に入っすぐに宿が並ぶなど不自然極まりない。

「ええ。ここは見た通り宿を中心として栄えた町ですからね。値段も旅の商人に合わせてバラバラですね」

振り向いて微笑むザーランド。

そんな彼に対して二人の人物が同時に口を開いた。

「手頃な所を頼む」

「一番安い所で」

ノイアと傭兵の声が重なる。二人の表情は真顔だった。余分なお金は一切ありません、と表情から楽に読み取れる事ができるだろう。言葉にした瞬間に虚しさが心を満たす。だが、贅沢が出来るほどのお金がないのは事実なのだ。

「私が払おうか？」

シエルが懷から一つの袋を取り出す。複数の金貨が擦れる音が寒空に響く。

その瞬間にノイアは目を見開く。さすがはハールメイツ神国一の花形の職業である。その給金は予想を遥かに超えていた。雲泥の差と言ってもいいだろう。

「それくらいはこちらで払いますよ」

ザーランドは苦笑いを浮かべる。どこかその笑みには哀れみが含まれているような気がする。

「ありがとう」

余裕があるシエルがニツコリと笑う。ノイアは懷にある自らの資金を思い浮かべて、悲しさが込み上げてきたのだった。

「参りましょう」

馬を預けたザーランドが事務的な口調でつぶやく。

無言で機械的に単調な速度で歩く彼に案内された宿は、町の入り口から数十分離れた場所にあった。メインの大通りから左に外れた先。路地裏のような細い道をひたすら歩いた先に、その宿はあった。まず驚いたのは宿の小ささだった。外側から見ているために、正確な所は分からないがおそらく部屋は三つあればいい所だろう。

結構古そうだな、と失礼ながらにノイアは思う。宿を支える木はどこか時代を感じさせる。そう思うのはどうやらノイアだけらしい。ジュレイドはどこでもいいのだろう。いつもの陽気な表情のまま宿を見つめている。そして、シエルは楽しそうにキョロキョロと視線を移していた。

「ここは知人が経営している宿です。古い宿ですが……ゆっくりするには適していますよ」

ザーランドは宿へと入る木製のドアを開ける。

何かが軋む不快な音を響かせてドアが開く。

「お客様ですか？ あら、ザーランドじゃない」

出迎えたのは笑顔が似合う女性だった。ノイアよりも年上だろうが、浮かべる笑顔は眩しく若さを感じる。予想では二十代前半だろうが、とてもそうは見えなかった。

「四人です。空いていますか？」

ザーランドは彼女に微笑む。久しぶりに会った知人に向ける裏のない笑顔だった。

その笑顔を冷静にノイアは見つめる。この人物を疑う感情は徐々に薄れている。とても真っ直ぐで心優しい人物である、というのが現在抱いている印象だ。

「ここなら安心だね」

シエルは出迎えた女性に笑顔を向ける。このシスターに到っては

疑うという言葉を知らないのではないかと思うくらいである。長年、共に歩んで来た者に向けるような信頼の眼差しでザーランドを見つめている。

「……」

対して先ほどから冷たい視線を向けているのはジュレイドだ。彼はまだ疑っているらしい。だが、この反応もある意味では正常なので文句は言わない。そして、彼が警戒してくれているからこそ信じる事が出来ると言っても過言ではない。

「絶対に安心な場などはありませんが……身の保障は致します」

「まあ、これだけいけばな」

ザーランドの言葉を聞いて空を見上げる傭兵。

その横顔を見つめた瞬間にノイアは意識を集中させる。塀を隔てた先にある民家、またはここら一体に群を成して集まる宿の天井に気配がする。数は五人だろうか。ジュレイドの言葉を聞いてからでしか反応できなかった自分に怒りを覚えると共に、敵ではなかった事に安堵する。

「味方いるの？」

シエルは左右に視線を走らせる。

「上にな」

ノイアがつぶやくと同時に少女の黒髪を撫でる。だが、シエルは分かっているようにだ。この辺りはただのシスターに分かれというのは酷な話なのだろう。

「戦いはそいつらと……俺がするから安心してろ」

ジュレイドが陽気な声でつぶやく。

「そろそろ入りましょう。体が冷えていけません」

ザーランドが皆を促す。頷いたノイアを先頭に彼らは宿へと入った。

「理解できませんね」

落ち着いた声でつぶやいたのは白髪 of 男性。彼の個性である顎鬚に触れながら思案する。

「ハールメイツの軍神でも無理ですか」

肩を落としたのは副団長のマイセルである。

「ええ。グリア連合国も我が国も戦争が出来る状態ではないのです。少しずつ安定してきたというのが正直な所でしょう。この状態で戦争など共倒れもいい所です」

軍神が唸る。

これくらいの事は副団長になったばかりのマイセルでも分かる事だ。一年で国を建て直して戦争しようなど自暴自棄もいい所である。何か秘策があるのであれば話は別だろう。だが、その秘策というのが異大陸からの援軍である。

「グリア連合国が勝ったとしてもその後は」

「はい。数日でこの大陸は奪われます。それも昨日、共に戦った者にです。それは分かっていると思うのですが」

軍神は敵の王を思い浮かべているのか遠い目をした。

賢王とまで呼ばれるグリア連合国の王。騎士としての無類の強さだけではなく、政治までこなせるこの大陸一の人材である。彼がこんな愚かな事に手を出すとは到底思えない。

二人の男の唸り声が副団長の執務室で虚しく響く。

「では、確かめたらどうですか？」

声を掛けたのはシスターの第二位であるハーミル。滑らかな銀髪を腰まで伸ばした落ち着いた雰囲気とする女性である。

「なるほど」

軍神は何か閃いたような顔をしている。彼の閃きはハールメイツ神国には欠かせない。特に国力が低下している現在は、彼がいなければ崩れていたと言っても過言ではない。

「まさか話し合おうというのですか！」

「ええ。まだ戦争状態ではありません。秘密裏にアガレスと対話し

ます」

マイセルの言葉に微笑んで答える軍神。

「賢王と軍神の対話。よい結果を期待しております」

全てを見透かしているかのようなハーミルの声が響く。

「それでは」

軍神が片手を上げて早足で去っていく。その足取りはどこか急いでいるようにも見えた。

その姿に不安を感じたのだろうか。副団長は自然と隣に立ったシスターに視線を向けていた。

「よろしいのですか？」

マイセルは眉根を寄せて問う。

「ええ。おそらくこの対話……この大陸の運命を左右する程の意味があると思います」

ハーミルは遠い目をしてつぶやく。

幾度も奇策を用いてこの国を勝利に導いた軍神。今回も彼が帰還した際は、皆が目を見開くような策を持ち帰ってくるのだろうか。そんな彼に与えられた敬意と畏怖を込めた称号が今も生きている事を示すかのように。

「そうですか。副団長というのは案外……仕事がないのですね」

マイセルは自らを強引に昇格させた人物に澄んだ青い瞳を向ける。
「戦いになれば嫌でも活躍していただきます。それで……一年前の事は許します」

ハーミルはうつむく。

おそらく一年前を思い出しているのだろう。ハーミルの細い肩は震えていた。彼女が経験したのは敗戦だった。その戦場で彼女も皆と共に命を落とすつもりだった。だが、マイセルは、彼女を守る騎士はそれを良しとはしなかった。

だから、マイセルは彼女を戦場から連れ出した。そんな彼にぶつけられたのは深い怒りと憎しみだった。それはシスターが抱くべきではない汚れた心だった。

彼女の汚れた心を癒すためならば、マイセルは如何なる事でもやるだろう。本日も彼の口から漏れたのは償いの言葉だった。

「それで許されるのであれば努めましょう。出世にも地位にも興味はありませんが、ただ私が出来る事をこの国と……あなたのために」
マイセルは恭しく礼をする。

「お任せします。副団長殿」

シスターの第二位も恭しく礼をする。そんな彼女はすでに普段通りの彼女のようだった。

*

見上げた先は真つ白な天井。慣れぬ土地を歩き回ったせいなのか体が重い。だが、眠る訳にはいかずにノイアは半身を起こす。

招待された部屋は予想通りの狭さだった。部屋に置かれているのは部屋の右奥にベッドが一つ、そして、後は左に机が鎮座している。テーブルなどを置くスペースは皆無だった。他に目につくのはドアを開けて真正面に見える窓くらいだろうか。窓の隙間から漏れる風は肩が震えるくらいに冷たい。ベッドに載せられた毛布と分厚い布団がここまでありがたいと思つた事は、おそらく今までにないだろう。

何気なく部屋の観察をしていると、じつとこちらを見つめる視線が気になって仕方ない。本日この部屋で共に過ごすシエルの視線である。

どうも船でのやり取りのせいで嫌な距離感が続いている。シエルはいつも通りである。原因はノイアだ。これ以上は汚い所を見せまい、とシエルの瞳から逃げ続けている。それが納得いかないのか少女はじつとこちらを見つめているという事だ。合わせるまで視線を外す事はないのだろう。突き刺さる視線は言外にそう告げていた。
(そろそろ降参か)

ノイアは内心でつぶやく。そんな心の声すら伝わっていきそうで戸

惑ってしまう。だが、伝わっているのであれば隠すという事は無意味なような気がした。

ゆっくりと視線を右へ。すぐに澄んだ青い瞳と重なる。

「ようやく視線を合わせてくれた」

花が咲いたように笑うシエル。心底嬉しそうに見える。実際に嬉しいのだろう。

「ごめん。どうしても船での一件が気になってな」

つぶやいた瞬間に自分がどんな表情をしているのか気になった。もしかしたら泣きそうな顔をしているのかもしれない。

「どうして気になるの？」

少女は問う。ノイアという人物を理解するために。

「シエルに汚い感情を見せたくないんだ。私はお前に誇れる騎士になりたい」

右手を握ってつぶやく。手の震えを誤魔化すためだが、シエルは見逃してくれなかった。ゆっくりと立ち上がってノイアの右手を包む。

「ノイアは誇らしい騎士様だよ」

「シエル……」

少女の温かさがノイアの心を解していく。今なら何でも出来る気がしてしまうから不思議だ。

「凛々しいノイアも大好きだけど。私はもっと知りたい。良い所も、悪い所も」

シエルの言葉が全身を駆け巡る。頭が理解した時には自らの小ささに嫌気が差した。

「どうして？」

「私はノイアの一番の理解者になりたい。どんなノイアだって好きでいたい」

ノイアの質問にあっさりと答える少女。迷いが晴れたノイアは一つの言葉に全ての気持ちを込める。シエルになら伝わると思っから。「ごめん」

「うつん。これからは全部話してね」

うつむいたノイアに優しい声が降り注ぐ。

「ああ」

ノイアは少女の手から逃れて、代わりに抱きしめる。お互いに寄りかかる訳でもなく、お互いを理解して支え合える。これが隣に立つという事なのだろう。ノイアは今日この時に彼女の世話係を卒業できた気がした。それはノイアにとっては心から祝福できる事であり、それと共に一種の寂しさを感じさせる瞬間だった。

*

楽しげな声を耳にしたジュレイドは寄りかかっていた壁から背を放す。

「盗み聞きとは……あまりいい趣味ではありませんね」

低い声がジュレイドを威嚇する。

「少し心配だったんだ。必要ならフォローがいると思ってな」

鋭い視線をさらりと受け流して陽気な声を返す。

「そうでしたか。少しあなたを誤解していたようですね」

こちらの反応に驚いたのは一瞬。すぐに微笑を浮かべてザーランドはつぶやいた。

「構わんさ。まあ、そこまで心配でなければ……ここまで付いてこないだろ」

微笑を向ける相手に肩をすくめるジュレイドだった。

「どちらが心配なのですか？」

長髪の男はこちらに興味を持ったのか問いを投げ掛ける。
逡巡する事数秒。

ジュレイドは溜息をついてから口を開いた。

「両方かな」

「……両方ですか」

納得がいかないのか長髪の男は顎に手を置いて真顔で悩み出した。

この辺りはギルベルトに似ているかもしれないと思う。すぐに考え出す所などは特にだ。

「ああ。ノイアは無理ばかりしていてガチガチ。お姫様は純粹すぎるんだ。疑う事を知らない。こんな二人の側にいたら心配にもなるさ。俺がここに派遣されたのは何かの悪意を感じるな」

何度目かの溜息をつく。

「自ら引き受けたのではないのですか？」

ザーランドの質問は中々に痛い所を抉ってきた。本人に悪気はないのか先ほどとは表情は変わらない。常に真顔で話している。関わっていると疲れる部類の人間だと思えてならない。

「そうだ。ほっとけないんだよ、あの二人」

髪型が乱れる事も気にせずに乱暴に頭を掻く。それでも自らの甘さを心から追い出す事はできなかった。本当に彼女達に関わってから自分は変わってしまったと思えてならない。

「なるほど」

ザーランドはこちらにようやく微笑を向けた。どこか好意的で、親しみを感じる笑みだった。だが、この程度で解されるジュレイドではない。いい機会であるので聞きたい事を全て聞いて、その上で判断するのもいいだろう。

「聞いていいか？」

「この国の現状についてですか？」

こちらの聞きたい事を正確に予測して問いを発するザーランド。

先ほどまでの笑みは消え鋭い視線が向けられる。

「聞きたいのは二つ。一つ、どうしてこの地には緑がなくなったのか。二つ、なぜ戦争する必要があるのか」

人差し指と中指を立てて問う。ザーランドは一つ頷いてから口を開く。

「まずこの地に緑がないのは魔力を使用する事の副作用です。そして、戦争をする理由はこの地に緑が……作物が育ちにくい地となったからです」

「おいおい。魔力の副作用って……。自分達で好き勝手に力を使って自然を消したただけでは飽き足らずに他国まで侵略するのか。あまりにも勝手過ぎるだろう！」

思わず叫んでいた。ザーランドの言葉はあまりにも勝手過ぎる。常に陽気なジュレイドでさえ怒りが込み上げてくる。一般の者ならばさらに激しい怒りが生じるに違いない。

「お怒りはごもっともです。ですが……明日には食べる物が何もないかもしれない。そんな極限の状態に置かれればどんな手段でも取ります。それが人間です」

開き直ったような物言いだった。言いたい事は理解できる。だが、納得はできなかった。

「ハールメイツ神国としては許す事はできないな」

つぶやいて腰のホルスターに手を伸ばす。こんなにも早く交渉が決裂するとは思わなかった。もう少し話せると期待していた自分は確かに存在した。それが残念でならない。

「待って下さい！ 私はその愚かな戦争を止めたいのです。それは女王も同じです」

「それを信じると？」

必死な言葉に冷たい視線を向ける。殺気を放ち続ける瞳を受けても引かないザーランド。何が彼をここまでさせるのだろうか。そして、嘘をついているようには見えない。その姿がジュレイドを迷わせる。信じてみたいと思わせる。

だが、油断して命を落とす訳にはいかないのだ。疑い警戒するのがジュレイドの務めである。

「信じて下さい。せめて……女王には会っていただきたい」

ザーランドは頭を垂れる。今にも銃を引き抜こうとするジュレイドを目の前にしてもなお。

「分かったよ。続きはそれからだ」

ジュレイドは低くつぶやいて隣を通り過ぎる。信じたいが判断する材料がない。態度を保留にする。それがジュレイドが取れる唯一

の手段だった。

「ありがとうございます」

心からの感謝の言葉がジュレイドの心を再度揺さぶった。

*

微かな寝息を立てているのはシエル。ベッドが一つしかない事を良い事に身を寄せてくる少女。まるで一年前の甘えん坊の彼女に戻ったような気がする。甘えてきたり、成長した姿を見せたりと忙しい子だと思う。ノイアは苦笑して柔らかな黒髪を撫でる。

ザーランドの配下が見張っているとしても何が起こるかは分からない現在。ノイアは横にはなっているが眠るつもりはない。だが、何を警戒しているのか分からない。警戒する基準がないのである。魔力という力がどこまで万能なのか予測が出来ないからである。

襲ってくるなら窓だろうか。それとも正面からなのか。ノイアは瞳を閉じて意識を集中させていく。微かな音すら見逃さず、寄り添う少女を守り抜く。それが今のノイアに与えられた役割だった。

何事もなければそれでいい。

ノイアが短い思考を走らせた瞬間。微かな音を捉えた。それは天井で人が倒れる音だった。場所が正確に分からない所が悔やまれるが何かが起きようとしている。

「シエル」

眠る少女の肩を揺する。

「敵なの！」

シエルは慌てて半身を起こす。ただの聞き間違えであればそれでいい。だが、確かに自分は音を捉えた。

「端で障壁を」

ノイアは指示を出すと共に立ち上がる。

一つ深呼吸をしてすかさず剣を抜き放つ。月夜を浴びて光輝く騎士剣。情報が筒抜けならば敵はこちらを狙うだろう。ドアを背にし

たノイアは剣を強く握り締める。

いざとなればシエルのために人を殺める覚悟はすでにしている。だが、出来ればこの手を血で染めたくはない。騎士でもあり、シスターでもあった自分が持つ最後の葛藤だった。

「やはりこちらか」

ノイアは一つの影を見つめてつぶやく。

次の瞬間。

ガラスが割れる音と共に姿を現したのは黒いローブを纏った男。手には魔力を元に形成した光剣が握られている。

敵の光剣は触れた物を爆破させる力がある。無力化させたいが、迂闊に鞘で止める事はすらできない。ノイアにとってはもつとも忌むべき力なのかもしれない。

「ならば！」

叫ぶと同時に迷わず床を蹴る。相手が反応するよりも速く、一息で距離を詰めるノイア。相手が避けられるギリギリの速度で剣を振るう。

高速で降られた銀閃が漆黒のローブを切り裂く。慌ててバランスを取る相手を緑色の瞳が正確に射抜く。

刹那、短く息を吐くノイア。吐き出させる息と共に左手に握る鞘が追撃の一撃を放つ。

「ちっ……」

ローブの男が舌打ちを漏らして半歩下がる。その姿に余裕の笑みを向けるノイア。剣も鞘も当てるつもりはない。ただギリギリで避ける事が出来る一閃を放ち続けるだけだ。

絶え間ない銀閃に男は剣を振るう事すらできない。迫る高速の剣にまさに手も足も出ないのだろう。

永遠に続くかと思われる剣舞。付き合いたくはないだろうがノイアは逃がさない。だが、その舞は唐突に終わりを迎える。

「私の勝ちだな」

つぶやくと共に半歩下がるノイア。それと同時にドアが開く音が

耳に入る

「耳を塞いでろ」

余裕を感じさせる声が響いたと同時に轟音が部屋を満たす。大口径の銃から放たれた弾丸が敵の頭部に吸い込まれるように飛んでいく。

勝負がついたと思ったその瞬間。

甲高い音が部屋を満たす。それと同時に全身を針で突かれたような痛みが走る。弾丸は防いだのは一つの氷壁だった。

「外か！」

ノイアは叫ぶと同時に窓の外に素早く視線を走らせる。だが、敵の姿は見えない。

（天井にいるのか？）

ノイアが思考を走らせた瞬間、この場に魔力を持つ者がいる事を思い出した。疑いたくはないが、その可能性は捨てきれない。

「危ない！」

少女の叫び声がノイアを現実に取り戻す。不測の事態に動きが鈍ったノイアに光剣が迫る。剣でも鞘でも受け止められない一閃。避けるにしても間に合わないだろう。

「ノイアさん！ 私の力を受け取って下さい」

数瞬間に疑ってしまった者の声。ノイアは疑うよりも信じる道を選ぶ。どちらかしか選べないのならば例え愚かだと言われようと信じて。

渴いた音が部屋に響く。

次の瞬間、二つの光剣が激突する。互いの剣に秘められた力が衝突しているのか、閃光が室内を満たす。

一度、二度、お互いの剣が触れ合う度に閃光が瞬く。そして、三度目の閃光が瞬いた瞬間にノイアは勝負に出る。

「吹き飛ばせ！」

叫ぶと共に光剣が秘めた力を発動させる。舞ったのは光輝く刃だった。

「ジュレイド！」

役目を終えたノイアは叫ぶと同時に後方に跳躍。着地と共に銃声が轟く。ノイアの左腕すれすれを通過した弾丸が男の頭部を正確に貫く。

倒れる男を見る事もなくノイアは視線を窓の外へと向ける。残り
は一人か、二人かは分からないがこちらを狙う者はまだいる。

「油断しないで下さい」

ザーランドの緊迫した声が部屋を満たす。刹那、寒気が背を駆け
抜けた。

「来るぞ！」

ノイアは叫ぶと共に光剣を横薙ぎに振るう。視界を埋めたのは爆
砕される氷刃。触れた物を爆砕させる魔力を帯びた剣。だが、次第
に溢れんばかりに輝いていた光剣は光を失いつつある。力の消費が
激しいというのはどうやら本当らしい。

ノイアは左手に握る鞘を強く握り締める。最悪は鞘一本で叩き落
さねばならない。だが、その不安を一つの光が拭い去る。それは神
力を発動させる馴染み深い言葉だった。

「神聖なる神よ。我に守りの力を」

少女の声と共にノイアを包んだのは光の壁だった。寒空を切り裂
く氷刃を圧倒的な神力の壁が弾き返す。この障壁が形を保ってい
れば負ける事はない。だが、相手の姿が見えなければ勝機がない
のもまた事実である。

「ジュレイド、届く？」

ノイアは後ろを見ずに傭兵に問う。

「さすがに見えない相手には届かないな」

「では、ここは私が」

有効な手段を持ち得ない傭兵に代わって前に出たのはザーランド
だった。シエルの障壁を楯にしてゆつくりと手をかざす。

「第二師団長、ザーランド。同じ氷の刃にてお相手します」

涼しげな声が部屋を満たす。ノイアは溢れる冷氣に肩が震えた。

全身を針で突かれたような鋭利な寒気。放たれる殺気は戦い慣れた者ですら震えてしまうほどに強烈だった。

ザーランドが出現させた氷の刃は、先ほどから障壁を叩いている物とは比べ物にならなかった。ノイアが使う騎士剣とほぼ同じサイズはあるだろうか。

「せめて……楽に逝けますように」

声に反応して氷刃に力が伝わる。寒空を、力無き氷刃を、進む道に阻む物全てを切り裂く鋭利な刃だった。

時間にして数秒。一つ息を吐いて黒髪の魔術師は手を下ろす。

「終わったのか？」

ノイアは目の前の魔術師に問う。氷刃が飛んでこない所を見れば終わったのだろう。だが、実感が全くないのが現状である。

「ええ。確実に仕留めました。彼は良い人材でした。残念でなりません」

ザーランドはうつむいて拳を握る。

「まさか……彼は」

ノイアは銃弾で撃ち抜かれた男を見つめる。

「ここでも内輪揉めか。どこまで腐ってるのかねえ」

ジュレイドが苦々しくつぶやく。

「反論できませんね。まさか私が信頼を置く者の中に彼の手の者がいるとは思いませんでした。その可能性も考えなければいけないのですが……私は彼らを信じすぎていました。迂闊だったとしか言えませんね」

ザーランドの声はどこか寂しそうだった。信頼する部下すら疑わなくてはいけない。それは並大抵の精神力では勤まらないだろう。

「他の三人は……」

「こいつらに殺されただろうな。奇襲にて俺達を殺せるならそれで良し。失敗しても不審な目がザーランドへと向く。なかなか策士だな、敵は」

ノイアの言葉に答えたのは傭兵だった。一瞬でも疑ってしまった

ノイアは口を開く事はできなかった。この口で何を言っても無駄だ。事態をより悪くしてしまうような気がしてならない。

張り詰めた空気が部屋中を満たす。この空気にさせるのが相手の目的だとしても、一度不審に思えば止まらないのが人間というものだ。

そんな不快な空気を破壊したのは柔らかい声だった。

「ザーランドは助けてくれたよ」

二人に無垢な笑顔を浮かべて語り掛けるシエル。少女の青い瞳は今でも澄んでいた。疑いをもった汚れた瞳ではない。

「この状況で……まだ信じていただけのですか？」

ザーランドは心底驚いたのだろう、その声は震えていた。

元気よく頷いて応えるシエル。そんな彼女を見て二人は微笑む。

ノイアの心にはもう迷いはなかった。

「私も信じよう。助けられた事だしな」

ノイアは地に落ちた騎士剣を拾う。ザーランドの声を聞いて、咄嗟に騎士の魂とも言える剣を手放したのは信じなかったからだろう。その信頼に応えてくれたのは他でもないこの男だ。

「ノイアさん」

こちらへと視線を向けるザーランド。ノイアはゆつくりと視線を合わせる。

「もう一度言う。私はお前を信じる。そして、可能ならその力を貸して欲しい」

つぶやいてゆつくりと右腕を掲げる。

「何を……」

「いいから」

戸惑う魔術師に微笑むノイア。しびしびザーランドが同じように腕を掲げる。二人の腕が重なる。大陸マクシリアにいる友とよく行った、絆を友情を確かめる儀式のようなものだ。自然とブレイズと黒髪の魔術師が重なる。

「よろしく頼む。異国の友よ」

ノイアは漆黒の瞳をしつかりと捉えてつぶやく。

「光栄です」

ザーランドは微笑を称えて一つ頷いた。

*

雪原に立ち不適な笑顔を浮かべているのは黒髪の少女。その小さな身を包んでいるのは漆黒のドレスだった。白銀の雪が舞う寒空の中で、漆黒のドレスは自然と目に付くだろう。

だが、ドレスが霞むくらいに目立つ物を彼女は握っていた。

それは雪と同じ白銀色の柄を持つ一振りの大鎌である。そして、鋭利な刃物は色鮮やかな鮮血で濡れていた。

「これが魔力？ つまらないわね」

飛来する氷刃を大鎌で切り裂いてぽつりとつぶやく。もっと強大な力だと思っていた。だが、実際に目にした瞬間に興味が失せてしまった。あまりにも脆くて、あまりにも弱い。

少女はこの戦いにすでに飽きていた。自らの腕を動かすすら億劫だった。一つ溜息をつくと同時にまるで何かの手品のように大鎌が姿を消す。異様な存在感を放っていた禍々しい武器が消え、残ったのは可憐な少女。

それを好機だと勘違いした魔術師二人が氷刃を形成する。少女はゆっくりと右手を掲げる。

「さようなら」

少女は綺麗に笑う。まるで家族を見送るように。

次の瞬間。

この世の終わりでも見たかのような絶叫が寒空に響いた。

ただあなたを守りたい 騎士編 2（後書き）

読んでいただきありがとうございました。感想等をいただければ幸いです。

ただあなたを守りたい 騎士編 3

ただあなたを守りたい 騎士編

― 3 ―

身が震える寒気を感じて一度肩を震わせる。ノイアはその身に被さっている毛布を一度引く。

（……寒いな）

肩まで毛布がかかり寒気が若干引いたような気がする。だが、雪国の寒さがこの程度の事で和らぐ事はない。毛布の上に被さる厚い布団もこの寒さの前では十分とは言えないらしい。

とても眠れそうにないのでゆっくりと上体を起こす。突然の戦闘のおかげで窓を割られたノイア達は男性二人が使用する部屋で休んでいる。ベッドは二つしかないためノイアとシエルで一つを使用し、もう一つはザーランドが使用している。

「眠れないの？」

出来る限り音量を落とした低い声。

ノイアはゆっくりと視線を左へと向ける。左隣にあるザーランドが休むベッドのさらに奥。壁に背を預けて寝ずの番をしている傭兵がこちらを気にして声を掛けてくれたらしい。普段は陽気な彼だが襲撃が合っただけからは、どこか張り詰めた感じがする。

「ああ。代わるうか？」

ノイアは微笑んで問う。眠れないのであれば番をするのもいいだろう。だが、ジュレイドはゆっくりと首を左右に振るだけだった。

そして、有無を言わせない強い意志を込めた瞳を向けてくる。

「そうか。案外、真面目なんだな」

「言ってる」

ノイアの言葉に肩をすくめる傭兵。普段の陽気な彼に一瞬だけ戻

った気がする。その変化を正確に感じたノイアはゆっくりと口を開く。今なら答えてくれるような気がしたからだ。こちらだけ話したままなど納得がいけないという思いもあるのだが。

「なあ……」

「船の時の続き？」

ノイアがつぶやいた瞬間。ジュレイドはまるで心を読んだかのように的確に先を述べる。

「……ああ」

戸惑いつつ一つ頷く。

ジュレイドは微笑んでいた。初めて見る柔らかい笑みだった。

「俺は傭兵をして……もう十二年は経つな。ただお金が必要だったんだ。出来るだけ多くの金が必要……呆れるかもしれないが俺一人が十年以上は遊んで暮らせるだけは稼いだよ」

溜息をついて語るジュレイド。

「そのお金は……どうしたんだ？」

彼は宿を決める時に余計な金はないような素振りをしていた。それだけ稼いだのなら宿で一泊するくらい余裕ではないだろうか。

「全部使ったよ。長い長い親孝行のために。だが……もう終わったんだ。終わったんだよ」

ジュレイドはうつむいてつぶやく。長身の男の肩は不思議と小さく見える。その理由は彼が震えていたからだろう。

「……ジュレイド」

つぶやいてゆっくりと立ち上がるノイア。戸惑う茶色の瞳が重なる。

「必要なだけの薬は用意した。そんな俺が出来る事はもうないんだよ。生きる目的もない。だからいるんだよ、ここにな。彼女は……シエルは俺を必要としてくれる。そうさ……。ノイア、お前とは違う。人に語れるような立派な理由なんてないんだ。一番の年長者が笑えるだろう」

自嘲の笑みを浮かべる傭兵。そんな彼はどこか疲れきった顔をし

ていた。

「私にも人に語れるような立派な理由はない。騎士でありながら……私はシエルを守る事を最優先にしている。それは許される事ではない。ただの我がままだ」

ノイアはつぶやいて一歩進む。傭兵はこちらの行動が理解できないのか戸惑っているようだ。

「私達は同じだ」

「何が……？」

「結局はシエルがいなければ歩めない。だから守ろうとしている。私も……ジュレイドも弱い存在だ」

さらに一歩進むノイア。次の瞬間にはジュレイドを優しく包んでいた。

「……」

傭兵は何も答えなかった。動く事もなく黙って抱擁を受け止める。

「だから支え合う必要があるの」

ノイアは諭すように優しくつぶやく。この時だけは一年前のシスター見習いだった時に戻る。汚れない真っ直ぐな気持ちを伝えるために。

「そうだな。可愛げがなくなったと言った事は訂正するよ」

囁くようにつぶやくジュレイド。その声音はどこか優しかった。

「今さら言われてもな。それに……シエルの代わりに抱きしめただけだ。寂しいお前のためにな」

ノイアは抱擁を解いて一歩下がる。

「そうかい。でも……少し軽くなった。ありがとう」

つぶやいて瞳を閉じる傭兵。また寝ずの番を続けるつもりなのだろう。もう話す事はないと言外に告げているようにも見える。

「構わない。心を癒すのもシスターの務めだからな」

その言葉を最後にシエルが眠るベッドへと戻る。ジュレイドは何も言わなかった。それが気にはなったが、時が来ればまた何か話してくれるような気がした。

「おやすみ」

ノイアは一度つぶやく。傭兵は瞳を閉じたまま片手を上げて済ます。すでに普段通りの彼だった。安心したノイアは毛布に包まって瞳を閉じる。

（今なら眠れるか）

すぐに強烈な眠気がノイアを襲う。まどろみ始めたちょうどその頃。隣に眠る少女がノイアを抱きしめる。

「ありがと」

囁くような少女の声。どうやら起きていたらしい。何時から聞いていたのは分らないが、少し居心地が悪い気もする。何か悪い事をしていた訳ではないのだが。

「構わないさ。仲間のために……これくらいはしたい」

「うん」

シエルは一つ頷いただけで他には何も話さなかった。ノイアは守るべき存在をその手に抱いて深い眠りについた。

*

「今日の晩は異国からの客人が参ります」

涼やかな声音が王座の間に響き渡る。

王座の前で膝をつけて控えているのは第一師団長ゲベル・トイリス。この大陸一の光剣の使い手であり、いざ戦争となればこの国の兵の三割を動かせる権限を持つている男だ。フィッツベル王国を一つにまとめるに到った統一戦争では数え切れない武勲を上げ、実質は彼がこの国を動かしていると言っても過言ではない。

「今さらハールメイツ神国の使者に会う必要はないと愚考しますが」
ゲベルは面を上げる。鋭い視線を自らが仕えるべき王へと向ける。明らかな敵意を含む、睨むような視線。無礼極まりないが、それだけの事が彼には出来てしまう。三割の兵を動かせる権限を持つ彼だが、一度反乱を起こせば五割以上の兵がゲベルの味方をするだろう。

こちらに従う魔術師などザーランドが率いる第二師団くらいではないだろうか。

「いえ……ぎりぎりまで戦争は回避したいと思います。そのための手段を講じないなど恥でしかありません」

ノースは鋭い視線を真っ直ぐに受け止めて断言する。こちらは全く引くつもりはない。フィッツベル王国の女王は、最高権力者は自分であるのだから。

「そうですか。そこまでおっしゃるならば」

ゲベルはゆっくりと立ち上がる。

「無礼がないように」

ノースは屈強な男の背に言葉を投げ掛ける。彼は赤い絨毯が敷かれた道を大腿で歩いていく。左右に控える魔術師は去っていく。ゲベルと王へと交互に瞳だけを向けている。彼らの瞳から伝わってくるのは戸惑いだった。

「ふう……」

ノースは王座に小さな背を預けて溜息をつく。やはり自分には荷が重い。このまま彼が描くシナリオ通りに進んでしまうのだろうか。そう思えてならない。

「父上……ノースはどう進めばいいのですか？」

亡き前王に問う。表向きは統一戦争で死んだとされている父。だが、ノースとザーランドは暗殺されたと思っている。現在、権力を持っているゲベルによってだ。確かな証拠はない。だが、そう疑わずにはいらなかった。

誰かに答えて欲しいと願う。だが、その問いに答える者はいない。心細さを胸に抱いてノースはただ毅然と前を見つめる。形だけでも誇れる王であるために。

*

「動けない……」

少女の頼りない声が雪原に響く。

振り向くとシエルの膝は雪で埋もれていた。ちょうど深い部分に足をつっ込んだらしく、両足を引き抜くのに多大な体力を消費しているようだ。やはり背の低い彼女にとって深い雪原を踏破するのは無理があるらしい。その証拠に額にはびっしりと汗が浮かべ、もう限界だと顔に書いてあるようだった。

「この辺りは深いからな」

ノイアが地面を見てつぶやく。町を出た先に広がっていたのはまた雪原だった。だが、この雪原はイリース雪原とは比べ物にならないほどに雪が深く降り積もっていた。

「失礼」

ジュレイドがつぶやくと同時に疲弊した少女を両手で抱き上げる。
「ごめんね」

シエルは申し訳なさそうにうな垂れる。それと同時にどこか安心した表情を浮かべていた。

「いいさ。体が資本の仕事をしているからな」

ジュレイドは温かい笑顔を浮かべる。少女一人抱えたくらいでこの男が疲れるなんて事はないだろう。だが、両手が塞がった彼のために前に出る者が必要であるのは当然の事である。

「シエルは任せる」

ノイアはつぶやいて歩を早める。ジュレイド達の前に出て腰にある剣に触れる。

「ああ。初撃だけは防いでくれ」

背に掛けられる声にノイアは一つ頷いて警戒を深める。いつどの勢力が攻撃してくるか分からない現在。どれだけ警戒しても無駄にはならないと思う。

「今晚には着きます。それまでは気を抜かないで下さい」

最後尾を歩くザーランドが三人に声を掛ける。皆は一つ頷いて目的地へと着実に歩を進めた。

雪原を歩き続けて一時間が経った頃。

雪原にぼつりと見える小さな人影。雪原に入り初めて見る人影である。

「幻ではないようだな」

ノイアは人影を見てつぶやく。幻だと疑ってしまうほどに人がいない雪原地帯。この雪の深さは現地の人間でも警戒するレベルだという事が見に染みて分かった瞬間でもあった。

「こんな所で戦闘になるのは最悪だな」

抱えていた少女を降ろすと同時に傭兵が銃を腰のホルスターから引き抜く。咄嗟に銃を抜く所がいかにも彼らしかった。

「敵と断定は出来ないがな」

ノイアは鋭い視線を前方に向ける傭兵に倣い剣を引き抜く。だが、この動作は無駄に終わるのではないかと思っている。それは人影の正体を見ればすぐに分かるだろう。

こちらに向かって歩いてくるのは小さな少女だった。漆黒のドレスを纏った十代前半に見える可憐な少女である。こんな雪原を一人で歩くにはあまりにも奇妙に見えてしまう。

「警戒だけはして下さい」

ザーランドが雪原に配置されている水晶色の石に力を伝える。魔力に反応して光が雪原を満たしていく。

淡い光に照らされた少女は、愛らしい笑顔を浮かべて恭しく礼をする。たまたま雪原を歩いていたという事ではないらしい。刺客なのか、王城からの伝言があるのか。

「お前は何者だ？」

ノイアは皆を代表して問いを放つ。

「名を問うのであれば……そちらが先に名乗りなさい」

少女は表情をそのままにつぶやく。

「……すまない。私はノイア・フィルランドだ」

自らの非礼を素直に詫びて名乗るノイア。

「ノイアね……。なら、見せてもらいましょう。神力という力を」

少女は両手を左右に伸ばす。

刹那、空間が歪む。

「踊りなさい、マリオネット」

少女の理解し難い言葉。だが、少女の目的ははっきりと分かる。

「ジユレイド、ザーランド。敵だ！」

ノイアは叫んで後方に跳躍。それと同時に神力を解放する。

二度、障壁が何かに衝突して閃光を上げる。着地と同時に見つめた先にはまた理解に苦しむ物が存在していた。

「人形？」

障壁を叩いたのは木で出来た人形だった。人形劇で使用されるような、糸で吊るされて操られるマリオネット。人形の上空には禍々しい門が開き、そこから垂らされている糸で操られているのだろうか。表情のないデク人形はどこか不気味で視線を外す事ができない。「初撃は防ぐんだね、ノイア」

友人に挨拶するかのような親しみを込めた声が耳に届く。マリオネットに視線を奪われていたわずかな時間。その間に少女は間合いを詰めていた。

それを合図にしたように振り下ろされる人形の腕。

響いたのはガラスが割れるような音だった。マリオネットが作った道を少女は潜り抜けて手に持った大鎌を振り下ろす。高速の銀閃がノイアの視界を埋める。

「初撃だけだと思うな！」

叫ぶと同時に騎士剣を振り上げる。舞ったのは激しい火花。少女が驚く暇も与えずに一息で吹き飛ばす。

「援護を！」

ノイアが叫ぶ。

刹那、少女を銃弾と、氷刃が狙う。少女の背後には光輝く障壁が退路を塞いでいる。シエルの障壁だろう。

「へえ……面白い」

体勢を整えた少女は薄っすらと微笑む。それと同時に手に持った

大鎌が滑らかに動いた。

幾重にも渡る銀閃。退路を塞がれた少女はいとも簡単に銃弾と氷刃を凌いでみせる。

だが、この程度は予想の範囲内である。ノイアは鋭い瞳を少女へと向けて疾走する。

「人形遊びに付き合う暇はない」

言葉と共に渾身の力を込めて騎士剣を振り上げる。ノイアが狙ったのは少女の銅である。触れれば致命傷となる一撃。その一撃を防いだのは少女の操り人形。自らの体が崩れる事も恐れない意志無き人形だった。その姿はただシエルを守る事だけを考えている自分と重なる。

だが手を抜くつもりはない。すかさずノイアは横薙ぎの一閃を放つ。マリオネットの銅を正確に切り裂く。銅を両断されたマリオネットは力を失って雪原に崩れていった。

「ふふ……」

迫るノイアを見て不敵に笑う少女。余裕すら感じさせる楽しそうな笑みだった。背に寒気を感じたノイアは直感を信じて右に跳躍する。

「残念」

少女の楽しそうな声。

着地と同時にノイアが跳躍した地点に素早く視線を向ける。その場に立ち尽くしていたのは一体のマリオネット。咄嗟に右に飛ばなければ背を殴打されていただろう。

（かなり戦い慣れているな。どうすればいい？）

ノイアは荒い息を整えると共に思考を走らせる。遠距離の攻撃は手に持った大鎌が全て防いでしまう。逆に接近戦を挑めば、身が碎ける事も厭わないマリオネットが進路を塞ぐ。

どれだけの人形を所持しているのかは分からない。だが、これで終わりとはとも思えない。それは少女の余裕に満ちた笑顔を見れば容易に想像できる。

「もう終わり？ 私はそれでもいいけど」

少女は漆黒の瞳をノイアへと向ける。

「私達は王城に向かいたいただけだ。戦う意志はない。何がしたい？」

ノイアは少女に問う。少女は隙無く大鎌を構え、しばし逡巡した。

「魔力……それに神力という力に興味があったの。ただ刺激が欲しいだけよ。戦う事が私の全てなの」

少女はただ戦いを楽しんでいただけらしい。

ノイアには理解できない感情だった。ふつつつと怒りが込み上げてくる。

「自らの退屈凌ぎのために……人を殺めたのか！」

ノイアは叫んでいた。この少女が自分達以外にも刃を向けたのは簡単に想像できる。理由もなく、意志もなく殺された人間を思えば許す事などできない。

「だって……弱いんだもん」

少女は可笑しそうに笑う。笑ってはいるが少女の大鎌は殺気を放ち続けている。隙あらばノイアを、皆を殺すつもりなのだろう。

「貴様！」

気づいた時にはノイアは地面を蹴っていた。込み上げてくる感情に任せて剣を強く握る。

激情するノイアとは逆に少女の瞳は冷たく細められる。何か企んでいるのだろうか関係ない。彼女みたいな存在は許してはおけない感情に任せての疾走。剣を握る手にはもう迷いはなかった。鋭い視線が見つめる先で少女は左手を前方に向ける。

少女の求めに応じて現れたのは三体のマリオネット。

「どけ！」

ノイアは叫ぶと共に先頭にいる人形の銅を切り裂く。碎けて舞う木片の隙間から垣間見える少女を、貫くような視線で見つめる。左右から迫る人形に視線は移さない。

ノイアが再度疾走するために力を込めると同時に左右の人形が碎け散る。男性二人の援護に感謝して雪原を駆け抜ける。

進路を塞ぐ物はもう存在しない。ノイアは鞘を捨てて両手で剣を握る。渾身の力を込めて振り上げようとした瞬間。

「遅いわ」

少女の冷たい声が響く。高速で駆け抜けたのは少女の大鎌だった。避ける事も、障壁を展開する事もすでに間に合わない。まさか速さで負けるなんて思ってもいなかった。ただ人形を扱うだけの存在ではない事は分かっていたのだ。それを失念させたのは溢れる怒りの感情だった。

覚悟を決めた瞬間。一つの閃光がノイアの視界に映る。ノイアを包んだのは温かさを感じさせる障壁だった。

「ノイア！」

自分を守ると決めた少女の声。燃え上がるような怒りは一瞬で冷めていく。冷静さを取り戻したノイアは一度距離を取ると同時に少女の追撃を警戒する。

だが、少女は追撃をする事はなかった。

ノイアは不審な瞳を向ける。それを合図にするように少女は手に握った大鎌とバラバラになったマリオネットを、まるでその場に存在しなかったかのように消した。

「なんだ？」

ノイアは理解出来ずにつぶやく。少女からは溢れる殺気はもう感じない。むしろこちらに心を開いたかのような温かい視線を向けてくる。

「ただ殺すよりも……戦うよりも、もっと楽しそうな事を思いついたわ」

少女はゆっくりとノイアに近づいてくる。

「止まれ！」

ノイアは剣を向ける。理解できない相手というものが、ここまで恐ろしいと感じるとは思わなかった。震える肩を叱咤して少女を見つめ続ける。

「もう攻撃しないよ」

少女は楽しそうに笑い、近づいてくる。

男性二人も判断を迷っているのか少女に攻撃する事はない。

「あなた達と共に歩む方が楽しそうだわ」

少女はノイアに小さな手を向ける。その手を怪訝な瞳で見つめるノイア。

「自らの楽しみのために武器を取る者とは一緒に歩めない」

ノイアは鋭い瞳を向けたままつぶやく。少女と握手をする事は当然ない。

「もうしないわ。ただ……あなた達の命を狙う者がいるのなら排除してあげるわ」

少女は強引にノイアの右手を両手で包む。

「心を改めると……？」

ノイアは問う。少女は笑顔で頷く。

この少女が何を考えているのか全く分からない。油断して背を向けた瞬間に攻撃を仕掛けてくるようにも見えるし、純粹にこちらに興味を持ったようにも見える。後者だとしてもその理由が分からない。理由などなくてただ感情で動いているとも言うのだろうか。

ノイアは判断を求める視線を三人に向ける。

「ノイアさんに託します」

最初に答えたのはザーランドだった。ジュレイドは無言で首を横に振る。保留が一、反対が一。

「シエルは？」

ノイアは彼女に全てを託すつもりで問う。重荷を背負わせてしまいかもしれないが、シエルが決めた事であれば従える。返ってくる言葉はだいたい想像できているのだが。

「私は信じるよ。例え裏切られたとしても」

シエルは微笑んで少女を見つめる。

「分かった。だが下手な事をしてみる。すぐに斬る」

ノイアは少女の手を振りほどいて背を向ける。早足で歩いて地に落ちた鞘を拾う。

「安心して。あなたに興味が沸いたから……飽きるまでは絶対に裏切らないわ」

少女は花が咲いたように笑う。まるで毒がないような、穢れを知らないような綺麗な笑顔。今まであれだけの殺気を放っていたとは、とてもではないが思えない無垢な姿だった。

「そういえば……名は？」

結局ノイアだけしか乗っていない事に気付いた。

「錬^{レン}よ。よろしくね」

錬は右手でピースを作って元気良く挨拶。

「はあ……」

ノイアは自然と溜息が出してしまった。三人の攻勢を凌ぎきった彼女が力を貸してくれるのは素直にありがたい。だが、素性がまるで分からない事は不安に思わずにはいられない。神力も魔力も使っている様子はなかった錬。ならばあの操り人形はどんな力で動いているのだろうか。

思考に没頭していると左肩を優しく掴まれる。

「今は王城へ」

ザーランドが進むべき道を右手で示す。歩きながら考えるという事なのだろう。

「分かっている」

ノイアは一つ頷いて王城へと足を向けた。

*

二頭の馬がクレイア街道を走る。

「懐かしいな」

無造作に生えた草を見つめてブレイズはぼつりとつぶやく。一年前に皆で進んだ道。自分達の最初の旅路だった場所である。

「ふふ……ジジイと一緒にではつまらないですか」

左隣を走るギルベルトは薄い微笑を浮かべてこちらに視線を向け

る。

「いえ……まさか護衛に選んでいただけとは思ってもいませんでした」

「すみませんね。隊長クラスの者を護衛に選ぶなど……そんな権力は一介の騎士にはないのですが」

嬉しそうに話すブレイズに、老齢な男は申し訳なさそうにつぶやく。

「グリア連合国……下手に刺激すれば戦争に突入する国です。他の者には任せられません」

部下に任せるのも隊長の仕事ではある。だが、信頼に値する者が国外に出ている現在では人選が難しかったのだ。ならば自分で行くしかないというのが、ブレイズが決めた決断である。

有事の際は団長と副団長がいる。自分一人が動けなくなろうと何問題はないだろう。

「ノイアさん達が国外に出ているのは問題ですね。明らかに手駒が不足しています。その上で私達まで動くのは賢いとは言えません。ですが……グリア連合国の真意をどうしても確かめたいのです」

軍神は遠い目をする。おそらくグリア連合国を見つめているのだろう。

「賢王か……」

ブレイズはつぶやいて遙か遠くを見つめる。この場からは見えないうが確かに存在している国。その国を納めている賢王の強大さは一年前にこの身でしつかりと味わったブレイズである。

「この大陸に招き入れて殲滅するつもりなのか……本気でハールメイツ神国を潰しに来るのか。どちらなのです」

ギルベルトは問うようにつぶやく。

ブレイズは悩む軍神の横顔を見つめる。だがすぐに視線を外す。軍神が予測できない事を自分が分かる訳がないのだ。ならば出来る事をやろうと思う。この命を懸けて軍神を送り届ける。そして、必勝の策をハールメイツ神国に伝える事が自らの任務である。ブレイ

ズは心を切り替えて手綱をしつかりと握った。

*

「ここが王都か……」

ノイアは城門に辿り着いた瞬間に全身の力が抜けた気がした。もう動く事すら億劫である。今すぐにでもベッドに横になって休みたい。

「ノイアは体力がないのね」

隣で微笑む少女。見上げた先には操り人形の腕に抱えられた鍊がいた。

「……そんな楽をしている奴に言われたくはない」

ノイアは鋭い視線を向けて、苦々しくつぶやく。

「ふふ。力は有効に使うべきものよ」

鍊は不適に笑い操り人形を消す。支えを失った少女は重力に従って落下していき、渴いた着地音が響く。

「さあ、行きましょう」

ノイアの手を引いて歩き出す少女。その姿は歳相応の少女だった。

「行こう、ノイア」

次の瞬間にはいつの間にか右隣にいたシェルが手を引く。

「おい。待て……引つ張るな」

ノイアは両手を引かれてぎこちなく歩いていく。バランスが取りにくい事この上ない。好意を持たれるのはいいのだが、もう少しこちらの事を考えてほしいものである。だが、少女二人はお構い無しに未知なる王都へとノイアを引張っていく。背後からはノイアを見守る男性二人の温かい視線を感じる。

（頼むから……どちらか一方の面倒をみてくれ）

ノイアはそう思わずにはいらなかった。ふと握られた右手が強く握られる。右隣を歩く少女にゆっくりと視線を向ける。

「ここが……王都なんだね」

シエルは瞳を輝かせていた。見る物全てが新鮮なのだろう。その楽しそうな横顔を見ていると疲れが薄れていく気がした。

余裕を取り戻したノイアは、瞳を輝かせている少女の視線を追っていく。

なだらかな坂が真っ直ぐに伸び、左右には賑わいを見せる商店街が広がる。毛皮のコートなどを売る衣類の店、温かそうなスープを売っている店など、どこも賑わっていた。

少女二人は楽しそうに店を見渡す。無邪気な二人に手を引かれて坂を上りきった先。平らな円形の広場の中心には一つの石碑があった。石碑に刻まれていたのは何かの文字のようである。

「名前……？」

ノイアは文字を注意深く見つめる。幸いこの大陸の文字は読む事が出来る。シスター見習いの時に習った事の結果がこんな所で役に立つとは思ってもみなかったノイアである。だが、解読出来たとしてもなぜ王都の中心にこんな物があるのか。その答えは分からなかった。

「それは……統一戦争の際に散った高名な魔術師の名です」

追いついてきたザーランドが口を開く。振り向いて彼の顔を見つめると、どこか悲しそうな表情を浮かべていた。おそらくこの石碑に知っている者の名前があるのではないだろうか。

「それでも……また戦うんだね」

ノイアは少女二人の手から逃れて石碑に触れる。彼らは何を思っている戦いに望んだのだろうか。家族の無事、それが大切な人を守るためだったのだろうか。それが自身の欲を満たすためだったかもしれない。どちらにしても悲しい事であるとノイアは思う。

「この石碑は戦いの愚かさを示すために……ノース様が立てられた石碑です。戦いに向かう心をこの石碑が諫めるようにと」

ザーランドの落ち着いた声が沁みていく。

「戦いを止めたい……そう願う女王か。ぜひ会ってみたいな」

ノイアは期待に満ちた視線を王城へと向ける。

「一緒に止めよう！」

シエルが胸の前で拳を握り力強く宣言する。

「入った先は……敵地かねえ」

「すみませんが……それも覚悟して下さい」

肩をすくめるジュレイドに、淡々とつぶやくザーランド。

「危険は元よりも承知だ。それでも戦いを止めたいから……ここにいる」

ノイアは振り向いて二人の男性を見つめる。

「やれやれ思い切りがいいねえ。なら行きますか」

ジュレイドは微笑んで歩を進める。皆は頷いて王城へと続く真つ直ぐな道をひたすらに進んで行った。

*

「そろそろですね」

ノースは薄っすらと瞳を開く。彼らが王都ローベルクに入ったという報告はすでに受けている。彼らがどこにも立ち寄っていないのであればそろそろ到着する頃だろう。

王座からゆっくりと立ち上がった女王は、床に敷かれた赤い絨毯を踏みしめながら進んでいく。左右に控える魔術師が膝を床につけて頭を垂れていくのを視界に収めながら緊張した面持ちで歩んでいくノースである。本来であればここで待っていればいいのだが、どうしても急ぐ気持ちを抑える事ができなかったのである。

時間にして数十秒。

目の前に広がるノースの身長のはあるドアに手を掛ける。ゆっくりとドアを開けて、下る階段に一步を足を進めた所で一つの集団が目に入った。正確に言えば、彼らの先頭を歩く金髪の騎士の瞳が視界に飛び込んできたのだ。

迷うという言葉を知らないような力強い緑色の瞳だった。ノースの揺れた瞳とはまるで違う。これが歩む事を許された者の瞳なのだ

と直感的に感じる。その瞬間に体が固まって動く事ができなかった。
「ノース様、ただいま戻りました」

ザーランドの言葉が耳に入ったが反応する事ができなかった。それだけ先頭にいる騎士の瞳は力があつたのだ。

「私がどうかしましたか？」

金髪の騎士がこちらに問う。その瞬間に心臓が一度跳ねる。

「い……いえ。申し訳ありません。私は……フィッツベル王国の女王……ノース・ロウ・フィッツベルです」

纏ったドレスのスカートを軽く挙げて会釈する。

「私はハールメイツ神国の騎士、ノイア・フィルランドです」

騎士が胸に手を当てて会釈を返す。その後にそれぞれが挨拶をしたような気がしたが、頭には入らない。王としての威厳を示すなどという事はすっかり頭から抜け落ちていた。

「ノース様……？」

ザーランドが眉根を寄せてこちらを見つめる。その姿を見てはつとしたノイスはすぐに平静を取り戻す。

「お疲れでしょうから……まずはお部屋に。着替えを用意しますから、その後は食事でもしながら話しましょう」

ノイスはようやくそれだけを言う事ができた。

「感謝します」

ノイアと名乗った騎士が一度会釈をする。

「私が案内します。よろしいですね？」

「ええ」

ザーランドの言葉にぎこちなく頷く。まるで自らが人形みたいだとノイスは思う。それだけ不自然だった。ザーランド以外は特に気にした素振りは見せていない。だが、これでは王として失格である。彼らが去るのを見送って数秒経った時に女王はゆっくりと口を開く。

「あれだけ強い意志を持った方なら……この国を変えられる。それに比べて私は……」

自嘲の笑みを浮かべてノースは強く拳を握った。

＊

「着いたようだな」

冷たい声が部屋を満たす。耳にするだけで悪寒がするような不気味な声だった。声を発したのは窓際に座る細身の男である。月明かりに照らされたこの男は、不気味な声も相まって浮世離れして見えてしまう。神か悪魔か。人という概念を超越したように見える彼は視界に収めるだけで体が震えてしまう。

「ああ。今は部屋で着替えているだろう。彼らにはこの国に来た所で、無駄だという事を教えてやる必要がある。ただ……情報にない少女が加わっているのが気にはなるが」

腕を組んでゲベルはつぶやく。一度ならず、二度も刺客をやり過ぎた彼ら。それに加えて正体不明の少女まで同行している、という事にゲベルは少なからず不安を覚えずにはいられない。

「あれは……ただの失敗作だ」

窓際に座る男は淡々とつぶやいた。

ゲベルは眉根を寄せる。人をまるで物のように言う男。知り合つてすでに数ヶ月は経つが、今でも何を考えているのかまるで理解できない。それゆえにゲベルは問う。

「失敗作とは？」

ゲベルの声を聞いて細身の男はゆっくりと立ち上がった。ゲベルは震える体を叱咤して男の言葉を待つ。

「言葉通りだよ。私が作り……そして、捨てた。彼女はただの人形だよ」

男は表情を変えずにつぶやいた。何の感傷もなく淡々と事務的に語るだけ。表情から読み取ろうと努めるが、それは無駄な労力に終わった。

「人形……。警戒する必要はないと？」

「ああ。それよりも早く戦争を始めてくれたまえ」

返答は簡単なものだった。あまりにもあつさりと語る彼の言葉はなかなか頭に入ってこなかった。言葉を返さないゲベルに男は一度溜息をつく。

「そんな事で勝てるのか？ 敵はそんなに甘くはないぞ」

男は興味が失せたのかつぶやくと同時にゲベルの右横を通り過ぎる。慌てて振り向いた時には男はドアノブに手を掛けていた。言葉を掛けなければそのまま去ってしまうような。そんな背中だった。

「必ず勝つ……そして、俺は王になる！」

ゲベルは慌てて去り行く背に向けて叫ぶ。王になるためなら、この怪しい男すら利用すると心に決めている。他国への侵略という大罪をも背負う覚悟である。

「そうか。ならば……私も力を貸すでしょう」

男はついに一度も振り向く事なく言葉だけを残して去っていった。

*

「私のドレスがないのだが」

ノイアは用意された衣類を見つめる。テーブルの上に並べられているのは色鮮やかなドレスである。だが、サイズが明らかに小さいのだ。シエルや鍊が着るには問題なさそうだが、ノイアには明らかに小さすぎるのではなからうか。

「もしかして……これ？」

シエルが手に取ったのは男性用の燕尾服だった。

「さすがに。それはないだろう」

苦笑いを浮かべて夜の最上級の礼服を手取る。冗談のつもりで体に黒のスーツを合わせる。

「ピッタリじゃない」

鍊が可笑しそうに笑う。

指摘通りにサイズはピッタリである。ノイアの身長は百六十センチ

チ前半である。男性と比べれば小柄な部類に入る。自然と導き出される答えは二つである。一つ、ノイアを男性と間違えた。二つ、あえて男性用の礼服を用意したという事だろう。後者だというのは、これを着るといふのだろうか。今さら女性らしくか弱く振舞うつもりはさらさらない。だが、これはあまりの仕打ちではなからうか。

「き……着てみて」

シエルが頬を朱色に染めて期待した眼差しを向ける。

「うーむ。ヒラヒラした物よりかは動きやすいのだろうか」

ノイアは男性用の礼服を見つめる。期待した少女二人の視線がどうもくすぐつたい。

「はあ……」

ノイアは一度溜息をついてしゅしゅ着替え始める。これから食事に招待されるのに軽装を纏って参加する訳にはいかない。服がこれしかないのであれば着るしかあるまい。

「ドレス……綺麗」

溜息をつくノイアとは別に鍊の手伝いを受けてドレスアップしていくシエル。飛び跳ねる勢いで喜ぶシエルを見られるのは嬉しいが、どこか切ない気持ちがふつふつと沸いてくる。

（神よ……あなたはどこまで私をお嫌いなのですか……）

心の中で悲しくつぶやく。だが、天からの声など返ってくる訳はない。再度、溜息について男装するノイアだった。

*

「こんなもんか？」

鏡を見ながら同室にいる魔術師に問う。夜の礼服を身に纏い、先ほど茶色の髪をアップさせたジュレイドである。こんなしっかりした服を着る事があるとは思わなかった。

「だいたいイメージが変わりますね。いいのではないですか」

部屋の奥にあるベッドに腰掛けているザーランドが微笑む。この人物が嘘を言うようには見えないので、一応はまともには見えるらしい。

「ま……こんな汚れた手で小綺麗な服を着ても無駄かねえ」

こんな皮肉しか言えない自分は本当に曲がっているとは思う。だが、本音でもある。今もせっかく豪華な食事に招待されたというのに、手には大口径の銃を持っている。

「その物騒な物は必要ですか？」

ザーランドの溜息交じりの声が切なく響く。その声はどこか残念そうだった。

「悪いな。これがないと……落ち着かないんだ。お守りだと思ってくれ」

つぶやいて背のベルトに銃を挟む。そして、漆黒のジャケットで隠す。

「仕方ありませんね。ここは大目にみます」

「悪いねえ」

男性二人はお互いに微笑を称える。言葉を交わさなくても分かるお互いに少しずつ信頼している事が。どうかこの信頼が崩れませんように、ジュレイドはそう強く願った。

*

赤い絨毯が敷かれた通路を落ち着いた足取りで歩く少女達。

そんな少女達を見た者の反応は分かりやすかった。愛らしい姿に溜息をつく、または驚愕の表情を浮かべてまじまじと見つめるという二種類である。

（穴があるなら入りたいな）

ノイアはそう思わずにはいらなかった。着心地は決して悪くはない。この姿で剣を振れと言われれば可能だろう。その点においては何の問題もない。

だが、所詮は男性が纏う礼服だ。それを女性である自分が纏う事による奇異の視線に耐えられない。慣れてしまえばどうという事はないのだが。

「やはりいいな。かつこいい……凜々しいよ、ノイア」

右斜め後ろから熱の入った声が届く。両手を朱色に染めた頬に触れてつぶやくその姿はまるで恋する乙女。どこかで育て方を間違えただろうか。女性である自分にそんな瞳を向けるのは元世話係としては心配で堪らない。

「ふふ。本当に悪くないわよ、ノイア。いつそ男性になったら？」

鍊は心底楽しそうだ。

「私は女だ！」

左斜め後ろを鋭く睨む。

「レディーはそんな事で叫びませんわ」

ドレスの裾を摘まんでわざとらしく丁寧な口調で話す鍊。

まさしくその通りであるので言い返す事ができない。だが、不思議と鍊に言われると嫌味を感じない。どこか大人の余裕すら感じるからだ。

「まあ……いいか」

ノイアは本日何度目かの溜息をついて通路を進む。

指示された部屋に辿り着くには数分と掛からなかった。四メートルはあるう巨大なドアの背に体を預けて待っていたのはジュレイドだった。

「ザーランドは？」

姿の见えない人物を求めて第一声を発するノイア。

「中にいるよ」

ジュレイドはドアを左手の親指で示す。それからゆっくりと背をドアから放す。

「そうか。何か怪しい所は？」

「ない。ザーランドの所属している第二師団の魔術師が固めているみたいだ。中にはゲベルとかいう奴の刺客がいるかもしれないが、

「これだけ周囲を固めれば安心だろう」

ジュレイドが一度瞳を閉じて気配を探る。

ノイアも先ほどから複数の視線を感じている。見張られる視線と、張り詰めた視線の二つだ。前者がゲベルの刺客、もう一つはザーランドの部下だろう。後者の方が多いのは確かだろう。

「なら…… ゆっくりとご馳走になれそうね」

鍊は笑顔でドアへと向かう。その背を追いかけていくシエル。青い瞳が一瞬だけ傭兵の視線と重なったように見える。

「お姫様はいつにも増して可愛いねえ」

ジュレイドがつぶやいて黒髪を撫でる。シエルの心を正確に読み取って言葉を掛けたのだろう。

「えへへ。そうかな」

シエルは満面の笑顔でつぶやく。立ち止まり嬉しそうに自らの水色を基調としたドレスを見つめる。

「ああ」

ジュレイドは優しい笑顔を浮かべる。どうやら昨日の迷いはもう晴れたらしい。

「なら…… 良かった。行こう、ノイア」

シエルが左手を差し出す。

「分かりました。姫様」

ノイアは姫をエスコートする騎士のようにそつと少女の手を取る。シエルは幸せそうに笑う。その笑顔が見られるだけでこの服を着てよかったと思うノイアだった。

ただあなたを守りたい 騎士編 3（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

感想、メッセージなどをいただければ幸いです。

ただあなたを守りたい 騎士編 4

ただあなたを守りたい 騎士編

— 4 —

「どうぞ。お掛け下さい」

耳に心地良い声が来客用の部屋に響く。声に導かれて視線を向けると、淡い黄色のドレスを身に纏った若き女王が柔和な笑顔を浮かべていた。

「では、遠慮なく」

先頭を進んでいくのは鍊だった。貴族の食事に呼ばれたというのに物怖じしている様子は全くない。先ほどから緊張して喉が乾ききっているノイアからすれば、その勇姿には感動すら覚えそうである。（このまま棒立ちしている訳にはいかないか）

一度深呼吸をする事で心を落ち着かせるノイア。

一步を踏み出した所で視界に入ったのは部屋の中央にある真っ白なテーブルクロスが敷かれた横長のテーブル。そして飾りがついた豪華な椅子が五つ、向かい側にも同じように五つあり合計で十個あるだろうか。

（思ったよりも狭いか？）

決して口に出すことは出来ないが、それがこの部屋から感じた第一印象だった。

首都クロイセンにも似たような部屋はあるが、並べられた椅子は二十以上あった気がする。単純に比べていいのかは疑問ではあるが、大陸を一つにまとめた国にしては規模が小さいのではなからうか。

「あれは……なに？」

小首を傾げて壁面を指差したのはシエルである。少女が指差した壁面には無機質な岩が真四角に積み上げられた何かがあった。

「それは暖炉というらしい。あの中で木材を燃やして暖をとるんだとき。ここでは雪原に散りばめられていた岩を砕いた物を使うらしいな」

説明をしたのはジュレイドである。

暖炉と呼ばれた物の中には、真つ赤に燃える透明な石が敷き詰められていた。煌々と輝く真つ赤な石を見ているだけで自然と体が温まってくような気がするから不思議である。

「この国は寒いからね」

シエルは暖炉に興味があるのか、うつとりとした瞳を向けている。可能であるならば暖炉の前に腰を下ろしてのんびりと過ごしたいのだろう。

「シエル」

暖炉に向けて歩いていつてしまいそうな少女に一声掛ける。それと同時に軽く手を引く。寒いのが苦手なノイアには彼女の気持ち痛みくらいに分かる。だが、今は女王との対話を第一にしなければならぬだろう。

「まずはやることを……ちゃんとしないとね」

シエルは残念そうに一瞬だけ表情を曇らせる。だが、すぐに表情を引き締めて一步を踏み出した。

皆が席についたのを確認した女王は一度頷き、自らも豪華な椅子に腰掛ける。

「なかなか楽しい方々ですね」

女王は右側に座ったザーランドへと微笑みを向ける。

「そうですね。彼らとは国も、戦争も関係なく関わってみたいと思いますよ」

そう語るザーランドの表情はどこか寂しそうだ。正面に座っているノイアには魔術師の表情が、その心境がはつきりと分かる。国も利益も関係なく、ただ純粹に親しくしたいと願う真摯な想いがはつきりと伝わってくるのだ。その想いにすぐにでも応える事ができない事がノイアには齒痒くて仕方がない。

現在も個人で十分に戦えるジュレイドを左端に、同じく腕が立つ錬を右端に置いて左右を固め、有事の際に備えてノイアがシエルの左隣に座っている。こんなあからさまな座り方をすれば警戒していると思われるも仕方がないだろう。特にこちらの腕前を知っているザーランドが無意識のうちに残念だと思っるのは容易に想像できる。

「話もいいけれど……食べましょう」

錬は溜息をついてテーブルに並べられたディナーを見つめている。「これだけしか用意出来ずに申し訳ありません」

女王は一度溜息をついた。

用意されたディナーは、半分に切られたステーキがメインで、あとは見た目が硬そうなパン、唯一多いのはガラスの容器に入れられたサラダくらいだろうか。客人に出すディナーとしては明らかに少ない。だが、おそらくこれが精一杯なのだろう。

「魔力の副作用か。そんなに酷いの？」

ジュレイドは鋭利な瞳をフィッツベル王国の二人へと向ける。二人の反応は見るからに違った。女王は殺気すら感じそうな瞳に怯え、ザーランドは向けられる殺気も怒りも全て受け止めて、涼しげな瞳を代表で口を開いた傭兵に向けている。

「ええ。このままでは二年もすれば、国を存続する事は出来ないでしょう」

額に細い指を触れさせて溜息をつくザーランド。

「二年か。ここまで疲弊する前に動けなかったのは……この大陸を統一するためですか？」

ノイアは出来る限り柔らかい微笑を浮かべて女王に問う。警戒されてばかりでは話が聞けない。彼女をとりあえず落ち着かせる事を目的とした微笑みである。こんな事をせずともザーランドに質問すれば全て答えてもらえる。だが、聞きたいのは女王の本音だ。それが聞けなければ何も始まらない気がするのだ。

「ええ。この大陸の緑が年々減少しているのは分かっていました。ですが……そんな状態でも各々は自国の繁栄のために各地で戦争ば

かりをしていました。私の父であり、前王はその事実には嘆き統一に向けて動いたのですが……」

女王はそこで言葉を切った。

「戦死した……というよりは暗殺されたな。例のゲベルとかいう男に」

頭の上で手を組みながらジュレイドが淡々とつぶやく。

「証拠はありません。ですが……前王が亡くなった事で、数々の武功を手にしたゲベルが出世したというのは紛れもない事実なのです。私がいかに政治で国を支えようと、国民は国を統一させた英雄であるゲベルを支持するでしょう。私は形だけの女王なのです」

女王の肩は震えていた。国を任されたというのに何も出来ない少女。いくら努力しても報われない姿。ノイアは女王に一年前の、シスター見習いだった時の自分を無意識のうちに重ねてしまっていた。どうしても他人事には見えない。胸に鋭い痛みを感じる。

（深入りしては駄目だ）

ノイアは一度頭を振って平静を取り戻す。

「大陸統一の次は……異大陸への侵攻か。その先陣を進むのが英雄ゲベルという訳ね」

呆れながらつぶやいたのはジュレイドである。

「ええ。この疲弊した国が戦争をするには何か信じられるものが必要なのです。それが英雄という存在なのです」

傭兵の言葉に溜息交じりに答えたのはザーランドである。

冷静にフィッツベル王国を見る事が出来るノイア達からしてみれば、戦争が出来るような国では決してない。英雄を担ぎ上げて勝てない戦に向かおうとしているようにしか見えないのだ。

「あの賢王がこんな勝てない戦に力を貸すようには見えないんだけどな」

ジュレイドはグリア連合国の王を思い浮かべているようだ。

「グリア連合国の王アガレスの噂はここまで届いています。彼がこんな無謀な戦に力を貸すとは私も思えません。ですが……我が国が

攻めるとすれば光の壁に守られたハールメイツ神国よりも、グリア連合国を攻撃の対象にするのは当然です。最悪はハールメイツ神国と、フィッツベル王国に挟まれて身動きがとれなくなる可能性もあるでしょうね。グリア連合国がどう動くのかは現在では予想が難しいですね」

瞳を瞑り思考を走らせていく魔術師。彼はどうも戦うよりも策を練るほうが向いているかもしれない。その姿はノイアがよく知るハールメイツの軍神ギルベルトに重なる所があるように思えた。

「だったら……まずは協力してハールメイツ神国を潰すか」

ジュレイドの中ではすでに考えがまとまっているようである。それは一つの可能性にしか過ぎないが、あながち外れでもなさそうである。その事実にはノイアを含むハールメイツ神国出身の者を黙らせるには十分だった。

重苦しい空気が一室を満たす。その場を破壊したのは今まで黙っていた少女の声だった。

「何か見落としない？」

落ち着いた声に視線を向けると、一人黙々と食事をしていた鍊が漆黒の瞳を皆に向けていた。

「見落としたと？」

ノイアはいぶかしむ。判断の材料が明らかに不足しているために、ただの憶測だと言われれば納得はできる。だが、見落としがあると言われて、すぐに思いつくものが浮かんでこないのが現状である。

「一つ。ここまで疲弊している状況で攻めるといふ事は、何か秘密の兵器が力でもあると思う」

鍊は一指し指を天井に向けて淡々とつぶやく。

「二つ。ゲベルはいろいろと動いているみたいだけど……女王様はいったい何をしているの？ 私には怯えているだけにしか見えない正直、見ていて不快だわ」

鍊が中指を立てる。

二つ目は鍊が思っている事をついでに述べたような気もする。だ

が、女王が動けば戦争を止められるというのも事実ではある。あなたがち適当な事を言っている訳ではないので、無下には出来ないだろう。

「私は……」

口ごもる女王。それ以降は言葉を発する事ができないようである。「まさかやる事が分からないとでも言うの？　本当にイライラするわね」

鍊は誰が見ても分かるような蔑んだ瞳を女王へと向ける。どこか下等生物を見るような瞳は完全に冷え切っていた。

「無礼ですよ、鍊さん」

ザーランドが女王の代わりに少女を睨む。

「無礼？　ここで伝えておかなければ後悔するよ。甘やかして戦争になりました、なんて許されると思っているの？　甘いわ」

鍊の声には怒りが含まれている。どうやら一歩も引く気はないようだ。

「聞き捨てなりませんね」

ザーランドがゆっくりと立ち上がる。普段は冷静な男ではあるが、女王への侮辱だけは許せないらしい。対する鍊は立ち上がらない。鋭い視線を向けるだけである。

鍊が立ち上がった瞬間に戦いが起きそうな張りつめた空気。ノイアが二人を止めるために立ち上がろうと足に力を込めた時に、状況は一変する。

「ザーランドは座つて。鍊も一度、口を閉じて」

張り詰めた空気を破壊したのは女王の正面に座っている少女だった。

「分からない事は皆で考えればいい。女王様が歩む道が見えないならば示せばいい。それだけだよな？」

シエルが女王へと微笑む。皆の視線が自然と少女に集まる。張りつめた空気はすでに消えていた。まるで争いなどなかったかのようにな、ごく自然な空気が周囲を満たしていく。

「……はい」

女王は呆氣に取られながらも一つ頷いた。

睨み合っていた二人は急に場の空気が変わったために戸惑っているらしい。複雑な感情をどこに向ければいいのか迷っているようにも見えるだろうか。

（どんな複雑な事も……シエルを通せばこんなものか）

ノイアは隣にいる少女を優しく見つめる。それからこの場をまとめるためにゆつくりと語りかけていく。

「まずはゲベルの策を調べる。女王様については……一度、王都を歩かれてはいかがですか？」

ノイアは落着いた声音で女王に話し掛ける。

「そんな危険な事は……私が！」

立ち尽くしたままのザーランドが叫ぶ。そんな彼にノイアはゆつくりと首を左右に振る。

「自らの目で見た事でないと意味がないわ」

鍊はそんな事も分らないのかと言いたげである。可愛げがない言い方ではあるが、全くもってその通りなので言い返す事はできないだろう。

「分かりました。それでは王として民の心に触れてみようと思います。騎士様に護衛を頼んでも……よろしいでしょうか？」

女王はノイアに向けて一つ提案する。

「喜んで。いつでもおそろくもう一人護衛がつくでしょうけど」

ノイアは快く引き受けると共に、魔術師へと視線を向ける。

「何かあれば私とジュレイドが駆けつけます。それでいいでしょう」
ザーランドはつぶやいてしつぶ席につく。当然、一緒に来るものと思っていたノイアは内心驚く。

「いいのか？」

「女王の将来のためには……時には身を引くことも肝要です」

ノイアの問いに溜息交じりに語る魔術師は、心底残念そうに見えるのは気のせいだろうか。

「話はまとまったわね。それはいいとして……そろそろ食べたらず」
鍊は食事に全く手をつけていない一行を呆れた顔で見つめている。
「そ……そうだな。いただく」

ノイアはナイフとフォークを手取る。あまりにも話に意識が向いてしまい出された料理はすでに冷めているようだった。

「冷めてしまいましたか……どうぞ」

女王がぎこちなく笑う。

威厳はないが接しやすい女王様。彼女が国民としっかりと向き合えば、この国を変える事はできると思う。そのためには彼女の歩みを止めさせる訳にはいけない。そう強く思うノイアだった。

*

「アガレス王！」

叫び声と、慌しい足音。瞳を開けなくても誰が来たのかはすぐに分かる。

「なんだ」

王座に座るアガレスはゆっくりと瞳を開く。

「ハールメイツ神国の使者が、こちらに向かっているとの報告があります」

銀髪を腰まで伸ばした騎士が床に膝をつけて報告する。予想通り目の前にいたのは近衛騎士団の隊長であるフィッツであった。

要領を得ない報告に一度眉根を寄せたアガレスは、こちらから情報を引き出す事を選ぶ。

「使者とは誰だ？ 人によっては会っても構わんが」

シスターならば会うつもりはない。最低でも部隊を率いる隊長クラス、その中でも軍略の分かる人間が好ましいだろうか。

「ハールメイツの軍神に、ブレイズという隊長クラスの男です。使者としては妥当な所かと思考します」

面を上げてフィッツが報告を続ける。

「ほう。十分な使者だな。軍神はこちらの考えをすでに予想しているのだからな」

王はゆっくりと玉座から立ち上がる。自然と口元が緩んでしまう。こちらの行動に自然に合わせてくれる相手。どれほど有能な人材なのだろうか。直に言葉を交わして力量を判断したいという思いが膨らんで止まらないのだ。

「王？　もしかや自ら？」

フィッツが慌てて立ち上がる。

「ふっ……玉座に座っているだけの王など不要。道は王自らが切り開くものだ」

アガレスは大股で歩いていく。迷いも不安も心にはない。ただ突き進む。それが武力によって国をまとめたグリア連合国の王が出来る、唯一の道の示し方である。

「お供します！」

フィッツは胸に手を当てて背を追いかけてくる。

「行くぞ。この会談……我が国、いや大陸マクシリアの命運が掛かっていると思得よ！」

王の言葉が王座の間を震わせる。目に見えて活気が戻っていくのを肌で感じる。

（我が国はまだ歩めるな。俺が足を止めない限りは）

心の中でつぶやいて歩を速めていく。その歩みに合わせて一人、また一人と近衛騎士団が後に続く。

（ならば歩み続けよう。この命が尽きるまで）

強い想いが王の足を動かし続けた。

*

「失敗作か」

声が頭に響く。冷え切った言葉と、物を見るような哀れみに満ちた瞳が容赦なく少女に降りかかる。

（違う）

少女は心の中で反論する。自分はちゃんと息をしている。戦う力もあるのだ。

「私は戦える。生きてる」

少女は手を差し伸べ、創造主に懇願の瞳を向ける。だが、男はすぐに視線を外してしまう。

「黙れ。つまらん人形に構っている暇などない」

まるで興味のない言葉だった。

「違う。人形じゃない」

少女は差し伸ばした手を胸の前に戻しつぶやく。弱々しい少女の声に返ってくる言葉は皆無だった。

少女は行き場のない虚ろな視線を彷徨わせていく。浮かんだのは一つの疑問だった。

（彼らが成功なの？）

少女の視界の先には意志を持たない人形達がいる。心を持たない殺戮人形。それが彼の求めた答えだった。心を、感情を持つ自分はどうかやら失敗作らしい。

「邪魔だ」

男は座っている少女を蹴り飛ばす。宙に浮いた体が冷たい床に叩きつけられた瞬間に、ここでの生活の全てが終わった事を悟る。

（行かないと）

少女はゆっくりと立ち上がる。ここにはもう自分の居場所はないのだから。でも、いったい何処にいけないのだろうか。戦う事しかできない自分に居場所はあるのだろうか。

「戦って……戦い続けて。いつか場所が見つかるといいな」

少女はふらつく体を引きずるように歩いていく。何か温かいものが心を埋めてほしいと思う。それが戦う事だというのなら、それでもいい。所詮は作られた殺戮人形なのだから。心をもった人形ではないのだから。

（なんで……涙が出るのかな）

少女の頬は大量の涙が濡らしている。心を、感情を与えたのならば、ちゃんと分かるようにしてほしかったと思う。

「誰か……教えて。私はどうすればいい？」

少女は涙を拭い、答えを求めて彷徨い続けた。

*

「大丈夫？」

心配した声音が鍊を夢の中から現実に取り戻す。瞳を開けるとシエルがこちらを覗き込んでいた。

「何が？」

鍊は素っ気なくつぶやいて上体を起こす。

次の瞬間、一つの雫が頬を伝いドレスを濡らした。どうやら心配された理由はこれらしい。

「泣いていたから」

鍊の頬に柔らかい手が触れる。涙の雫が朝日を浴びて一度輝いた。嫌な夢を見ただけよ。心配は無用」

鍊は少女の青い瞳から逃れる。瞳を合わせていると全て見透かされてしまいそんな気がしたのだ。それだけシエルの瞳は力があるように見えたのだ。

「どんな夢なの？」

だが、シエルは逃がしてくれなかった。鍊の手を握り真剣な瞳を向けてくる。鍊の心の中に話したいという想いが膨らんでくる。もしかしたら答えが分かるかもしれないからだ。だが、鍊は素直になれなかった。

「あんたには関係ない」

刺々しい声と共に手を振り解く。

「う……」

呆気ないほどに簡単に吹き飛び尻餅をつくシエル。痛みに歪む表情を見ていると、少なからず罪悪感が胸を襲う。だが、人の心に土

足で踏み込もうとした彼女が悪いのだ、と強引に自らを納得させていく。

「これ以上は踏み込んでこないで」

突き放すつもりで述べた言葉。これで大抵の人間は諦めるだろう。解放された事への安堵の溜息をつこうとした瞬間の事である。

「本当に？」

シエルは問いを放つと共にゆっくりと立ち上がる。純粋な青い瞳が鍊に問いかけてくる。本当にそれでいいのかと。

（いい訳がないでしょう。知りたいよ。いろいろと）

鍊は下唇を強く噛んで出せない言葉を心の中でつぶやく。

「鍊が話したくないなら聞かない。でも、私は知りたいよ。どんな気持ちも受け止めるから」

シエルは自らを吹き飛ばした手をもう一度握る。今度は離さない。そんな強い気持ちで伝わってくる。少女は鍊が思っているような人とは明らかに違うようである。

「どれだけお人好しなのよ」

鍊は温かい少女の手を優しく握り返す。

「ノイアと比べればまだまだだよ」

少女は恥ずかしそうに頬を赤らめてつぶやく。自らにノイアと同じ部分があるのが嬉しいのだろう。

「話してあげるわ。ノイアも起きてるんでしょう？ ついでに聞いておきなさいよ」

恥ずかしそうに頬を赤らめて声を絞り出す。

「ああ。分かってる」

ノイアがゆっくりと上体を起こす。会話の内容が内容だけに起きるタイミングを図っていたらしい。寝たふりをしていた少女は、ちよいどいいと言いたげな顔をしていた。

二人の視線を受けた鍊は一度頷いて覚悟を決め重い口を開く。どうかこの話を聞いて変わらぬにいられますようにと強く願いながら。「私はとある人間に作られた存在なの。彼が作りたかったのは優秀

な殺戮人形。そのテストの一環で人に似せた感情を持った存在が作られたの。結果は強さだけを見れば成功だった。既存のどの人形よりも強かったわ。それが私。でも、最終的には心がある……ただそれだけの理由で捨てられたわ」

まるで他人事のように言葉がスラスラと出てくる。やはり自分はどこか壊れているのかもしれないと思う。

「どうして？ 心があるのは素晴らしいことだよ」

手を握るシエルが無垢な笑顔を向ける。

「簡単よ。いつ自分に牙を向けるか分からないのだから。ならば意志のない人形の方がいいのよ。私は感情という欠陥を抱えた人形なの」

鍊は淡々とつぶやく。自分はいつたいどんな顔をしているのだろうか。壊れた笑顔を向けている。それとも無表情だろうか。それが分からないのもどかしい。

「それだけ考えられるなら人形ではないな。私達と何か違うのか？」
ノアの問いが鍊の心を揺さぶっていく。

「人形ではない？ 私は違う？」

鍊は二人に問いを放つ。答えて欲しい。それが知りたいのだ。自分一人が人形ではないと言っても何も証明できないから。

「鍊は私達と一緒にだよ」

シエルは迷いなくはっきりと告げる。鍊の手を包む少女の手はただ温かった。この温かさが嘘ではないと言ってくれているように思う。

「なら……どうして捨てられたの？ どうして私には居場所がないの！」

溢れる感情が止まらない。冷めた視点で見れば、何が言いたいのか理解に苦しむのではなからうか。だが、止められないのだ。

「どうして！ 答えて……誰か」

鍊は涙を零してつぶやく。感情も涙も止める方法が分からない。助けてほしい。ただそれだけを強く願う。

「居場所が必要ならここにいろ。裏切らない限りはずっと面倒を見てやる」

ノイアの溜息交じりの声。

「え？」

歪んだ視界でノイアを見つめる。何を今さら言っているのだと、その表情から読み取れる。

「ずっといてね」

シエルも自分を歓迎してくれるらしい。

「ふふ……もうどうでもいいわ。過去も自分自身の事も」

鍊は可笑しくて笑ってしまった。笑っているのに涙が止まらない。もう悩む必要も、悲しむ必要もないというのに。ただ想いを伝えるだけでいいのに。

「ずっと側にいる。ううん……いてもいい？」

上目遣いでノイアを見つめる。

「ああ」

ノイアは一つ頷く。頷いてくれた事が嬉しくて堪らない。これだけ嬉しかったのは生まれて初めてではないかと思う。

「ありがとう」

一つの言葉に全ての想いを込める。二人はその想いを受け止めて一つ頷く。鍊は彼らの仲間になれた事を心から喜んだ。

*

王座からゆつくりと立ち上がったのはノースである。

「女王自らが民の話を聞く必要はありません」

膝について進言するのはゲベルである。おそらく余計な事をして欲しくないのだろう。

「いえ……それも女王としての務めだと考えます」

震える肩を叱咤して毅然と言い放つ。ここで引き下がる訳にはいかない。進むと決めたのだから。

「そうですか。それでは気をつけて下さい。最近はいろと物騒ですから」

ゲベルは淡々とつぶやく。だが、脅しで言っている訳ではない事はノースにも分かった。

「そうですね。どこかの家臣が謀反を起こすかもしれませんし、賊がいるやもしれませんから」

ノースは微笑んでつぶやく。これが精一杯だった。言葉とは裏腹に心臓は高鳴り、今にも逃げ出したくなる。だが、負ける訳にはいかないのだ。

「そうですね。賊にはくれぐれも気をつけて下さい。では」

ゲベルは立ち上がって背を向ける。その背からは殺気すら感じそうだった。

「や……やれば出来るものね」

ノースは全身の力が抜けて、倒れそうになる体を何とか支えてゲベルの背を見つめ続ける。

（でも、こんな事が簡単に出来るようにならないといけないんだ）
心の中でつぶやいて気合を入れる。まずは自らが出来る事をしよう。そう決意して王城の外に向けて歩を進めたのだった。

*

早朝の王都ローベルクは賑わいを見せていた。もともと王都と言われるだけはある、早朝から活気に満ちているが、本日はその比ではない。

理由は一つしかない。女王が王都を歩いているからである。普段は城から一步も外に出ない女王の姿を一目でも見たくて住民が集まってきたのだ。

「皆様、おはようございます」

緊張したノースの声が響く。女王が声を上げる度に歓声が場を満たしていく。

（結構、人気あるんだな）

ノイアは女王と住民を交互に見つめる。

住民は口々に「女王様！」と叫んでおり、かなりの熱気である。何も出来ないと言っていたが彼女には力がある。人を引きつけて離さない魅力があるのだ。

「本日は皆様の言葉を……一つでも多く聞こうと思い参りました」

女王の言葉はいつも真っ直ぐだった。裏などは全くない。この飾らない姿が人気の秘密なのだろう。

「隣の方は？ 見慣れない方ですが？」

ふと商店街の男が女王に声を掛ける。昨日の晩に来たばかりであるノイアの顔を覚えていないのは当然だろう。それに加えてローブを纏った者が多いこの国で、軽装姿というのも珍しいのかもしれない。

「ノイア・フィルランド。ハールメイツ神国の騎士です」

女王の代わりに胸に手を当てて名乗る。

「ハールメイツ神国？ 近々戦争をする国ではないか」

男は瞳を見開く。

「それは違います。私は戦争をしません。この国を救うのは戦争ではないのです」

ノースは男に言葉を掛ける。焦っているのか女王の言葉はどこか早口のような気がする。

「でも……もう食料はないのでしょうか？」

男はうつむく。その視線の先には力を失って枯れた花。この国の現状を知るにはこの花を見るのが一番早い気がしてならない。

「日々、失われているのか」

ノイアは屈んで花に触れる。その瞬間にまるで砂で出来ていたかのように崩れて、吹き付ける風に乗って舞っていった。まるで魔力の使用によって生命が失われていくように見えてしまう。

「ええ。ですからこの国を救う方法を共に考えていきたいのです」

女王は必死に言葉を続ける。

だが、男の顔は曇っていくばかりだった。根本的な解決方法が見つからなければ、何を言っても無駄なのだろう。例えば言葉を掛けているのが女王であったとしてもだ。

「皆さん。戦争に急いではいけません！」

女王は住民に向けて必死に叫ぶ。だが、誰も口を開かない。誰しもすでに手遅れなのだと諦めているのだろう。

（根本的な解決策か……）

ノイアは朽ちた一輪の花を見つめる。試しにゆっくりと手をかざす。出来るかどうかは分からない。だが、何としても彼らに希望を示したい。その想いがノイアを動かしていく。

「神聖なる神よ。我に癒しの力を与えたまえ」

短い祈りの言葉。身に宿る神力が解放されて一輪の花に癒しの力が伝わっていく。淡い光が商店街の一角を照らす。

「何をしているんだ？」

男が首を傾げる。見た事もない力が発動しているのだ。疑問に思うのは当然だろう。

「これが神力？」

女王も呆気にとられているらしい。

「もう一度咲き誇って。道を示すために！」

ノイアの叫びと共に光が満ち溢れる。住民の視線が一輪の花に集まっていく。向けられた視線には一縷の希望が含まれている。皆の希望を全身で受け止めてかざしている手に力を込めていく。

「すごい」

女王が歓喜の声を上げる。力を失ってうな垂れた花が、日の光を求めて天へと向いたからである。

（もう少し）

ノイアがさらに力を込める。

その瞬間。

一つの氷の刃が空を切り裂く。力の制御に集中していたノイアは反応が一瞬だけ遅れる。咄嗟に体を左に捻るが右肩に鋭い痛みが駆

け抜けた。

「くっ……！」

ノイアは痛む右肩を庇いながら周囲を見渡す。周りにいるのは先ほどからいる住民ばかりである。特に怪しい人物は見られない。

「やはり無理か」

住民の一人が溜息交じりの声を上げる。

ノイアは慌てて癒しの術式をかけていた花に視線を向ける。天へと向けて伸びていた花はすっかり元通りのうな垂れた姿に戻っていた。肩の痛みに意識が向いて力の発動が止まってしまったのだ。

「ノイアさん。その力を広域に展開できますか？」

女王はノイアの肩を気遣いながら問う。

「私一人では不可能です。ですが首都を守る光の壁の力を解放すれば……可能です」

ノイアは肩を押さえて立ち上がる。それと同時に周囲への警戒は決して緩めずに鋭い視線を左右へと走らせていく。

「その力があればこの国は立ち直れます！」

警戒するノイアとは別に女王は明るい笑顔を浮かべてつぶやく。まるで名案を思いついたような顔だった。

「そうなればいいのですが」

「何か問題があるのですか？」

ノイアのつぶやきに首を傾げる女王。

「ハールメイツ神国は光の壁の絶対的な防御力で支えられている国です。光の壁を失えば即座に他国に介入されるほどに脆い国なのです。壁を失えばグリシア連合国が、この国にいるゲベルが黙っているとは思えません」

苦渋の表情を浮かべてつぶやくノイア。他国のために自国を危険に晒す。そんな事をするとはとてもではないが考えられない。

「そんな……」

女王はうつむいて拳を握る。先ほどの明るい笑顔はすっかり消え、見るからに落ち込んでいるように見える。本当に分かりやすい人だ

とノイアは女王の表情を観察しながら思ったほどである。

「ノース様。現実はそのなに簡単ではありません。一つの国が動けば、それに合わせて全ての国が動きます。悲しいですが……女王とは敵同士になる可能性の方が高いのです」

ノイアは溜息交じりにつぶやく。

「その前に消えていただこう。貴殿の力。いや、神力という力をこの国の者に知られるのはまずいのでな」

低い声が響く。おそらく先ほど氷の刃を向けた相手だろう。

癒しの術式で肩を癒しながら周囲に視線を走らせる。まさか堂々と王都の中で攻撃してくるつもりなのだろうか。

答えはすぐに出た。

だが、その答えはノイアにとっては信じられない光景だった。突如として姿を現したのはマリオネットだったからだ。この力は鍊が使用していたものと酷似している。

だとすれば数で押されればとてもではないが防ぎきれない。冷汗がノイアの頬を伝っていく。

「ノース様。出来る限り離れないで下さい」

女王を背に庇いながら剣を抜く。人形だけではなくて、いつ放たれるか予測出来ない氷刃にも意識を向け続ける。

一度、深呼吸をすると同時に二つの氷刃がノイアを狙う。

「はっ……！」

一息で剣と鞘を振るい放たれた氷の刃を破壊する。砕けた氷の欠片の先には、二体のマリオネットが坂を駆け下りる。

（鍊の人形よりも速いか？）

冷静に駆ける人形を見つめる。一体は止められるが、もう一体は守りながらでは厳しいだろうか。そして、頼みの綱であるジュレイドとザーランドの姿はまだない。

悩んだのは数瞬だった。

「受け止めます。ノース様は全力で坂を下ってください」

ノイアは震える女王へと声を掛ける。

「それでは……」

「早く！」

迷う女王に叫ぶノイア。怯えた女王が数歩後ずさる。それを見届けたノイアは一步を踏み出す。

先行したのは左側に見えるマリオネットだった。意思無き人形が両手を組んで頭上高くまで振り上げる。刹那、ノイアは剣を握る右手に力を込める。

がら空きの銅への横薙ぎの一閃が人形を破壊する。

順調かと思える一閃ではあるが、次の瞬間には予測していた事態が起きた。

「ぐっ……」

癒しの術式で癒しきれなかった右肩に再度鋭い痛みが走り抜ける。いちいち確認しなくても傷が開いたのがすぐに分かる。一体しか防ぎきれないと判断したのはこれが原因である。

反応が鈍いノイアに向けて、右側から迫ったマリオネットの左足が繰り出される。剣で防ぐのは無理だと咄嗟に判断すると同時に、左手に握る鞘を振り上げる。

（左腕は……折れるか？）

最悪の想像が脳裏に浮かぶ。

手に伝わったのは固い感触。だが、ノイアが予想していたものよりも遥かに衝撃は少ない。

視界を埋めたのは全身が凍るような冷気を放つ一つの壁だった。

「氷壁？ ザーランドか？」

目の前に突如現れた氷の壁を見つめ疑問の声を上げる。

「ノイアさん。私の力を」

女王の声が背後で、すぐ近くで聞こえる。

（まさか！）

慌てて振り向くと、女王は両手を前方に向けて立ち尽くしていた。一度、後ずさってから一步も動いていない。それでいてあまりにも無防備な姿だった。

「ノース様！ 逃げてください」
すかさず叫ぶ。

ここで女王が倒れれば事故だという事で終わる可能性が高い。そして、守りきれなかったノイア達の信頼は地に落ちるだろう。ゲベル達の勢力にとって有益な事しかない。だからこそ王都の中でもこんなに簡単に攻撃が出来るのだろう。

「引きません！ 進むと決めたのですから」

女王は震えながら叫ぶ。

「くっ…… ノース様、剣を！」

叫ぶと同時に鞘を放り投げる。迷う時間も、説得する時間もノイアにはない。目の前の脅威はすぐそこまで迫っているのだから。

ガラスが割れるような音が響くと同時にマリオネットが氷壁を破壊する。ノイアは鋭い瞳を向けると同時に左手に光輝く剣を握る。

「吹き飛ばす！」

光剣を横薙ぎに振るい意思なき人形を爆砕する。だが、安心できたのはほんの数秒だった。

（多すぎる）

人形を倒した勢いをそのままに、坂を駆け上がりとする足を止めて後方に跳躍する。敵の数は二十体を優に超えている。それに加えてノイアを狙い続けているのは鋭利な氷刃。

（避けられない！）

心の中で叫ぶ。避ければ女王に当たってしまう。それが分かっているが放っているのだろう。両手に握る剣を目も止まらぬ速度で振り続ける。細かく砕かれた氷の刃が幾重にも散ってノイアの体に無数の傷をつけていく。

霞んだ視界が捉えたのはさらなる絶望だった。弱ったノイアを畳み掛けるように迫る無数のマリオネットである。

ここまでかと諦めた瞬間。

一つの轟音が鳴り響く。

ノイアが目を見開いて人形を見つめると胴には風穴が開いていた。

高速の銃弾と、氷刃が迫る人形を次々と破壊して道を作る。

その間隙を白銀の大鎌を握った少女が疾走。目にも止まらない高速の銀閃が駆け抜ける度に人形が砕け散る。

「遅くなっただわ」

鍊はノイアを庇うように前に立つ。ドレス姿の少女の背はどこか頼もしかった。

「すまない」

ノイアは光剣を手放して癒しの術式を展開する。ここまで無防備な姿でいられるのは鍊が的確に氷刃を破壊してくれるからだ。

「……疑わないの？」

か細い声が問う。おそらく人形を見た瞬間に真っ先に鍊が疑われると思ったのだろう。刹那、少女の言葉が思い出される。

「ずっと側にいる。ううん……いてもいい？」

あの時の鍊は居場所を求めている。求め続けていた。嘘ではないのははっきりと分かる。

「鍊を信じる。今朝の言葉が嘘だったら……もう何も信じられないから」

ノイアは少女の背に言葉を掛ける。

「ありがとう。それなら行くわよ……マリオネット。同じ人形に負けるんじゃないわよ」

意志を受け取った操り人形がノイアを囲む。それと同時に大鎌を構えなおした鍊が地面を蹴った。

*

「潮時か」

涼しげな声が淡々と告げる。

「どちらも消せなかったのは残念だが……住民につまらん希望を与

える事を防げたのは大きいな」

不気味な声が応じる。

「神力がまさか草花をも癒せるとはな。まさに奇跡の力といった所か」

涼しげな声が金髪の騎士を見つめる。今も出血する肩をこちらには理解できない力で癒している。

「引くぞ」

不気味な声が響いた瞬間に一人の男が姿を消す。それと同時に彼に操られていた人形もまるで今までが幻であったかのように姿を消していた。

「敵は思ったよりも強大のようだな」

男は戦場に背を向けてぼつりとつぶやいた。

*

「終わったのか？」

ノイアは突如消えた人形を見ていぶかしむ。

「そのようね」

鎌は隙なく大鎌を構える。

数秒待つが氷刃がこちらを狙ってくる事はもうなかった。人形の気配もすでに皆無である。

「ふう」

ノイアは放り投げた鞘を拾いに坂を上る。

「ノイア。肩は大丈夫！」

シエルの叫び声を聞いてゆっくりと顔を上げる。

「ああ。問題ない」

「問題ない、ではないよ！　すぐに癒すから」

心配させないように微笑んでみたが、シエルはすかさず癒しの術式を展開。肩の傷はノイアの術式ですでに塞がっていたが、動きが鈍く、チクリとした痛みを感じていた。

だが、一度閃光がノイアの肩を照らしてからには明らかな違いを感じる。

「本当にすごいな」

つぶやいて肩を一度回す。傷を受ける前と遜色はない。いや、むしろ前よりも快調のような気がする。

「私のせいで……申し訳ありません」

女王はうつむいてつぶやく。

「女王のせいではありません。これは私の不覚です」

ノイアは右肩を見つめてつぶやく。仮にジュレイド辺りだったら余裕を持って回避できたのではなからうか。やはりどれだけ腕を磨いても、まだまだ未熟だと思えてしまう。

「ノイアさんはさらに上を目指すんですね」

「当然です。守りたい人がいますから」

女王の言葉にノイアは迷いなく答える。

「そうですね。シエルさんが羨ましいですね」

女王はシエルを見つめて微笑む。見つめられた少女は頬を真っ赤に染めてノイアを見つめる。

「私達はそんなノイアも守る役目かしらね」

錬は男性二人に言葉を掛ける。

「まあ、そんな所じゃない」

ジュレイドは陽気に微笑んで頭の上で手を組む。

「そうですね。彼女たちの歩みをただ見守りましょう」

ザーランドは歩みを止めない少女達を温かく見守った。

ただあなたを守りたい 騎士編 4（後書き）

読んでいただきありがとうございます。感想、メッセージなどをいただければ幸いです

ただあなたを守りたい 騎士編 5

ただあなたを守りたい 騎士編

― 5 ―

「今日はこれくらいにしましょう」

空が暗くなり始めた頃。ノイアは隣を歩く女王へと声を掛ける。
「いいえ。まだです」

石碑へと向かう上り坂を懸命に上るノースはどこか焦っているようだ。昨日は襲撃に合い、そして本日は成果なし。何とかしたい、そんな強い気持ちが続いていくくらいに伝わってくる。

「焦ってはいけません」

ノイアは諭すような口調で語り掛ける。少しでも女王の心が休まるように自らの焦る気持ちを極力殺して落ち着いた姿を装う。

女王は落ち着いたノイアを見るうちに冷静になったのか、恥ずかしそうに頬を染めていく。

「王たる者が見せる姿ではありませんね」

「ノース様は有りのままの姿でいるのがよろしいかと思えます」

落ち込む女王へと、柔らかい声音で語り掛けるノイア。

「有りのままの姿？」

女王が小首を傾げる。やはり女王自身は自らの強みを認識していないらしい。彼女らしいと言えばその通りであるが、一国の王ともなれば自らの強みくらいは知っていてもいいのではないかとノイアは思う。

だが、部外者である異国の者が口出しをしていいものかどうか判断に困る事も事実ではあるため言葉を慎重に選んでいく。

「はい。飾らない姿が一番輝いているように思えます。そして、裏表のない女王の姿が皆は好きなのだと思います」

「——そうだといいのですが」

ノイアの言葉に女王は自嘲の笑みを向ける。

なぜこの女王は自らに自信を持てないのだろうか。そんな疑問が自然と浮かんでくる。これだけ人気があるのなら胸を張ってもいいのではなからうか。

「胸を張って下さい。あなたはこの国の女王なのですから」

ノイアは考えを素直に伝える。だが、言葉を受け取った女王の表情は変わらない。むしろさらに悪化しているようにも見えるのは気のせいだろうか。

「何か一つでもいいのです。私が王たる証明を国民に示したい」

下唇を強く噛んで女王がつぶやく。

「ならば示しましょう」

ノイアはすかさずつぶやく。簡単な事ではないのは分かっている。だが、何もしなければ変わらない。才能がなく、がむしゃらに努力をしてきたノイアにはそれがよく分かる。歩まなければ人は手すら差し伸べてくれないのだ。

「簡単に言いますね」

「皆で行えば可能です。女王が歩むのであれば私は力を貸します」

ノイアはゆっくりと右腕を上げる。ハールメイツ神国での癖がまた出てしまった。

「なんですか？」

案の定、女王は端正な顔を歪めてノイアを見つめる。確かザーランドもこんな反応だったような気がする。当然の反応なので文句は言えないが居心地は悪い。

「ハールメイツ神国にいる友とよく行っていた……友情と絆の確認みたいなものです」

恥ずかしそうにノイアは語る。

「ノイアさんも案外裏表がないですね。つまりは友……あるいは同志になりたいという事ですよね」

女王は綺麗に微笑んで自らの左腕を重ねる。温かい想いが触れた

腕から流れ込んでくる。ノイアがこの行動を好むのは、相手の気持ちを直に感じる事ができるからである。この温かい気持ちを感じられるなら、ずっと変わらぬ友情を貫きたいと思えるのだ。

「そうですね。我ながら恥ずかしい事をするとは思いますが。ただ……異国の何の位もない騎士では迷惑になるかもしれないですね」

「位など関係ありません。私は女王ではなく、一人の女性としてあなたと親しくなりたいと思います」

ノースは真摯な瞳を向けてくる。本心なのだとすぐに分かる。この真っ直ぐな想いがノイアの心を惹きつけて離さない。

（この方も守ってあげられたらいいのだが）

ノイアは心の中でつぶやく。だが、それは不可能だと分かっている。自分にはシエルがいるのだから。自らが守りたいと願う少女すら満足に守れないノイア。そんな未熟な者が二人も守れる訳はないのだ。無理に二人を守り、結果シエルが傷つく姿などは見たくはない。それならば我が身が引き裂かれた方がましである。どちらかを天秤にかけると言われればシエルを選んでしまうだろう。

だが、可能な限りは女王の力になりたいと思うのも本心ではある。「あなたと出会い友になれた事を誇りに思います。せめて……この国にいる間は全力でノース様の力になります」

ノイアは隠さずに本心を述べる。

女王はノイアが大切な人を思い浮かべているのだと、すぐに気が付いたらしく一瞬だけ表情を曇らせる。だが、すぐに何事もなかったかのように言葉を返してくれた。

「あなたがこの国を離れても……例え敵同士になろうとも変わらぬ友情が続きますように」

祈るような女王の言葉が夜の王都に響く。ノイアが視線を向けると女王は一度頷くだけだった。もう言葉は不要だと言っているかのようである。

（二人の絆がずっと続きますように）

ノイアは強く、強く願った。

*

魔力の輝きがほのかに照らす一室でザーランドは戦術について本を読んでいた。その厚さは男性の手の平ほどはあり、内容を全て頭に入れるには数か月はかかるだろう。

「そろそろでしょうか」

区切りのいい所まで読み終えたザーランドが独語する。

窓へと視線を向けると、外はすっかり暗くなってしまうている。

今の女王様であれば成果が出るまでは粘るような気もするが、側にいるノイアが止めてくれるだろう。甘い所もあるが機転が利く彼女であれば女王を上手く説得してくれるような気がするのだ。

（すっかり信じていますね）

心の中でつぶやくと共に一つ溜息をつく。

昨日の襲撃の事も考慮すれば本来は後方で控えているべきである。だが、すっかり心を開いた女王の姿を見ると、余計な介入は控えるべきだと思ってしまうのである。

（ここで何やら考えていても仕方ありませんね）

女王を出迎えるために机に本を置き、ゆっくりと立ち上がる。

その瞬間。

一定のリズムでドアがノックされる。ドアの向こうに立っているであろう人物は、部屋の主であるザーランドへと声を掛ける様子はなかった。ただ黙って待っている。

「ソルトですか？」

ザーランドは左側に見えるドアへと向き直る。

「邪魔をする」

涼しげな声と共にドアが開く。部屋へと入ってきたのは予想通り第三師団長のソルト・ブレイザーだった。鋭い眼光と常に無表情であるためか、どこか威圧的に見える男である。

「本日も私を説得に来たのですか？」

眉根を寄せてザーランドがつぶやく。彼の話聞くのはこれで三回目くらいになるだろうか。そろそろ諦めてもいいのではないかとザーランドは思っている。

「ああ。この国が危機に晒されているのはお前も知っているだろう。国が統一し勢いがある今しか戦争をする機会はない」

ソルトは鋭い眼光をさらに鋭くさせ、まるで睨むような視線を向けてくる。実際に戦争をする気がないザーランドを疎ましく思っているのだろう。

「勝てる保証はありませんよ。現状ではどんな策を取ろうとも……ハールメイツ神国の壁は破壊できません」

ザーランドは分厚い戦術の本を持ち上げ睨む男へと向ける。その本に記された名前はギルベルト・スタンリー。ハールメイツの軍神の名前である。彼の取る指揮に生半可な戦術が通用するとはとてもではないが思えない。何か切り札を隠し持っているようだ。戦争において必勝の手札などは存在しない。食糧の危機に瀕して急いでいるようにしか見えないのだ。

「それではどうする？ 神力とかいう未知なる力に頼るのか！ それで国民が納得するとも思っているのか？」

ソルトは一步踏み出して叫ぶ。彼の言いたい事も分かる。ザーランドとて神力は未知なる力なのである。どこまでの力を秘めているのか全くの未知数なのである。

「納得するのは難しいでしょうね。結果を見るまでは。それを待つ時間もそう多くはありません。いたずらに時を使えば……最悪は内乱です」

「ああ。王都はまだ備蓄があるが……王都から離れば離れるほど深刻だ。他国と戦争する前に内輪揉めで終わりだろうな。食糧を求めて争い、そして滅ぶ……後世に悪い見本として紹介されるだろうな」

自嘲の笑みを向けてうつむくソルト。

これがただの悪い妄想であればどれだけいいだろうか。だが、実

際に起きる可能性があるのだ。餓えれば理性などすぐに吹き飛んでしまっただろうから。

「それでも私はノース様を信じます。彼女はこの国の王なのです。その決定に従うまでです」

ザーランドは全てを理解した上ではっきりと宣言する。例え愚かだと言われようとこの気持ち曲げる事はできない。

「そうか。やはり考えは変わらないという事か。それは俺も同じだ。何としてもこの国を戦争へと導く。自らの野心のために歩むゲベルのためではない。ただ餓えて苦しむ民のために、俺は他国すら滅ぼす」

ソルトは無表情を崩さすにつぶやく。だが、民のためならばどんな悪名すら背負う覚悟が鋭い瞳を通してひしひしと伝わってくる。そんな彼と敵対する事は残念に思えて仕方がない。

「同じ国の者同士が刃を向ける事がなければいいですね」

「その時は苦しまぬように殺してやる」

ザーランドの言葉に返って来たのは冷え切った声だった。ソルトとの道が重なる事はもうないのだろう。どれだけ望もうとも。

「分かりました。その時はあなたを……殺します」

殺気を含んだ声を放つ。ザーランドは全てを納得はしていない。だが、ここで応じない事は彼に対する侮辱になるような気がしたのだ。

ソルトはその想いを知ってか知らずか無言で背を向けて去って行った。

*

王都から北に一日ほど歩いた先に一つの都市がある。農業と魔力を帯びて輝く魔石と呼ばれる石を採掘する事で発展した都市である。だが、それは数年前の話である。

王都から徒歩で一日という立地の良さに導かれ、各地から集まっ

てきた商人は雪道に閉ざされ姿を消し、頼みの農業は魔力の副作用を受けて半数が枯れ果ててしまった。そんな彼らが立ち直る道はついに見つけれず、日々衰弱の一途を辿っているのである。

「彼らのせいだ」

都市の端に設けられた作物を育てる畑に立ち尽くす男が独語する。もはや理性などと言う言葉は消えていた。

「考えなしに魔力を使うから」

別の男が呪詛を含んだような声でつぶやく。

突き詰めれば自らが売った魔石によって作物が枯れ果てたという事に頭は回っていない。ただ何もしてくれない王都へ身勝手な怒りを向けているだけなのである。

「それなら彼らに報復をしたらどうだ？」

寒気を感じさせる低い声が男たちに囁きかける。

驚いた男達が視線を向けた先には黒いローブを羽織った男が立っていた。まるでこの世のものではないかのような不気味な雰囲気を感じた住民は一度身を震わせる。

「報復？ 一つの都市で王都に敵う訳がないだろう」

一人の男が呆れながらつぶやく。周りの男たちもすかさず賛同する。皆で結託してとりあえずの安心感を得たいそう言っているかのようである。

そんな彼らに男は再度語りかける。

「お前達だけでは無駄だろうな。だが……俺が力を貸せば容易だ」

男は不気味に笑う。

都市の男達は耐えられずに一歩後ずさる。王都に勝つことよりも、今はこの直近に迫る恐怖から逃れたいのだろう。

だが、逃げる所かさらなる恐怖が住民を襲う。まるで何かの悪夢のような光景だった。

「お前達は俺の人形になってもらおう」

男は表情をそのままに右手を上げる。

刹那。

住民の腕を糸が絡め取る。身動きを封じられた男達はただただ恐怖し、絶叫を上げる。

「そんな脆弱な心では……私の呪術からは逃れる事は出来んぞ」

男は叫び続ける住民を哀れみの瞳で見つめる。その視線はまるで下等生物を見下ろすような視線だった。

「助けてくれ」

住民が救いの声を男へと向ける。だが、男はそれを無視して糸を操る。次の瞬間には住民は意思のない操り人形のように、男の思った通りに動く。

「さて。王都へと行こう」

男の言葉を聞いた住民はゆっくりと王都へとその足を向けた。

*

女王を自室へと送り届けたノイアは、自らに与えられた部屋へと向かう。

（シエル、いるかな）

本日はシエルとあまり話していないような気がする。

シスター見習いであった時は一緒に部屋でいつも話していた二人だが、ノイアが騎士になってからはそれぞれ部屋を分けて暮らしていた。その時は会う機会もさほど多くはなく、会話する日がなくても平気だった。だが、最近は毎日顔を合わせているためか話していないとどうも寂しいのだ。

今からは時間もあるため、寝るまでゆっくり話すのもいいかもしれない。

自然と頬が緩んでいく。引き締めようとしても無駄だった。やはりノイアにとって彼女は特別なのである。

早足で歩いて目的の部屋へ。早く気持ちを抑えてドアノブに手をかける。今はこの動作すら煩わしいと思ってしまう。

「シエル、いるか？」

ドアを開けながらつぶやく。何だか声が少し弾んでしまった事がどこか恥ずかしい。

「残念」

返ってきたのは落ち着いた声だった。視線を向けるとベッドに腰を下ろした鍊がいた。

「鍊しかいないのか」

肩を落としてノイアがつぶやく。その様子に鍊は不機嫌そうに頬を膨らませる。

「なによ。私では不満なの？」

両手を組んでご立腹の様子である。

「悪かったよ。ただ……シエルと話したかったんだ」

ノイアはぎこちなく笑い頬を膨らませている少女の隣に腰掛ける。「代わりに話し相手になってあげるわ」

すっかり機嫌を直した鍊が微笑む。この少女はどこか難しい。感情の変化が激しすぎるのだ。怒っていたかと思うと、すぐに笑顔。まだ数日しか彼女と接していないが時折戸惑う事がある。

「何を話そうか……そうだ！聞きたい事があった」

ノイアはずっと聞けなかった事を思い出した。

「あー。やっぱり気になるよね」

鍊は聞きたい事を察し、ゆっくりと右手を胸の高さまで上げる。

その瞬間。

一体のマリオネットが姿を現す。そう、これが聞きたかったことである。魔力も神力も使わずに動く人形。一体どんな力を使っているというのだろうか。

「あの糸で動かしているのか？」

「ええ。隠すような事ではないから教えてあげるわ。この力は呪術と言つの」

ノイアの疑問にあっさりと答える少女。

「呪術？呪いか……何かか？」

ノイアは人形を凝視する。自分は実は破壊してはいけない物を破

壊しただろうか。急に強烈な寒気が全身を襲う。どうか呪われていませんように、心の中で信じる神へと短い祈りを捧げる。

「ノイアはそういの苦手なの？ まあ、それはまた今度にして……呪いと言えはそうかもしれないわね。この力は意思のない物、または意思または心が脆弱な者を操る力なの」

鍊は意思を送って人形を自由に操る。意思はなく人と同じ形状をした人形がもつとも適しているという事なのだろうか。

「人も操れるのか？」

「ええ。ただ心が強い者には効果がないわ。例えば……」

鍊は左手をこちらに向ける。身構えるよりも早く、細い糸がノイアの腕を拘束する。

「鍊……おい！」

「抗えば簡単に逃げられるわ。逃げないと私の人形にしてしまうわよ」

鍊の黒い瞳が怪しく光る。操って一体何をするつもりなのだろうか。

「そうはいくか！」

叫ぶと共に両腕に力を込める。腕を拘束していた糸は拍子抜けするほどあっさりとノイアを解放する。呪いと言っていたが、体に違和感はなさそうだ。鍊が手加減したのか、そもそも操ることが難しいのかは分からない。

「簡単に切れたでしょう？ 便利そうに見えるけれど難しいの。人に使用するには対象者の心が疲弊している時くらいかしらね。まあ、私の創造主なら恐怖を与えて強引に縛る事も出来るけど」

鍊は淡々と説明していく。そんな少女を横目で軽く睨む。

「先ほどの行動は控えるべきだと思うが」

自らの意思に反して操られるなど気分のいいものでは決してない。冗談でやるにしては少々悪ふざけが過ぎるのではなからうか。

「えっと……操る気はなかったよ？ 軽い冗談のつもりで」

睨まれた少女は慌てて弁解の言葉を述べる。

「冗談でしていい事ではない」

ノイアは少女から視線を外してドアを見つめる。ただ鍊を注意しただけだけである。それで分かってくれれば済ませるつもりだった。

だが、少女の反応はノイアが思ったものとは違った。

「ごめんなさい」

少女のか細い声が聞こえる。不審に思い再度視線を向けると、鍊の肩は小刻みに震えていた。

「鍊？」

「ごめんなさい。私が悪かったわ。だから許して……捨てないで」

鍊は細い肩を抱いて震えていた。捨てられる恐怖にただ震えている。やはりこの少女はどこか安定していない。

「捨てないで」

鍊は再度つぶやく。恐怖で思考が止まっているのだろう。ノイアは一度溜息をついてから震える少女の黒髪を優しく撫でる。

「この程度で見捨てるものか。少しずつ学んでいけばいい」

鍊の恐怖を和らげるために努めて優しくつぶやく。

「ほんとう？」

黒い瞳に涙を溜め、すぎるような視線を向けてくる鍊。そんな彼女の問いにノイアは強く頷く。

「シエルが羨ましいな」

鍊は涙を拭いながらぼつりとつぶやく。どこか遠い目をしているような気もする。

「シエルか……。どうしてるんだろう」

一番に守りたいと願う少女の名前を聞いたノイアは急に不安になってきた。

「行ったら？」

そんなノイアの背中を押す声。その声に押されるように自然と立ち上がった。

「そうだな」

どこに行けばいいかなど分らない。だが、この場に座っているだけというのは耐えられない。ジュレイドか、ザーランドと話でもしているだろう。大雑把な当たりをつけ、ノイアは一步を踏み出した。

*

「一人で大丈夫？」

ドアを開け、今にも外に出ようとしているシエルに部屋の主はつぶやいた。

「うん。いつまでもジュレイドに甘える訳にはいかないから」

ぎこちなく笑ってシエルは答える。自分はノイアとジュレイドに頼りすぎている。二人とも迷惑な顔などせずに進んで世話を焼いてくれる。そのためいつの間にか甘えてしまっただ。

「別にどんな事でもするよ。言ってくればな」

ジュレイドが微笑んでつぶやく。それが当然だと言わんばかりの顔である。

「ありがとう。でも、今回は一人で行くよ。シスターの第三位……その役目を果たさないといけないから」

シエルは強く宣言する。彼を不安にさせないために。

「そっか。本当に強くなったな。一年前は俺の背に張り付いていたのにな」

ジュレイドは可笑しそうに笑う。

一年前の塔へと向かう旅路ではずっとジュレイドの側にいた気がする。彼の操る馬に共に乗り、振り落とされないようにしがみついていたのだ。あの時は何も考えていなかった。自らの足で歩むことすら知らなかった。

「守られてばかりではいけないから。だから強くなると決めたの。ノイアを……ジュレイドを支えられるように」

最高の笑顔を作って微笑む。

「お前の身は俺とノイアが守り抜く。だから……俺達の……いいや、俺の心を支えてくれ」

ジュレイドは一步を踏み出してゆっくりと腕を伸ばす。

「うん」

一つ頷いた時には優しく髪を撫でられていた。全身に力が湧いてくる。

（私の心も支えてくれているんだよ）

シエルは心の中でつぶやく。一年前とは違い共に歩めることが誇らしくて仕方がない。

「成果は……期待してる」

ジュレイドが大きな手を退ける。

シエルは優しくて温かい大きな手を名残惜しそうに見つめる。ここにいるとまた甘えてしまうような気がしてしまふ。それはようやく動き出した自らの足を止める事である。

一度、息を吐いてシスターの第三位としての自分に切り替える。

「行ってきます」

つぶやいて背を向ける。自らが成すべき事をするために。

「ああ」

短い返答から力を受け取って、シエルは小さな一步を踏み出した。

*

馬に乗った一団が平原を駆け抜ける。数にして二十ほどだろうか。出発して一日経過しているが隊列は乱れる事はなく、各々がよく訓練された精鋭であるという事は一目見れば分かるだろう。

「よかったですか、王」

左隣りを並走するフィッツが声を掛ける。どこか不安な表情をしている。それは周りにいる騎士とて同じである。

「クレサの事か？」

王は右隣りを並走する黒髪の少女に視線を向ける。艶やかな黒髪

は一年前と変わらないが、常に無表情で病人のように白い肌はどこか不気味ですらある。幼いながらも懸命に想い人のために槍を握っていた少女はもうそこにはいなかった。

「はい。ガイラル殿が戦死してからの彼女は……もう目も当てられません」

フィッツはうつむいてつぶやく。実際その通りなのである。クレサは一日中部屋に引きこもり、誰が話しかけても反応を返す事はなかった。アガレスも一度出向いて言葉を掛けたが、壊れた人形のように虚ろな瞳を一点に向けているだけだった。どうすれば彼女がまた力を取り戻すのか一年の時を使っても誰も分からなかった。

「だからこそ……今回はいい機会だと思っている。自ら外に出たのだからな。部屋から飛び出したのであれば後は歩むのみ」

アガレスは馬の手綱をしっかりと握りしめる。

「いい機会だと私も思います。ですが……下手をすればハールメイツ神国の騎士を襲うかもしれませんよ？」

フィッツが疑いの視線を黒髪の少女へと向ける。おそらく声は聞こえているだろうが少女は反応しない。ただ虚ろな瞳を前方に向けているだけである。

「襲うだろうな」

淡々とアガレスがつぶやく。一瞬、張りつめた空気が周囲を満たす。

「王！」

張りつめた空気を破壊したのはフィッツの叫び声。

アガレスは一つ溜息をつく。近衛隊の隊長とまで上り詰めても、まだこの男は落ち着くという事を知らない。常に感情的である。

「例え負傷させたとしても……軍神とまで呼ばれた男がすぐに感情的になるとは思えん」

教えを語るようにアガレスはつぶやく。

仮にその程度で感情的になり会談を無下にするような人間と話しても時間の無駄である。常に冷静に戦局を見られる人間をアガレス

は求めているのだから。

「分かりました。もしクレサが動くのであれば私が止めます。ハールメイツ神国のために動くのは納得しかねますが……会談の席で武器を取るなど我が国の誇りを汚す行い。断じて許す訳にはいきません」

フィッツは少女に鋭い視線を向ける。

刹那。

今まで黙っていたクレサが急に口を開いた。

「許さない」

呪詛を含んだような短い言葉。視線を向けなくても伝わってくる強烈な殺気。身に宿る負の感情をぶつけなければ前へと進めない。そんな想いが痛いくらいに伝わってくる。

「クレサ」

アガレスは短く名を呼ぶ。

殺気を含んだ少女の瞳がアガレスを貫く。クレサはもはや視線を向けている相手が王である事すら忘れているかのようだった。いや、むしろ王だと思っていないのだろう。彼女が主と認めて尽くすべき相手は今亡きガイルただ一人なのだ。

「全てをぶつければいい。責任は俺がとる。その代わりにお前は前を向け」

前方を見つめたままアガレスは淡々とつぶやく。少女の殺気が一瞬だけ弱まった気がする。それが気のせいではない事を強く願い少女の言葉を待つ。

「私は復讐が出来れば――」

「復讐を遂げた後に溢れる気持ちをしっかりと受け止める」

少女の言葉に被せるようにアガレスは語る。

「私には分かりません」

そうつぶやいた彼女が口を開くことはもうなかった。重い空気のままグリア連合国の騎士達は無言で平原を駆け抜けた。

*

「な……何用でしょうか？」

目の前に座る女王は緊張した面持ちで問いを放つ。年上で、しかも女王だというのに若干十三歳のシエルに緊張する姿はどこかおかしかった。

「少し話したいと思ったのです。ハーツメイツ神国の……シスターの第三位として」

シエルは微笑んでつぶやく。ノイアがよく行っている相手の緊張を解すための微笑みである。

「ノイアさんも、シエルさんも立派ですね」

自嘲の笑みを浮かべて女王が返す。

「いえ……私は二人にずっと守られてきましたから。偉そうな事は言えません。まだ一人では何も出来ないのです」

シエルは苦笑いを浮かべてつぶやく。

「でも……あなたは一人でここまで来た。私にはまだ出来ません。そして、この国を救う道すら見つけれない」

女王は強く拳を握り締める。皆が諦めている中で一人諦めずに道を探す女王。シエルには彼女が弱いとはとてもではないが思えなかった。

「道ならあります」

シエルは落ち込む女王へと努めてゆつくりとつぶやく。

「え……？」

女王は信じられないという顔をしている。そして、次の瞬間にはとある可能性を思いついたのか目を見開く。

「この大陸全土に癒しの術式をかけます」

迷いなく、澀みなくシエルはつぶやく。

「それはあなた達の国が危険に晒されるために使用できないと聞いています」

女王は首を左右に強く振る。

「私が皆を説得します。この国の現状を……そして共に歩める事を伝えれば動いてくれると思います」

実現不可能だと思われることはない。最善を尽くせばどんな事でも出来るのだと女王には知ってもらいたいのだ。

「例えこの国を救ったとしても……ゲベルはあなた達を攻めるかもしれないですよ？」

女王はなぜそこまでするのかと問うていた。ハールメイツ神国にシエル自身に何の得があるというのか。その答えを求めているような気がした。

「分かっています。でも、救いたいです。私は見捨てる事はできません。皆が笑顔でいられる道を探したい……愚かだと言われようとも、結果的に裏切られたとしても諦めません。一緒に歩める道を探し続けます」

シエルは思った事をただ口にする。真っ直ぐな心を伝えるために。「ならば……私はあなたを信じます。そして、全力で止めてみせませう。戦争などという愚かな行為を。私自身が道を示して！」

女王の瞳に光が宿る。今までの怯えた、緊張した女王はどこにもいない。前へと進む凛々しく勇ましい王がそこにはいた。おそらくこれが彼女が内に秘めている本当の姿なのだろう。

「共に歩める事を祈ります」

シエルは短くつぶやいて座っていた椅子から立ち上がる。

「ええ」

女王はどこか吹っ切れた表情で一つ頷いた。

*

柔らかい絨毯が敷かれた廊下を早足で歩いていたノイアはどうも周囲が慌ただしいような気がしてならない。早足で歩いているノイアを追い越す勢いで走る魔術師達、そして、どこからか聞こえてくる叫び声。

（何かが起きたか？）

鋭い視線を周囲へと走らせる。だが、それだけで理由など分かる訳はない。ノイアは一度眉根を寄せた。

「ノイアさん、いい所に居てくれました」

後方から男性の声が聞こえる。

「ザーランドか？」

ゆっくりと振り向くとそこには肩で息をしたザーランドがいた。

彼のこんな慌てた姿は初めて見るような気がする。どうやら本当に何かがあつたらしい。

「王都の前で小規模の戦闘が起きる可能性があります」

ザーランドが早口で述べた言葉はなかなか頭に入ってこなかった。それはこの大陸に存在する国は一つしかないからである。その場合、争いになる理由は――

「内乱か？」

ノイアは一つの可能性を口にする。

「ええ。ここから北にある都市の住民が南下しています。数人の代表が交渉に来るのであれば理解できるのですが……住民全となるとあまりにも不自然です」

ザーランドは苦渋の表情を浮かべている。住民全てを受け入れるとでも言うのであるうか。仮にそうだとしても、まずは都市の代表が交渉に来るのが自然である。

「まさかいきなり攻撃してくるのか？ 正気ではないぞ」

王都の戦力がどれほどのものかは分からないが一つの都市で勝てるとは思えない。まるで殺してもらいに來たようなものではないか。

「何がしたいのかは全く分かりませんが……おそらくは」

ザーランドは額に手を置いて溜息をつく。

「どうするんだ？ 同じ国の住民だぞ。そして、仮に殲滅しても連鎖的に各都市が立ち上がる可能性もある」

ノイアは最悪の可能性を告げる。この状況で各都市が反旗を翻せば、国全体の首を絞めるようなものである。だが、愚かだと分かっ

ていてもこの手の連鎖は止められないのである。

「彼らを説得できればいいのですが」

「説得……？」

説得という言葉がノイアの脳裏を駆け巡る。彼らを説得するにはどんな手段があるだろうか。一つは王都の抱えている食糧不足を解決させる事である。今回で言えば王都の食糧を与える事である。だが、本当にそれだけだろうか。

「ノイアさん？」

急に思考に耽るノイアを訝しんで声を掛ける魔術師。そんな彼を数秒放置して思考を巡らせる。

「……なあ。内乱を起こして危機的な状況を全ての住民に知らせる事が目的ではないのか？」

ノイアはまとまらない考えをとりあえず口にする。間違いであればそれでもいい。だが、敵は王都の中でも攻撃をしてきた。何をしても不思議ではないと思えるのだ。

「もう後がないから一か八か戦争をしよう？ 非常に分かりやすい考えですね」

「政治に関わる人間には愚かしく見えるだろう。だが、国民はどうだ？ 理解できない理屈よりも、単純で分かりやすい方を支持するとは思わないか？」

ノイアは言葉をぶつける。ザーランドは一度瞳を閉じる。

「確かめるしかありませんね」

ゆつくりと瞳を開いてザーランドが答える。

「そうだな。つまらない戦いを止めるために」

「ええ。そして、説得は女王にさせていただきます」

一步を踏み出そうとしたノイアは目を見開く。誰よりも女王を前線に出したがないように思えるこの男が一番危険な説得役を女王に任せると言っているのである。

「正気か？」

「ええ」

確認の問いに対してザーランドは一度頷くだけだった。そして、次の瞬間にはうつすらと微笑む。

「女王を守るのを手伝って下さい。そして、信じて下さい。ノース様なら必ず説得できます」

「言われるまでもない。行くぞ」

ノイアはつぶやいて一步を進む。その背を追うようにザーランドが続いた。

*

「さあ……忠実なる人形よ」

怪しい声が雪原に響き渡る。その声を聞いても誰も答えない。周囲にいる住民はただ虚ろな瞳を王都へと向けるだけである。

「私のために死になさい」

男の言葉を聞いて操られた住民が王都へと向けて一定の速度で歩いていく。誰一人として抗うものはおらず言われるままに進んでいく。まるで意思のない人形のように。

（準備は整った。もう止められない）

男は不気味に笑い王都を見つめる。

視線の先にはローブを纏った魔術師達が臨戦態勢で待ち構えている。後はゲベルがこの内戦を沈めて、戦争にもっていけばいいだけだ。

（感情を持っていても、しょせんはこの程度）

男は下等生物を見る目で操られている住民を、王都の魔術師達を見つめる。こうも思惑通りに進むと楽しむ所か、いささか拍子抜けしてしまう。

だが、手を抜くつもりは全くない。ゆっくりと右手を上げて最後の指示を出す。

「行け！」

「聞いて下さい！」

男の声と、若い少女の叫び声が重なる。

男は予定にない出来事に驚くと共に素早く視線を走らせる。王都の魔術師に守られるように立ち尽くしていたのは女王ノースだった。迫りくる住民に臆した様子はなく静かな瞳を向け続けている。

「あの女は邪魔だな」

男は鋭い視線を女王へと向ける。

ただ臆して震えている間は何の脅威も感じなかった。だが、今の彼女は十分に脅威となり得るだろう。可能であれば、この戦いのついでに殺すのが妥当な所だろう。

（さて、説得出来るかな……女王様）

男は不気味な笑みを浮かべて毅然と立つ女王を見つめ続けた。

ただあなたを守りたい 騎士編 5（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。感想、メッセージをいただければ幸いです。

ただあなたを守りたい 騎士編 6

ただあなたを守りたい 騎士編

―6―

「ノース様。周囲は気にせず……ありのままの言葉を伝えて下さい」

前方を睨みながらザーランドがつぶやく。

「ええ」

短く答えた女王は雪原を一步進む。一度深呼吸をして心を落ち着かせて対話を試みる相手をゆっくりと見つめる。

一定のペースで迫ってくるのは、虚ろな瞳を向ける住民達。彼らが普通ではない事はノースにも分かっている。歪な空間から延びる糸に操られているのだろう。そんな彼らに自分の声が伝わるのだろうか。

（今は王として迷ってはいけませんね）

弱気になる心を追い出すと同時に、声を張り上げるために力を溜める。

「この国が抱える問題を……解決する手段を見つけました！」

ノースは飾らぬ言葉を伝える。知能派のザーランドのように気の利いた演説が出来るとは思っていない。だからこそ出来るだけ簡単で、真っ直ぐな言葉を掛ける。それが、自らが取れる唯一の手段であり、もっとも有効な手段だと信じて。

だが、彼らの歩みは止まらない。言葉は届いているというのに。

「大陸マクシリアを満たす神力を使用すれば……この地の緑を取り戻す事が出来ます」

諦めずに言葉を続けるノース。そんな彼女の言葉を聞いて一部の住民が虚ろな瞳に光を取り戻す。だが、向けられた言葉は冷たいも

のだった。

「そんな事は出来ない。国の存続のために嘘をついているだけだ！」

「違います。嘘は言っていないません！ 彼女は……シエルはハーツメイツ神国を説得してくれると。そして、私は神力を受けた花が力を取り戻す姿を見ました」

女王は叫びながら前進する。静止しようと肩を掴むザーランドの手を強引に振り解いて声を想いを伝えるために前へと突き進む。

「あなたは餓えて苦しむ俺たちに何をしてくれた！」

別の男が叫び声を上げると同時に氷の刃を形成する。脅しではない。見つめる氷刃からは確かな殺気を感じた。

（これが民の怒りであるならば……避けません）

ノースは放たれる氷刃を真っ直ぐに見つめる。刹那、自らの左頬に焼けるような痛みを感じた。おそらく切れて血が流れるいるであろう頬を気にする事もなく、女王は怒る住民へと声を掛ける。

「信じて……下さい」

微笑み我が子を迎え入れる母親のように両腕を広げる。どんな理不尽な気持ちも、刃も受け止める、そう心に決めてノースは優しい瞳を向け続ける。彼らの心に一つの光を照らすために。

「う……あ……」

住民の表情が歪んでいく。何を信じていいのか。溢れる怒りをどこにぶつければいいのか分からない。そんな様子に見えた。

（もう少し）

確かな手応えを感じた瞬間。状況は女王が望まぬ形へと向かって動き出す。

「女王をお守りしろ」

状況を変えたのは低い男性の声だった。声に含まれているのは、ノースでも分かるような強烈な殺気。

（そんな——！）

ノースが驚きに目を見開いた瞬間。無数の氷刃が無防備な住民を貫く。

「やはり騙したのか」

「綺麗事ばかり言って！」

騙し討ちに合ったと判断した住民は鋭い視線をノースへと向ける。
(違う。騙していない)

ノースは首を激しく左右に振る。頭が取れてしまうのではないかと思うくらいに何度も、何度も。

だが、住民が向ける視線は変わらない。

そんな彼らをさらに挑発するのは無数の氷刃だった。魔術師達が一斉に魔力を解放したのだ。狙いはもちろん怒り狂った住民達。ここまで進めば彼らを操る糸などは関係ない。糸から解放されたとしても彼らの意思で襲ってくるだろう。

(私には……やはり止められないの？ 私の言葉にはそれだけ価値がないというの？)

女王は自らを支える両足から力が抜けていくような気がした。これが自分の限界。やはり自分はお飾りの王だったのだ。

以前のノースならば膨らんでいく劣等感に押しつぶされていただろう。だが、今は別の想いが自らを突き動かす。

(それでいいの？)

女王は自らの心に一つ問いかける。このまま諦めて眺めているだけならば、叫んだ意味も、ここに立っている意味もない。信じてもらうには彼らを守るしかない。お飾りの王でも住民をこの身で守る事くらいは出来るのだから。

「放て」

冷徹なゲベルの声が雪原に響く。第一師団長の合図を受けて一斉に魔術師が魔力を解放していく。

「駄目です！」

ノースは叫ぶと共に雪原を駆け抜けて――

「止まって！」

迫る氷刃から住民を庇う様に大きく両手を広げる。

ノースの体は誰が見ても分かるくらいに震えていた。そんな自分

が情けなくて仕方がない。ノイアのように勇ましくある事ができない弱い自分。だが、今は逃げる訳にはいけない。背には守るべき民がいるのだから。

ノースは震える両足に力を込め、身に宿る魔力を全て解放する。もちろん自分を守るためではない。一人でも多くの愛する民を守るためである。

視界を氷の刃が埋め尽くす。助かる事など不可能だと判断したノースは、覚悟を決めてゆっくりと瞳を閉じる。

だが、いつまで経っても痛みを感じる事はなかった。死ぬ時は痛みを感じないのだから、と半ば現実から離れた事を考えていると溜息混じりの声が降り注ぐ。その声は常にノースを心配してくれる聞き慣れた声だった。

「今後は……このような無茶は控えて下さい」

声に導かれて瞳を開けると、全身を氷刃で貫かれたザーランドが立っていた。

「それはお前も同じだろう、ザーランド」

声を上げたのは同じく傷だらけのノイア。

なぜ彼らほどの者が傷だらけなのだろうか。

「まさか……守って」

ノースはとある可能性を思いつく。それと同時に慌てて視線を自らが命懸けで守ろうとした民へと向ける。彼らは皆、氷壁と障壁によつて守られていた。ただ一人の漏れもなく氷刃が放たれる以前と変わらない姿で、ノースが望む姿で立っていたのだ。

「——ありがとう」

気づけば感謝の言葉をつぶやいていた。瞳からは涙が溢れて止まらない。心に広がるのは温かい感謝の気持ちだけだった。二人はすかさず氷壁と障壁を展開して民を守るだけではなく、我が身が傷つく事を厭わずにここまで駆けつけてくれた。こんな未熟な女王を守るために。

「ノイア、大丈夫！」

遅れてジュレイドに背を守られながら雪原を走るシエルの姿が見えた。

「ああ、大丈夫だ。まだ終わっていないからな。女王……今なら言葉は届きます」

自らの傷を気にした様子もなくノイアはこちらに微笑む。ノースに力を与え、そして前へと向かせてくれる友の微笑み。彼女のこの微笑みにどれだけ自分は助けられただろうか。ノースはそんな友の想いに答えるためにゆっくりと自らの背を見つめる住民へと振り返って――

「どうか信じて下さい」

短い言葉に全てを込める。彼らに理屈で語り掛けても無駄なのだ。心で対話するしかない、そう決意すると同時に穏やかな微笑みを向ける。

彼らはそんな女王へと心を開いたのかゆつくりと口を開いた。

「女王様……信じたけれど。そんな奇跡があるとは思えません」
住民はうつむいて両手の拳を握り締める。他の住民も同じ事を思っているらしい。信じたけれど、どうしたらいいのかわからないのだろう。ノースですら一度この目で見たから信じられる話であるのだから。

「信じるための証拠が必要なら……私が示します」

落ち着いた声が割って入る。今まで傷ついた二人に癒しの術式を施していたシエルである。

「シエル。上手くいくかどうかは……分からないんだぞ？」

ノイアは、シエルとノースにぎりぎり聞こえる声で話す。失敗すれば今度こそ信頼を失う。そして、彼らは助かる道を失い再び暴徒と化すだろう。

そして、一つ重大な問題が残っている。

「ハールメイツ神国が光の壁を――」

「私が説得する。だから信じて……ノイア」

ノイアの言葉を遮り、シエルは小さな手を伸ばす。道を示すため

に。

（ノイア……あなたはどうするの？）

ノースは迷う友を見つめる。一秒が数分にも思える緊迫した時間。固唾を飲んで見守る中で二人の視線が重なった。

*

「用意周到ですね」

まるで孫にでも向けるような柔らかく温かい声が耳に届く。

「これから敵の領内に入るのですからね。用心もします」

ブレイズは言葉を返すと共に、紐で括って首から吊り下げている輝石のペンダントを見つめる。

「神力を帯び……一度だけ障壁を張る事が出来るペンダント。まだ試作段階ですので名前は決まっていませんが……実用化されれば今後の戦いを変えますね」

ギルベルトは鋭い瞳を淡い輝きを放つペンダントへと向ける。

「ですが製作過程が長すぎます。一度障壁を発動させられるだけだというのに、シスターが一日中神力を込めなければなりませんから」
「そうですね。現在は量産せずに隊長クラスが装着して、実戦で試してみる。時間に見合った効果があれば量産されるでしょう」

軍神が冷静な言葉を返す。

「光の壁の維持に、騎士を守るためのペンダントの作成。守られてばかりだな」

ブレイズは溜息をつく。シスターに守られるだけの騎士にいったい何の価値があるというのか。そんな疑問が脳裏に浮かんで仕方ない。

「いざ、戦争になれば前線に立つのは私達騎士です。誇りに思っているのですよ」

軍神は柔らかい声で語る。長年、戦い続けてきた老齢な騎士の言葉。自信に満ちた言葉を聞くだけで弱気になっていた心が徐々に晴

れていくような気がした。

「そうですね。誇りを持って前へと進みます。いざとなれば友が守ってくれるでしょう」

ブレイズは友が神力を込めてくれたペンダントを強く握る。

「ほう。それはノイアさんが」

軍神は一度驚きの表情を作る。だが、すぐにこちらに何か期待した視線を向けてきた。

「何を考えているかは知りませんが……ノイアは俺の大切な友人であり、同志です。この深い絆をつまらない色恋話にするのであれば……例えあなたでも許しません」

ブレイズは軍神を軽く睨む。

今日もまた誰かのために剣を振っているに違いない。そう信じる事が出来る凛々しく、それでいて気高い少女の姿が自然と脳裏に浮かぶ。次に会うのは戦場の中か、それとも平和になってからなのか。どちらにせよ再会を願う強い気持ちが溢れて止まらない。この溢れる想いは恋ではなく、友の無事を願う絆だとブレイズは信じたいのである。

「ふむ。お似合いだと思うのですけどね。まあ……冗談はこれくらいにしておきましょうか」

軍神はつぶやくと同時に薄い笑みを引っ込める。

刹那。

身が凍るような寒気が全身を襲う。全てを拒絶し、存在するもの全てを抹消しようとする鋭利な殺気。

「これは……どうやら歓迎はされてはいないらしいですね」

ブレイズは素早く剣を引き抜く。

（どこから来る？）

一つ深呼吸をして視線を走らせる。

まず瞳に飛び込んでくるのは真っ直ぐに伸びた平坦な道。そして、その左右には木目が比較的真っ直ぐに伸びた背の高い木々が広がっている。左右の木々を抜けて来るのか、それとも真っ直ぐ突っ込ん

で来るのか。

ブレイズが悩んだ時間はほんの僅かの時間。少女の叫び声が正確な位置を教えてくれたからである。

「ハールメイツの騎士。覚悟！」

叫ぶ少女はまるで周りが見えていない様子だった。ただ恨むべき相手を睨み、その手に握る槍で串刺しにする。それ以外は頭にはないだろう。

（予想はしていたが。まさかここまで酷いとはな）

ブレイズは自らを睨む少女に憂いを帯びた瞳を向ける。自然にしていれば若く、愛らしい少女なのだろう。だが、今は溢れる怒りで心も表情も歪めてしまっているように見えた。

「死ね！」

少女が放ったのは速度、気迫共に申し分ない高速の突き。常人には決して避けられない人外を超えた速度の突きだった。少女は腕に自信があるのか表情を喜びに変える。仇を討てる事を心から喜んでいる。そんな様子だった。

対するブレイズは。

「すまない」

一言謝罪の言葉をつぶやく。それと同時に身を捻るように左へと逸らし、今にも腹部を貫かんとする槍を回避する。

「……っ！」

少女が驚きで目を見開く。

咄嗟に槍を引き戻そうとするがもう遅い。ブレイズは騎士剣を上段に構えて一息で振り下ろす。これで決着が付くと確信するブレイズ。

だが。

少女は予想外の言葉を口にする。

「神聖なる神よ。我に守りの力を！」

それはシスターが障壁を張る際に紡ぐ言葉だった。

次の瞬間には高速の銀閃と、突如出現した眩しい光を放つ障壁が

激突する。

（まずい）

このまま吹き飛ばされてバランスを崩せば終わりだ。この少女の腕なら態勢を整えるよりも速く貫けるだろう。

だが、ブレイズの不安はガラスが割れるような乾いた音と共に霧散する。

「もう力が……」

少女はいとも簡単に砕け散った障壁を呆然と見つめる。神力は手を汚す事で失われてしまう。彼女はいつたいどれだけの人を、守るべき者のために殺めたというのだろうか。

（ノイアとは違う。だが……彼女も一歩間違えれば。シエルを失ってしまえば……）

ブレイズの心に迷いが生まれる。

ノイアがひたすらに努力を続けていたのは中途半端な神力と、騎士の力を持つていたからだ。そして守りたいと思える大切な人が隣にいたからなのだろう。自らが信じる友も一歩間違えればこんな姿になってしまうのだろうか。心に広がる迷いがブレイズの剣を鈍らせていく。

その事実気付いた時にはすでに遅かった。

「――遅い！」

少女はブレイズの剣をすかさず槍で弾き飛ばす。ブレイズが剣を構えなおすよりも速く。一つ呼吸をするよりも速く鋭利な突きが空気を切り裂くように突き進む。

「こんな所で！」

ブレイズは咄嗟に体を右へと捻る。同時に首からぶら下げているペンダントに意思を送る。

その瞬間。

ブレイズと少女の間に光の壁が突如出現した。

「障壁？」

少女は疑問の声を漏らす。少女は確かにブレイズの胸を正確に捉

えたのである。数秒後には甲冑と共にその身も貫ける筈であった。だが、槍はブレイズの思惑通りに弾き飛ばされる。

予想外の展開に追いつけない少女に向けてブレイズは一步踏み込む。

「これで終わりだ」

言葉と共に剣を振り下ろす。狙ったのは少女が握る槍だった。それ以上は追撃の剣は振るわない。その意思を受け取った少女は壊れた人形のようにうな垂れる。

「殺して。仇を討てないなら殺して」

少女は折れた槍を見つめながら小声でつぶやく。

「君を殺す事はしない。俺達はグリア連合国と会談するために来た」
ブレイズは剣を鞘へと戻す。戦いの終わりを告げるために。

一瞬の沈黙。

このまま諦めて欲しいと切に願う。

だが少女は腰に装着している鞘から剣を引き抜いた。自らを終わらせるために。また隙あればブレイズを殺すために。

「くっ……」

ブレイズは反射的に鞘へと手を伸ばす。今から抜けば隙だらけの少女を切り裂く事は可能である。だが、それでもブレイズは剣を抜く事は出来なかった。

「ガイラル様の……ために！」

少女は剣を真っ直ぐに突き出す。自らの恨みを晴らすために。避ける事はもう適わない。だが、後悔はない。これは自らの甘さが招いた結果なのだから。

「すみませんが……許容範囲を超えています」

冷静な声が二人の戦いに割って入る。

一息で二人の間に入り、剣を振り上げたのはギルベルト。一度、剣響が響くと同時に火花が散る。

「待って下さい。彼女を殺しては！」

ブレイズは軍神の背へと手を伸ばす。だが、彼の手は止まらない。

左手の騎士剣で少女の剣を弾き飛ばし、無防備な胴に右手に握る騎士剣で一閃。

ここから見ていても分かる。少女にはギルベルトの一閃を避ける事が出来ない事が。ブレイズは現実から逃げるように強く瞳を閉じる。

それと同時に聞き覚えのある声が絶望的な事態に介入を果たす。

「そこまでだ」

一度、剣響が鳴り響く。

ブレイズが固まった瞳を開くと。今にも少女を切り裂こうとしていたギルベルトの剣を止める銀髪の男が立っていた。

「お前は……あの時の——」

「話は後だ」

男はブレイズの言葉を遮り視線を後方へと向ける。

男の視線を辿った先にはブレイズ達が言葉を、想いを伝えるべき男が立っていた。

「——剣を収める。我らに必要なのは対話だ」

威厳に満ちた男の声が響く。

「グリア王国……国王アガレス」

ブレイズは震えが止まらなかった。

黒髪に褐色の肌。全身から放たれる強烈な威圧感。見間違える筈がない。そこに立っていたのは紛れもなくグリア連合国の王アガレスだった。

「こちらも出来れば対話で済ませたいですね」

ギルベルトは半歩引いて隙なく剣を構える。

「クレサは俺が止めておく。貴様も手伝え」

銀髪の騎士がブレイズに視線を走らせる。

「いいだろう。我が国が招いた事だ。いかなる形であれ責任は取る」

ブレイズはつぶやいて一步を踏み出した。

*

ノイアは震える手を守ると決めた少女へと向ける。

（何を迷っている。一年前なら喜んで握っただろう？）

自らの心に問う。だが、答えは返ってこない。シエルが歩もうとする道を信じられない自分が心の中にとでも言うのだろうか。

「ノイア」

シエルは優しくつぶやいてノイアの震える手を握る。柔らかくて温かい手。この手を振り払う事は叶わない。ノイアには決してこの手から離れる事は出来ないのだ。

（迷っている時間はない）

今は女王が飛び出したお陰で周囲はどう動くべきか判断に迷っている。だが、このまま何もしないのであればせっかくの機会を失ってしまう。迷う自分のせいで全てが台無しになってしまうのだ。それだけは避けなければならない。

だが。

何が正しくて、何が間違っているのか分からないのだ。判断する術が見つからない。

ノイアは迷う心を強引に抑え込む。平静を整えたノイアの心にすでに決まっていた。

ただ自らの手を握る温かい手を強く、強く握って――

「どう進めばいいのか分からないなら。私はシエルを信じて進み続ける。どこまでも」

ノイアは最高の笑顔を浮かべる。もう迷いは晴れたのだと、そう伝えるために。

「全力で癒しの術式をお願い。私が神力の供給と制御をするから」
微笑み返すシエルの指示を聞いて、ノイアは身に宿る神力を解放していく。神力の強さだけならシエルにすら匹敵する規格外の神力を止めどなく放出し続ける。絶対量が少ないノイアがこの力を維持出来る時間はたったの数分。

だが、シスターの第三位は顔色一つ変えずにノイアに力を渡し続けてくれる。それと同時にシエルは無作為に放出する力を術式として制御していく。

「すごい……これだけ広く。それに雪が」

女王が感嘆の声を漏らす。

ノイアは声に導かれてゆつくりと緑色の瞳を開ける。瞳を開けた先には二百メートル以上の広さを持つ円形の魔法陣が眩い光を放ち、地を覆う雪をゆつくりと溶かしていく。まるであるべき姿に戻っていくように。

「一人では無理だが。二人でなら奇跡だつて起こせる！」

ノイアは自らを奮い立たせるために強気に叫ぶ。虚勢だという事は震える手から全てシエルに伝わっているだろう。だが、シエルは恐怖を受け取っても怯まない。ノイアの震える手をしっかりと握り力を渡し続けてくれる。だから信じて続けていられる。それはシエルも同じなのだろう。ノイアが諦めないから続けていられるのだ。

「——もう少しだ」

ノイアは解けていく雪を見つめる。その先には雪に覆われて力を失った花が咲いていた。風が吹く度に砂で出来ていたかのように崩れて舞う命を吸い尽くされた花々がそこにあった。

「全力でいく！」

「これが……私達が示す道！」

二人の勇ましい声が上がった瞬間。眩い光が全てを包み込む。

「奇跡が……起こるのか？」

住民が光に向けて問う。彼らの視線は地に咲く花に縛られて離れない。眩い光が瞳を貫こうとも決して逸らす事はなかった。

（咲いてくれ。シエルが望む道を示すために）

ノイアはただ祈る。彼らの心に共に歩む道を示す事が出来ますようにと。

そんなノイアの祈りを受け取った花々は天へと延びていく。まるで自らの姿を誇示するかのよう。

「これでいい。これで終わ——」

「女王を惑わす異国の使者を消せ！」

ノイアの言葉は、一つの怒声によってかき消される。

「彼らは我らが民を欺き、この国を従属国にするための使者だ。皆、甘い言葉に惑わされるな。彼らは恩を売り、我らから地位も権力も……全て奪う気なのだ」

声を張り上げているのは第一師団長のゲベル。物音すら許されないような静寂とした空気から一転。幾つものざわめきが満たしていく。

「違います。彼らは共に歩んでくれます！」

女王がゲベルを睨むと同時に声を張り上げる。

「騙されてはなりませんよ、女王様。我らが歩み続けるためには……戦争によって勝利するしか他に道はないのです」

ゲベルは一度そこで言葉を切って、ゆっくりと右手を上げる。

「第一師団！ 異国の使者に洗脳された住民共々、彼らを殺せ！そして、この勝利を胸に刻み全軍を上げて邪な手を使う浅ましい者共を殲滅するのだ！」

ゲベルが力の限りに叫ぶ。

刹那、彼に従う魔術師が一斉に氷の刃を形成していく。

「ノイア、あれだけの数は無理だ。シエルを連れて逃げる！」

ジュレイドが放心した少女二人に声を掛ける。今から障壁を張っても間に合わない。そして、あれだけの数を防げる自信もない。

「でも、彼らは……どうするの！」

シエルが悲鳴に近いような声を上げる。彼女なら住民を守るためにこの場に留まる事を選ぶだろう。無事を見届けるまではこの場から決して離れないのではないだろうか。

「すまない」

ノイアは今にも泣き出しそうな少女の手を引く。

「ノイア？」

シエルはこちらに戸惑いの瞳を向ける。ノイアなら自らの気持ち

を理解してくれると思っていたのだろう。

「私はお前を守る。例え疎まれようとも」

つぶやくと同時にシエルの手を強く引いて駆け出す。背に聞こえたのは銃声と、大鎌の風切り音。

「民は私が全力で守りますよ」

そして、最後に聞こえたのはザーランドの落ち着いた声だった。

＊

「離して！」

両肩を後ろから抑えられた黒髪の少女が叫ぶ。槍を折られても、抑えられても少女はブレイズを睨み続ける。

「こんな状態で会談が出来るのか？」

ブレイズはうつむいて独語する。

目の前で暴れる少女は例外では決していない。グリア連合国には少女と同じように自分達ハールメイツ神国を恨む者がいるだろう。それはブレイズ達にとっても同じ事。大切な人を失い、心を閉ざし性格すら変わってしまった者をブレイズは幾人も知っている。

「クレサ。いいかげんにしろ！」

少女を抑えている銀髪の男が苦渋の表情を浮かべて叫ぶ。こうも暴れられると平気でいられる訳はないのだろう。

「こいつらは、ガイラル様を！ガイラル様を殺したんだ。仇を取れないなら殺せ！」

少女は叫び続ける。感情をぶつける事でしか自らを保つ事が出来ない少女。こんな姿を見ているとどうにかして救いたいと思うのはおそらくブレイズだけではないだろう。

「俺を殺せば……気持ち晴れるのか？」

「お前……何を」

ブレイズの言葉に少女を抑える銀髪の男が目を見開く。まるで理解出来ないという瞳を無視してブレイズは言葉を続ける。

「どうなんだ？ ガイラルという男を殺していない俺を殺して……
気持ち晴れるのか？」

「――！」

ブレイズの問いに少女は言葉を失う。

「殺しても何も変わらない。虚しくなるだけだ」

言葉を失った少女はゆっくりとうつぶむいていく。うつむいてからは、まるで壊れた人形のようにピクリとも動かない。

数十秒か、それが数分か。正確な時間は分からないが少女は無言を貫き通す。答えを探しているのか、本当に壊れてしまったのか。

「お前は どうしたい？」

ブレイズは返答を諦めて言葉を掛ける。また反応が返ってこなくてもいい。ただこちらの想いを伝えていく。心を開いてくれるように。

その気持ちが通じたのか少女はゆっくりと顔を上げて問いを發した。

「どう生きれば いい？ 私はガイラル様に認められて……ただ側に
いられば良かった。それだけの存在だった。そんな私はどう生き
れば いいの？」

少女の虚ろな瞳がブレイズを捉える。何の意思もない虚ろな瞳が、
答えを求めて一度だけ光を宿したように見えた。

「生きたいように生きれば いい。自らを支える人間が必要ならば……
……探せば いいだろう？」

一つ溜息をついてブレイズは語る。

「そんな簡単に見つかる訳ないよ。お願い……終わらせて」

少女はつぶやいて強引に腕を振り解く。

少女の次の行動は予想通りだった。自らを抑えていた銀髪の男から
剣を引き抜き真っ直ぐに構えたのだった。殺さなければブレイズ
を貫く。そう告げているように見えた。

ブレイズが迷ったのは一瞬。

「君は殺さない」

ブレイズは剣を抜かずに優しく微笑む。まるで少女を迎え入れるかのように。

（俺には殺せない）

なぜかノイアがこの少女と重なってしまうのだ。性格も、姿もまるで似ていない黒髪の少女。共通点と言えば神力を持ち、今でも守りたいと願う人がいるくらいのものだろうか。

「殺して。殺してよう」

少女は涙を流す。

そんな少女にブレイズは表情を変えずに無言で見つめ続ける。

一度、少女の叫び声が響く。

次の瞬間。

腹部に火傷したような熱さが伝わる。刺されたのだとすぐに理解した。だが、ブレイズの心に後悔はなかった。

「どうして……？」

少女は震えながら問う。どうして敵である自分にここまでしてくれるのかと問うている。

「俺はここに対話をしに来たんだ。二つの国が――」

そこまでつぶやいた瞬間に口の中に生暖かい感触が伝わる。すぐに溢れる血を吐きだして、力を失いつつある両足に再び力を込める。「共に歩めるかもしれないんだ。そんな時に手を出す訳にはいかない。それに君は彼女に……」

そこまで言うのが限界だった。力を失った体が意思に反して倒れていく。

「フィッツ！ 彼を支えて。出来るかどうかは分からないけれど……癒しの術式を使用します」

ブレイズを支えたのは彼を貫いた少女だった。霞む視界が捉えた少女の瞳には力が宿っていた。その瞳はブレイズがよく知る友の瞳と重なる。力強く、それでいて迷いを知らない瞳。

「あなたを助けます。生きて……どうか私に償わせて下さい」

少女の優しい声が耳元で囁く。その声を最後にブレイズは意識を

失った。

*

「ノイア、戻って！」

悲鳴のような少女の叫び声を背に聞いてもノイアは止まらない。
強くシエルの手を握って駆け抜ける。

「すまない。だが……どうしようもないんだ！」

ノイアは叫んで下唇を強く噛む。

聞こえてくるのは無数の呻き声。振り向かずとも住民が一人、また一人と倒れている事が容易に想像できる。ノイア達の背を守るジュレイド達とて無事だと過信する事は出来ない状況だった。そんな場にシエルを置いておく訳にはいかないのだ。

（私はいつたいこの国に何をしに来たのだ）

走りながらノイアは思考を巡らせる。可能性しか示す事が出来なかった。彼らの心に明るい未来を示す事も出来ずにおめおめと自国に帰れというのだろうか。

（だが……もう一度だけ機会はある。シエルが生きていれば）

シエルは何を言ったとしても諦めない。ハールメイツ神国に戻れば、自国の説得に走るだろう。説得に応じてくれるとは思えない。

だが、この少女ならば何とかしてしまおうような気がするのだ。そう信じられる。だからノイアは前だけを見て走れる。結果、シエルからの信頼を失ったとしても。

*

「ぐっ……第二師団長の名が泣きますかね」

ザーランドは自嘲の笑みを浮かべて膝を地につける。雪解け水を吸った泥が一度跳ねる。だが、そんな些細な事など頭の隅に置いておく余裕すらザーランドにはなかった。

霞んだ視界に入るのは無数の氷刃。住民だけではなく戦争に反対するザーランドをも殺そうとしている事はすでに分かっている。

（潮時でしょうかね）

覚悟を決めて一度瞳を閉じる。結局、民を守る事すら出来なかった。だが、せめてこの国の未来のめに尽くしたいとザーランドは思う。それが自分出来るこの国に対する最後の忠義だと信じて。

「申し訳ありませんが……私の代わりに女王を」

視線を左へと向けて茶色髪の傭兵へと言葉を掛ける。

「分かった」

傭兵は軽やかに氷刃を回避すると同時に、銃を腰のホルスターへと戻す。

「援護するわ」

つぶやいた鍊が進路を塞ぐ氷刃を大鎌で切り裂いていく。その様子を見たザーランドは優しく微笑む。

「女王様を託せるのが……あなた達でよかった」

つぶやくと同時に最後の力を振り絞りザーランドは立ち上がる。

「私はここで……彼らを説得して――」

「どうか彼らと共に……明るい未来を」

言葉を遮り、ザーランドは女王を突き飛ばす。

少子抜けするほどにあっさりと、まるで弾かれたように女王の体は軽々しく吹き飛ぶ。

「お前の事を疑って……悪かった」

受け取ったジュレイドは短くつぶやく。最後まであっさりとしているのが彼らしいとザーランドは思う。だが、その方が見送る者にとってはあるがたかった。

「ザーランド！」

ゆつくりと瞳を閉じて、女王の言葉を胸に刻み込む。唯一心残りがあるとすれば成長したノースの姿が見られない事くらいだろうか。まるで父親のような心境だと思い、ザーランドは薄っすらと微笑む。彼に与えられた幸せな時間はたったの数秒。だが、最後にここま

で心温まる感じを感じられた事は幸せだとザーランドには思えた。

「終わりだ」

第三師団長ソルトの冷たい声が耳に届く。瞳を開けると眼下に迫るのは光輝く魔力の剣だった。

「ただでは死にませんよ」

振り下ろされる光剣を半歩下がって回避。次の瞬間には残った魔力で氷壁を展開する。

展開と同時に無数の衝撃音が寒空に響き渡る。

「防いだか。伊達に第二師団をまとめていた男ではないな」

一瞬の静寂の後。砕け散った氷壁の隙間を縫うように低い声が響き渡る。

「今でも第二師団の団長ですが」

氷壁を放ったゲベルを睨みつけると同時に、片手を上げて部下へと合図を送る。

「ふん。今さら貴様の部隊が動いた所で何が変わる」

鼻で笑ってゲベルは余裕に満ちた笑みを向ける。

現在、第一師団と第三師団は同国の情けがあるのか常に警戒はしているが、第二師団に攻撃を行う事はない。だが、手を出そうものなら容赦はしないだろう。彼らは自らの師団長を信じ、ただ突き進むのだから。

だが、それはザーランドの第二師団とて同じである。彼の想いを常に理解して、彼の望むように動いてくれる。中にはゲベルの手の中にも混じってはいるだろうが、それは極少数だろう。

「変わりますよ。女王が変わえてくれます」

ザーランドがつぶやいた瞬間。第二師団の最前列が氷壁を展開する。

そして、それ以外の者は守るべき師団長に背を向けて地面を蹴った。

「馬鹿な……師団長を見捨てていくだと？」

ゲベルは目を見開く。

入念に準備をしていたこの男にもこの状況は理解出来ないらしいいや、この場にいる全ての者がこの状況を予測する事は出来なかっただろう。

「第一、第三師団に真つ向から挑むなど……無駄に兵力を消耗するだけです。ならば、彼らを次の戦場に送るのが得策。まだまだ甘いですね」

ザーランドは不敵に笑う。

「ハールメイツ神国が受け入れるとも思っているのか！」

ゲベルは吠えて光剣を振り下ろす。その姿はまさに獣のようだった。

「彼らも一国を治める者達です。そこまで愚かではないでしょう」表情を変えずに、まるで挑発するようにザーランドはつぶやく。頭に血が上った男の剣筋を丁寧に見切り、無駄のない動きで回避していく。

「ゲベル、それよりも住民を！」

冷静なソルトの声が場の空気を一瞬で変える。

（さすがはソルトですね。ですが……今から間に合いますかね）

ザーランドは光剣を避けながら思考を巡らせる。奇怪な行動に出た第二師団、そして安易な挑発に乗った指揮官のおかげで十分に時間稼げた。

今頃、住民は生きるために全力で逃げている事だろう。その手にこの国の未来を示す生きた花を握って。

「その程度か……ゲベル。これでは力を貸した私まで滑稽に見えるだろう」

不気味な声がザーランドの背に届く。

おそらくこの事態を引き起こした者だろう。ザーランドは振り向いてその顔を瞳に焼き付けたいが、体は指示に従ってはくれなかった。まさか恐怖を感じているとも言うのだろうか。

「たかが数人逃がしたくらいでは変わらない！ もう戦争は止められないんだ」

ゲベルは光剣を振り回しながら叫ぶ。

「ぐっ……！」

力任せの光剣をザーランドは氷壁で受け止める。

「貴様さえいなければ！」

力の限り吠えるゲベル。その瞬間に眩い光が迸る。触れた物体を爆砕させる魔力を解放させたのだろう。

砕けた氷壁がザーランドの体を容赦なく切り裂く。だが、ザーランドは決して諦めない。一秒でも長く、皆が逃げる時間を稼ぐ。その一心で踏み留まる。

「抑えなさい……マリオネット」

感情を感じさせない声が静かに響く。まるで戦いの終わりを告げるかのように。

「すまない……ザーランド。せめて楽に逝ってくれ」

ソルトはつぶやくと同時に氷刃形成する。

「私を殺すのはやはりあなたでしたか。申し訳ありません……ノー
ス様」

両肩を左右から人形によって固定されたザーランドは動く事は敵わない。抵抗するために暴れるよりも速く、もう一度緊張した表情を浮かべて微笑む女王の顔を思い出すよりも速く。

一つの氷の刃がザーランドを貫いた。

ただあなたを守りたい 騎士編 6（後書き）

読んでいただきありがとうございました。感想をいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6491x/>

ただあなたを守りたい

2011年12月17日09時52分発行